県道高松善通寺線道路改修事業 及び
県道西植田高松線道路改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

田村遺跡 II
川島本町遺跡
川島本町南遺跡

2007. 1

香川県教育委員会

県道高松善通寺線道路改修事業 及び
県道西植田高松線道路改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

田村遺跡 II
川島本町遺跡
川島本町南遺跡

2007. 1

香川県教育委員会

序　　文

丸亀市田村町に所在する田村遺跡は、県道高松善通寺線の道路改修事業に伴い香川県土木部道路建設課からの依頼で、香川県埋蔵文化財センターが平成17年４月から６月までの３ヶ月間で発掘調査を実施しました。田村遺跡は古代の田村廃寺（白鳳時代～平安時代）の北に広がる、古墳時代末～平安時代（７～12世紀）頃の集落跡です。平成11年に行った、（財）香川県埋蔵文化財調査センターの発掘調査では、平安時代頃の田村廃寺で使われた釣鐘を鋳造したと考えられる、全国的にも珍しい梵鐘鋳造遺構が見つかっています。

今回の発掘調査では、古墳時代末～奈良時代頃の掘立柱建物跡の柱穴跡が多数見つかりました。その組合せから10棟程度の建物跡の存在を推定することができ、田村廃寺の周辺に広がる集落跡の実態を探る上で、大変重要な成果になりました。

高松市川島本町及び高松市池田町に所在する川島本町遺跡、川島本町南遺跡は、県道西植田高松線の道路改良事業に伴い香川県土木部道路建設課からの依頼で、香川県埋蔵文化財センターが平成17年７月から10月までの４ヶ月間で発掘調査を実施しました。

今回の発掘調査では、縄文時代～江戸時代頃の遺構・遺物が見つかりました。中でも縄文時代後期頃の遺物は、高松平野でも出土例が少なく重要な資料になりました。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、香川県土木部道路建設課、地元関係者各位に多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝いたしますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年１月

香川県埋蔵文化財センター
所長　　渡部　明夫

例　　言

1. 本報告書は、県道高松善通寺線道路改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業で調査した、香川県丸亀市田村町に所在する田村遺跡（たむらいせき）及び、県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業で調査した、香川県高松市川島本町に所在する川島本町遺跡（かわしまほんまちいせき）、高松市池田町に所在する川島本町南遺跡（かわしまほんまちみなみいせき）の報告を収録した。

2. 発掘調査は、香川県土木部道路建設課から依頼を受けて、香川県教育委員会が調査主体となり、現地調査は香川県埋蔵文化財センターが担当した。

3. 発掘調査の期間及び担当は以下のとおりである。

（田村遺跡）	（川島本町遺跡、川島本町南遺跡）
期間　平成17年４月１日～６月30日	期間　平成17年７月１日～10月31日
担当　西村尋文、古野徳久、中里伸明	担当　西村尋文、古野徳久、中里伸明

4. 調査にあたっては、下記の関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県土木部道路建設課、香川県中讃土木事務所、香川県高松土木事務所、丸亀市教育委員会、地元自治会、地元水利組合、株式会社百十四銀行城西支店

5. 本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。
本報告書の執筆は西村、中里が担当した。執筆の分担としては、田村遺跡の第Ⅰ章、川島本町遺跡、川島本町南遺跡の第Ⅰ章、第Ⅱ章第１節及び、第Ⅲ章の石器に関する記述を西村が、それ以外の主要な部分を中里が担当した。なお、編集は西村が担当した。

6. 本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標系第Ⅳ系（日本測地系）の北であり、標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。

7. 本書で用いている遺構記号は次のとおりである。
ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＡ：柵列跡　ＳＰ：柱穴跡　ＳＥ：井戸跡　ＳＫ：土坑跡　ＳＤ：溝跡
ＳＸ：性格不明遺構

8. 挿図の一部に国土交通省国土地理院作成の1/25,000地形図を使用した。

9. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1997年度版』による。

10. 写真図版（添付ＣＤ－ＲＯＭ)のビューワーは、株式会社トリワークス（http://www.kuraemon.com/）の「蔵衛門2005professional」を使用した。

本 文 目 次

田村遺跡

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境 …… 2

第２節　歴史的環境 …… 2

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　概要 …… 7

第２節　基本層序 …… 7

第３節　検出遺構・出土遺物

掘立柱建物跡・柵列跡 …… 7

柱穴 …… 20

溝跡 …… 23

包含層出土遺物 …… 23

第４節　Ⅲ－３・４区の調査 …… 27

第Ⅳ章　調査成果の分析

第１節　調査成果について

（１）掘立柱建物跡・柵列跡の変遷 …… 28

（２）出土遺物について …… 31

第２節　既往の調査との比較検討

（１）各遺構群の比較 …… 31

（２）寺院関連遺構・遺物の有無から見た比較 …… 32

第３節　周辺の地割との比較検討

（１）検出された建物跡群を規制する地割の抽出 …… 35

（２）田村北型地割の成立背景 …… 37

第Ⅴ章　まとめ …… 38

川島本町遺跡、川島本町南遺跡

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 …… 43
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境
　第１節　地理的環境 …… 45
　第２節　歴史的環境 …… 47
第Ⅲ章　川島本町遺跡の調査成果
　第１節　概要 …… 49
　第２節　基本層序 …… 49
　第３節　検出遺構・出土遺物
　　柱穴 …… 49
　　土坑 …… 55
　　井戸跡 …… 56
　　溝跡 …… 56
　　性格不明遺構 …… 68
　　包含層出土遺物 …… 77
第Ⅳ章　川島本町南遺跡の調査成果
　第１節　概要 …… 82
　第２節　基本層序 …… 82
　第３節　検出遺構・出土遺物
　　柵列跡 …… 85
　　柱穴 …… 85
　　溝跡 …… 87
　　包含層出土遺物 …… 87
第Ⅴ章　調査成果の分析
　　（１）弥生時代後期～古墳時代前期の土器の色調・胎土について …… 88
　　（２）今回検出した井戸跡および土坑について …… 89
第Ⅵ章　まとめ …… 91

挿 図 目 次

田村遺跡

第１図 田村遺跡位置図 ・

第２図 田村遺跡周辺遺跡分布図 ……3

第３図 田村遺跡調査区割図 ……8

第４図 東壁土層断面図① ……9

第５図 東壁土層断面図② ……10

第６図 各調査区西壁・北壁土層断面図 ……11

第７図 ＳＢ001・002, ＳＡ001平面図・断面図 ……12

第８図 ＳＢ001出土遺物実測図 ……13

第９図 ＳＢ003平面図・断面図及び出土遺物実測図 ……14

第10図 ＳＢ004平面図・断面図 ……15

第11図 ＳＢ005・006平面図・断面図 ……16

第12図 ＳＢ007・008平面図・断面図及び出土遺物実測図 ……18

第13図 ＳＢ009・010平面図・断面図 ……19

第14図 ＳＢ010出土遺物実測図 ……20

第15図 柱穴平面図・断面図① ……21

第16図 柱穴平面図・断面図② ……22

第17図 柱穴出土遺物実測図 ……23

第18図 溝平面図・断面図 ……24

第19図 包含層出土遺物実測図 ……24

第20図 田村遺跡遺構配置図 ……25・26

第21図 ＳＫ303平面図・断面図及び出土遺物実測図 ……27

第22図 田村遺跡主要遺構変遷図① ……29

第23図 田村遺跡主要遺構変遷図② ……30

第24図 田村遺跡遺構配置図 ……34

第25図 田村遺跡に関連する地割ライン ……36

川島本町遺跡・川島本町南遺跡

第26図 川島本町遺跡・川島本町南遺跡位置図

第27図 調査地より由良山を望む ……43

第28図 川島本町遺跡・川島本町南遺跡調査位置及び区割図 ……44

第29図 微地形分類図 ……46

第30図 川島本町遺跡・川島本町南遺跡周辺遺跡分布図 ……48

第31図 Ⅰ区西壁・Ⅱ区中央トレンチ土層断面図 ……50

第32図 Ⅰ区北壁・Ⅰ区東壁土層断面図 ……51

第33図 Ⅱ区東壁・Ⅰ区南壁土層断面図 ……52

第34図 Ⅱ区西壁土層断面図 ……53

第35図 柱穴・土坑平面図・断面図 ……54

第36図 柱穴・土坑出土遺物実測図 ……55

第37図 ＳＥ101平面図・断面図及び出土遺物実測図 ……56

第38図 ＳＤ101・102・104・106平面図 ……57

第39図 ＳＤ101・102・104・106断面図及びＳＤ102出土遺物実測図① ……58

第40図 ＳＤ102出土遺物実測図②及びＳＤ101出土石器実測図 ……59

第41図 ＳＤ103・105・107・108平面図・断面図及びＳＤ107出土遺物実測図 ……60

第42図 ＳＤ201～203・205～207平面図・断面図及び出土遺物実測図 ……62

第43図 ＳＤ208～210平面図・断面図 ……63

第44図 ＳＤ208～210出土遺物実測図 ……64

第45図 ＳＤ109・110平面図・断面図及び出土遺物実測図 ……65

第46図 ＳＤ110・204・212平面図・断面図及び出土遺物実測図① ……66

第47図 ＳＤ110・204・212出土遺物実測図② ……67

第48図 ＳＤ213～ＳＤ217平面図・断面図及びＳＤ213出土遺物実測図 ……68

第49図 ＳＸ201平面図・断面図 ……69

第50図 ＳＸ202平面図・断面図及び出土遺物実測図 ……69

第51図 ＳＸ202出土剥片 長・幅比率 ……70
第52図 ＳＸ202出土楔形石器 長・幅比率 ……70
第53図 ＳＸ202出土楔形石器の削片 長・幅比率 ……70
第54図 ＳＸ202出土石器実測図①……71
第55図 ＳＸ202出土石器実測図②……72
第56図 ＳＸ202出土石器実測図③……73
第57図 ＳＸ203・204平面図・断面図及びＳＸ203出土遺物実測図……74
第58図 川島本町遺跡遺構配置図 ……75・76
第59図 縄文土器群出土位置図 ……78
第60図 縄文土器群出土遺物実測図① ……79
第61図 縄文土器群出土遺物実測図② ……80
第62図 包含層出土遺物実測図 ……81
第63図 川島本町南遺跡遺構配置図 ……82
第64図 西壁土層断面図 ……83
第65図 東南壁土層断面図 ……84
第66図 ＳＡ01平面図・断面図 ……85
第67図 ＳＰ27・31平面図・断面図……85
第68図 ＳＤ03～07平面図・断面図 ……86
第69図 川島本町南遺跡出土遺物実測図 ……87
第70図 石器計測基準図 ……94

表　目　次

田村遺跡

第１表 田村遺跡周辺遺跡一覧 ……4
第２表 掘立柱建物跡・柵列跡の大別 ……28
第３表 須恵各器種の焼成の大別 ……31
第４表 田村遺跡出土土器観察表 ……41
第５表 田村遺跡出土瓦観察表 ……42
第６表 田村遺跡出土石器観察表 ……42

川島本町遺跡・川島本町南遺跡

第７表 川島本町遺跡・川島本町南遺跡周辺遺跡一覧 ……47
第８表 ＳＸ202出土サヌカイト製石器類組成表 ……70
第９表 弥生時代後期～古墳時代前期における各器種の色調及び胎土 ……88
第10表 川島本町遺跡出土土器観察表 ……95
第11表 川島本町遺跡出土瓦観察表 ……99
第12表 川島本町遺跡出土石器観察表……100
第13表 川島本町南遺跡出土土器観察表……102
第14表 川島本町南遺跡出土石器観察表……102

図　版　目　次

田村遺跡

図版１ (1)Ｉ－２区全景（北から）
(2)Ⅱ－１区全景（北から）
(3)Ⅱ－２区全景（南から）
(4)ＳＰ106完掘（西から）
(5)ＳＢ002－ＳＰ133土層断面（北から）
(6)ＳＢ009－ＳＰ250土層断面（東から）
(7)Ⅱ－１区東壁土層断面（西から）
(8)ＳＢ003－ＳＰ138　12
図版２ (9)包含層出土土器　33
(10)ＳＫ303出土土器　40
(11)Ｉ区全景（北から）
(12)Ⅱ区下層遺構面全景（北から）
(13)Ⅱ区上層遺構面全景（北から）
(14)ＳＥ101周辺（北から）
(15)ＳＥ101全景（西から）
(16)ＳＤ102遺物出土状況（北から）
図版３ (17)ＳＤ208・209全景（南西から）
(18)ＳＫ103遺物出土状況（南から）
(19)ＳＸ202検出状況（南から）
(20)ＳＸ202サヌカイト砕片・剥片類出土状況（南から）
(21)Ⅱ区包含層出土縄文土器群（西から）
(22)ＳＥ101出土土器　9

川島本町遺跡・川島本町南遺跡

(23)ＳＥ101出土土器　10
(24)ＳＤ102出土土器　28
図版４ (25)ＳＸ203出土土器　146
(26)包含層出土土器　148～152
(27)包含層出土土器　157～161
(28)包含層出土土器　168・170
(29)ＳＸ202出土石器　94～113
(30)ＳＸ202出土石器　114～118
(31)全景（北から）
(32)ＳＤ03出土勾玉　10

ＣＤ収録図版目次

田村遺跡　遺構・遺物

Page１　Ⅰ－１区全景（南から）
Ⅰ－２区全景（北から）
Ⅱ－１区全景（南から）
Page２　Ⅱ－１区全景（北から）
Ⅱ－１区東壁土層断面（西から）
Ⅱ－２区全景（南から）
Page３　Ⅲ－１区全景（南から）
Ⅲ－２区全景（北から）
ＳＰ106完掘（西から）
Page４　ＳＰ137土層断面（西から）
ＳＢ002（ＳＰ133）土層断面（北から）
ＳＢ009（ＳＰ250）土層断面（東から）
Page５　Ⅱ－２区包含層須恵器出土状況（西から）
ＳＢ003（ＳＰ138）　12
包含層(1)外面　32
Page６　包含層(1)内面　32
包含層(1)　32
包含層(2)　33
Page７　包含層(3)凹面　37
ＳＫ303　40
ＳＢ001・003, ＳＰ115・226
1・2・4・8・10・11・22・29

川島本町遺跡　遺構

Page１　Ⅰ区全景１（南から）
Ⅰ区全景２（南から）
Ⅰ区全景３（北から）
Page２　ＳＥ101周辺（北から）
Ⅱ区下層遺構面全景（北から）
Ⅱ区上層遺構面全景（北から）
Page３　ＳＰ109全景（西から）
ＳＰ117全景（西から）
ＳＰ117土層断面（西から）
Page４　ＳＥ101全景（西から）
ＳＥ101土層断面（東から）
ＳＤ102遺物出土状況（北から）
Page５　ＳＤ102土層断面（南から）
ＳＤ107・108・110全景（北東から）
ＳＤ107土層断面（西から）
Page６　ＳＤ108土層断面（南から）
ＳＤ109土層断面（西から）
ＳＤ205～207全景（南西から）
Page７　ＳＤ208・209全景（南西から）
ＳＤ208・209土層断面（東から）
ＳＤ209土層断面（東から）
Page８　ＳＤ110土層断面（南から）
ＳＫ101土層断面（東から）
ＳＫ103遺物出土状況（南から）
Page９　ＳＫ103土層断面（南から）
ＳＸ201全景（北から）
ＳＸ201土層断面（北から）
Page10　ＳＸ202土層断面（北から）
ＳＸ202土層断面（南から）
ＳＸ202サヌカイト破片・剥片類出土状況（南から）
Page11　ＳＸ203全景（北から）
ＳＸ203遺物出土状況（東から）
Ⅱ区包含層出土縄文土器群１（北から）

Page12　Ⅱ区包含層出土縄文土器群２（西から）
Ⅱ区西壁側溝縄文土器出土状況（東から）
Ⅱ区東壁北半部土層断面（南西から）
Page13　Ⅱ区東壁中央部（SD209周辺）土層断面（西から）
Ⅱ区下層確認トレンチ西壁土層断面（南東から）
Ⅱ区西壁中央部（SD208・209周辺）土層断面（南東から）

川島本町遺跡　遺物

Page１　SK101　4
SK103　6
SE101(1)　9
Page２　SE101(2)　10
SD102(1)　12
SD102(2)　28
Page３　SD102(3)　37
SD205　51
SD208上面　60
Page４　SD208側面　60
SD208底部外面　60
SD110　79
Page５　SD212　84
SX203　146
包含層(1)　189
Page６　包含層(2)　191
SD102(1)　26・27・29
SD102(2)　31～35
Page７　SD209　56～59
SD110凹面　66・67・80～83
SP204・SD110・201・204・206・207
SX202　1・45～48・68・85・90～92
Page８　包含層(1)　148～152
包含層(2)　153～156
包含層(3)　157～161
Page９　包含層(4)　162～167
包含層(5)　168・170
包含層(6)　172・173
Page10　包含層(7)　175～179
包含層(8)　192～196
Page11　SD101・203・207～209・211表面　40・52・54・61～63
SD101・203・207～209・211裏面　40・52・54・61～63
SX202(1)表面　94～113
Page12　SX202(1)裏面　94～113
SX202(2)表面　114～118
SX202(2)裏面　114～118
Page13　SX203(3)表面　119～128
SX203(3)裏面　119～128
SX202(4)表面　129～139
Page14　SX202(4)裏面　129～139
SX202(5)　145
SX202(5)　145
Page15　包含層表面　197～203
包含層裏面　197～203

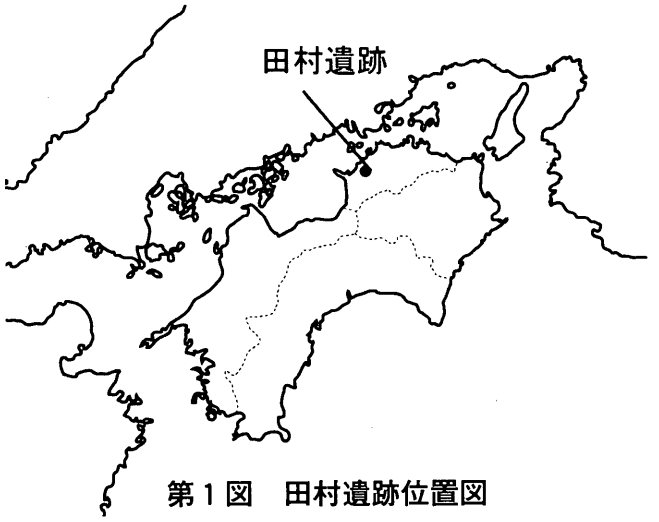
川島本町南遺跡　遺構・遺物

Page１　全景（北から）
SP31土層断面（南から）
SP39土層断面（東から）
Page２　SD03・04全景（西から）
SD06・07全景（南から）
SD03土層断面（東から）
Page３　SD03勾玉出土状況（東から）
SD04土層断面（東から）
SD03表面　10
Page４　SD03表面　10
SD03裏面　10
SD03裏面　10

県道高松善通寺線道路改修事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

田村遺跡 II



第１図　田村遺跡位置図

2007. 1

香川県教育委員会

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

県道高松善通寺線は高松市と善通寺市を結ぶ幹線道路であるが、近年の交通量の増加に伴い丸亀市内での混雑が多発してきた。こうした状況の緩和策として香川県土木部道路建設課（以下、道路建設課と略称）は、丸亀市田村町より中府町に至る県道高松善通寺線の拡幅工事を計画した。

平成10年度に香川県教育委員会（以下、県教委と略称）は、工事予定箇所が周知の埋蔵文化財包蔵地である田村廃寺（白鳳時代～平安時代）に隣接することから当該地に埋蔵文化財が所在する可能性が高いものと判断し、道路建設課と協議を重ね、地下遺構に影響を与える範囲については発掘調査を実施することで合意に達した。現地での発掘調査は平成10年度に県教委が１次調査を、平成11年度に（財）香川県埋蔵文化財調査センターが２次調査を実施し、平成17年度の今回の発掘調査は３次調査になる。１・２次調査では、この遺跡が田村廃寺と密接に係わる、古墳時代末～平安時代（７～12世紀）頃の集落跡である事が明らかになった。また、注目される遺構としては、平安時代頃の田村廃寺で使われた釣鐘を鋳造したと考えられる梵鐘鋳造遺構を検出した。この資料は全国的にも希少であり、大変重要な調査成果になった。

今回の調査対象地は遺跡の北半部にあたり、県教委による平成14･16年の道路側溝工事に伴う立会調査、平成16年度の試掘調査を経て保護措置の必要な調査範囲が確定した。発掘対象地は790㎡を測る。調査地は市街地で西側に県道、東側には複数の店舗が隣接する狭地のため、店舗への進入路の確保、発掘調査の作業ヤードの確保、掘削土の防塵対策、工事工程との調整等の多数の問題があった。これらの問題を解決するため、地元地権者及び直接工事を担当する香川県善通寺土木事務所（平成17年度以降、香川県中讃土木事務所に事業を移管）と協議を重ねた。その結果、調査区を小分割し、その中で店舗への進入路と作業ヤードを確保しながら調査を進める方策をとる事になった。また、スケジュールの関係で、対象地の主要な区域を香川県埋蔵文化財センターが４月～６月までの３ヶ月間で調査を実施し、南半部の一部を工事着工前後に県教委が調査を担当する事になった（４次調査と仮称する）。

香川県埋蔵文化財センターの現地調査（３次調査）は、16年度から設けられた小規模調査班が担当した。小規模調査班とは、土木部道路建設課事業に係わる小規模な発掘調査を担当する調査班であり、17年度の担当は主任文化財専門員西村尋文、文化財専門員古野徳久、調査技術員中里伸明、整理作業員田村加良子が現地調査及び整理作業にあたった。現地調査は平成17年４月１日から６月30日までの３ヶ月間を要した。なお、県教委が担当する４次調査は同年８月中旬に実施した。なお、発掘調査の成果をまとめる整理作業は、香川県埋蔵文化財センターにおいて同年11月より12月までの2ヶ月間を要した。

平成17年度の発掘調査及び整理作業は、以下の体制で実施した。

総括	所　長	渡部明夫	調査課	課　長	廣瀬常雄
	次長兼総務課長	榊原正人		主任文化財専門員	西村尋文
総務課	副主幹兼係長	松崎日出穂		文化財専門員	古野徳久
	主　査	塩崎かおり		参　事	河野浩征
	主　査	田中千晶		調査技術員	中里伸明
				整理作業員	田村加良子

（現場作業参加者）　朝田加奈子、磯野良照、井戸　等、香川慶一、佐野信子、新池谷昭雄、茶本憲一、橋本敏子、松原登代子、矢野貞子

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

田村遺跡が所在する丸亀平野には現在、中央部に土器川、西部に金倉川および弘田川、東部に大束川が流れている。このうち、土器川と金倉川の間の、北側中央に田村遺跡が位置する。このあたりは土器川と金倉川によって形成された沖積地で、両河川の上流地帯に由来する砂礫あるいは泥によって形成された土地である。この土器川と金倉川は流路が定まらず、たびたび変化していたことが、航空写真や地図上から読み取れる。田村遺跡のすぐ東側にも旧河道の痕跡が認められ、ため池である蓮池はこの旧河道上に位置する。一方、田村遺跡の西側においても先代池から丸亀城西高等学校に向けて、条里型地割が乱れており、旧河道の存在が想定できる。したがって、これら旧河道に挟まれた田村遺跡は、中州状の微高地上に立地することが推定される。このことを裏付けるかのように、田村遺跡近辺では、集落跡が緩やかな「く」の字状を呈して、南北に細長く分布する。これはおそらく蓮池の基であった旧河道によって形成された自然堤防を示しているのであろう。

第２節　歴史的環境

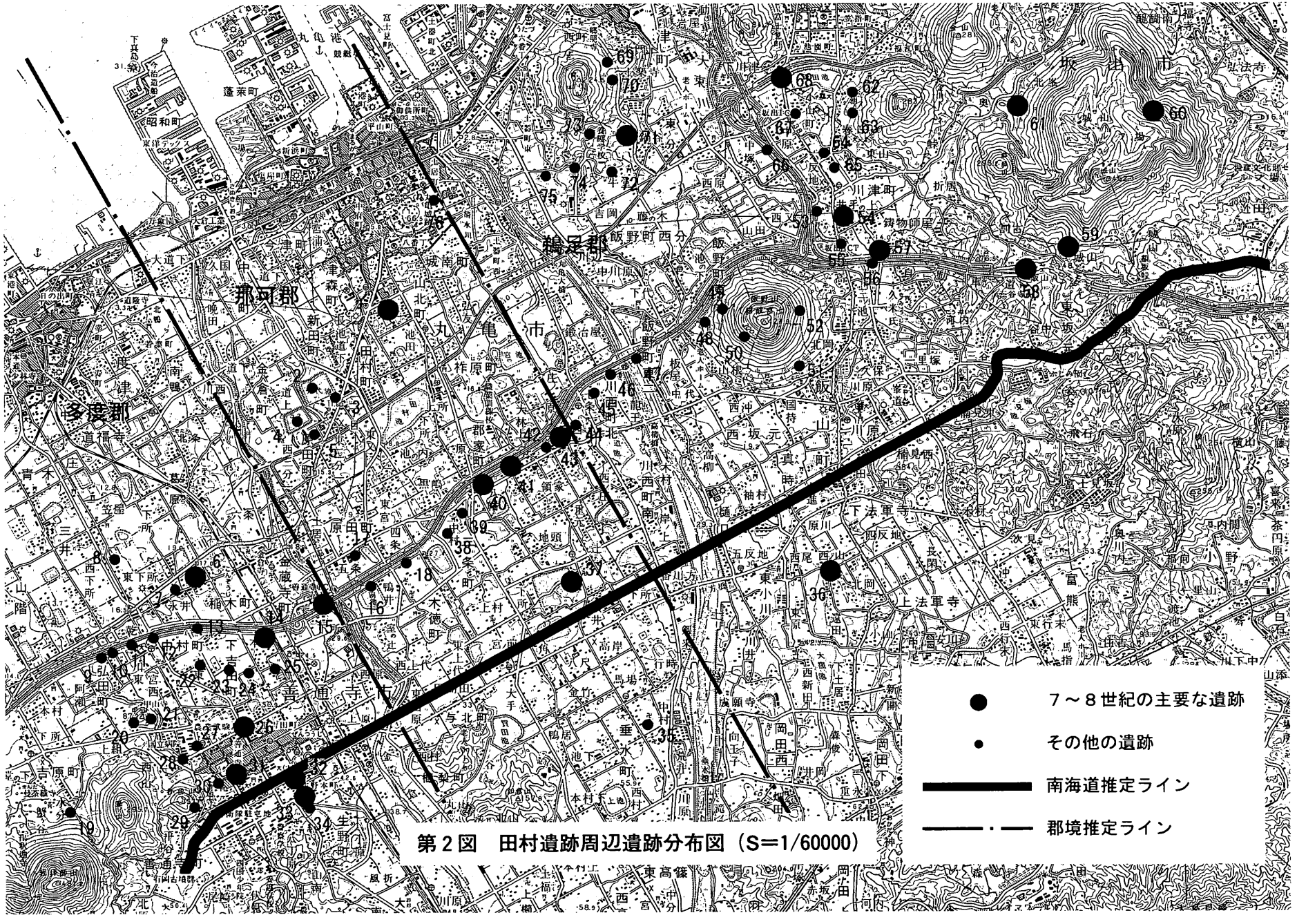
旧石器時代・縄文時代

香川県内で確認できる旧石器時代の遺跡は、主に島嶼部や丘陵地においてであるが、平野部に立地する三条黒島遺跡（39）では翼状剥片石核・翼状剥片などの接合資料が出土し（森下1997a）、郡家田代遺跡（43）では国府型ナイフ形石器、翼状剥片などが100点近く出土しており（佐藤1996）、そのほか２次堆積物中の出土遺物も含めると広範囲に分布している。

縄文時代に入ると中期に至るまでは遺構・遺物ともにほとんど確認されず、状況不明である。この時期の遺跡が県内では海浜部に多く見られることと対応している可能性はある。縄文時代後期に至っても遺構を確認することはほとんどないが、この時期から土器がまとまって出土する遺跡が散見される。特筆すべきは永井遺跡（13）で、後期から晩期前葉に至る多量の土器・石器とともに、自然河川跡からドングリを主体に、トチ・クリ・クルミなど、当時の食糧にあたる植物遺存体が確認された。これらを加工・調理する際に用いる石皿も多数出土している（渡部1990）。このほか、旧練兵場遺跡群中の弘田川西岸遺跡・平池南遺跡（５）などで磨消縄文土器がまとまって出土している。これらが出土するのは、自然河川跡もしくは黄褐色系シルト層からであり、この層は、弥生時代以降の基盤層となっている。

弥生時代

縄文時代晩期後半（突帯文期）から弥生時代前期に至るまでは、河川流域で遺跡が確認できることが多い（森下1998）。大束川流域においては、川津下樋遺跡（64）で検出された自然河川跡で井堰が検出されるとともに、弥生時代前期と思われる水田跡が確認された（片桐1996）。このほか、下川津遺跡（68）・川津元結木遺跡（66）・川津川西遺跡（57）などでは、縄文時代晩期もしくは弥生時代前期の土器が出土している。また、金倉川流域においては、平池南遺跡（５）で自然河川跡より縄文時代晩期中葉～後葉の土器とともに、打製石鍬や小型鋤状木製品が出土している（木下1995）。龍川四条遺跡（18）も同様の状況であり、両者の近隣に集落跡の存在が想定される。これらの遺跡は水稲農耕が確認あるいは想定



第２図　田村遺跡周辺遺跡分布図（S＝1/60000）

第1表　田村遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	田村遺跡・田村廃寺	27	旧練兵場遺跡	53	川津西又遺跡
2	中の池遺跡	28	善通寺陣所跡	54	川津一ノ又遺跡
3	平池東遺跡	29	香色山経塚	55	川津東山田遺跡
4	平池西遺跡	30	善通寺西遺跡	56	三ノ池古墳
5	平池南遺跡	31	善通寺境内遺跡	57	川津川西遺跡
6	稲木北遺跡	32	四国学院大学構内遺跡	58	足利池南窯跡
7	永井北遺跡	33	生野本町遺跡	59	前池北窯跡
8	三井遺跡	34	生野南口遺跡	60	城山城跡
9	阿弥陀堂遺跡	35	垂水妙見遺跡	61	峠奥窯跡群
10	高熊遺跡	36	法勲寺跡	62	川津茶臼山古墳
11	乾遺跡	37	宝憧寺跡	63	蓮尺茶臼山古墳
12	中村遺跡	38	三条番ノ原遺跡	64	川津下樋遺跡
13	永井遺跡	39	三条黒島遺跡	65	川津二代取遺跡
14	稲木遺跡	40	郡家原遺跡	66	川津元結木遺跡
15	金蔵寺下所遺跡	41	郡家一里屋遺跡	67	川津中塚遺跡
16	龍川五条遺跡	42	郡家大林上遺跡	68	下川津遺跡
17	五条遺跡	43	郡家田代遺跡	69	青ノ山山頂遺跡
18	龍川四条遺跡	44	川西北・原遺跡	70	青ノ山古墳群
19	大塚池（吉原椀貸塚）古墳	45	川西北・七条Ⅰ遺跡	71	青ノ山1号窯跡
20	甲山北遺跡	46	川西北・七条Ⅱ遺跡	72	吉岡神社古墳
21	甲山城跡	47	川西北・鍛冶屋遺跡	73	竜塚古墳
22	仲村城跡	48	飯野・東二瓦礫遺跡	74	青ノ山2号窯跡
23	九頭神遺跡群	49	飯野・東分山崎南遺跡	75	青ノ山城跡
24	下吉田八幡古墳	50	飯野山西麓遺跡	76	丸亀城跡
25	石川遺跡	51	坂元神社遺跡		
26	仲村廃寺	52	飯野山山頂遺跡		

されており、水稲農耕を契機とし、それに基づいて立地した集落の出現という見解がなされる。

このような河川流域の集落は、弥生時代前期の中頃以降、環濠集落という形で（視覚的に）拠点的な集落が形成される。金倉川流域では、中の池遺跡（2）において5重の環濠が確認されており、龍川五条遺跡においては、環濠とともに居住域と想定される柱穴群、周溝墓を主体とする墓域が構成される状況が検出された（森下1998）。一方、環濠の出現よりやや遅れて「瀬戸内型甕」が出現する。瀬戸内型甕は県内で自生したものではなく、他地域との交流関係に基づいて出現したものと理解されている（森下・信里・乗松2000）。また、竪穴住居（竪穴建物跡）の確実な事例が確認されるのも前期後半からであり、そのほとんどが「松菊里系住居」と考えられる（中里2004）。石器においても石斧類は遠隔地石材を用いており、広域流通の状況が窺える。さらにその一方で、前期後半～中期前葉の土器の文様パターンは、水系単位で異なることが指摘されており、金倉川・大束川流域では甕において直線文帯最下段に列点文や波状文を施す傾向があるという（森下・信里・乗松2000）。よって、「河川流域あるいは平野を単位とした広域交流が顕在化」したのが、この時期といえよう。

この後、弥生時代中期初頭までには環濠が埋没することを除けば、遺跡の動態に大きな変化はない。しかし、中期中葉にはこれらの拠点的集落は一旦廃絶し、それともに造墓活動も縮小傾向になる。その一方で、倉庫と考えられる掘立柱建物跡が出現し、その後の居住域（信里2003）は竪穴住居と掘立柱建物跡のセット関係に基づいて形成される（森下1999）。この居住域が複数まとまって確認できる遺跡・遺跡群が大規模集落とみなされ、逆に散在的であれば小規模集落ということになり、丸亀平野においては旧練兵場遺跡群（27）が前者にあたり、川津一ノ又遺跡（54）が後者にあたる（信里2002）。

弥生時代中期後半になると、これまでに河川流域を中心に展開されていた集落とは別に、丘陵裾や丘陵斜面に集落が営まれる状況が顕著に確認できる。弘田川西岸に展開する丘陵群においては、

天霧山に立地する矢ノ塚遺跡が代表的であり、周溝をもつ竪穴住居と、梁間一間の掘立柱建物跡で構成される居住域が検出されている（真鍋1987、森下1999)。大束川流域においても、平野部の集落と飯野山に立地する集落で構成される遺跡群が想定されている（信里2003)。

弥生時代後期後半以降、高所地あるいは丘陵上の集落は営まれなくなり、集落群のまとまりとしては、大規模集落である旧練兵場遺跡（27）と、平野部の微高地で各所に立地する集落とで、再び構成されるようなる。この時期に営まれる丸亀平野の代表的な遺跡として、下川津遺跡（68）があげられ、この集落で鉄器生産がなされていたことが推定され、周辺の遺跡群内で流通していた状況が想定された（信里2004)。また、旧練兵場遺跡（27)では鍛冶遺構とともに鉄器６点が出土した（森下2003)。いまだ事例は少ないが、この時期には鉄素材の確保が比較的安定したものと考えられる。集落立地の動向からみれば、この状況は古墳時代前期初頭ころまでは変わらないと思われる。ただ、この期間中、旧練兵場遺跡群においては、掘立柱建物跡が居住域内に見られなくなり、終末期には竪穴住居が小形均質化して、棟筋をそろえて配置されるなど、集落内の構成に何らかの統制が加わることが指摘されている（森下2001)。また、終末期には方形住居が大半を占め、古墳時代前期初頭には方形住居にほぼ統一される。ただし、終末期においては、丸亀平野西部域では小形もしくは中形の住居が主体をなすのに対し、大束川流域を中心とした東部地域では中形を主体としつつ、大形住居も検出されている点で、小地域色が見出される（蔵本1999)。

古墳時代

古墳時代前期の集落の動向は不明である。これまで大規模集落として継続的に営まれてきた旧練兵場遺跡群において、少なくとも、これまで調査がなされた箇所での営みが解消され、他の弥生時代の集落も規模の縮小あるいは解消の傾向を示していることから、集落群の立地あるいは集落内の構成などが再編されたことを推定するのみであり、この時期の様相はきわめて不鮮明である。

古墳時代中期の状況も同様であるが、近年、旧練兵場遺跡（27）において中期の竪穴住居が検出された。この時期の竪穴住居は、竈が造り付けられているものと、そうでないものが混在しており、造り付け竈の出現過程を検証するうえで貴重な資料である。また、後期に入るとその資料数は充実する。これらの住居内の床面上あるいは埋土中からは、臼玉を主体とする滑石製品が多数出土しており（片桐・信里・細川・中島2005)、集落機能時（あるいは廃絶時）の活動の一端をうかがい知ることができる。旧練兵場遺跡は、弥生時代のみならず、古墳時代の集落としても重要な遺跡である。

このほか、古墳時代後期（６世紀～７世紀前葉）の集落には、丸亀平野西部では四国学院大学構内遺跡（32）・仲村廃寺（26）・稲木遺跡（14）などがあり、平野東部では下川津遺跡（68）およびその周辺の遺跡群があげられる。これらの集落は造り付け竈を有する竪穴住居と掘立柱建物跡とで基本的に構成されている。断片的な検出事例も多いが、資料数は確実に蓄積されており、後期の集落の動向および内部構成などを一度整理すべき状況に至っているものと考える。

古代初頭

７世紀代は居住形態が竪穴住居から掘立柱建物跡へと移行する過渡期である。丸亀平野の多くの遺跡では、竪穴住居が確認されるのは７世紀前葉までであるが、四国学院大学構内遺跡（32）や下川津遺跡（68）などでは、７世紀中葉の竪穴住居がまとまって検出されている。おそらくこの時期を境にして以後、掘立柱建物跡を主体とする居住域が形成されると考えられるが、川津一ノ又遺跡（51）や川津川西遺跡（57）では、少数ながらも７世紀後葉～８世紀前葉の竪穴住居が検出されて

おり、竪穴住居から掘立柱建物跡への居住形態の推移は、一律的なものではなく、集落間もしくは集落内部で異なるようである。このうち、下川津遺跡（68）では７世紀代中葉以降、区画施設を伴った大型建物跡群が構成されるようになる。その整地作業にあたっては耳環・管玉・勾玉などを投棄しており、地鎮の可能性が指摘されている。また、遺跡内で鉄器・土師器の生産が行われているとともに、周辺では須恵器生産も継続的に行われていることなどから、多面的な経営活動を行う集団（周辺の遺跡群も含む）と、その首長層の存在が想定された（佐藤2000）。

一方、７世紀後葉～末葉には、四天王信仰や金光明経などにもとづく護国仏教の流布を国家側が意図して、各地方で仏教寺院が展開する（菱田2005）。この時期の寺院の創建主体者は、下川津遺跡で想定されたような首長層や、郡司に任命されるような氏族であり、丸亀平野での具体例としては、伝導寺（仲村廃寺）（26）・善通寺（30）が佐伯氏の氏寺であることがあげられる。この時期に創建される地方寺院の多くは法隆寺式伽藍配置と法起寺式伽藍配置であり、前者は山田寺式軒丸瓦、後者は川原寺式軒丸瓦の系統の瓦類が伴う。丸亀平野においても、郡内に1～2寺院存在し、川原寺式系統の軒丸瓦が広く分布している。今回の調査地のすぐ南に位置する田村廃寺（１）も、この時期に創建されたものであり、創建時の瓦として川原寺式系統の軒丸瓦が出土している（東2002）。したがって、伽藍配置としては法起寺式伽藍配置が第一候補として挙げられるが、その是非を検証する材料は今のところ皆無である。

また、古代寺院の寺域のほとんどは、条里型地割の一町（約109m）を単位とするが、条里型地割施行以前に建立された寺院は、それに一致しない（上田1987）。この状況は丸亀平野の古代寺院についてもあてはまり、佐伯氏の氏寺とされる伝導寺（仲村廃寺）（26）では、ほぼ正方位の土壇が瓦の堆積を伴って検出されている。その後、この寺院は奈良時代に消失し、あらためて南西500ｍの地に移転されたのが善通寺である。この善通寺の寺域は条里型地割に規制を受けて建立されている（笹川1989）。今回の調査地の南に隣接する田村廃寺（１）においても、当地に現存する地割が正方位をなしており、発掘調査においても正方位に近い方向で区画溝や掘立柱建物跡が検出されていることから（東2002・北山2004）、田村廃寺の創建が条里型地割施行以前であったという想定がなされる。

丸亀平野において、土地区画の整備である条里型地割の施行が開始されるのは、７世紀末葉～８世紀初頭の時期である（森下1997b）。この地割は、讃岐国においては南海道を基準に設置されていることが明らかにされており（金田1996）、推定される郡界線も南海道を基準にして直交方向に設置された状況がうかがえる。近年では、川原遺跡（高松市）および四国学院大学構内遺跡（32）において、南海道の側溝かと考えられる溝跡が検出された（藤好2003・海邊2003）。

この南海道を基準とした土地区画は、国家側からしてみれば、班田収授法に象徴される各種税徴収の前提としての土地管理政策、という一面を有している。実際、少なくとも８世紀後半以降は、条里プラン（金田1995）にもとづいて土地管理がなされている状況が明らかにされている（金田1999）。その一方で、条里型地割の施行は耕作地のみならず、宅地の再編成をも促していることが確認されており（大久保1990・森下1997b）、集落の動向を理解するうえでも重要な意味を有している。稲木北遺跡（６）では、条里型地割に規制され、かつ、計画的に配置された大型建物跡群が検出された。この建物跡群は、それまで宅地としては利用されていなかった箇所に、条里型地割の施行直後に形成されており、この時期の宅地再編成の一端を示唆しているといえよう。

田村遺跡の今回の調査地においても、条里型地割施行前後の集落が検出された。したがって本報告では、条里型地割を考慮しながら、隣接する田村廃寺との対比の中で今回の調査地を評価している。

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　概要

道路拡幅工事であるため、調査地は南北に細長い。よって、調査地を北から順にＩ区からⅢ区に区分して調査を進めた。また、調査地はいくつかの店舗に隣接しており、営業上の障害とならないよう配慮する必要があった。人力掘削時の排土は各調査区内で仮置きする必要があり、このため、各調査区はさらに南北に分けて調査した。それぞれの細区分はＩ－１区・Ｉ－２区というように、北から順に番号を付与している。また、本報告では、香川県教育委員会が調査した箇所（４次調査区域）についても掲載している。これらを、Ⅲ－３区・Ⅲ－４区として本報告では取り扱っている。

Ｉ区の南半部からⅡ区の北半部に集中して、７世紀前葉～８世紀前葉の掘立柱建物跡群を検出した（第３図・第７図参照）。今回の調査地のすぐ南には田村廃寺が位置しており、既往の調査では、鴟尾を含めた多量な瓦類・梵鐘鋳造遺構など、寺院の存在を示す遺構・遺物が多々確認されている。しかし、今回の調査でそのような遺構・遺物が確認できたのは、包含層中に含まれていた瓦片１点のみである。田村廃寺に隣接する以上、田村廃寺との関わりを完全に否定するものではないが、これまで確認されてきた田村廃寺の関連遺構とは、その内容から見て区別されるべきである。

第２節　基本層序

調査地の旧状は複数の店舗が建ち並んでいた市街地であり、今回の調査においても店舗に伴うコンクリート基礎を含む造成土が確認されている。これらの造成土はおおむね60～80cmの厚さで、調査地全体に及んでいる。ただし、コンクリート基礎は地表下１ｍ以下に位置しており、この部分については既に遺構は失われていた。

造成土の直下には耕作土層が堆積しており、残りのよい部分で40cm程の厚さがあった。この土層中からは近世の遺物が出土している。Ⅲ区で検出された土坑・溝跡（ＳＫ301・302、ＳＤ301）の埋土は、この耕作土層と基本的には同じものである。

耕作土層の直下では、淡灰色を呈する砂質シルト層が10～20cmの厚さで堆積しており、基盤層はその直下で確認された。遺構が検出されたのは基盤層上面である。また、Ⅱ区では、遺構に切られた状態で、旧河道を検出した。遺物は出土しておらず、形成された時期は不明である。

第３節　検出遺構・出土遺物

掘立柱建物跡・柵列跡

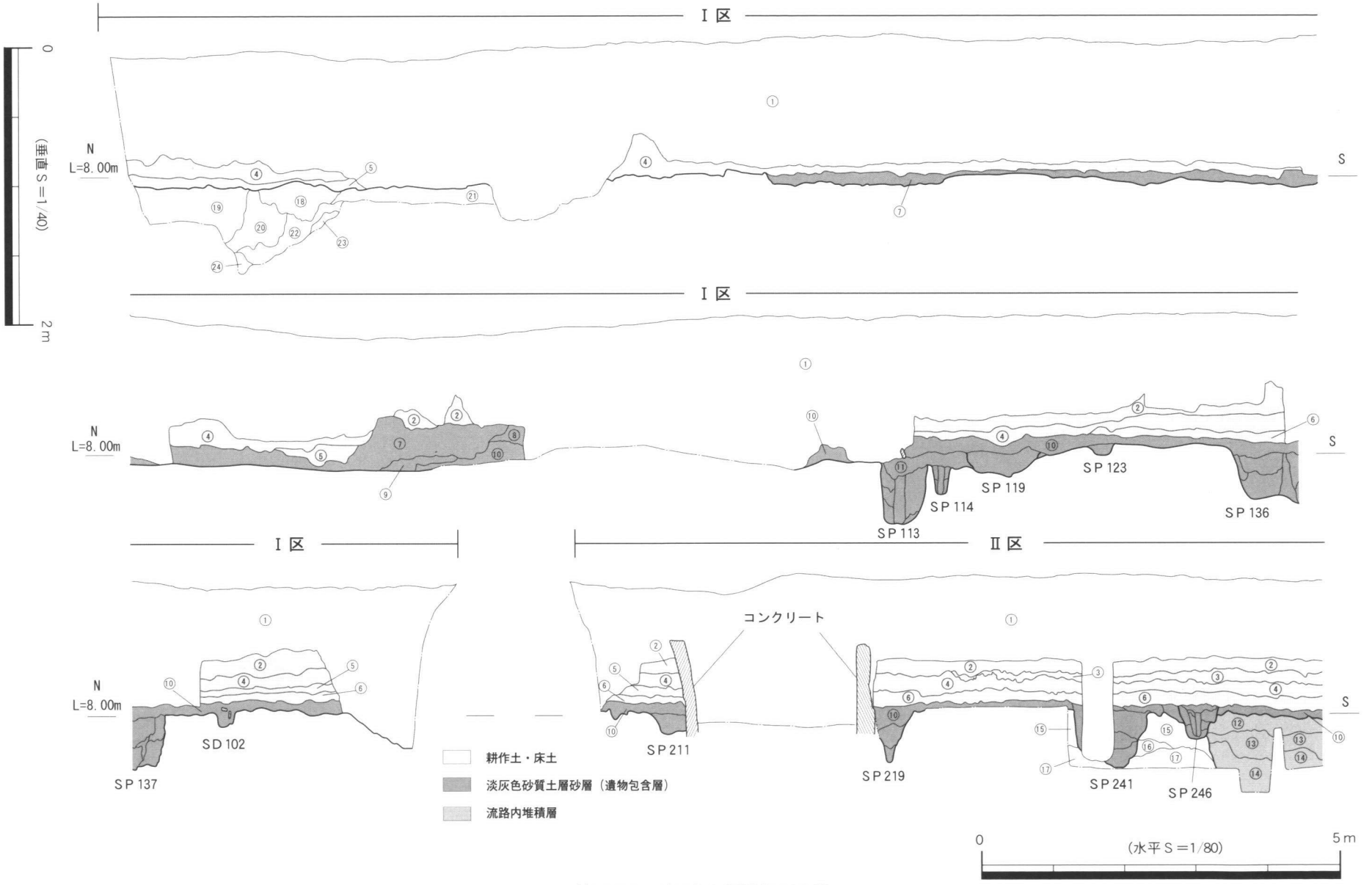
SB001・002,　SA001（第７・８図）

ＳＢ001・ＳＢ002はほぼ重複しており、柱穴の切り合いから判断してＳＢ002→ＳＢ001の順に建替えられたものである。また、ＳＡ001はＳＢ002に切られている。したがってこれらの先後関係は、ＳＡ001→ＳＢ002→ＳＢ001となり、主軸方位を少しずつ西にずらしている状況がうかがえる。

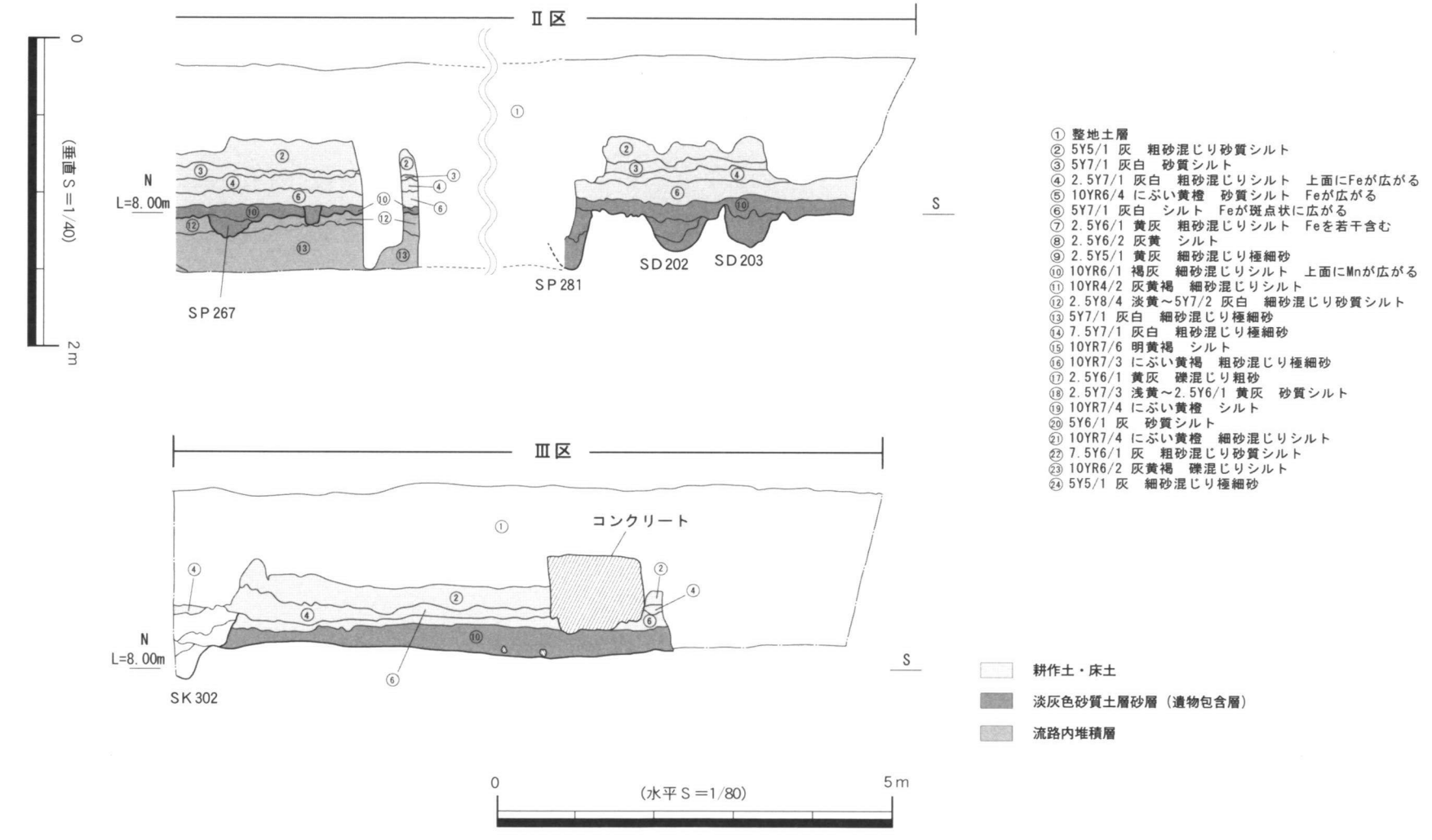
ＳＢ001は東西２間(3.65m)、南北２間以上(4.0m以上)で、主軸方位Ｎ－22.5°Ｗの南北棟である。ＳＢ002は東西２間(3.0m)、南北２間以上(4.05m以上)で、主軸方位Ｎ－19.5°Ｗの南北棟である。

両者を南北棟としたのは、東西棟に復原すると梁間の中間柱に根石が敷かれていることになり（Ｓ

第３図　田村遺跡調査区割図



第4図　東壁土層断面図①

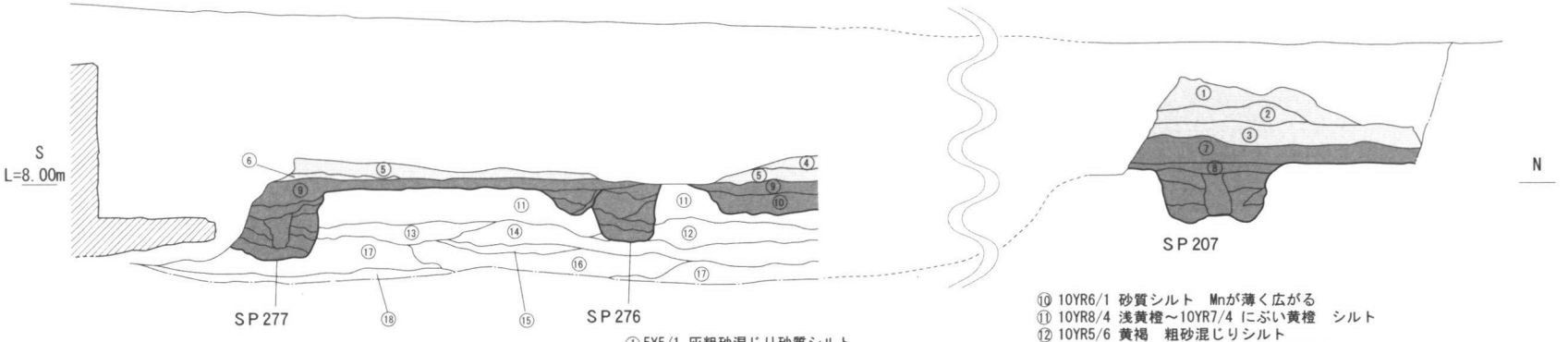


① 整地土層
② 5Y5/1 灰　粗砂混じり砂質シルト
③ 5Y7/1 灰白　砂質シルト
④ 2.5Y7/1 灰白　粗砂混じりシルト　上面にFeが広がる
⑤ 10YR6/4 にぶい黄橙　砂質シルト　Feが広がる
⑥ 5Y7/1 灰白　シルト　Feが斑点状に広がる
⑦ 2.5Y6/1 黄灰　粗砂混じりシルト　Feを若干含む
⑧ 2.5Y6/2 灰黄　シルト
⑨ 2.5Y5/1 黄灰　細砂混じり極細砂
⑩ 10YR6/1 褐灰　細砂混じりシルト　上面にMnが広がる
⑪ 10YR4/2 灰黄褐　細砂混じりシルト
⑫ 2.5Y8/4 淡黄～5Y7/2 灰白　細砂混じり砂質シルト
⑬ 5Y7/1 灰白　細砂混じり極細砂
⑭ 7.5Y7/1 灰白　粗砂混じり極細砂
⑮ 10YR7/6 明黄褐　シルト
⑯ 10YR7/3 にぶい黄褐　粗砂混じり極細砂
⑰ 2.5Y6/1 黄灰　礫混じり粗砂
⑱ 2.5Y7/3 浅黄～2.5Y6/1 黄灰　砂質シルト
⑲ 10YR7/4 にぶい黄橙　シルト
⑳ 5Y6/1 灰　砂質シルト
㉑ 10YR7/4 にぶい黄橙　細砂混じりシルト
㉒ 7.5Y6/1 灰　粗砂混じり砂質シルト
㉓ 10YR6/2 灰黄褐　礫混じりシルト
㉔ 5Y5/1 灰　細砂混じり極細砂

耕作土・床土
淡灰色砂質土層砂層（遺物包含層）
流路内堆積層

第5図　東壁土層断面図②

Ⅱ区　西壁

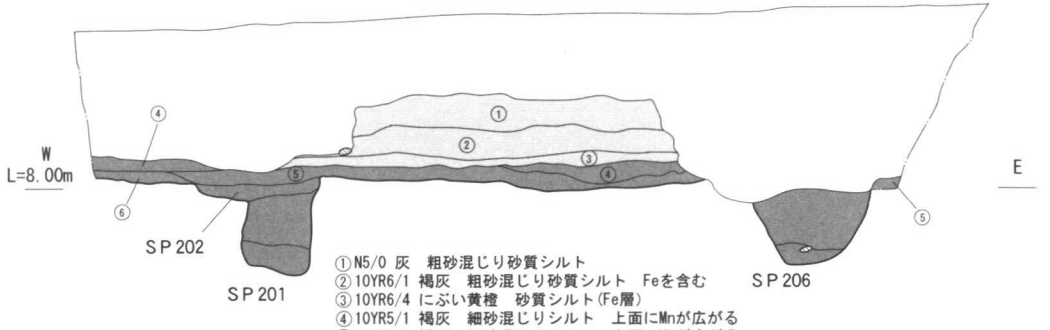


耕作土・床土

淡灰色砂質土層砂層（遺物包含層）

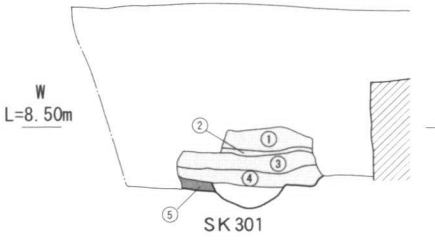
①5Y5/1 灰粗砂混じり砂質シルト
②N5/0 灰　細砂混じりシルト
③5Y7/1 灰白　砂質シルト
④N7/0 灰　シルト Feが全体に薄く広がる
⑤10YR6/4 灰　砂質シルト　Feが全体に広がる
⑥10YR6/4 灰　砂質シルト　Feが全体に多く含まれる
⑦5Y7/1 灰白　シルト　Feが斑点状に広がる
⑧10YR6/2 灰黄褐　シルト　上面にMnが広がる
⑨2.5Y6/1 黄灰～10YR6/1 褐灰　シルト　上面にMnが広がる
⑩10YR6/1 砂質シルト　Mnが薄く広がる
⑪10YR8/4 浅黄橙～10YR7/4 にぶい黄橙　シルト
⑫10YR5/6 黄褐　粗砂混じりシルト
⑬10YR6/4 にぶい黄橙　細砂混じり極細砂
⑭10YR5/6 黄褐～10YR5/1 褐灰粗砂混じりシルト
⑮10YR4/6 褐　粗砂混じり極細砂
⑯10YR8/4 浅黄橙　シルト　やや粘性
⑰10YR6/1 褐灰～2.5Y7/4 浅黄　粗砂混じり細砂
⑱2.5Y6/2 灰黄　細砂

Ⅱ区　北壁

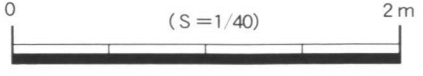


①N5/0 灰　粗砂混じり砂質シルト
②10YR6/1 褐灰　粗砂混じり砂質シルト　Feを含む
③10YR6/4 にぶい黄橙　砂質シルト(Fe層)
④10YR5/1 褐灰　細砂混じりシルト　上面にMnが広がる
⑤10YR6/1 褐灰　細砂混じりシルト　上面にMnが広がる
⑥10YR5/1 褐灰　シルト　上面にFeが広がる

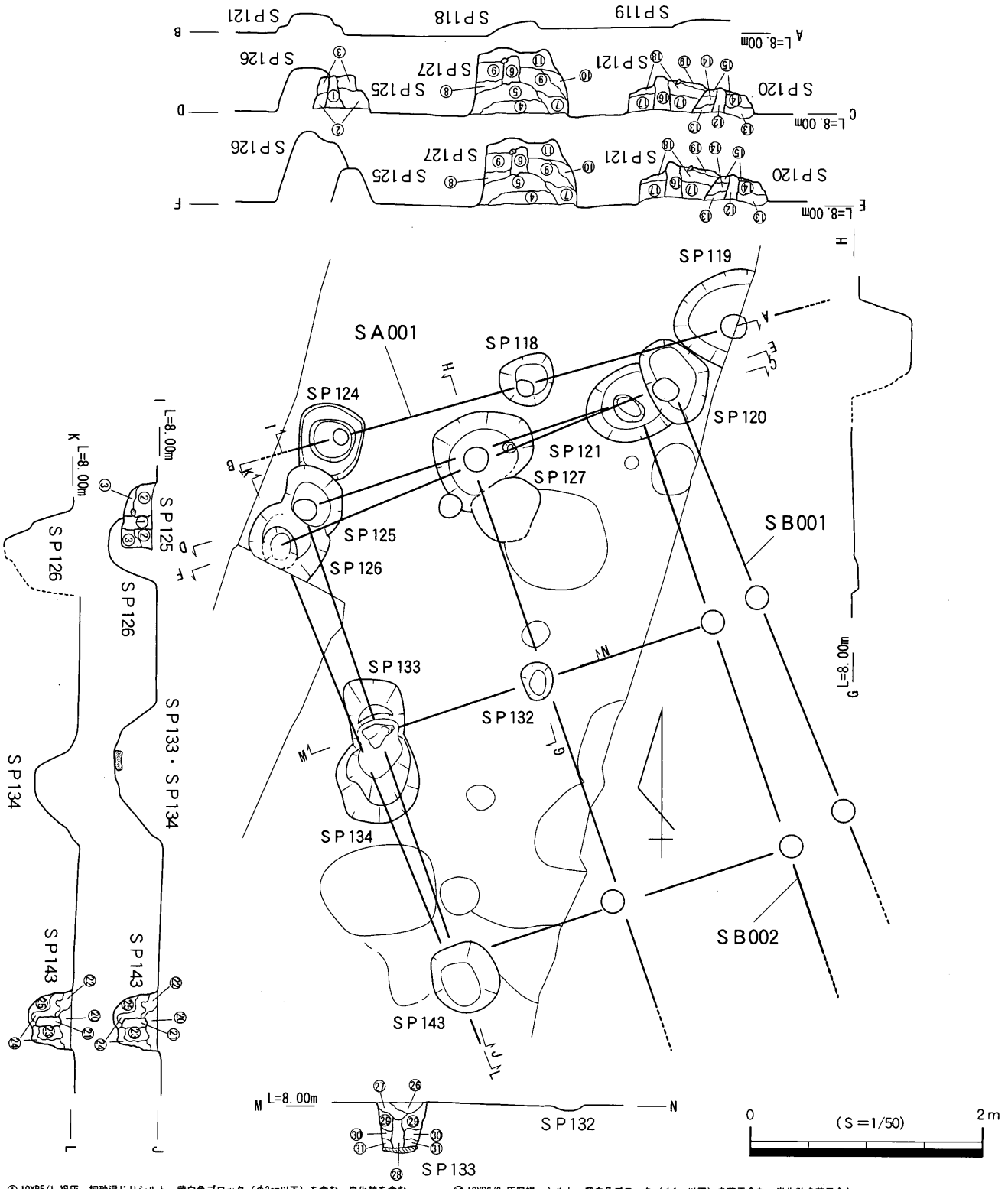
Ⅲ区　北壁



①N5/0 灰　砂質シルト
②5Y6/1 灰　砂質シルト
③5Y6/2 灰オリーブ　砂質シルト
④5Y6/2 灰オリーブ　砂質シルト　Feが雲流状に広がる
⑤2.5Y6/1 黄灰　粗砂混じりシルト　上面にMnが広がる

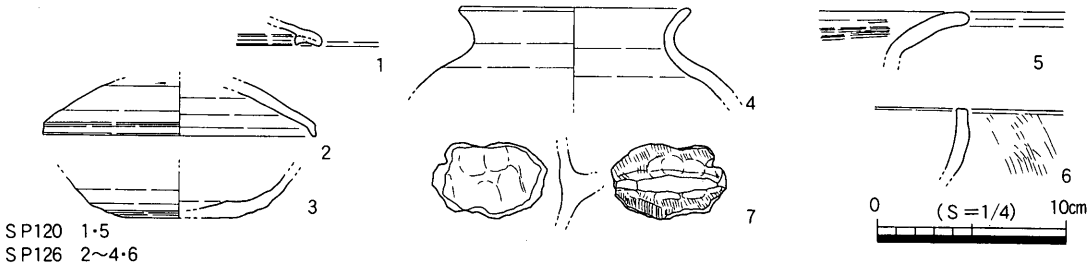


第6図　各調査区　西壁・北壁土層断面図



① 10YR5/1 褐灰　細砂混じりシルト　黄白色ブロック（φ2cm以下）を含む、炭化粒を含む
② 10YR5/1 褐灰　シルト　炭化粒をわずかに含む
③ 10YR4/2 灰黄褐　シルト
④ 10Y6S/1 褐灰　シルト
⑤ 10YR5/1 褐灰　シルト　黄白色ブロック（φ0.5～2cm）を含む、炭化粒をわずかに含む
⑥ 10YR5/1 褐灰　シルト　黄白色ブロック（φ1cm以下）をわずかに含む
⑦ 10YR5/1 褐灰　シルト　黄白色ブロック（φ1cm以下）を多く含む
⑧ 10YR5/1 褐灰　シルト　黄白色ブロック（φ1cm以下）を含む
⑨ 10YR5/1 褐灰　細砂混じりシルト　黄色ブロック（φ1cm程度）を含む
⑩ 2.5Y5/1 黄灰　シルト　黄色粒を若干含む
⑪ 2.5Y5/1 黄灰　極細砂　黄色粒をわずかに含む
⑫ 10YR6/2 灰黄褐　細砂混じりシルト
⑬ 10YR7/1 灰白　細砂混じりシルト　黄白色ブロック（φ0.5～3センチ）を若干含む
炭化粒を若干含む
⑭ 10YR7/1 灰白　細砂混じりシルト　黄白色ブロック（φ1cm程度）を含む
⑮ 2.5Y7/1 灰白　シルト　黄白色ブロック（φ0.5～2cm）を多く含む
⑯ 10YR6/2 灰黄褐　シルト　黄白色ブロック（φ1cm以下）を若干含む、炭化粒を若干含む
⑰ 10YR7/1 灰白　シルト　黄白色ブロック（φ1～2cm）をわずかに含む、炭化粒を若干含む
⑱ 10YR5/2 灰黄褐　シルト　黄白色ブロック（φ0.5～3cm）を若干含む、炭化粒を若干含む
⑲ 10YR5/2 灰黄褐　シルト　黄白色ブロック（φ1～2cm）を多く含む、炭化粒をわずかに含む
⑳ 2.5Y6/1 黄灰　シルト
㉑ 2.5Y7/2 灰黄　シルト　黄色ブロック（φ0.5～2cm）を若干含む
㉒ 2.5Y7/3 浅黄　シルト　黄色ブロック（φ1cm以下）を多く含む
㉓ 2.5Y6/2 灰黄　シルト　黄色粒をわずかに含む
㉔ 10YR5/2 灰黄褐　シルト　黄色ブロック（φ1cm以下）を含む、炭化粒をわずかに含む
㉕ 2.5Y8/2 灰白　シルト　黄色ブロック（φ0.5～5cm）を多く含む
㉖ 10YR7/1 灰白　シルト　黄白色ブロック（φ1～5cm）を含む、炭化粒を若干含む
㉗ 10YR7/1 灰白　シルト　黄色粒をわずかに含む
㉘ 10YR6/1 褐灰　細砂混じりシルト　炭化粒を若干含む
㉙ 10YR6/1 褐灰　細砂混じりシルト　黄白色ブロック（φ1～3cm）を多く含む
㉚ 10YR6/1 褐灰　細砂混じりシルト　黄白色ブロック（φ2～4cm）を含む
㉛ 10YR6/1 褐灰　シルト　わずかに粘性　黄白色ブロック（φ1cm以下）を若干含む

第７図　ＳＢ００１・００２，ＳＡ００１平面図・断面図



第8図　SB001出土遺物実測図

P133)、やや不自然であると判断したためである。ただし、梁間2間で復原しているが、梁間3間であることを否定するものではない。

SA001は他に組み合う柱穴がなく、かつ、他の柱穴に比べて浅いものばかりで構成されているため、柵列跡と判断した。主軸方位はN－74.5°E（N－15.5°W）。

出土遺物は、SB001より7点（第8図－1～7）を図示した。SB002、SA001からは図示できる遺物は出土していない。1・2は須恵器杯蓋で、1は口縁部を折り返してかえりを成形している。3は須恵器杯身で、底部外面は未調整。4は須恵器壺。5は土師器甕で、外面には煤が付着していた。6は土師器鉢、7は土師器甕把手部である。

上記出土遺物のうち、1は7世紀後葉、2は7世紀末葉～8世紀初頭において、主に消費されたものである（信里2002参照)。他の遺物も、1・2から導き出される消費年代との対応に矛盾しない。したがって、なお検討の余地は残るであろうが、SB001は、8世紀初頭までに機能・廃絶した建物跡であると判断する。SB001に先行するSB002・SA001は、SB001の主軸方位とのズレはほとんどないことから、SB001の年代を大きく遡るものではないと判断する。

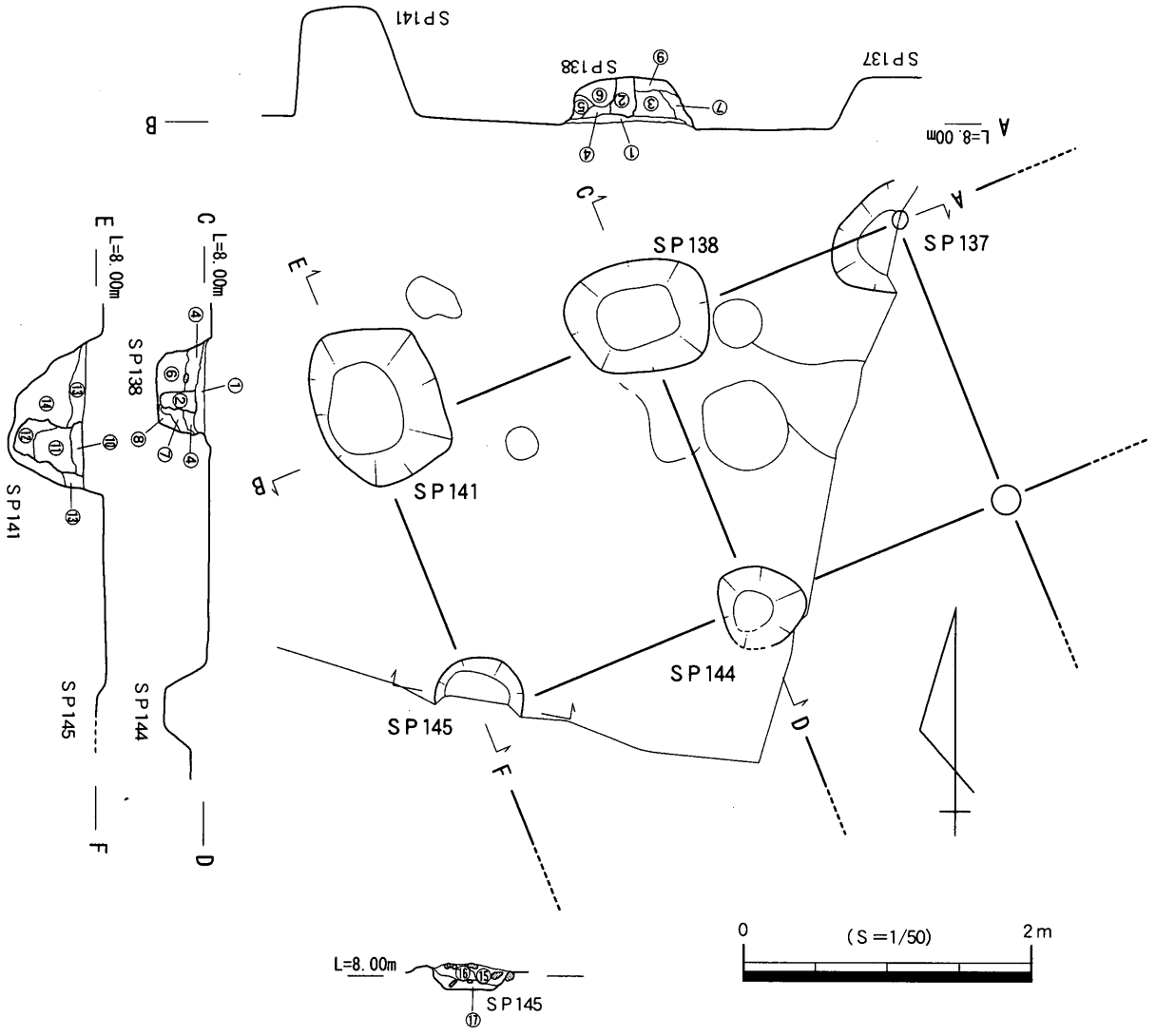
SB003（第9図）

今回検出された掘立柱建物跡の中では、最も柱配置の整った建物跡である。建物跡の規模は、南北1間以上（2.05m以上)、東西2間以上（3.9m以上）で、主軸方位N－67.5°E（=N－22.5°W）の東西棟である。

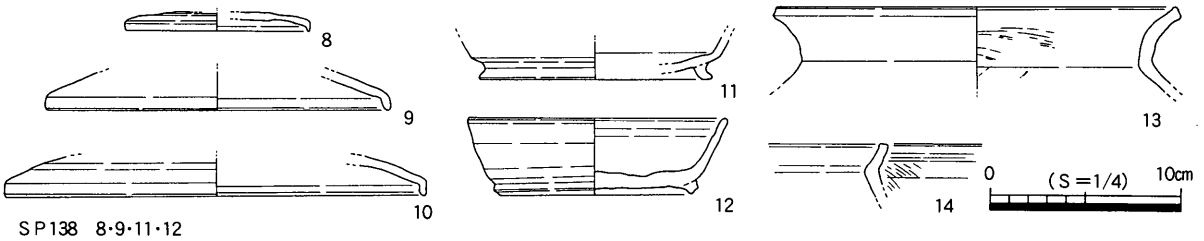
SP141は他の柱穴に比べてやや平面規模が大きく、かつ、深く掘り込まれているため隅柱であると判断した。したがって、これ以上西側へは伸びないものと考える。

出土遺物は7点図示した（第9図－8～14)。SP138・SP141からの出土遺物が主で、特にSP138からは比較的良好な遺物が出土している。8は短頸壺などの口径の小さい器種に伴う蓋かと思われる。今回の調査で出土した須恵器は、焼成がやや不良の軟質で、淡灰色を呈するものが杯類を中心に多く認められるのに対して、8は焼成良好・堅緻で青灰色を呈している。また、外面は高温のため自然釉が消失した「肌荒れ」となっている。9・10は須恵器杯蓋、11・12は須恵器杯身である。12は今回調査の遺構に伴う遺物としては残存率の最も高い資料である。13は土師器甕、14は小形甕の口縁部片である。

上記出土遺物のうち、9・10が7世紀末葉～8世紀初頭、11が7世紀後葉～8世紀初頭、12は7世紀末葉～8世紀前葉において、主に消費された遺物である（佐藤1993・信里2002参照)。したがって、SB003は7世紀末葉～8世紀初頭を中心に機能し、8世紀前葉には廃絶したものと判断する。また、SB003はSB001・002と重複しており、同時併存はありえない。直接の切り合い関係はないが、遺物組成の比較からは、SB003はSB001・002より後出するものと考えられる。ただし、SB002とS

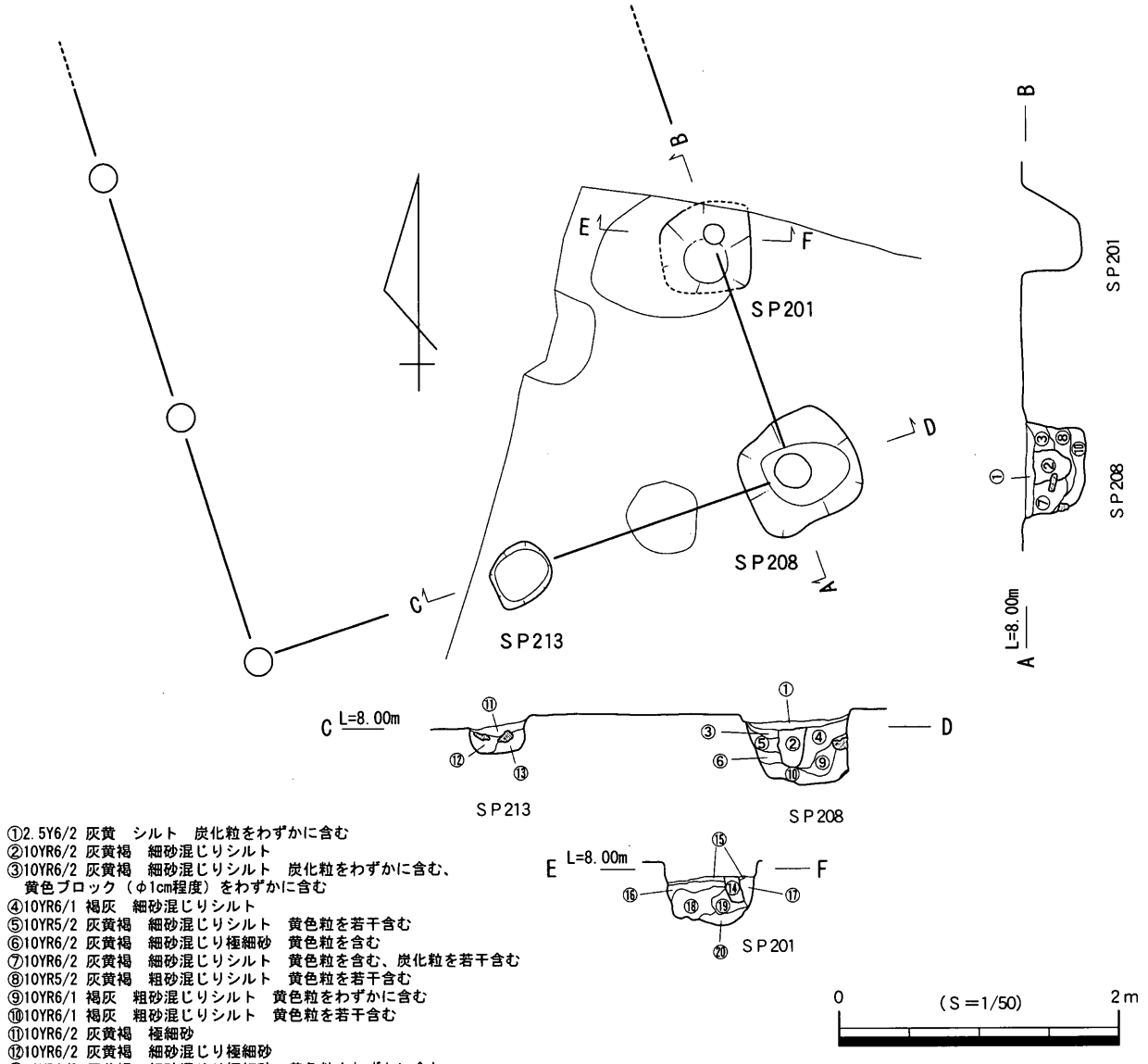


①10YR6/1 褐灰　シルト　黄白色ブロック（φ0.5～2cm）を含む、炭化粒をわずかに含む
②2.5Y5/1 黄灰　シルト
③10YR6/1 褐灰　シルト　黄色粒をわずかに含む
④10YR6/1 褐灰　シルト　黄白色ブロック（φ1cm以下）をわずかに含む
⑤2.5Y6/1 黄灰　砂質シルト　黄白色ブロック（φ1cm以下）を若干含む
⑥2.5Y6/1 黄灰　シルト　黄白色ブロック（φ0.5～2cm）を含む、炭化粒をわずかに含む
⑦10YR6/1 褐灰　シルト　黄色粒を若干含む、炭化粒をわずかに含む
⑧10YR6/1 褐灰　シルト　黄白色ブロック（φ1cm以下）を若干含む
⑨2.5Y6/1 黄灰　砂質シルト　黄白色ブロック（φ1cm以下）をわずかに含む、炭化粒をわずかに含む
⑩10YR6/1 褐灰　シルト
⑪10YR6/1 褐灰　細砂混じりシルト　黄色粒をわずかに含む、炭化粒をわずかに含む
⑫2.5Y6/2 灰黄　粗砂混じり極細砂
⑬10YR6/1 褐灰　礫混じりシルト　黄色ブロック（φ1cm程度）を若干含む
⑭2.5Y6/2 灰黄　礫混じり細砂
⑮10YR6/1 褐灰　礫混じりシルト　上面にMnが広がる
⑯10YR6/1 褐灰　細砂混じりシルト
⑰10YR6/1 褐灰　細砂混じり極細砂



SP138　8･9･11･12
SP141　13･14
SP144　10

第９図　ＳＢ003平面図・断面図及び出土遺物実測図



①2.5Y6/2 灰黄　シルト　炭化粒をわずかに含む
②10YR6/2 灰黄褐　細砂混じりシルト
③10YR6/2 灰黄褐　細砂混じりシルト　炭化粒をわずかに含む、
黄色ブロック（φ1cm程度）をわずかに含む
④10YR6/1 褐灰　細砂混じりシルト
⑤10YR5/2 灰黄褐　細砂混じりシルト　黄色粒を若干含む
⑥10YR6/2 灰黄褐　細砂混じり極細砂　黄色粒を含む
⑦10YR6/2 灰黄褐　細砂混じりシルト　黄色粒を含む、炭化粒を若干含む
⑧10YR5/2 灰黄褐　粗砂混じりシルト　黄色粒を若干含む
⑨10YR6/1 褐灰　粗砂混じりシルト　黄色粒をわずかに含む
⑩10YR6/1 褐灰　粗砂混じりシルト　黄色粒を若干含む
⑪10YR6/2 灰黄褐　極細砂
⑫10YR6/2 灰黄褐　細砂混じり極細砂
⑬10YR6/2 灰黄褐　細砂混じり極細砂　黄色粒をわずかに含む
⑭10YR6/1 褐灰　細砂混じりシルト
⑮2.5Y7/2 灰黄　シルト
⑯2.5Y7/2 灰黄　粗砂混じり極細砂
⑰10YR4/2 灰黄褐　シルト　黄色ブロック（φ0.5～2cm）を若干含む
⑱2.5Y6/2 黄灰細砂混じりシルト
⑲10YR4/2 灰黄褐　シルト　黄色ブロック（φ0.5～2cm）を含む
⑳2.5Y5/2 暗灰黄　礫混じり粗砂

第10図　ＳＢ004平面図・断面図

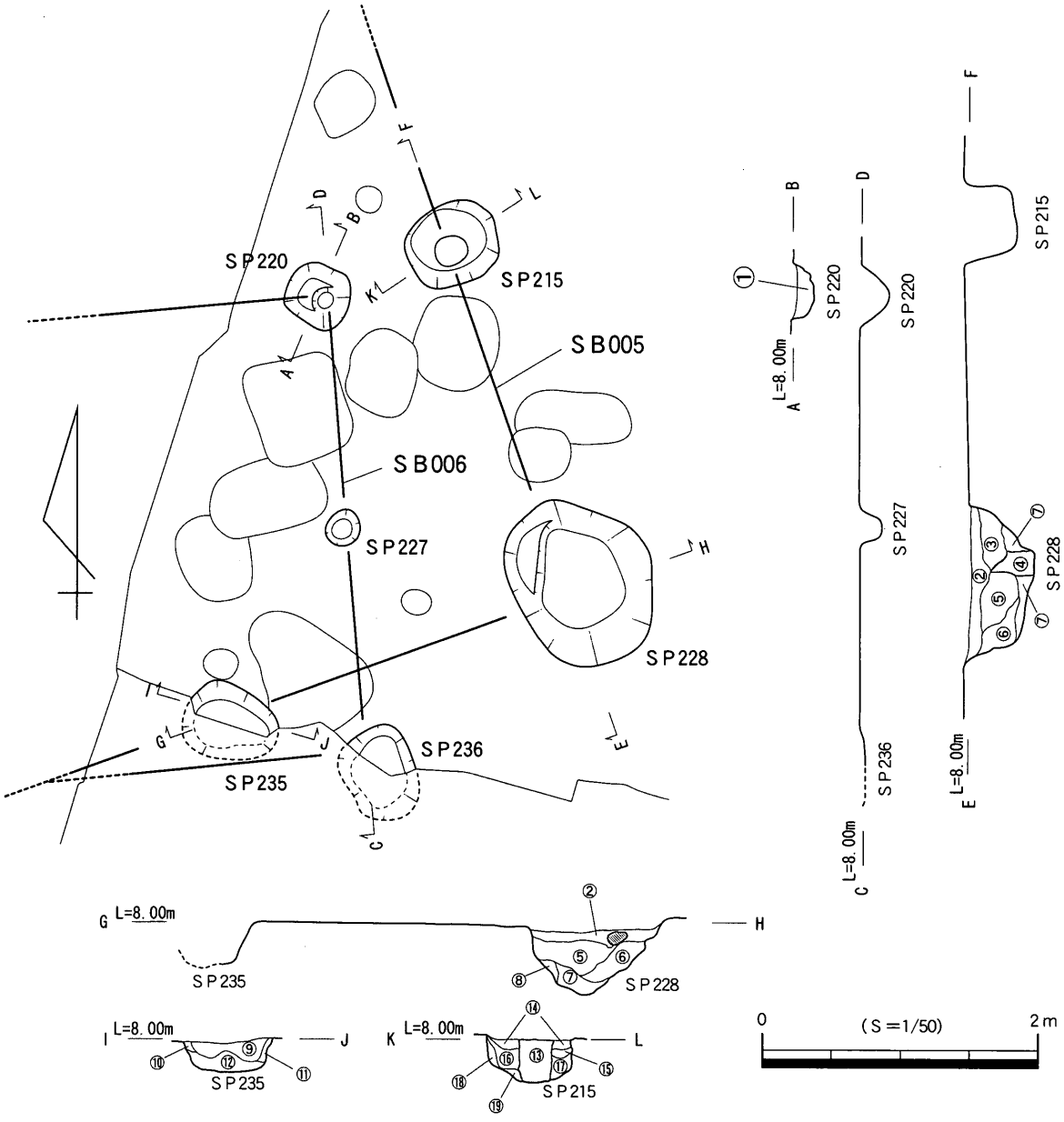
Ｂ003は主軸方位が極めて近似しており、連続的に営まれたものと考えられる。

SB004（第10図）

柱穴３基のみからの復原であり、隣接地の調査がなされれば修正を要する可能性は高い。ただ、ＳＰ208を隅柱とした場合、ＳＰ201が桁行の側柱となり、ＳＰ213が梁間の中間柱とすれば大きな違和感はなく、かつ、主軸方位も他の掘立柱建物跡と近いことから復原するに至った。

ＳＢ004は東西１間以上（2.1m以上）、南北１間以上（1.8m以上）の規模で、主軸方位Ｎ－18°Ｗの南北棟である。

図示できる遺物は出土しなかった。したがって、建物跡の年代を推定する直接の根拠はないが、Ｓ



①10Y67/4 にぶい黄橙　シルト　茶褐色粒を含む
②10YR6/1 褐灰　細砂混じりシルト
③10YR6/2 灰黄褐　礫混じりシルト
④10YR6/2 灰黄褐　細砂混じりシルト
⑤2.5Y6/2 灰黄　粗砂・礫混じりシルト
⑥10YR6/1 褐灰　細砂・礫混じりシルト　炭化粒をわずかに含む
⑦10YR5/1 褐灰　粗砂・礫混じりシルト
⑧2.5Y6/2 灰黄極細砂　黄色ブロック（φ0.5cm）を若干含む
⑨10YR6/1 褐灰　細砂混じり極細砂　黄色ブロック（φ1cm以下）を若干含む
⑩2.5Y6/1 黄灰　細砂
⑪2.5Y6/1 黄灰　極細砂　黄色粒をわずかに含む
⑫2.5Y6/1 黄灰　祖砂混じり細砂　黄色ブロック（φ0.5～2cm）を含む
⑬10YR5/1 褐灰　細砂混じりシルト　黄色粒をわずかに含む
⑭10YR6/4 にぶい黄橙　細砂混じりシルト
⑮10YR6/4 にぶい黄橙　極細砂　黄白色粒を若干含む
⑯10YR6/4 にぶい黄橙　細砂混じり極細砂
⑰10YR6/4 にぶい黄橙　細砂混じり極細砂　黄色粒をわずかに含む、炭化粒をわずかに含む
⑱10YR7/3 にぶい黄橙　シルト
⑲10YR7/3 にぶい黄橙　極細砂

第11図　SB005・006平面図・断面図

B001～SB002の存続時期と大きく異なる状況を想定し難いため、7世紀末葉～8世紀前葉の時間幅の中で、機能および廃絶したものと仮定しておく。

SB005（第11図）

柱穴3基からの復原であり、隣接地の調査がなされれば修正を要する可能性は高い。今回検出された他の事例に比べて、柱間が長い点でも違和感が残る。ただ、柱穴の規模からみてSP228は隅柱

である可能性が高く、その場合、ＳＰ215・235が側柱として成り立つことから、復原するに至った。

建物跡の規模は、東西１間以上（2.65m以上）、南北１間以上（2.6m以上）で、主軸方位はＮ－20°Ｗである。

図示できる出土遺物はないが、ＳＢ004同様の理由から、７世紀末葉～８世紀前葉の時間幅の中で、機能および廃絶したものと仮定しておく。

SB006（第11図）

柱穴３基からの復原であり、隣接地の調査がなされれば修正を要する可能性は高い。特に、建物跡の主軸方位と各柱穴平面形の主軸方位が不ぞろいである点で問題が残る。

建物跡規模は南北２間（3.25m）、東西１間以上で、主軸方位はＮ－85°Ｅ（=Ｎ－５°Ｗ）の東西棟としたが、南北棟である可能性を否定するものではない。

図示できる出土遺物はなく、およそ７世紀代であろうという予測は立つものの、厳密な時期比定は困難である。

SB007（第12図）

柱穴３基のみからの復原であり、隣接地の調査がなされれば修正を要する可能性は高い。特に、梁間の中間柱がない点で、今回の検出例では異質である。また、隅柱であるＳＰ266の平面形から導き出される主軸は正方位に近く、建物跡の主軸と異なる点で問題点を含んでいる。

建物規模は、南北１間(3.4m)、東西１間以上(1.9m以上)で、主軸方位Ｎ－17°Ｗの東西棟である。

出土遺物は３点を図示した。15は須恵器杯蓋で、天井部と口縁部の境にまで回転ヘラケズリが及んでいる。16は須恵器杯身であり、焼成は不良で軟質である。17は土師器で器種不明。下川津遺跡ＳＨ43・44に類例がある（藤好・西村1990）。

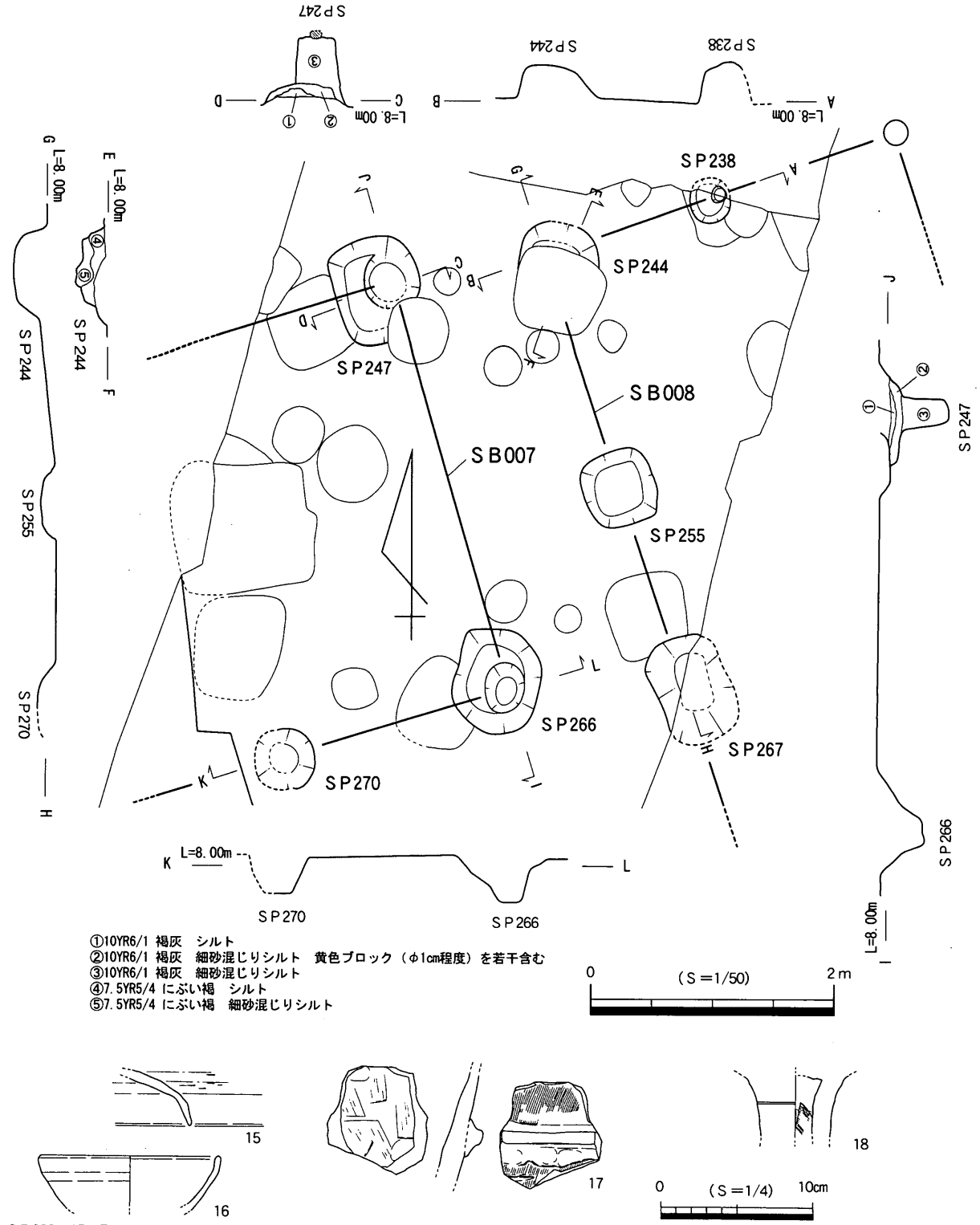
上記出土遺物のうち、15は６世紀末葉前後に主に消費された遺物である。同じ柱穴から出土した17も、下川津遺跡では類似資料が竪穴住居跡より出土していることから、15と組成上の矛盾はない。ただし、これらを出土した柱穴ＳＰ266は、同じく６世紀末葉前後の遺物を出土しているＳＰ265を切り込んでいることから、本来はＳＰ265の出土遺物が混入している可能性も高い。一方、ＳＰ270より出土した16は、やや問題は残るものの、その器形自体は７世紀中葉～後葉に類例が求められる（信里2002、渡部・森・古野1997参照）。したがって、ＳＰ266より導き出される年代と、ＳＰ270より導き出される年代にはやや開きがある。よって、厳密に時期比定する条件が整っていないが、７世紀代の時間幅の中でとらえておくことには問題はないであろう。

SB008（第12図）

発掘調査時から、掘立柱建物跡に復原しうる予測がなされた建物跡であり、ＳＰ244－ＳＰ255－ＳＰ267の柱筋には大きな変更を要しないと考えられる。一方、ＳＰ244－ＳＰ238の柱筋に関しては、その可能性は高いと考えているものの、隣接地の調査がなされれば再検討される余地も十分残る。また、現時点においても、ＳＰ244からさらに北に伸び、柵列跡に復原できる余地がある。

建物規模は東西１間以上（1.5m以上）、南北２間以上（3.5m以上）で、主軸方位Ｎ－19°Ｗの南北棟である。南北棟であると判断したのは、ＳＰ238が他の柱穴よりやや小振りで、梁間の中間柱である可能性を考慮したのと、ＳＰ244－ＳＰ255－ＳＰ267がそれぞれ規模に大差なく、桁行の側柱であることに大きな問題点はないと判断したためである。

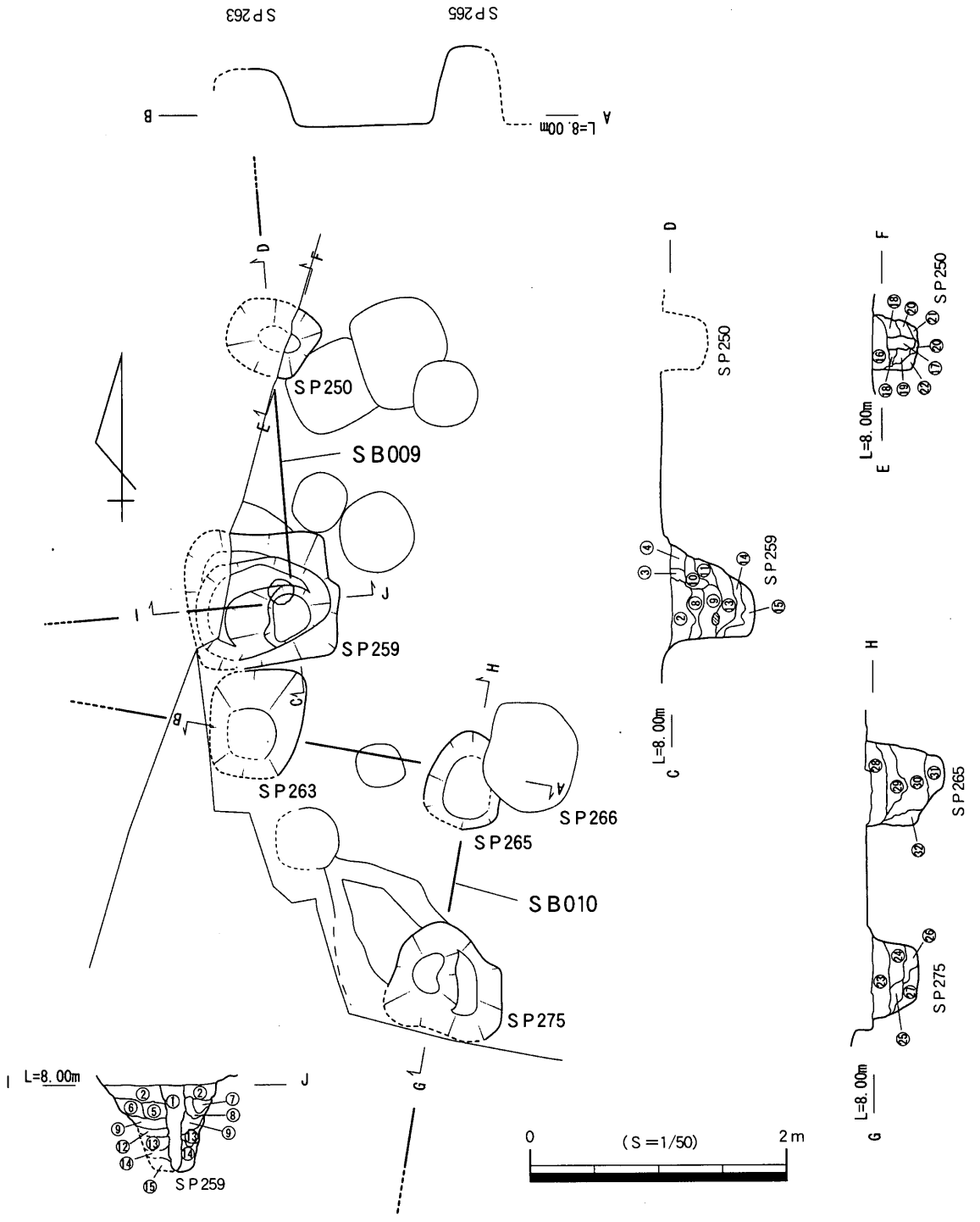
出土遺物は、ＳＰ267より出土した１点を図示した。18は須恵器高杯の脚部である。残存状況から



第12図　SB007・008平面図・断面図及び出土遺物実測図

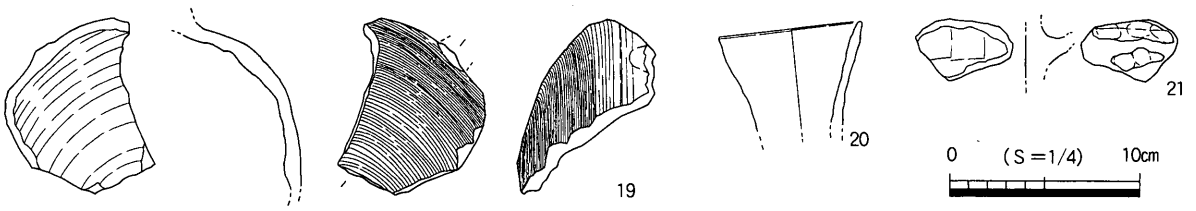
みて、透かしは施されていない可能性が高い。また、現存部の中位に極細の沈線が施されているが、文様として意図的に施されたものではない。

上記出土遺物から、年代を厳密に推定するのは問題が残る。ここでは、SB001・002と主軸方位をほぼ同じくすることから、7世紀末葉～8世紀前葉の期間中に機能・廃絶したものと仮定しておく。



① 10YR5/1 褐灰　シルト
② 10YR6/1 褐灰　シルト
③ 2.5Y6/1 黄灰　シルト
④ 2.5Y6/1 黄灰　シルト　③よりやや明るい
⑤ 2.5Y7/1 灰白　シルト
⑥ 2.5Y7/1 灰白　細砂混じり砂質シルト
⑦ 10YR5/1 褐灰　シルト　灰白色シルトブロックが若干混じる
⑧ 2.5Y7/2 灰黄＋10YR5/1 褐灰　シルト
⑨ 10YR5/1 褐灰　シルト　黄色ブロック（φ0.5～1cm）を若干含む
⑩ 10YR7/1 灰白　細砂混じり砂質シルト　黄灰色シルトが若干混じる
⑪ 10YR7/1 灰白　砂質シルト
⑫ 10YR5/1 褐灰　砂質シルト
⑬ 2.5Y5/1 黄灰　砂質シルト　黄色ブロック（φ1cm以下）を含む
⑭ 2.5Y5/1 黄灰　砂質シルト　灰白色シルトが混じる
⑮ 10YR6/1 褐灰　細砂
⑯ 10YR5/1 褐灰　シルト
⑰ 10YR6/1 褐灰　細砂混じり砂質シルト　黄色ブロック（φ0.5～1.5cm）を若干含む
⑱ 10YR6/1 褐灰　細砂混じり砂質シルト　黄白色ブロック（φ1cm以下）を若干含む
⑲ 10YR6/1 褐灰　砂質シルト　黄白色ブロック（φ0.5～2cm）を多く含む
⑳ 10YR6/1 褐灰　極細砂　黄白色ブロック（φ1cm以下）をわずかに含む
㉑ 2.5Y5/1 黄灰　極細砂　黄白色ブロック（φ0.5cm以下）をわずかに含む
㉒ 10YR6/1 褐灰　極細砂　黄色ブロック（φ1～2cm）を含む
㉓ 2.5Y6/1 黄灰　細砂混じり砂質シルト　黄色ブロック（φ1cm以下）を若干含む　炭化粒をわずかに含む
㉔ 2.5Y6/1 黄灰　砂質シルト　黄色ブロック（φ1cm以下）を若干含む
㉕ 2.5Y6/1 黄灰　細砂混じり砂質シルト　黄色ブロック（φ1cm以下）をわずかに含む
㉖ 2.5Y6/1 黄灰　細砂
㉗ 2.5Y6/2 灰黄　細砂混じりシルト　黄色ブロック（φ0.5cm程度）を含む
㉘ 2.5Y7/1 灰白　細砂混じりシルト　黄色ブロック（φ1cm）をわずかに含む
㉙ 10YR6/1 褐灰　細砂混じりシルト　黄色ブロック（φ0.5～1.5cm）を若干含む
㉚ 10YR6/1 褐灰　細砂混じり極細砂　黄色ブロック（φ0.5～1.5cm）を多量に含む
㉛ 2.5Y6/1 黄灰　極細砂　黄白色ブロック（φ0.5～4cm）を若干含む
㉜ 2.5Y6/1 黄灰　極細砂

第13図　SB009・010平面図・断面図



SP265 21
SP275 19·20

第14図　SB010出土遺物実測図

SB009（第13図）

柱穴２基のみで復原された建物跡であり、隣接地の調査がなされれば修正を要する可能性が高い。ただ、SP259は規模が大きく、隅柱である可能性が高い。また、主軸方位についても、SP259の平面形から導き出される方位と大差はないものと考えられる。

建物規模は東西１間以上、南北１間以上（2.0m以上）で、主軸方位はN－5°Wである。

図示できる出土遺物はなく、およそ７世紀代であろうという予測は立つものの、厳密な時期比定は困難である。

SB010（第13・14図）

柱穴３基のみで復原された建物跡であり、隣接地の調査がなされれば修正を要する可能性が高い。ただ、それぞれの柱穴の平面形から導き出される主軸方位は、復原された建物跡の主軸方位と概ね一致しており、大きな問題点を含まない。また、後述するように、SP265とSP275より出土した遺物も、組成上の問題はなく、少なくともSP265－SP275の柱筋に関しては、蓋然性が高いと考えられる。

建物規模は、東西１間以上（1.75m以上）、南北１間以上（1.6m以上）で、主軸方位はN－10°Eである。隅柱にあたるSP265は、他の柱穴より掘削深度が深い。

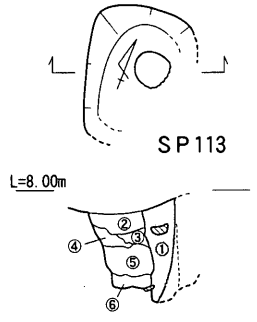
出土遺物は、SP265より１点（第14図－21）、SP275より２点（第14図－19・20）図示した。19は須恵器提瓶の体部で、把手部がわずかに残存する。把手部は角状に退化している可能性が高い。20は平瓶の口縁部である。やや砂粒を多く含むものの、胎土・焼成ともに19とよく似ている。21は土師器甕の把手部である。

上記の出土遺物のうち、SP275より出土した19は６世紀末葉～７世紀前葉を中心に消費された遺物であり、20は厳密な時期比定は難しいが、７世紀代を中心に消費されている。SP265より出土した21も、厳密な時期比定は困難だが、SP275出土遺物より導き出される年代との矛盾はない。また、SP265はSP266に切られているが、そのSP266からは６世紀末葉～７世紀前葉の所産と考えられる遺物が出土している。これが本来SP265に伴う遺物である可能性がある。これらの遺物の組成からみて、SB010は、７世紀前葉までに機能および廃絶したものと判断する。

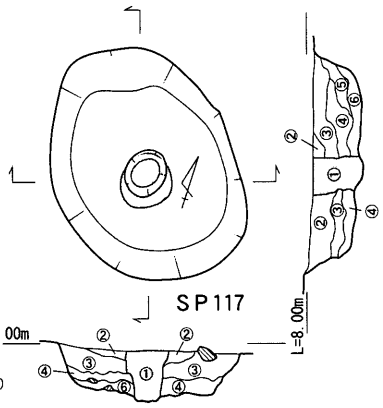
柱穴（第15～17図）

掘立柱建物跡に復原できなかった柱穴のうち、主たるものを第15・17図に図示した。それぞれの検出位置は第20図を参照にしていただきたい。

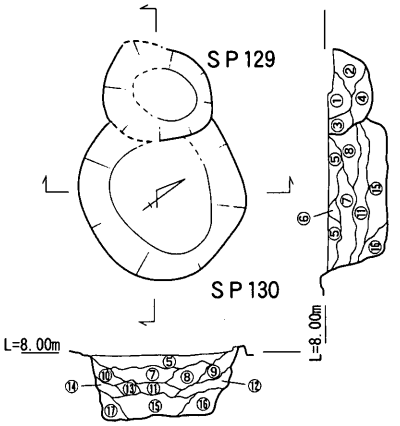
これらのうち、平面形が隅丸方形に近く、掘削深度が比較的深いものに関しては、側柱を構成する柱穴という想定がなされる。それに対して小振りの柱穴は、束柱、柵列などを構成する柱穴という想定が可能である。一方、SP117のように、平面規模は大きいながら、掘削深度がさほど深くないものがＩ区を中心にいくつか認められ、現時点でこれらの機能上の想定は困難である。また、ほとんどの柱穴からは根石を確認することができなかった。確実に根石を確認できる事例は、SB002を構成しているSP133のみであり、他に可能性としてあげられるのは、SP212・279のみである。



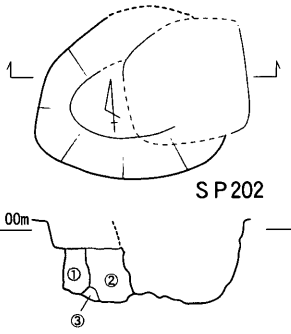
① 10YR5/1 褐灰　シルト　炭化粒を若干含む
② 2.5Y5/1 黄灰　シルト　黄色ブロック（φ1cm程度）を多く含む
③ 10YR5/1 褐灰　シルト　黄色ブロック（φ1cm程度）を含む
④ 10YR5/1 褐灰　シルト　黄色粒をわずかに含む
⑤ 10YR5/1 褐灰　シルト　黄色ブロック（φ0.5～3cm）を含む
⑥ 2.5Y5/1 黄灰　細砂混じりシルト



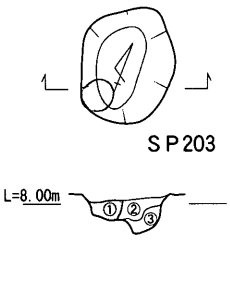
① 10YR5/1 褐灰　シルト　炭化粒をわずかに含む
② 10YR5/1 褐灰＋10YR7/3 にぶい黄橙　シルト
③ 10YR5/1 褐灰　シルト
④ 10YR5/1 褐灰　シルト　炭化粒を含む
⑤ 10YR5/1 褐灰　シルト　黄白色ブロック（φ1cm以下）をわずかに含む
⑥ 10YR5/1 褐灰　シルト　黄白色ブロック（φ1cm以下）を多く含む



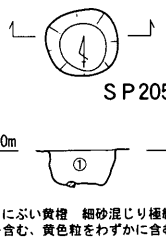
① 10YR5/1 褐灰　シルト
② 10YR5/1 褐灰　シルト　黄色ブロック（φ3cm）をわずかに含む
③ 2.5Y5/1 黄灰　シルト　黄色ブロック（φ3cm）を若干含む
④ 2.5Y5/1 黄灰　シルト　黄色ブロック（φ0.5～3cm）を多く含む
⑤ 10YR6/1 褐灰　シルト
⑥ 2.5Y8/2 灰白　シルト　褐灰色シルトが若干混じる
⑦ 10YR5/1 褐灰　シルト　黄白色ブロック（φ1～8cm）を多く含む　炭化粒をわずかに含む
⑧ 2.5Y6/1 黄灰　シルト　黄白色ブロック（φ10cm程度）を多く含む
⑨ 10YR6/1 褐灰　シルト　黄白色ブロック（φ1cm以下）を多く含む
⑩ 2.5Y6/1 黄灰　シルト
⑪ 10YR5/1 褐灰　細砂混じりシルト　黄白色ブロック（φ1～3cm）を含む
⑫ 10YR6/1 褐灰　シルト　黄白色ブロック（φ1～2cm）を含む
⑬ 2.5Y8/2 灰白　シルト　褐灰色シルトがわずかに混じる
⑭ 2.5Y6/1 黄灰　細砂混じりシルト
⑮ 10YR5/1 褐灰　シルト　黄色ブロック（φ2～5cm）を含む
⑯ 2.5Y7/2 にぶい黄橙　細砂混じりシルト　黄色粒を含む
⑰ 2.5Y6/1 黄灰　砂質シルト



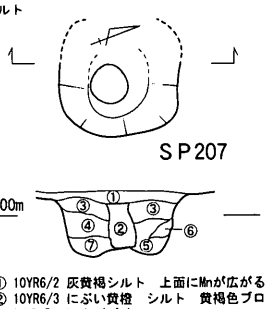
① 2.5Y6/2 灰黄　粗砂混じりシルト　炭化粒を若干含む
② 2.5Y6/1 黄灰　礫・粗砂混じりシルト
③ 2.5Y6/1 黄灰　極細砂



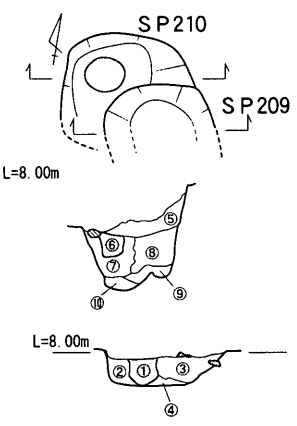
① 10YR6/2 灰黄褐　極細砂
② 10YR7/3 にぶい黄橙　極細砂
③ 10YR7/3 にぶい黄橙　細砂



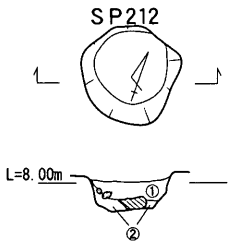
① 10YR7/2 にぶい黄橙　細砂混じり極細砂　褐色粒を含む、黄色粒をわずかに含む



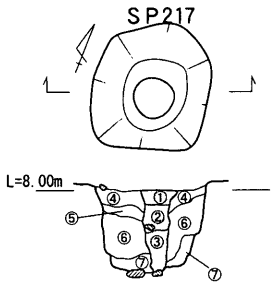
① 10YR6/2 灰黄褐シルト　上面にMnが広がる
② 10YR6/3 にぶい黄橙　シルト　黄褐色ブロック（φ0.5～1cm）を含む
③ 10YR7/2 にぶい黄橙　シルト
④ 10YR6/2 灰黄褐　小礫混じりシルト
⑤ 10YR7/2 にぶい黄橙　小礫混じりシルト
⑥ 10YR6/1 褐灰　シルト
⑦ 10YR6/3 にぶい黄橙　小礫混じりシルト



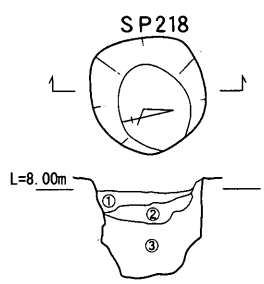
① 10YR6/2 灰黄褐　粗砂混じり極細砂　黄色粒をわずかに含む　炭化粒をわずかに含む
② 10YR6/2 灰黄褐　細砂混じり極細砂　黄色ブロック（φ1cm以下）をわずかに含む
③ 10YR6/2 灰黄褐　礫混じり細砂　黄色粒をわずかに含む
④ 10YR6/2 灰黄褐　細砂
⑤ 10YR7/4 にぶい黄橙　シルト
⑥ 10YR6/2 灰黄褐　砂質シルト　黄色粒を若干含む
⑦ 10YR6/3 にぶい黄橙　極細砂
⑧ 10YR6/3 にぶい黄橙　極細砂　黄色粒をわずかに含む
⑨ 10YR6/3 にぶい黄橙　極細砂　黄色粒を若干含む
⑩ 10YR6/3 にぶい黄橙　細砂　黄色ブロック（φ1cm以下）を若干含む



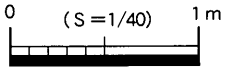
① 10YR7/2 にぶい黄橙　細砂混じりシルト
② 10YR7/2 にぶい黄橙　細砂



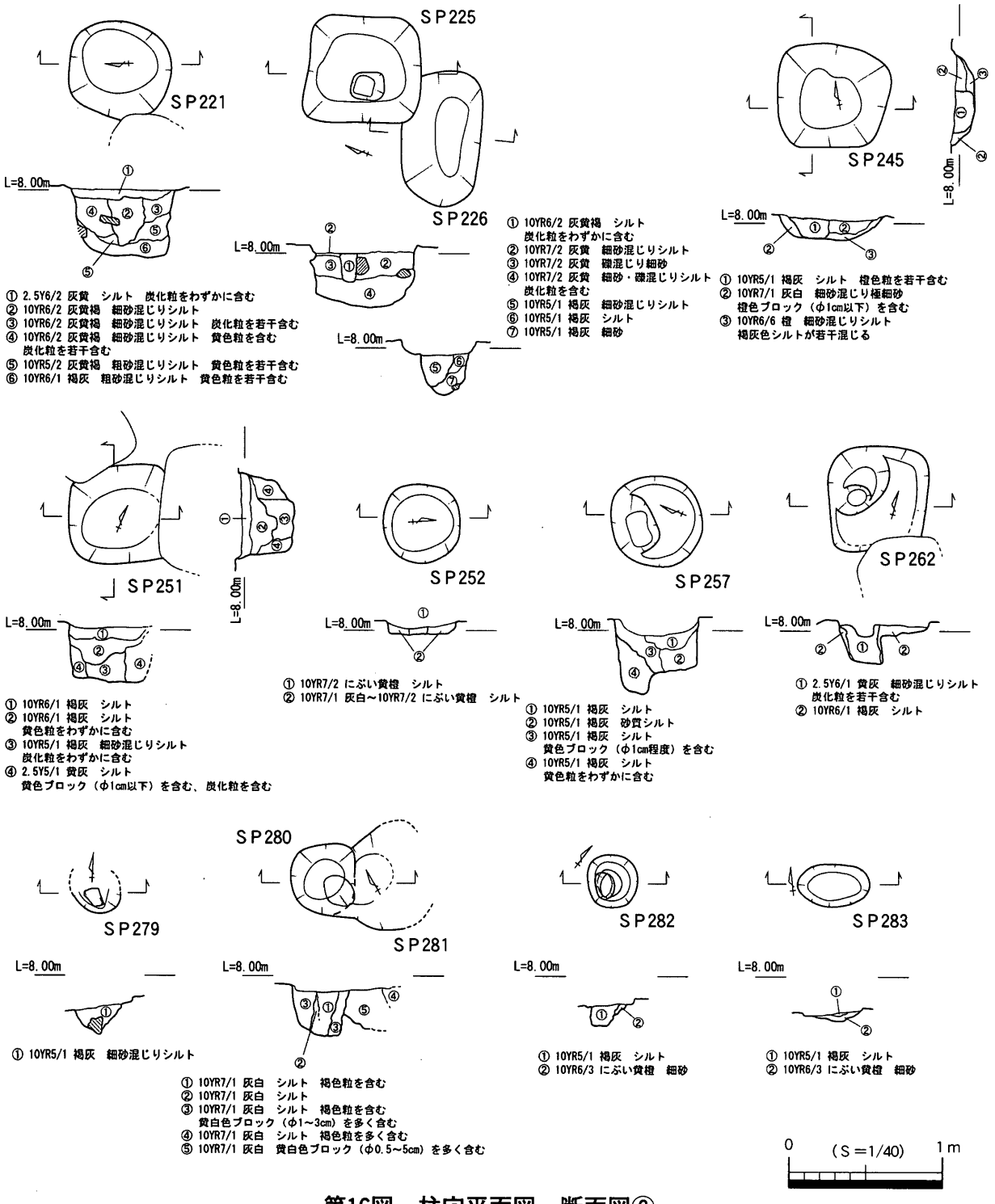
① 2.5Y6/1 黄灰　細砂混じりシルト
② 2.5Y6/1 黄灰　粗砂混じり細砂
③ 2.5Y6/2 灰黄　細砂混じり砂質シルト　黄色粒を若干含む
④ 2.5Y6/1 黄灰　粗砂～細砂混じりシルト
⑤ 2.5Y6/1 黄灰　極細砂
⑥ 2.5Y6/2 黄灰　細砂混じり極細砂　黄色粒をわずかに含む
⑦ 2.5Y6/2 灰黄　シルト　黄色ブロック（φ1cm以下）を若干含む



① 10YR7/3 にぶい黄橙　シルト　炭化粒をわずかに含む
② 10YR7/3 にぶい黄橙　細砂
③ 10YR6/3 にぶい黄橙　礫混じり細砂　炭化粒をわずかに含む

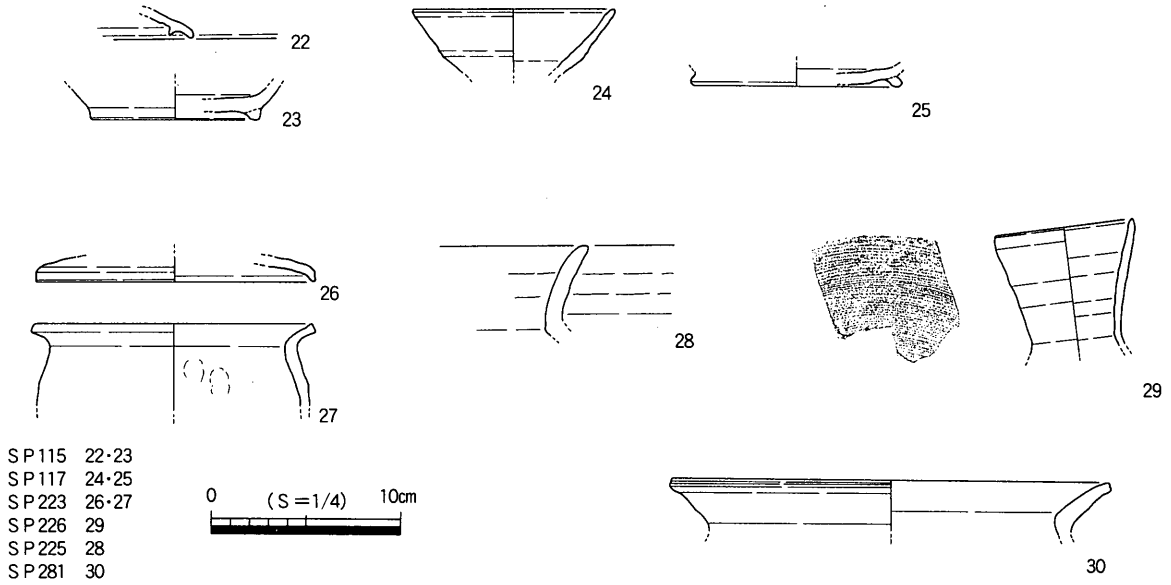


第15図　柱穴平面図・断面図①



第16図　柱穴平面図・断面図②

出土遺物は、各柱穴より計９点図示した（第17図）。22・26は須恵器杯蓋である。22が焼成良好であるのに対して、26は焼成不良で、淡灰色を呈する軟質である。23・25は須恵器杯身で、両者ともに焼成は26よりもさらに悪く、かろうじて還元焼成が達成されている程度の軟質である。24は甕の口縁部片である。焼成は比較的良好。29は平瓶の口縁部で、外面にカキ目を施している点で異質である。焼成は良好・堅緻で、胎土および焼き上がりの状況も、今回出土した遺物のなかでは、やや違和感がある。他地域からの搬入品である可能性が考えられる。28・30は土師器甕の口縁部である。27は弥生土器甕で、２次被熱のためか、外面の劣化が著しい。



第17図　柱穴出土遺物実測図

これら出土遺物のうち、混入されたと考えられる弥生土器（27）を除けば、７世紀中葉までに主に消費された遺物（22・24）と、７世紀末葉～８世紀前葉に主に消費された遺物（23・25・26）が確認でき、土師器甕（28・30）および須恵器平瓶（29）も、概ね７世紀代の範疇で使用されたものである。したがって、各柱穴の存続時期は、上記の期間内にほぼ収まるものと考えられる。掘立柱建物跡群より想定される存続時期と、ほぼ同様の傾向を示していることから、今回の調査地で検出された柱穴群のほとんどが、最大限に長く見ても６世紀末葉～８世紀前葉の間に機能・廃絶されたことがいえる。ただし、６世紀末葉～７世紀中葉までの杯類が少ないことから、主たる存続時期は７世紀末葉～８世紀前葉の期間内であったと考えられる。

溝跡（第18図）

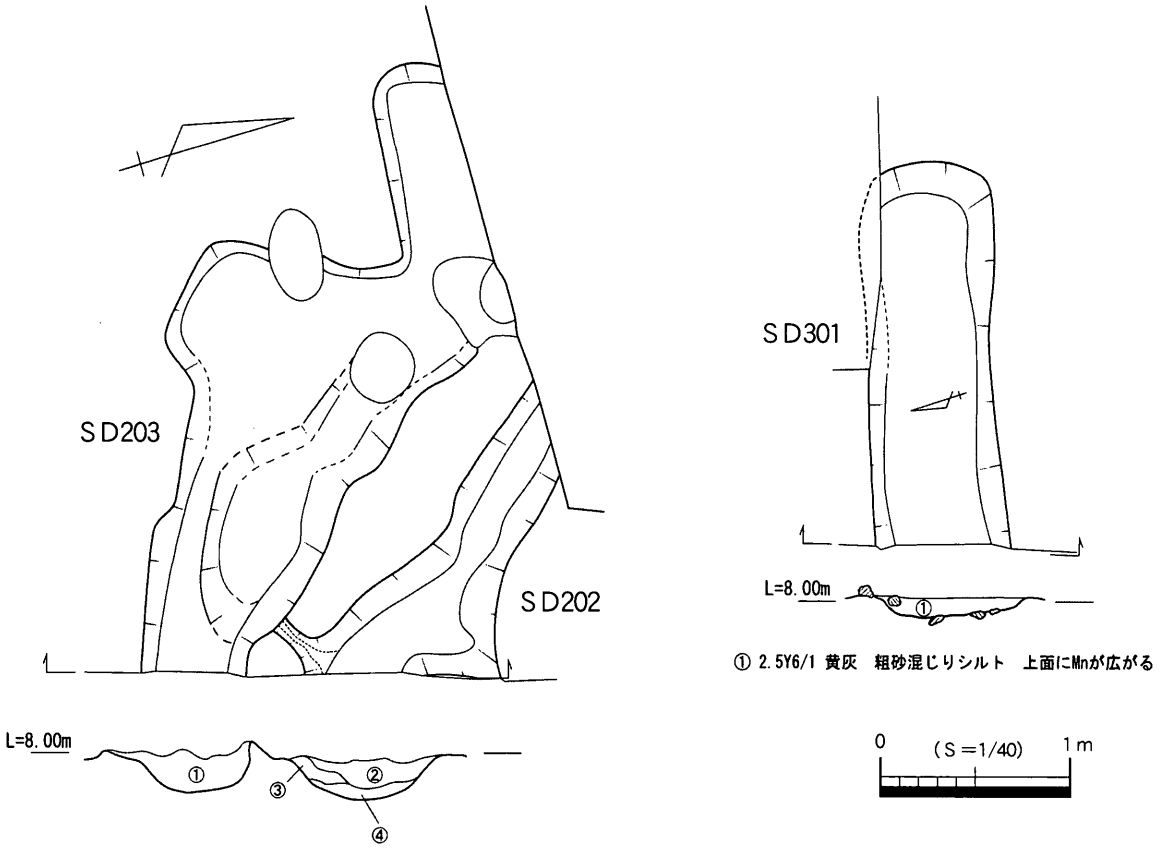
Ⅰ区で１条、Ⅱ区で３条、Ⅲ区で１条の計５条を検出した。それぞれの検出位置は第20図を参照にしていただきたい。

SD101・201は、その機能および存続時期が不明である。SD202・203も存続時期は不明であるが、両者が検出されたのは旧河道の上面である。SD301は機能の想定は難しいが、上層である近世耕作土と埋土が近似しており、出土遺物はないものの、中世末～近世の所産であると考えられる。

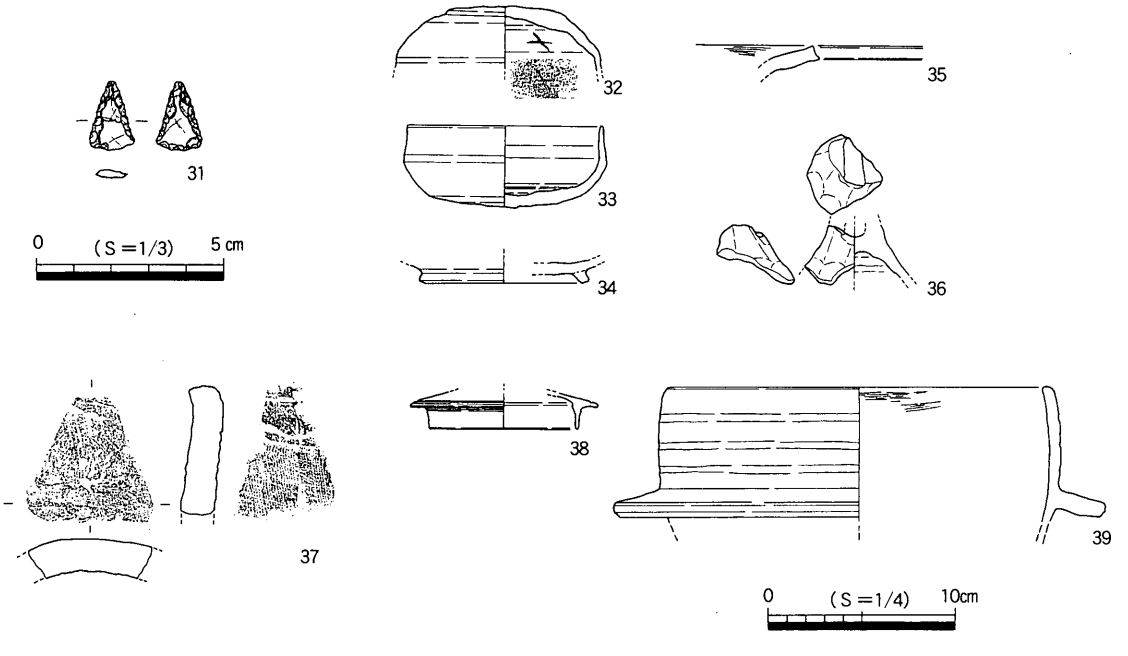
包含層出土遺物（第19図）

弥生土器１点、石鏃１点、７世紀代の杯類３点、近世の遺物２点のほか、蛸壺１点、瓦片１点を図示した。

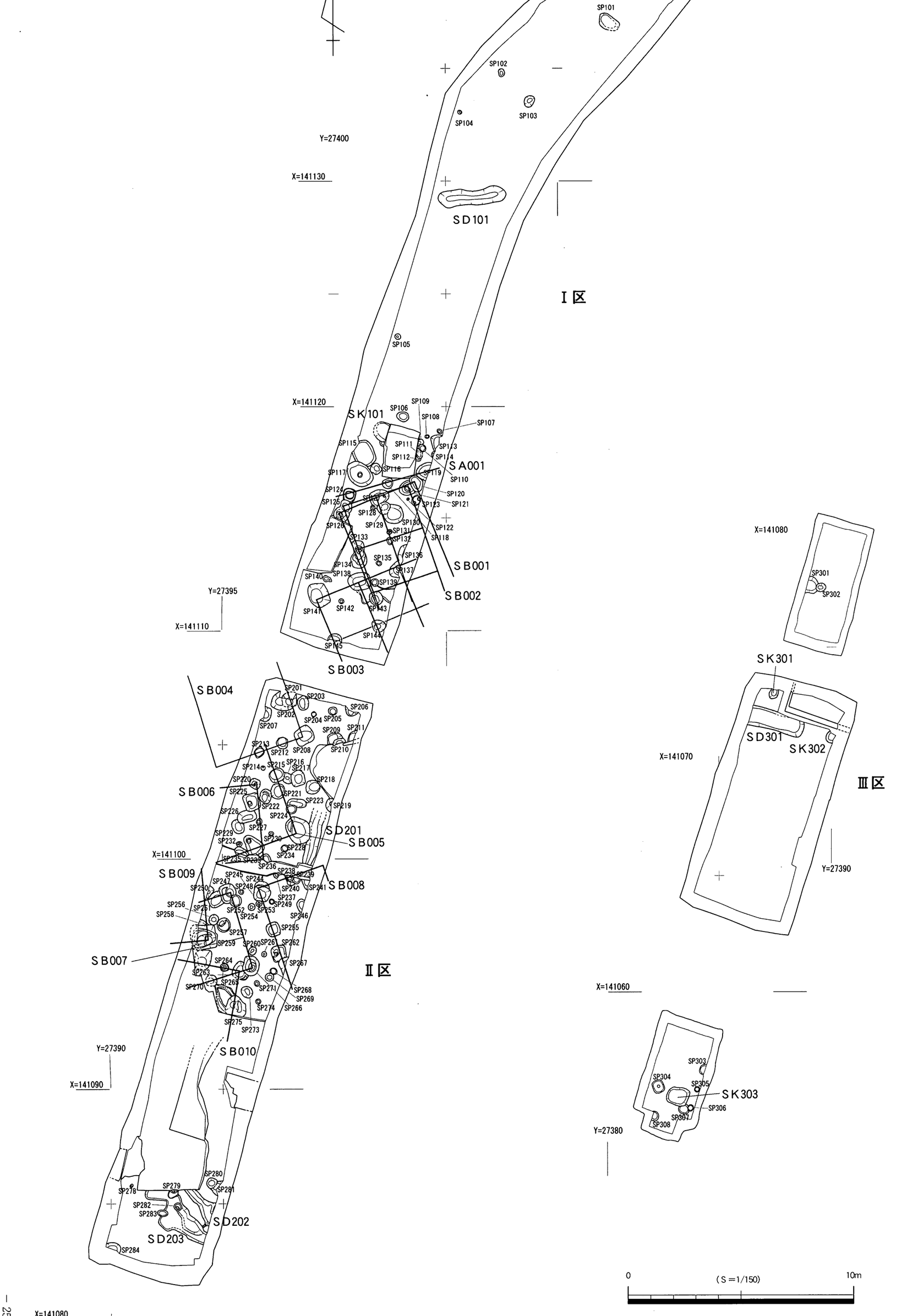
35は弥生土器の壺口縁部片、31は石鏃である。32は須恵器杯蓋としたが、杯身である可能性を否定できない。天井部外面はヘラ切り後ナデを施し、内面にはヘラ描きで「×」を印している。焼成は良好であるが、胎土中に１～５㎜大の粗い砂粒を多く含んでおり、今回出土した須恵器杯類の中では異質である。胎土の状況からは三野地域で生産された可能性をあげられる。33・34は須恵器杯身である。33は焼き歪みが大きいが、胎土は精良で、焼成も良好・堅緻の優品である。底部外面はヘラ切り未調整。34も他の杯類と比べれば、比較的焼成良好であるが、堅緻といえるほどのものではない。36は土師器飯蛸壺である。37は丸瓦であり、今回の出土遺物では唯一の瓦類である。凸面は板ナデと横方向のナデによって調整される。凹面の布目圧痕は細くて糸目が通り、明瞭に残ってい



第18図　溝平面図・断面図



第19図　包含層出土遺物実測図



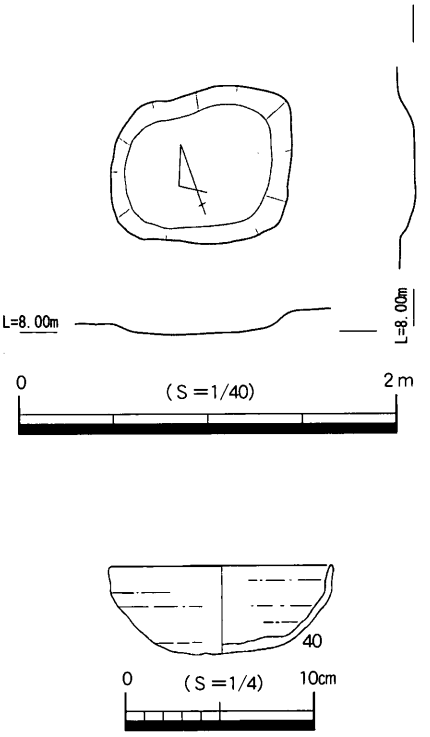
第20図　田村遺跡遺構配置図

る。38は施釉陶器蓋で、施釉されているのは天井部外面のみである。口縁部外面には沈線を１条意図的に施している。39は瓦質土器羽釜である。口縁部外面および鍔部上面は、燻しによる光沢をもつ。口縁部外面の３条の凹線は燻された後に施されたものであり、凹線部分に関しては胎土が露出している。内面には、鍔部に対応する部分以下に顕著なこげつきが認められる。

第４節　Ⅲ－３・４区の調査

第３図に示した各調査区のうち、Ⅲ－３区とⅢ－４区としたものは、香川県埋蔵文化財センターによる本調査後に、香川県教育委員会が調査を実施したものである。その経緯については、第Ⅰ章を参照していただきたい。ここでは、遺構・遺物に関する所見を述べておく。

遺構は、Ⅲ－３区で柱穴２基、Ⅲ－４区で柱穴６基・土坑１基が検出された。いずれも現存深度は10cm前後に収まり、それぞれの最深部は標高8.0mよりわずかに低い程度である。柱穴が密集して検出されたⅠ区・Ⅱ区では、柱穴の最深部が標高7.50m前後に至り、現存深度が40cm以上に及ぶ事例が多いのとは対照的である。ただし、柱穴が密集している地区の最北側では、ＳＰ115・117など現存深度が浅いものがあり、Ⅲ区だけが特殊な状況とはいえない。



第21図　ＳＫ303平面図・断面図及び出土遺物実測図

このような状況から、ほとんど遺構が検出されなかった地区についても、本来は建物跡がある程度まとまって存在し、最深部が標高8.0m以上に位置する柱穴に関しては削平を受けて消失してしまったものと推定される。

遺物は、ＳＫ303より出土した須恵器杯身（40）を図示した（第21図）。40は底部外面がヘラ切り未調整。底部内面も弱いナデを施すのみで、ロクロ目を明瞭に確認できる。焼成はややあまく、外面は淡灰色を呈する。

上記遺物は、主に７世紀後葉前後に消費された遺物であり（信里2002参照）、したがって、当資料が出土したＳＫ303は、７世紀後葉頃に機能したものと推定される。また、他の柱穴からは時期比定に耐えうる遺物は出土しなかったが、埋土の特徴やⅠ区・Ⅱ区の検出状況からみて、概ね７世紀～８世紀前葉の時間幅の中で、機能していたものと推測される。

第Ⅳ章　調査成果の分析

第１節　調査成果について

（１）掘立柱建物跡・柵列跡の変遷

今回の調査では、一部７世紀前葉に機能したと思われる建物跡があるものの、概ね７世紀後葉もしくは末葉～８世紀前葉に機能していたと考えられる掘立柱建物跡群と柵列跡を検出した。これらは、その主たる存続時期・建物跡の構造・主軸方位・分布の観点から、大きく分けて２つのグループに分けることができる（第２表）。なお、ＳＢ007は、前章で述べたとおり、建物跡の構成および時期の検討などにおいて問題点が多く残るため、ここでの検討対象からは除外している。

第２表　掘立柱建物跡・柵列跡の大別

	建物跡Ⅰ群	建物跡Ⅱ群
存続時期	７世紀後葉以前 （ただし、時期比定が困難なものが多い）	７世紀末葉～８世紀前葉
主軸方位	正方位に比較的近いが、ばらつきが大きい （座標北とのズレは東西10°以内）	座標北より20°前後西に振れる
建物跡の構造	束柱をもつ確実な事例はない	束柱構造のものが存在する
分布	柱穴密集地の南半部中心	柱穴密集地の北半部中心
掘建柱建物跡及び柵列跡	（ＳＢ006） （ＳＢ009） ＳＢ010	（ＳＡ001） ＳＢ001 ＳＢ002 ＳＢ003 （ＳＢ004） （ＳＢ005） （ＳＢ008）
柱穴・土坑	ＳＫ303	ＳＰ115 ＳＰ117

第２表に示した建物跡Ⅱ群のうち、ＳＡ001・ＳＢ001～003については、前章で述べた通り、ＳＡ001→ＳＢ002→ＳＢ001（７世紀末葉～８世紀初頭）→ＳＢ003（～８世紀前葉）の順に構築されたことが確認できている。このうち、ＳＢ002はＳＢ001と建て替え関係にあることから、ＳＢ001とほぼ同時期に機能していたと推定することに問題はない。ＳＢ002に先行するＳＡ001も、状況から考えて７世紀末葉頃に位置づけておくべきであろう。残るＳＢ004・005・008は、時期を推定する根拠に乏しく、ＳＡ001・ＳＢ001～003の存続期間中に機能していたと仮定するほかはない。

これら建物跡Ⅱ群は、主軸方位のズレが小さく、斉一性が高い。また、比較的大形の柱穴を多く含むという傾向が見出せる。また、ＳＰ115・117は、それぞれの平面形から導き出される主軸方位がＮ－20°Ｗ前後であり、かつ、出土遺物から想定される存続時期は７世紀末葉～８世紀前葉である。掘立柱建物跡には復原できなかったが、建物跡Ⅱ群としての条件を備えているといえよう。この他にも、時期は不明であるが、主軸方位がＮ20°Ｗ前後を示す柱穴は多々認められる。したがって、これらの補足的資料も踏まえれば、建物跡Ⅱ群は検出事例数の多さによっても、ある程度その存在を裏付けられる一群といえる。

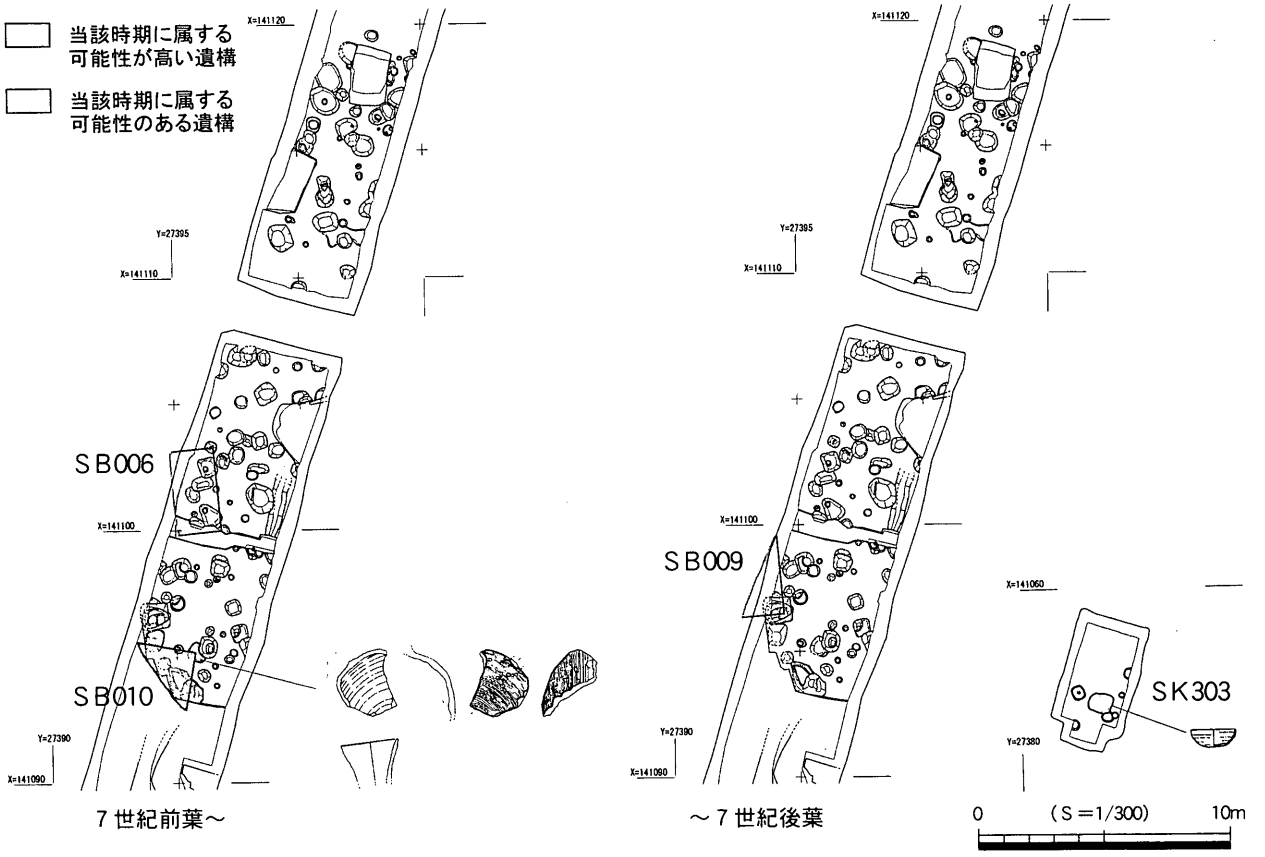
一方、建物跡Ⅰ群は、主軸方位は概ね正方位に近いものの、ばらつきが大きい。検出事例数の少なさも相俟って、群として抽出する条件が整っているとはいえない。しかし、主軸方位が座標北前

後に想定される柱穴がいくつか確認できることは事実であり、これらの柱穴より出土した遺物が建物跡Ⅱ群で出土したものよりも古い様相をもつこともまた事実である。したがって、やや消極的かつ恣意的な抽出方法であるが、建物跡Ⅱ群とは区別される一群として、建物跡Ⅰ群を設定することは可能であろう。

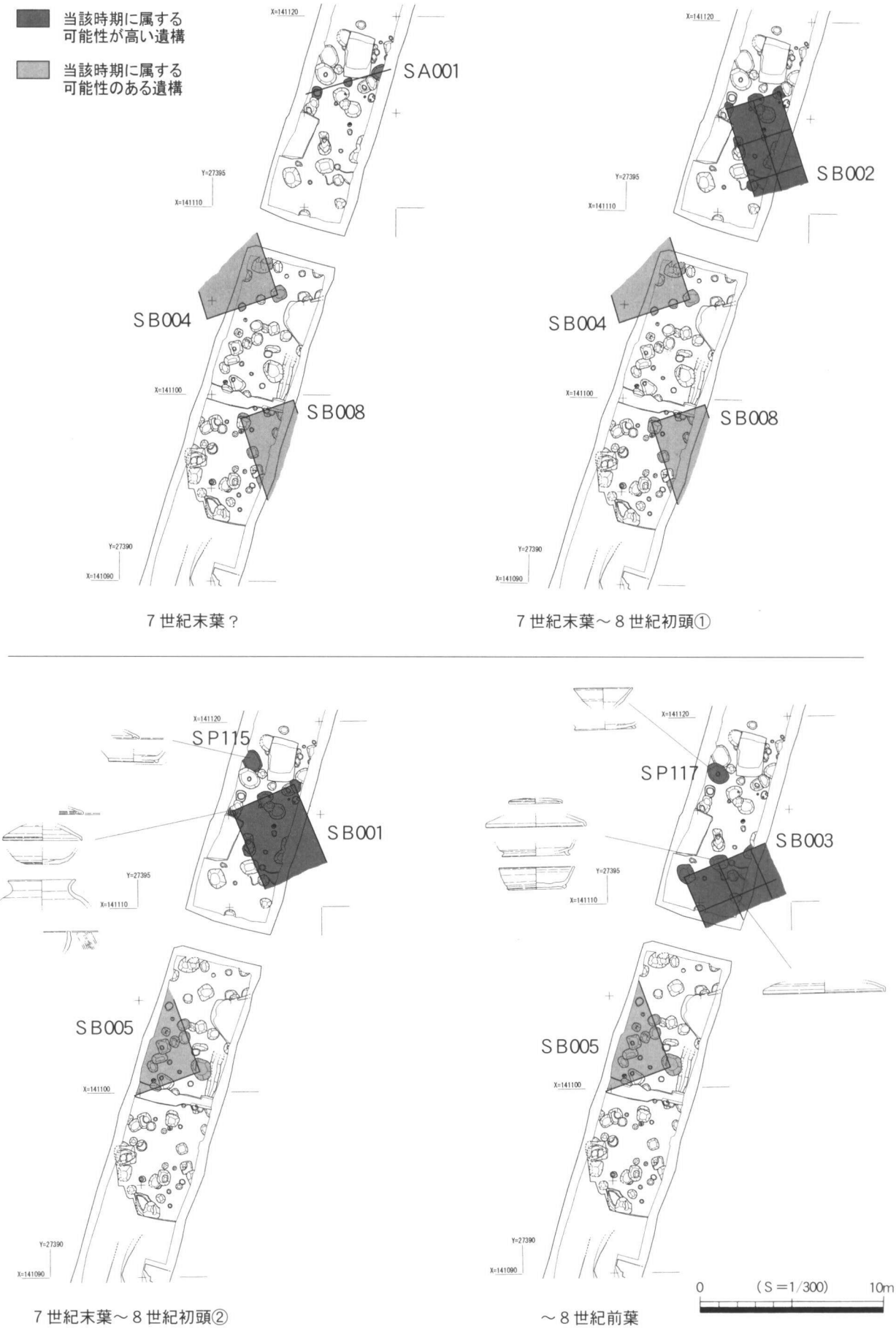
建物跡Ⅰ群において、時期比定が可能なのはＳＢ010（７世紀前葉前後）のみである。ただし、ＳＫ303では、その平面形から想定される主軸方位はＳＢ010に近く、かつ、７世紀後葉頃の遺物が出土している。したがって、建物跡Ⅰ群は７世紀前葉～後葉の時間幅を考えなければならない。

ここで注意しなければならないのは、建物跡Ⅰ群の下限と建物跡Ⅱ群の上限である。両者はともに７世紀後葉もしくは末葉に想定することが可能である。しかし、建物跡Ⅱ群は主軸方位等において斉一性が高いため、建物跡Ⅰ群が同時併存する状況は想定しがたい。よって、両者は時期差において完全に区分でき、７世紀後葉もしくは末葉を境に、建物跡Ⅰ群から建物跡Ⅱ群へと、建物配置上の再編成がなされたものと理解される。このような見解にもとづき、建物跡Ⅰ群の下限を７世紀後葉、建物跡Ⅱ群の上限を７世紀末葉にとらえておく。

さて、以上の検討に基づき、主要な掘立柱建物跡・柵列跡等の変遷図を作成した（第22・23図）。建物跡Ⅰ群およびⅡ群には厳密な時期比定が困難なものが多々あるが、これらについては、建物跡相互の重複関係からみて、無理のない配置になるよう考慮することで、時期比定の幅を絞り込んだ。ただし、それぞれの年代については、遺物から時期比定が可能な建物跡の年代を定点にし、それ以外は均等割して年代を付与している。したがって、これらについては、今後の調査・研究の進展によって修正されるべき内容であることを付言しておく。



第22図　田村遺跡主要遺構変遷図①



第23図　田村遺跡主要遺構変遷図②

（2）出土遺物について

今回の調査で出土した遺物の量は、コンテナ１箱分、実測遺物は40点であり極めて少ない。したがって、詳細な検討に基づく所見を得ることは困難である。ただし、須恵器の焼成については、器種ごとに差異が認められるという、おおまかな傾向が掴めた。この傾向は、今回の調査地に限った特殊なものではなく、消費地における一般的なあり方の一つであると思われる。以下、この点について若干の所見を述べておく。

第３表　須恵器各器種の焼成の大別

	杯類					杯類以外の器種					
	蓋Ａ	蓋Ｂ・Ｃ	蓋Ｄ	杯Ｃ	杯Ｄ	高杯	𤭯	短頸壺蓋	提瓶	平瓶	壺
良好・堅緻	15			33		18		8	19		4
良好		1 ・ 22	2	12 ・ 32	34		24			20・29	
やや不良			9・10・26	3・16・40	11						
不良					23・25						

※数字は遺物番号を示す
※器種分類は信里2002に準ずる

第３表は、須恵器の各器種における焼成の状況を示したものである。まず、杯類における傾向をみると、以下のようにまとめることができる。

焼成良好・堅緻←　　蓋：A―B・C－D　　→焼成不良

杯身：　　C　－　D

蓋・杯身の各器種は、A→D の順に出現することから、杯類は時期が下るにつれて焼成があまくなる傾向にあるといえよう。特に、杯Ｄ（高台付杯身）である23・25は、還元焼成がほとんど達成されていない軟質であり、杯Ｄとセット関係にある蓋Ｄも焼成不良・軟質のものが多い。今回の調査で出土した蓋Ｄ・杯Ｄは基本的には焼成不良・軟質のものであるといえよう。

一方、杯類以外の各器種は、焼成不良・軟質のものはなく、いずれも焼成良好である。資料数が少なく、厳密な時期比定も困難であるため、時期的推移を見出すことは難しいが、８世紀前葉の杯類とともに出土した短頸壺？の蓋（８）が、高温焼成による「肌荒れ」（信里2002）を呈しており、このことから時期が下っても、焼成良好であることが維持されていた可能性が高いと考えられる。したがって、杯類との対比から以下のようにまとめることができよう。

杯類　…　時期が下るにつれて焼成不良・軟質化する

杯類以外　…　各時期を通じて焼成良好

このような傾向は、焼成上の問題である以上、須恵器生産時に起因しているものとみてよい。ただし、三野地域で生産されたと考えられる杯（32）や、県外の他地域で生産された可能性のある平瓶（29）などは、流通上の問題、もしくは人の移動に関する問題を含んでいることを付言しておく。

第２節　既往の調査との比較検討

（1）各遺構群の比較

前節で述べたように、今回の調査では主軸方位が座標北より東西10°以内におさまる一群（建物跡Ⅰ群）と、N－20°Ｗ前後におさまる一群（建物跡Ⅱ群）が検出された。これらは７世紀末葉頃

を境として、建物跡Ⅰ群から建物跡Ⅱ群へと変遷することから、この時期に建物配置上の再編成がなされていることが確認できる。本節では、このような事象と、隣接地でなされた既往の調査（東2002・北山2004）との対比から、いくつかの所見を述べることに努める。

既往の調査においても、主軸方位を推定できる建物跡群、溝跡、土坑などが検出されているが、今回の調査地で得られた所見とはやや様相が異なる。すでに各報告書（東2002・北山2004）で指摘されているように、既往の調査地では、ほぼ正方位に配置された建物跡群・溝跡などで構成されている。これらは主軸方位のズレが小さく、斉一性の高い一群であり、同じ正方位でもばらつきのある建物跡Ⅰ群とは明らかに異なる。さらに、その存続時期は、7世紀末葉以降であり、建物跡Ⅰ群とは時期的には併存しない。むしろ、建物跡Ⅱ群と確実に併存する一群である。したがって、今回検出した建物跡Ⅰ群とは区別されるべきである。一方、建物跡Ⅱ群と比較すると、主軸方位が異なるのは当然であるが、それに加え、建物跡Ⅱ群の下限が8世紀前葉頃に求められるのに対して、これらの一群は10世紀頃までは確実に機能しており、その存続時期においても区別される。

以上のように、既往の調査で検出された建物跡・溝跡などは、建物跡Ⅰ群・建物跡Ⅱ群とは区別されるものである。したがって、これらの一群を建物跡Ⅲ群と仮称し、その特徴として以下の条件を備えるものとする。

建物跡Ⅲ群 … 存続時期：7世紀末葉～10世紀頃を中心とする
主軸方位：ほぼ正方位（座標北とのズレは東西5°以内）
分布：今回の調査地より南側

さて、建物跡Ⅲ群は各報告書（東2002・北山2004）に基づけば、7世紀末葉に出現している。一方、建物跡Ⅱ群も、厳密な時期比定は困難であるが、7世紀末葉頃に出現したものと考えられる。両者は斉一性の高い建物配置という点でも共通しており、この時期に土地利用上の画期があったと推察される。ただし、両者は主軸方位・消長がことなるため、やはり性格上区別されるべきものであることは考慮しなければならない。

一方、7世紀後葉以前においては、今回の調査地では、正方位に近いがばらつきのある建物跡（建物跡Ⅰ群）がいくつか確認できたが、当センターが以前に調査した箇所（北山2004）においても、同様の遺構が確認されている。ただし、検出事例数は極めて少なく、居住域としての様相は希薄である。また、丸亀市教育委員会の調査地では、古墳の周溝かと思われる溝跡が検出されており、少なくとも古墳時代後期における居住域の可能性は極めて低い。

7世紀後葉以前 ① 居住域としての様相は希薄で、少なくとも集住している状況は認められない。
② 建物跡等が確認される場合には、主軸方位が正方位に近い。ただし、ばらつきがあり、斉一的な状況は認められない。

検出事例数が少ないため、積極的に評価はできないが、上記の傾向は今回の調査地・既往の調査地ともに認められるものであり、7世紀後葉以前においては両者が性格上異なる状況は見出せない。裏を返せば、両者が区別されるようになるのは、建物跡Ⅱ群・建物跡Ⅲ群の出現以降のことであり、あらためて、7世紀末葉頃に想定される土地利用上の画期が浮彫りになろう。

（2）寺院関連遺構・遺物の有無からみた比較

田村遺跡の既往の調査地は、田村廃寺と呼ばれる古代寺院の推定地である。実際、既往の調査では、梵鐘鋳造遺構や築地塀などの遺構、鴟尾を含めた多量の瓦類など、寺院の存在を示す遺構・遺物が多々

確認されており、寺域として相応しい様相を呈している。これまで、建物跡Ⅲ群の性格については触れてこなかったが、これらの遺構・遺物と併存することから、建物跡Ⅲ群が寺院関連遺構であると位置づけることに異論はないであろうし、各報告書においても既にそのような位置づけがなされている。

一方、今回の調査地で、寺院の存在を示す遺構・遺物として確認できたのは、包含層より出土した瓦片1点のみであり、寺院関連遺構として評価できる内容ではない。前節で述べたように、今回の調査地で出土した遺物は、消費地における一般的なあり方を示している。古代寺院の推定地に隣接していなければ、一般的な集落跡として位置づけがなされるのが自然であろう。前項までの検討では、主に建物跡配置上の検討から、今回の調査地と既往の調査地が性格上区別されることを確認してきたが、その区別が寺院関連遺構・遺物の有無とも対応しているといえる。

建物跡Ⅱ群 ― N20° W前後 ― 寺院との関連が認められない遺構群

建物跡Ⅲ群 ― ほぼ正方位 ― 寺院関連遺構群

ところで、既往の各調査報告書では、寺院関連遺構群（寺域）の北限について言及している。当センターの報告書（北山2004）では、SD05・06と名づけられたほぼ東西方向の溝跡が北限を区画している可能性を報告している。一方、丸亀市教育委員会の報告書（東2002）では、SF01と名づけられた築地塀が寺院の北限を示していると判断している。ただし、築地塀SF01は上記のSD05・06より20mほど南に位置し、かつ、その完成時期が10世紀頃と想定されることから、この時期には寺院の規模が縮小したことを想定している。

したがって、両報告から想定される寺院の最大域は、上記のSD05・06までである。実際、SD05・06からは、多量の瓦類が出土しており、寺院関連遺構と位置づけることに問題はない。一方、SD05・06より北側では、今回の調査地を含めて、寺院の存在を示す遺構・遺物の出土量は極端に少なくなっており、SD05・06が寺院の北限を区画する溝跡であることを裏付けていよう。

このように、これまで想定されていた田村廃寺の寺域の北限が、今回の調査結果から見ても追認され、あらためて裏づけできたことは、今回の調査の大きな成果の一つといえる。

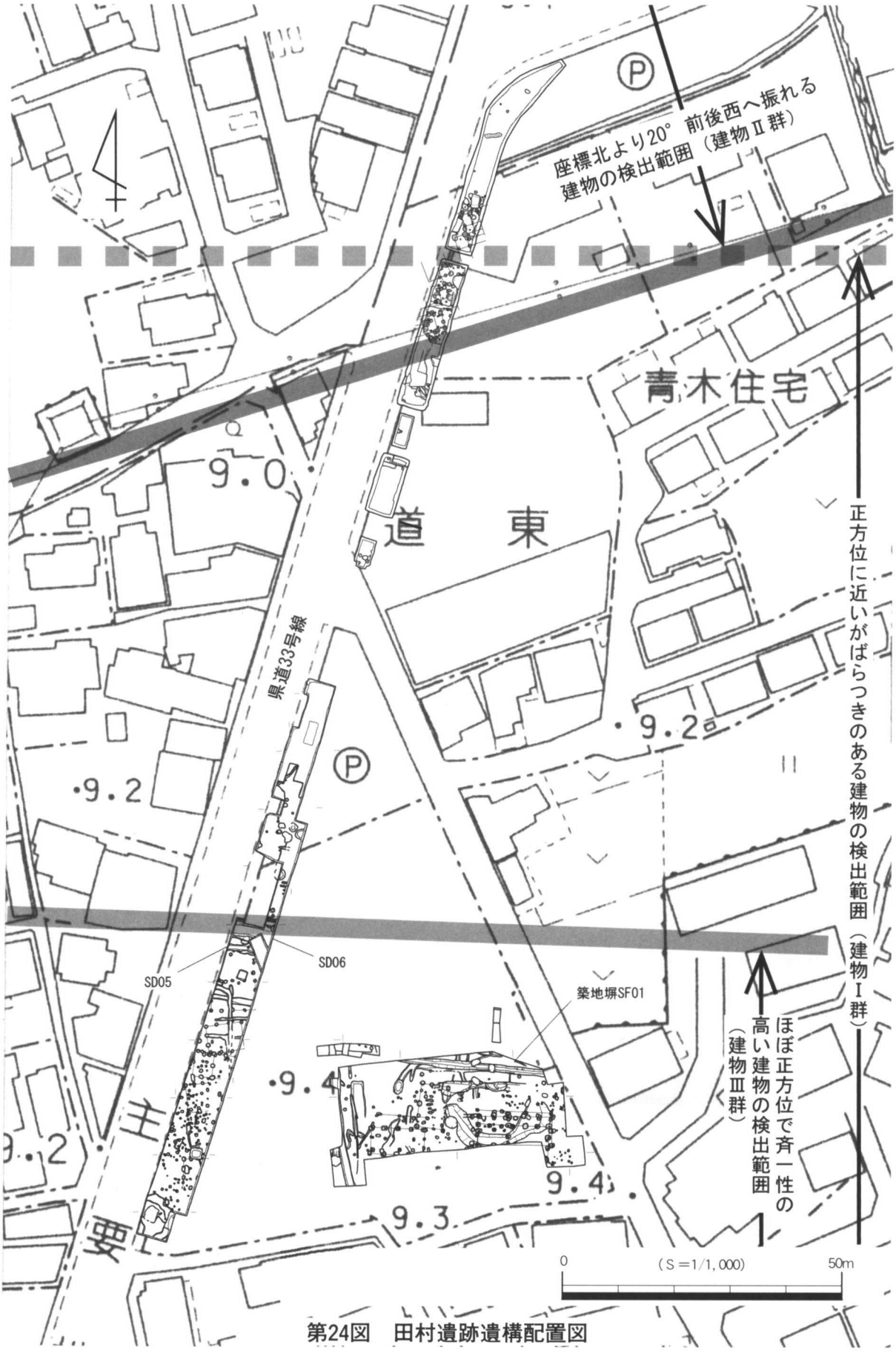
さて、本節での所見をまとめると、以下のようになる（第24図参照）。

① 寺院関連遺構・遺物をとり上げるまでもなく、今回の調査地と既往の調査地とでは、建物置及び存続時期からみて区別されるものであり、両者は性格の異なるものであると推察される。

② 寺院関連遺構・遺物の有無からみて、既往の調査地が田村廃寺の寺域であるのに対して、今回の調査地は田村廃寺との関わりを直接的に示す資料はなく、むしろ一般的な集落跡としての特徴を備えるものである。この対比的な関係は、①で示された区別とも対応する。

③ ①・②で示された区別があるにもかかわらず、両者を構成している建物跡Ⅱ群・建物跡Ⅲ群の出現時期はおおむね7世紀末葉頃に求められる。一方、両者の出現以前である7世紀前葉～後葉においては、斉一性の低い建物跡が散在的に確認できるのみであり（建物跡Ⅰ群）、集落等の様相は極めて希薄である。したがって、田村遺跡においては、7世紀末葉頃に土地利用上の画期があったことが想定される。

ここで、注意していただきたいのは、それぞれを構成する建物跡群の分布範囲である。建物跡Ⅰ～Ⅲ群のうち、建物跡Ⅲ群については、田村廃寺の寺域の北限が確認されているので、それに準じて分布範囲も限定される。それに対して、建物跡Ⅰ群はもともと散在的に分布しているため、第24図に示した範囲よりさらに北に広がる可能性は充分ある。また、第Ⅲ章第4節で述べたように、今回の調査地の南半



第24図　田村遺跡遺構配置図

部では遺構が削平されている状況が伺え、当センターの前回の調査地北部でも、大きな削平を受けており同様の状況が考えられる。したがって、建物跡Ⅱ群の分布範囲も、第24図に示した範囲よりさらに南に広がる可能性が考えられる。ただし、田村廃寺の寺域内にまで広がる状況は認められない。

第3節　周辺の地割との比較検討

（1）検出された建物跡群を規制する地割の抽出

前節までの所見は、既往の調査の再評価（寺域の追認）という側面が強い。その一方で、今回の調査地に対しては、「田村廃寺関連遺構群とは区別される建物跡群」もしくは「田村廃寺に隣接する集落跡」というような、いわば消極的な評価しかできていない。

一方、田村遺跡においては、7世紀末葉頃に土地利用上の画期があることを確認してきた。その背景には、古代寺院である田村廃寺の創建があることがまず想起される。寺域内に位置する建物跡Ⅲ群の出現事由は、ここに求めてよいだろう。今回の調査地で検出された建物跡Ⅱ群も、基本的には田村廃寺の存在を前提として営まれたものと考えられる。ただその場合、田村廃寺に隣接する以上、田村廃寺と主軸方位をそろえるのが自然であろう。しかし、建物跡Ⅱ群の主軸方位はN20°W前後であり、田村廃寺の創建を背景とするだけでは、建物跡Ⅱ群の出現事由としては説明不十分である。つまり、建物跡Ⅱ群の出現事由は、別途究明すべき課題として残されるのである。

第25図は、現存する丸亀平野条里型地割（N30°W前後）・建物跡Ⅱ群（N20°W前後）・建物跡Ⅲ群（ほぼ正方位）と方位を同じくする地割を抽出したものである。この図から、以下のような所見が得られる。

① 田村廃寺推定地には、寺域を示唆する正方位地割が確認できる。この地割と、既往の調査成果をもとに、寺域および主要伽藍位置をある程度推定することは可能であると考えられる。

② 建物跡Ⅱ群と同じN－20°W前後の地割は、①より推定される田村廃寺の寺域の北側を中心に確認され、今回検出された建物跡Ⅱ群もここに含まれる。

③ 丸亀平野条里型地割は、田村廃寺の寺域の北側では確認できず、復原が困難である。これは、②と表裏一体の関係にある可能性が高い。

このうち、建物跡Ⅱ群との関わりのなかで重要な意味を持つのは②・③である。すなわち、田村廃寺推定地の北側では、丸亀平野条里型地割とは異なる地割が形成され、この地割に基づいて配置されたのが建物跡Ⅱ群であるという位置づけがなされるのである。したがって、田村廃寺の北側で確認されるN－20°W前後の地割の原形は、少なくとも建物跡Ⅱ群が出現する7世紀末葉頃には成立していたものといえる。

このように、建物跡Ⅱ群が位置する田村廃寺推定地の北側では、田村廃寺の主軸方位や丸亀平野条里型地割とは異なる地割が7世紀末葉頃に機能しており、この地割が建物跡Ⅱ群の出現事由の一因をなしていることが確認される。したがって、この地割は、今回の調査で検出された遺構群を評価する上で重要な意味を持つのにとどまらず、田村廃寺機能時における、田村廃寺の北側の状況を推察する上でも重要な意味を持つものと考えられる。そこで、この地割を指して、「田村北型地割」と称することとする。

田村北型地割　…　田村廃寺推定地の北側で認められる、N20°W前後の地割

この地割を詳しく解明していくことが、今回検出された建物跡群の評価へとつながるものと予察される。

第25図　田村遺跡に関連する地割ライン

（2）田村北型地割の成立背景

田村北型地割の持つ意味を理解するためには、この地割がいつ頃、どのような経緯で成立したかを把握する必要がある。特に、田村北型地割の現時点での上限である７世紀末葉頃は、丸亀平野条里型地割の施行開始時期であり（森下1997）、両者のどちらが先に成立したかで、田村北型地割の持つ意味が大きく変わる。すなわち、田村北型地割の成立が７世紀後葉以前に遡ることが確認されれば、この地割は条里型地割に先行する地割という位置づけになり、そのこと自体が、これまで不鮮明であった７世紀代の土地開発史の一端を明らかにしうる事実となる。一方、丸亀平野条里型地割の施行開始と同時期かそれ以降であるならば、下川津遺跡と同様（大久保1990）、何らかの制約を受けたために、通有の条里型地割とは異なった、いわば、変則条里型地割とでも呼ぶべきものであろう。

さて、ここで再び検討の対象となるのが、７世紀後葉以前の状況である。前節までに確認したとおり、田村遺跡で検出されたこの時期の建物跡は概ね正方位に近く、田村北型地割との関連は想定できない。また、正方位に近いとはいえばらつきがあり、かつ、極めて散在的に分布する状況からは、地割の規制を受けて配置されているような斉一性自体が読み取れない。したがって、田村北型地割に限らず、そもそもこの時期に地割が存在していた状況は、田村遺跡の調査結果からは想定し難いのである。よって、現状では、田村北型地割の成立は丸亀平野条里型地割の施行開始と同時期かそれ以降に求めるほかはない。

一方、今回の調査地では、７世紀末葉頃に建物跡配置上の再編成がなされ、主軸方位等において斉一性の高い建物跡群（建物跡Ⅱ群）が構成されている。この現象は、主軸方位を考慮に入れなければ、稲木遺跡・金蔵寺下所遺跡などで示される「宅地の再編成」（森下1997）という現象と同様である。つまり、今回の調査で認められた「７世紀末葉頃の土地利用上の画期」とは、「地割施行に基づく集落の再編成」という点で、丸亀平野各所で認められる現象と通有のものであり、それが変則条里型地割に基づくものであったために、主軸方位が丸亀平野条里型地割とは異なったにすぎないという見解が示されるのである。

以上の検討より、田村北型地割とは、丸亀平野条里型地割が何らかの制約を受けることで生じた、変則条里型地割であると認識する。これまで、田村遺跡の近辺では、丸亀平野条里型地割の成立時期を示す調査事例はなく、判然としなかったが、田村北型地割が丸亀平野条里型地割を前提とする以上、丸亀平野条里型地割も、７世紀末葉頃には田村遺跡近辺で施行していたものと推察できる。このような推察が可能になったことは、今回の重要な調査成果の一つであるといえよう。

さて、田村北型地割が何らかの制約を受けた、変則条里型地割であると位置づけた場合、この「何らかの制約」とは一体何なのかという問題が浮上する。ここで想起されるのは、田村廃寺の存在である。主軸方位が正方位である田村廃寺と、Ｎ－30°Ｗ前後である丸亀平野条里型地割とでは、どこかで不整合が生じるのは必然である。この不整合を解消するためには、どこかで地割の方位を変更させる必要がある。もちろん、田村廃寺との不整合を無視し、通有の丸亀平野条里型地割を施行すること自体は可能である。しかし、この時期は田村廃寺創建当初ということもあり、田村廃寺を十分に機能させるため、田村廃寺へと続く道は重要な意味を持っていたのであろう。このような経緯で施行された変則条里型地割が、田村北型地割であると推察する。

第Ⅴ章　まとめ

今回の調査で検出されたのは、７世紀前葉頃から８世紀前葉頃までの約100年間に営まれた建物跡群である。この建物跡群の営まれ方は、７世紀後葉以前と７世紀末葉以後とでは大きく異なる。７世紀後葉以前の建物跡は、建物跡の軸をそろえる意識が弱く、また、断続的に営まれているのに対して、７世紀末葉頃からは、軸をそろえ、継続的に営まれていた。この時期は、古代の土地区画事業である条里型地割が丸亀平野において施行される時期であり、この地割の形成に伴って、丸亀平野の各所で宅地の再編成がなされている。今回の調査で確認された建物跡群の営まれ方の変化も、当地に形成された地割に沿って建物跡を構築した結果といえる。

ただし、当地に形成された地割は、丸亀平野において広く認められるＮ－30°Ｗ前後の地割ではなく、当地の近辺のみに認められるN20°Ｗ前後の地割である。これは、同じく７世紀末葉頃に創建された田村廃寺と、丸亀平野の条里型地割の不整合を解消しようとした結果である。すなわち、この地割は田村廃寺に起因する、当地近辺独自の地割である。このような地割を認識できるようになったのは、今回の調査結果の賜物であり、大きな成果といえる。

一方、今回の調査地は、古代寺院である田村廃寺の隣接地でありながら、寺院との直接的な関わりを示す遺構・遺物はなかった。田村廃寺の隣接地である以上、田村廃寺との関わりを完全に否定するものではないが、田村遺跡としてこれまで確認されてきた遺構群とは区別されるものである。しかし、このことが、前回の調査で確認された区画溝ＳＤ05・06が田村廃寺の北限であるという推定をあらためて裏付ける結果となっている。これも重要な成果のひとつである。

さて、今回の調査で認識できるようになった地割（田村北型地割）や、田村廃寺の名残を留める正方位の地割は、現在も地図や現地で確認することができる。すなわち、現在の地割のいくつかは、７世紀末葉頃に原型を求めることができるということである。したがって、現在の地割を検討することで、古代寺院である田村廃寺の復原や、当時の土地区画の施され方など、ある程度の推定が可能である。しかし、それはあくまで推定の域をでないものであり、これを検証するためには、発掘調査による「物証」が不可欠である。当地近辺は今後も土地開発が徐々に進み、時には現存する地割が失われることも想定されよう。そのこと自体は、現代における土地開発のあり方で、かつ、将来的には土地開発の歴史の一端となるものであり、否定されるべきものではない。ただ、原型を辿れば約1300年前にまで遡る地割が、いずれは消失してしまう可能性のあることを、強く認識しておく必要がある。地割に基づく推定が、推定のままで終わらないためにも、当地近辺における発掘調査が重要な役割を担っていることを最後に付言させていただく。

引用・参考文献

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか　2004『県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　田村遺跡』

香川県教育委員会　2000「田村遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報―平成10年度―』

丸亀市教育委員会　2002ほか『田村遺跡発掘調査報告書』

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

東　信男　2002『田村遺跡発掘調査報告書　株式会社百十四銀行城西支店建設に伴う丸亀市田村町所在の古代寺院跡の調査』丸亀市教育委員会ほか

安藤文良　1967「讃岐古瓦図録」『文化財協会報　特別号８』香川県文化財保護協会
石井誠一　1995「第１章　自然環境」『新編　丸亀市史１　自然・原始　古代・中世編』丸亀市
上田　睦　1987「寺院とその構造」『藤井寺市及びその周辺の古代寺院（上）　―藤井寺の遺跡ガイドブックNo.２―』藤井寺市教育委員会
大久保徹也　1990「下川津遺跡といわゆる条里地割について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
海邊博史　2003「四国学院大学構内遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成14年度』香川県教育委員会
片桐孝浩　1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第21冊　川津下樋遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
片桐孝浩　1997『中小河川大束川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津一ノ又遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
片桐孝浩・信里芳紀・細川健一・中島将史　2005「旧練兵場遺跡」『香川県埋蔵文化財センター年報』香川県埋蔵文化財センター
北山健一郎　2004『県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　田村遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
木下晴一　1995『陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成６年度　平池南遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
蔵本晋司　1999『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第33冊　川津川西遺跡・飯山一本松遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
金田章裕　1995「条里制」『日本古代史研究事典』東京堂出版
金田章裕　1996「南海道　―直線道と海路・山道」『古代を考える　古代道路』吉川弘文館
金田章裕　1999「地図に表現された古代の土地管理法」『古地図からみた古代日本　土地制度と景観』中公新書
蔵本晋司　1999「弥生時代終末期の讃岐地域の土器様相について」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第32冊　中間西井坪遺跡Ⅱ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
笹川龍一　1989『仲村廃寺　～旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書～』善通寺市教育委員会
佐藤竜馬　1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第24冊　郡家田代遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
佐藤竜馬　2000「讃岐・川津地区遺跡群の動向」『古代文化　特集　南海道諸国の官衙遺跡―調査研究の現状と課題―』52　（財）古代学協会
中里伸明　2004「香川県における弥生時代後期～終末期の竪穴住居に関する若干の検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要ＸＩ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
信里芳紀　2001「出土遺物から見た旧練兵場遺跡（旧練兵場遺跡シンポジウムの記録）」『旧練兵場遺跡　市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』善通寺市・（財）元興寺文化財研究所
信里芳紀　2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相　―集落の検討を中心にして―」『弥生時代前期末・中期初頭の動態　―研究発表要旨集―』古代学協会四国支部
信里芳紀　2003「讃岐地域における弥生時代前期集落の様相」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会
信里芳紀　2004「下川津遺跡における鉄器生産の可能性について」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要ＸＩ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
乗松真也　2005「三谷三郎池遺跡出土の弥生時代資料」『調査研究報告』第１号　香川県歴史博物館
菱田哲郎　2005「古代日本における仏教の普及　―仏法僧の交易をめぐって―」『考古学研究』52－３　考古学研究会
藤好史郎　2003「川原遺跡・本郷遺跡（中間地区・円座地区）」『平成14年度　埋蔵文化財発掘調査概報　県道関係埋蔵文化財発掘調査　農業試験場移転に伴う埋蔵文化財発掘調査　国立善通寺病院改修に伴う発掘調査』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
真鍋昌宏　1987『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会ほか
森下英治　1997ａ『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第27冊　三条黒島遺跡　川西北七条Ｉ遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
森下英治　1997ｂ「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅴ　特集　７世紀の讃岐』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
森下英治　1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第29冊　龍川五条遺跡Ⅱ　飯野東分山崎南遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

森下英治　1999「讃岐地方における弥生時代中期集落の機能と構造について」『古代学協会四国支部第13回大会資料　瀬戸内の弥生中期集落　―その機能と構造の研究―』古代学協会四国支部

森下英治　2001「旧練兵場遺跡の集落構造　―これまでの発掘調査成果から―（旧練兵場遺跡シンポジウムの記録）」『旧練兵場遺跡　市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』善通寺市・（財）元興寺文化財研究所

森下英治　2003『国立善通寺病院改修事業に伴う　旧練兵場遺跡発掘調査概報１　―平成13年度・14年度上半期の発掘調査成果概要報告―』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

森下英治・信里芳紀・乗松真也　2000「讃岐地方における弥生土器の基準資料Ⅲ　―前期後半～中期前葉の土器を中心にして―」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅷ』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

渡部明夫　1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第９冊　永井遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

渡部明夫　2005「天平勝宝以前の讃岐国分寺」『香川県埋蔵文化財センター　研究紀要Ⅰ』香川県埋蔵文化財センター

第Ⅲ章　調査結果

佐藤竜馬　1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念　考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室

信里芳紀　2002「小谷窯跡出土須恵器の編年」『高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小谷窯跡・塚谷古墳』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

藤好史郎・西村尋文　1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

渡部明夫・森格也・古野徳久　1997「打越窯跡出土須恵器について」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅴ　特集　７世紀の讃岐』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

第Ⅳ章　調査結果に関わる所見

東　信男　2002『田村遺跡発掘調査報告書　株式会社百十四銀行城西支店建設に伴う丸亀市田村町所在の古代寺院跡の調査』丸亀市教育委員会ほか

上田　睦　1987『藤井寺市及びその周辺の古代寺院（上）　藤井寺の遺跡ガイドブックNo.２』藤井寺市教育委員会

大久保徹也　1990「下川津遺跡といわゆる条里地割について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

北山健一郎　2004『県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

佐藤竜馬　1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念　考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室

信里芳紀　2002「小谷窯跡出土須恵器の編年」『高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小谷窯跡・塚谷古墳』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

藤好史郎・西村尋文　1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

森下英治　1997「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅴ　特集　７世紀の讃岐』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

渡部明夫・森格也・古野徳久　1997「打越窯跡出土須恵器について」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅴ　特集　７世紀の讃岐』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

田村遺跡

遺物観察表

第4表　田村遺跡出土土器観察表

遺物番号	報告遺構名	調査区	器種	法量(cm)			残存率	胎土	色調		調整		備考
				口径	器高	底径			外面(釉)	内面(胎土)	外面	内面	
1	SB001(SP120)	Ⅰ-2区	須恵器　杯蓋	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(細)少	2.5Y7/1 灰白	N7/ 灰白	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好
2	SB001(SP126)	Ⅰ-2区	須恵器　杯蓋	(14.4)	−	−	口縁部1/8	長石(細)少	N6/ 灰	N6/ 灰	回転ナデ, ヘラケズリ	回転ナデ	焼成良好
3	SB001(SP126)	Ⅰ-2区	須恵器　杯身	−	−	(3.0)	底部2/8	長石(中)少	5Y7/1 灰白	5Y6/1 灰	回転ナデ	回転ナデ	焼成やや不良
4	SB001(SP126)	Ⅰ-2区	須恵器　壺	(12.0)	−	−	口縁部2/8	石英・長石(中)少	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好, 堅緻
5	SB001(SP120)	Ⅰ-2区	土師器　甕	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並, 赤色粒(細)少	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR7/6 橙	ヨコナデ	ヨコナデ, ハケメ	外面に煤付着
6	SB001(SP126)	Ⅰ-2区	土師器　鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ハケメ後ヨコナデ	ヨコナデ	
7	SB001(SP134)	Ⅰ-2区	土師器　甕	−	−	−	把手破片	長石・赤色粒(中)少	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR5/6 明赤褐	オサエ後ハケメ	オサエ, ナデ	
8	SB003(SP138)	Ⅰ-2区	須恵器　杯蓋	(9.7)	−	−	口縁部2/8	長石・黒色粒(細)少	N6/ 灰	N7/ 灰白	回転ナデ	回転ナデ, ナデ	焼成良好, 堅緻
9	SB003(SP138)	Ⅰ-2区	須恵器　杯蓋	(18.0)	−	−	口縁部1/8	長石(中)少	5Y7/1 灰白	5Y7/2 灰白	回転ナデ	回転ナデ	焼成やや不良
10	SB003(SP144)	Ⅰ-2区	須恵器　杯蓋	(22.0)	−	−	口縁部1/8	長石・黒色粒(細)少	N5/ 灰	5Y7/1 灰白	回転ナデ	回転ナデ	焼成やや不良
11	SB003(SP138)	Ⅰ-2区	須恵器　杯身	−	−	(12.0)	底部1/8	長石(細)少	N5/ 灰	N8/ 灰白	回転ナデ	回転ナデ	焼成やや不良
12	SB003(SP138)	Ⅰ-2区	須恵器　杯身	13.5	4.0	10.0	底部8/8	石英・長石(中)少	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	回転ナデ, 底部ヘラキリ未調整	回転ナデ, ナデ	焼成良好
13	SB003(SP141)	Ⅰ-2区	土師器　甕	(21.0)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(中)並, 赤色粒(中)並	7.5YR4/6 褐	7.5YR6/4 にぶい橙	ヨコナデ	ヨコナデ, ハケメ後ナデ, ヘラケズリ後ナデ	
14	SB003(SP141)	Ⅰ-2区	須恵器　小型壺	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(細)少, 雲母(細)少	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	
15	SB007(SP266)	Ⅱ-1区	須恵器　杯蓋	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(細)少	5Y6/1 灰	N6/ 灰	回転ナデ, 回転ヘラケズリ	回転ナデ	焼成良好, 堅緻
16	SB007(SP270)	Ⅱ-1区	須恵器　杯身	(11.6)	−	−	口縁部1/8	長石(細)少	N5/ 灰	N7/ 灰白	回転ナデ	回転ナデ	焼成やや不良
17	SB007(SP266)	Ⅱ-1区	土師器　器種不明	−	−	−	破片	石英・長石(中)並	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	ヨコナデ, オサエ後ハケメ	オサエ, 板ナデ	
18	SB008(SP267)	Ⅱ-1区	須恵器　高杯	−	−	−	脚部4/8	石英・長石(細)少	5Y7/1 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙	回転ナデ	ナデ, 板ナデ	焼成良好, 堅緻
19	SB010(SP275)	Ⅱ-1区	須恵器　提瓶	−	−	−	破片	石英・長石(中)少	N6/ 灰	N6/ 灰	カキメ	回転ナデ	
20	SB010(SP275)	Ⅱ-1区	須恵器　平瓶	(7.5)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(細)少	N6/ 灰	N6/ 灰	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好
21	SB010(SP265)	Ⅱ-1区	土師器　甕	−	−	−	把手破片	石英・長石(粗)少	10YR7/4 にぶい黄橙	5Y3/1 オリーブ黒	オサエ	板ナデ	
22	SP115	Ⅰ-2区	須恵器　杯蓋	−	−	−	口縁部破片	長石・黒色粒(細)少	N7/ 灰白	N6/ 灰	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好
23	SP115	Ⅰ-2区	須恵器　杯身	−	−	(8.9)	底部1/8	石英・長石(中)並	10YR8/1 灰白	2.5Y7/2 灰黄	回転ナデ	回転ナデ	焼成不良
24	SP117	Ⅰ-2区	須恵器　甕	(10.6)	−	−	口縁部1/8	長石・黒色粒(細)少	N7/ 灰白	N7/ 灰白	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好

遺物番号	報告遺構名	調査区	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	胎土	色調 外面(釉)	色調 内面(胎土)	調整 外面	調整 内面	備考
25	SP117	Ⅰ-2区	須恵器 杯身	—	—	(11.0)	底部2/8	石英・長石(細)少	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/2 灰黄	回転ナデ	ナデ	焼成不良
26	SP223	Ⅱ-1区	須恵器 杯蓋	(14.8)	—	—	口縁部1/8	黒色粒(中)少	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白	回転ナデ	回転ナデ	焼成やや不良
27	SP223	Ⅱ-1区	弥生土器 甕	(14.6)	—	—	頸部1/8	石英・長石(中)並	5YR7/6 橙	10YR4/2 灰黄褐	ヨコナデ, マメツ	ヨコナデ, オサエ後ナデ	
28	SP225	Ⅱ-1区	土師器 甕	—	—	—	口縁部破片	石英・長石(中)多, 雲母(中)少	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ヨコナデ	板ナデ	
29	SP226	Ⅱ-1区	須恵器 平瓶	(7.2)	—	—	口縁部2/8	石英・長石(細)少	7.5Y6/1 灰	7/5Y5/1 灰	回転ナデ後カキメ	回転ナデ	焼成良好
30	SP281	Ⅱ-2区	土師器 甕	(23.0)	—	—	口縁部1/8	石英・長石(中)並, 赤色粒(中)少, 雲母(細)少	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	ヨコナデ	ヨコナデ, ナデ	
32	包含層	Ⅱ-2区	須恵器 杯蓋	—	—	—	天井部8/8	石英・長石(中)多	N5/ 灰	N5/ 灰	回転ナデ, 回転ヘラキリ後ナデ	回転ナデ	焼成良好
33	包含層	Ⅱ-2区	須恵器 杯身	(10.5)	4.3	—	口縁部2/8	石英・長石(細)少	N8/ 灰白	N8/ 灰白	回転ナデ, 底部ヘラキリ未調整	回転ナデ	焼成良好, 堅緻
34	包含層	Ⅱ-1区	須恵器 杯身	—	—	(8.2)	底部1/8	長石・黒色粒(中)少	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	回転ナデ, 回転ヘラキリ	回転ナデ	焼成良好
35	包含層	Ⅱ-1区	弥生土器 壺	—	—	—	口縁部破片	石英・長石(細)少, 赤色粒(細)少, 雲母(細)少	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ後ハケメ	
36	包含層	Ⅱ-1区	土師器 蛸壺	—	—	—	破片	石英・長石(中)並	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	オサエ後ナデ	ナデ	
38	包含層	Ⅰ-2区	陶器 蓋	(7.8)	—	—	口縁部1/8	砂粒(細)少	7.5YR6/3 にぶい褐 (釉) 5Y6/2 灰オリーブ	7.5YR6/3 にぶい褐	凹線, 回転ナデ, 施釉	回転ナデ	
39	包含層	Ⅲ-1区	瓦質土器 羽釜	20.0	—	—	口縁部1/8	砂粒(中)少	N3/ 暗灰	N4/ 灰	イブシ, 回転ヘラケズリ	板ナデ	内面に炭化物付着
40	SK303	Ⅲ-4区	須恵器 杯身	11.8	4.7	—	6/8	砂粒(細)並	5Y6/1 灰	10YR6/4 にぶい赤褐	回転ナデ, 底部ヘラキリ未調整	回転ナデ, 底部未調整	焼成やや不良

第5表　田村遺跡出土瓦観察表

遺物番号	報告遺構名	調査区	器種	法量(cm) 現存長	最大幅	最大厚	胎土	色調 凹面	色調 凸面	調整 凹面	調整 凸面	備考
37	包含層	Ⅱ-1区	丸瓦	6.6	6.8	1.7	白色砂粒(細)少	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	布目, 板ナデ	ナデ, 板ナデ	

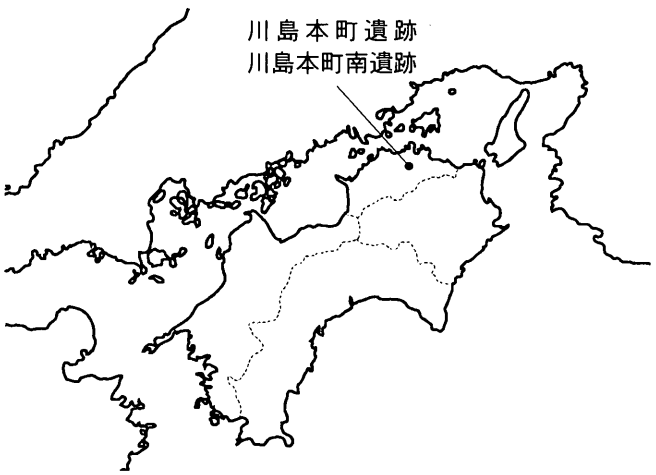
第6表　田村遺跡出土石器観察表

遺物番号	報告遺構名	調査区	器種	材質	法量(cm) 現存長	最大幅	最大厚	法量(cm)	備考
31	包含層	Ⅰ-2区	石鏃	サヌカイト	1.8	1.2	0.2	0.38	

県道西植田高松線道路改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

川島本町遺跡
川島本町南遺跡



第26図　川島本町遺跡・川島本町南遺跡位置図

2007. 1

香川県教育委員会

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

県道西植田高松線と県道三木国分寺線が交わる、高松市川島本町の交差点は、近年の交通量の増加に伴い混雑が多発してきていた。こうした状況の緩和策として香川県土木部道路建設課（以下、道路建設課と略称）は、川島本町の交差点の西側に県道西植田高松線のバイパス工事を新たに計画した。

道路建設課から工事計画の照会を受けた香川県教育委員会（以下、県教委と略称）は、工事予定箇所に埋蔵文化財が所在する可能性が高いものとの判断し、道路建設課と協議を重ね、地下遺構に影響を与える範囲については発掘調査を実施することで合意し、遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施することになった。県教委による試掘調査は、平成16年と17年の２次に分けて実施した。その結果、路線の南北２地点において埋蔵文化財の包蔵地とその範囲を確認し、北側の包蔵地を川島本町遺跡、南側を川島本町南遺跡として認められることになった。その報告を受けた道路建設課は、工事予定との関係で県教委と更に協議を重ね、平成17年度中に香川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することで合意に達した。

現地での発掘調査は香川県埋蔵文化財センターの、16年度から設けられた小規模調査班が担当した。現地調査は平成17年７月１日から10月31日までの４ヶ月間を要した。調査対象面積は、川島本町遺跡が1,275㎡、川島本町南遺跡が448㎡、合計で1,723㎡を測る。川島本町遺跡の調査では、縄文後期頃のサヌカイト製の砕片・剥片及び石器類を多量に廃棄している不整形遺構や弥生時代から中・近世頃の多数の溝状遺構、古墳時代前期の井戸跡等を検出した。注目できるものでは、高松平野でも出土例が少ない、縄文時代後期の土器が比較的豊富に出土し、貴重な調査成果になった。

なお、発掘調査の成果をまとめる整理作業は、香川県埋蔵文化財センターにおいて平成18年１月より３月までの３ヶ月間を要した。

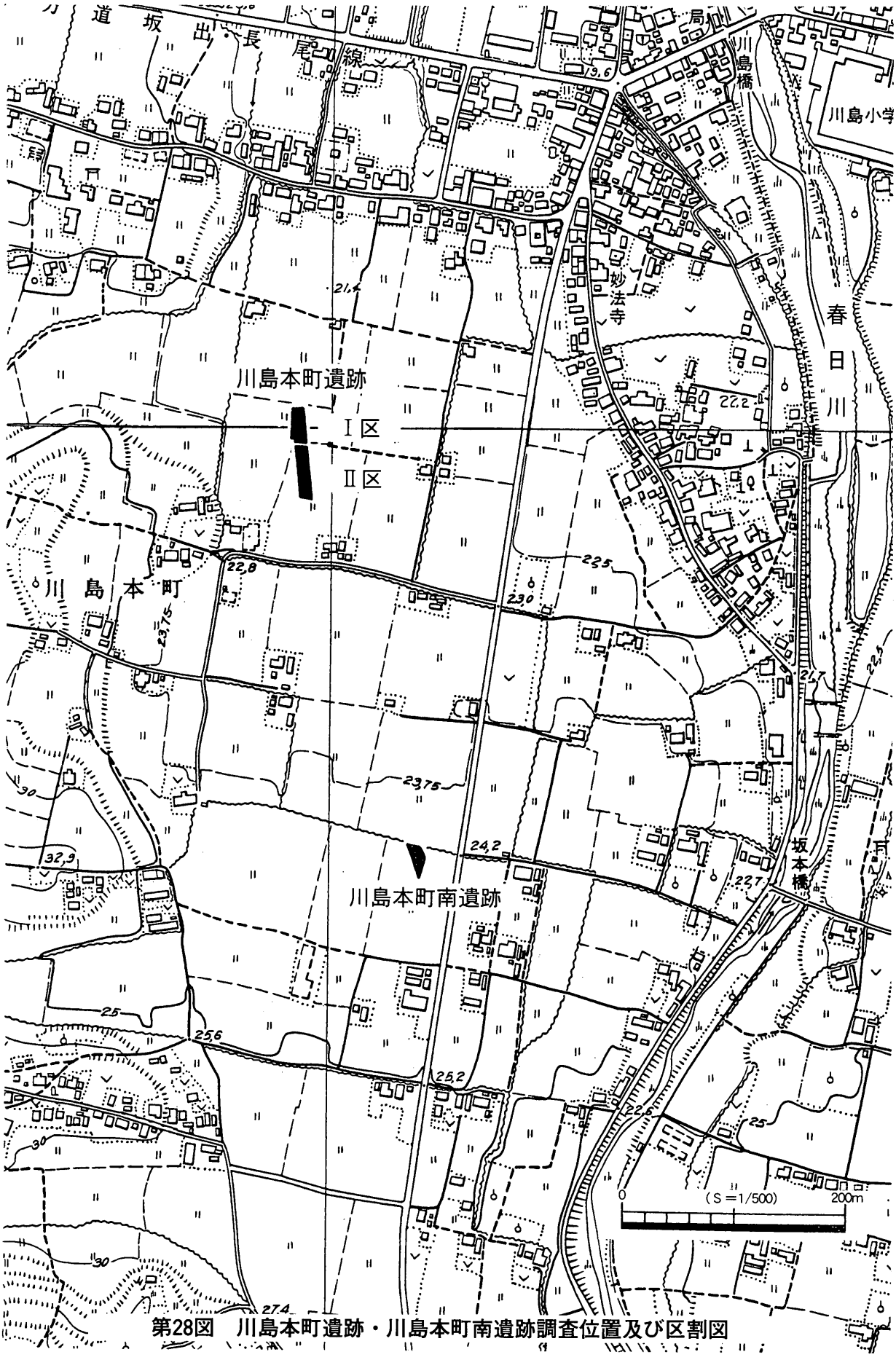
平成17年度の発掘調査及び整理作業は、以下の体制で実施した。

総括	所　長	渡部明夫	調査課	課　長	廣瀬常雄
	次長兼総務課長	榊原正人		主任文化財専門員	西村尋文
総務課	副主幹兼係長	松崎日出穂		文化財専門員	古野徳久
	主　査	塩崎かおり		参　事	河野浩征
	主　査	田中千晶		調査技術員	中里伸明
				整理作業員	田村加良子

（現場作業参加者）

池添晶子、大浦哲也、川西俊士、川西雅子
川渕ひな美、柴垣俊裕、筒井敏和、土居　剛
長尾誠一、西村和代、平居和彦、松本悦子
松本毅彦、三谷恵子、吉井和美

第27図　調査地より由良山を望む



第28図　川島本町遺跡・川島本町南遺跡調査位置及び区割図

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

高松平野は、香川県のほぼ中央部の瀬戸内海沿岸に位置する沖積平野である。西を五色台山塊、東を立石山、雲附山、南を日山、上佐山等に隔てられ、南北約20km、東西約16kmを測る。高松平野の南方には、香川県と徳島県とを隔てる阿讃山脈が東西に広がり、その山稜裾部から平野部に向かい多くの丘陵が細長く延びる。この丘陵間に東より新川、春日川、香東川、本津川等の河川が北流し、主にその河川堆積層により高松平野は形成されている。

川島本町遺跡及び川島本町南遺跡の所在する、高松市川島本町及び高松市池田町周辺は、高松平野の南東部に位置する。北約1.5kmには由良山、南西約1.2kmには上佐山、西約1.4kmには三郎池、東約0.3kmには春日川が北流している。春日川は高松市西植田町及び東植田町周辺の丘陵地より北流し、高松平野の東部の沖積地を、新川と伴に形成している。川島本町遺跡及び川島本町南遺跡は春日川が形成した沖積地の上面に位置する。

遺跡周辺は条里型地割りが広範囲に及んでいる。そのため、旧地形の復元が困難であり、詳細な点は問題を残すが、周辺の旧地形を復元した第29図（註）を見れば、遺跡周辺は旧河道、氾濫源、開析谷、自然堤防、段丘、山地・丘陵等に分けられる。遺跡は春日川西岸に位置し、東の旧河道Ａ・Ｂと西に広がる段丘面との間の扇状地上に立地する。旧河道Ａは川島本町南遺跡より東方の春日川西岸より北西方向へ派生し、川島本町遺跡より北東約500ｍの地点で春日川と合流する。河幅は約50～100ｍを測り、規模等より春日川の本流の可能性が考えられる。なお、春日川と旧河道Ａの間は中州状の自然堤防に分類される。旧河道Ｂは旧河道Ａの西側に位置する小流路で、北半部は水路も走り比較的明瞭であるが、川島本町遺跡に隣接する南半部は不明瞭である。

遺跡の西に広がる段丘面には、北東ないし東方に向く開析谷が複数認められる。川島本町遺跡の西側には、開析谷Ａが隣接している。そのため、川島本町遺跡は開析谷Ａからの堆積層と春日川方向からの堆積層が交わるような土地条件を呈しているが、主に春日川方向からの堆積作用により、遺跡がある基盤層は形成されたものと考えられる。同様に川島本町南遺跡の西方には、開析谷Ｂが位置しているが、比較的離れているため、川島本町遺跡同様、春日川方面からの堆積作用により基盤層が形成されているものと考えられる。なお、遺跡のある基盤層は、調査の成果から推定して、縄文時代後期までにはおおむね堆積作用が終了し、その上面に縄文時代後期以降の遺構が広がる。

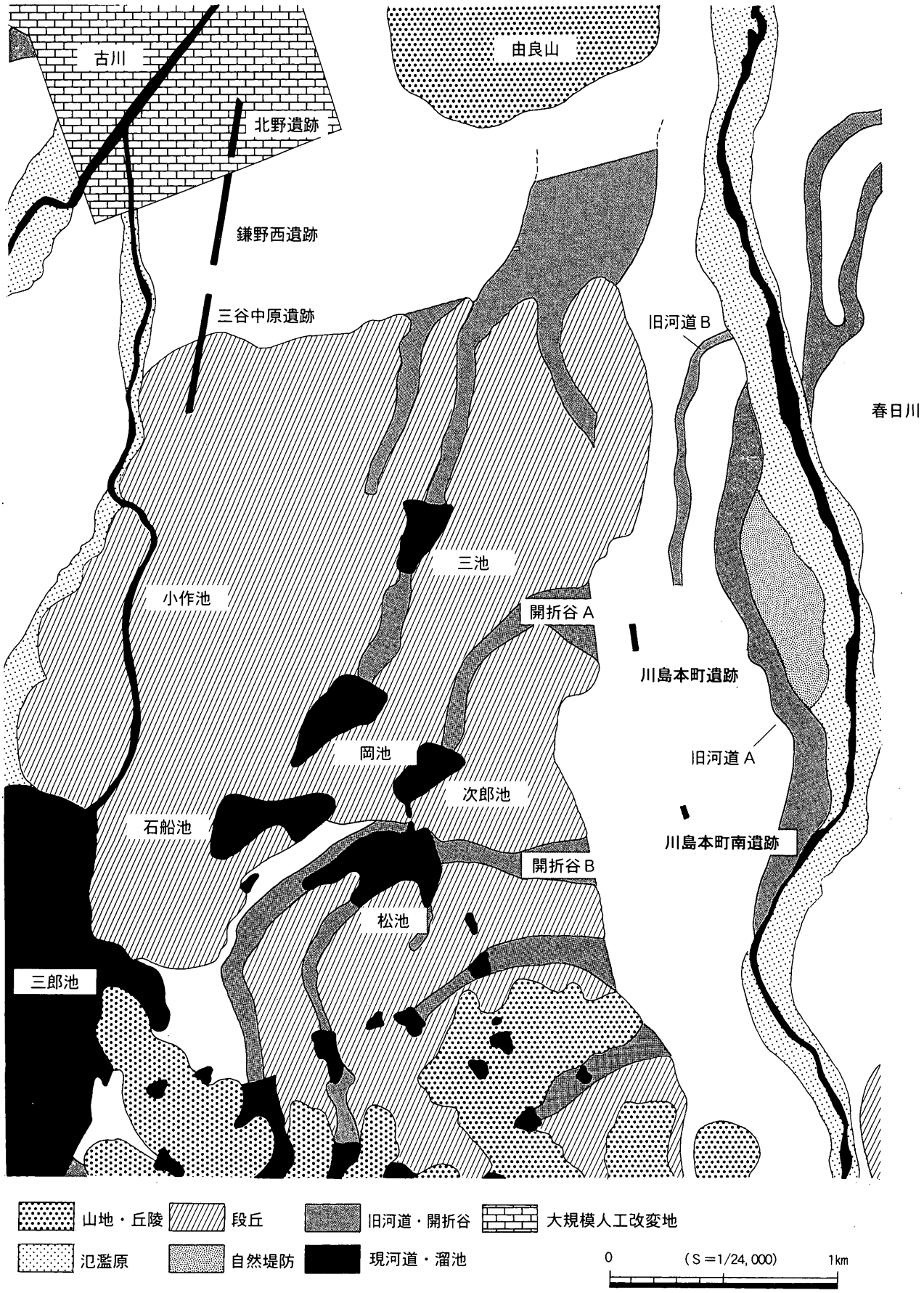
（註）

第29図は下記参考文献中で報告している地形分類図を参考にして、空中写真の検討と現地踏査を実施し作成したものである。

（参考文献）

金田章裕　1992「第２章　第１節　地理的環境」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会

高橋　学　1992「第４章　第１節　高松平野の環境復原」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会


古川
由良山
北野遺跡
鎌野西遺跡
三谷中原遺跡
旧河道 B
春日川
三池
小作池
開折谷 A
川島本町遺跡
旧河道 A
岡池
次郎池
石船池
川島本町南遺跡
開折谷 B
松池
三郎池
山地・丘陵
段丘
旧河道・開折谷
大規模人工改変地
氾濫原
自然堤防
現河道・溜池
0
(S=1/24,000)
1km

第29図　微地形分類図

第２節　歴史的環境

高松平野において、縄文時代草創期～縄文時代中期の明確な遺構はなく、遺物がわずかに確認されている。前田東・中村遺跡や大池遺跡で縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土した。縄文時代後期は、磨消縄文土器を主体とした土器組成が西日本の広域に分布する時期である。香川県内においても、森広遺跡群・小山南谷遺跡・永井遺跡などでこの時期の遺物がまとまって出土している。今回報告する川島本町遺跡でも、この時期の土器と石器類がまとまって出土している。

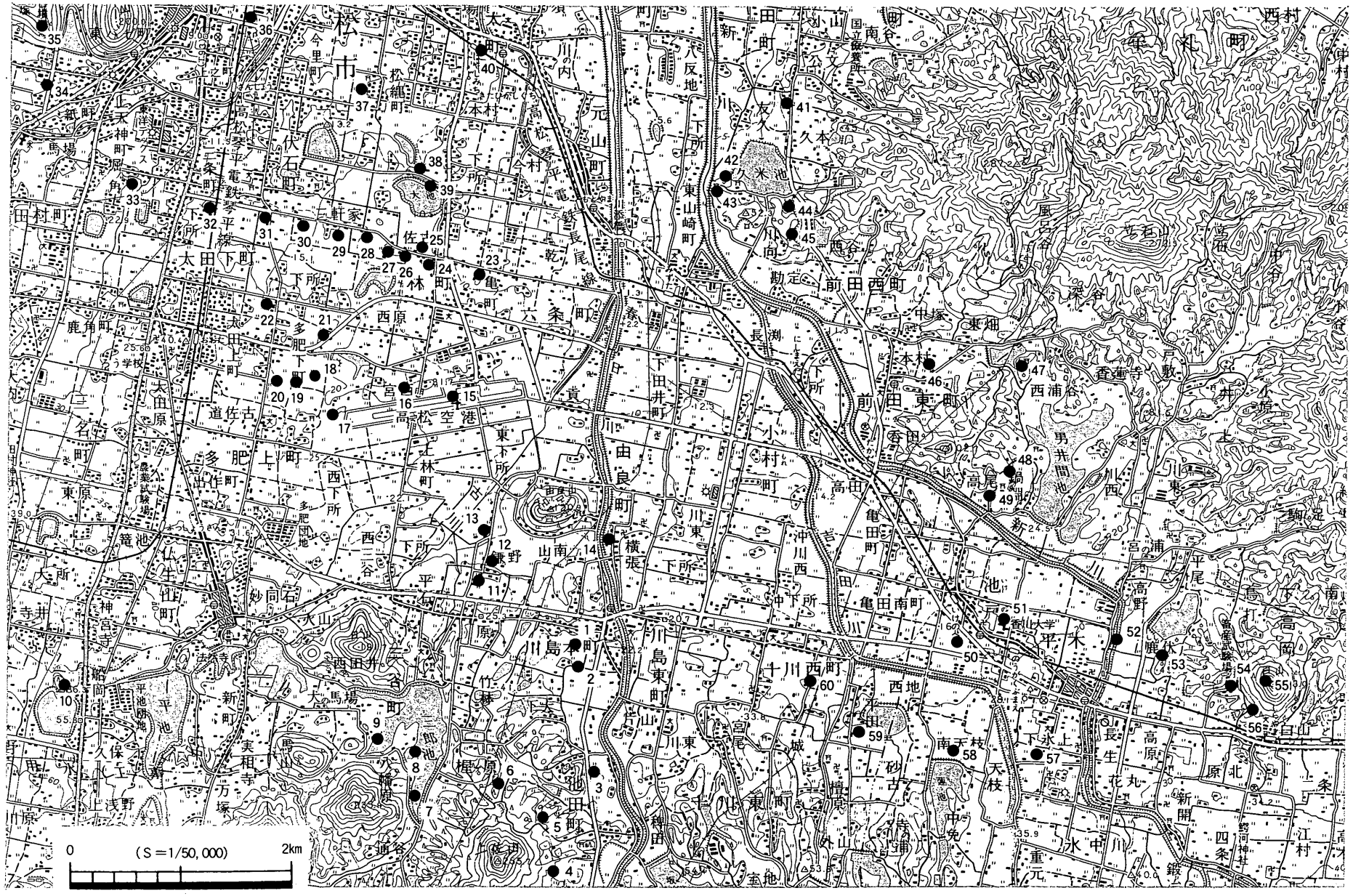
縄文時代晩期以降、水稲耕作を行っていたことを示す遺構･遺物が確認されるようになる。上西原遺跡、浴･長池遺跡では不定形小区画水田が検出されており、林･坊城遺跡では木製農具が出土している。これらの水田関連遺構･遺物よりやや後出するが、弥生時代前期～中期初頭には汲仏遺跡、天満･宮西遺跡などで環濠を伴う集落が形成され、ある程度集落の様相が把握できる。弥生時代中期中葉には既に環濠が消失しているが、居住域の単位に大きな変化があった状況は読み取れない（信里2003)。

弥生時代中期後葉～後期前葉には、丘陵地や山頂などの高所地や、平野の縁辺部にも集落が展開する。久米池南遺跡、鹿伏・中所遺跡、小山南谷遺跡などは、この頃より集落としての様相が明瞭になる。今回報告する川島本町遺跡、川島本町南遺跡の近辺においても、三谷三郎池遺跡、池田合子神社遺跡で、当期の遺物が確認されている。一方、平野部においても、集落の中心地は微視的には推移しているが、巨視的に見れば前期以来継続的に営まれている状況が読み取れる（乗松2005)。このうち、上天神遺跡では、朱精製容器である把手付広片口皿が約80個体出土したばかりでなく、遠近を問わず他地域よりの搬入品・模倣品が確認された。

高所地や丘陵地での集落の営みは弥生時代後期以降、縮小傾向にある。その一方で、竪穴住居跡の検出数は中期後葉以降、確実に増加し、古墳時代前期初頭まではこの状況が存続するようである。天満・宮西遺跡・凹原遺跡・空港跡地遺跡など、この時期の集落の推移が明らかとなっている事例も蓄積されつつある。これらの事例から、遺跡群（信里2003）内における集落の動向が把握できるようになりつつある。

第７表　川島本町遺跡・川島本町南遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	川島本町遺跡	21	凹原遺跡	41	久米池遺跡
2	川島本町南遺跡	22	汲仏遺跡	42	諏訪神社古墳
3	光専寺山遺跡	23	林・坊城遺跡	43	諏訪神社遺跡
4	中山田遺跡	24	浴・松ノ木遺跡	44	久米池南遺跡
5	上佐山山麓遺跡	25	弘福寺領田図比定地北地区	45	高松茶臼山古墳
6	通谷遺跡	26	浴・長池Ⅰ遺跡	46	前田東・中村遺跡
7	三谷三郎池Ｄ遺跡	27	浴・長池Ⅱ遺跡	47	西浦谷遺跡
8	三谷三郎池Ｃ遺跡	28	井手東Ⅰ遺跡	48	池戸鍋淵遺跡
9	三谷三郎池Ａ遺跡	29	井手東Ⅱ遺跡	49	池戸八幡神社１号墳
10	船岡山古墳	30	居石遺跡	50	砂入遺跡
11	三谷中原遺跡	31	蛙股遺跡	51	香川大学農学部遺跡
12	鎌野西遺跡	32	大田下・須川遺跡	52	鹿伏・中所遺跡
13	北野遺跡	33	上天神遺跡	53	天神山古墳群
14	由良南原遺跡	34	松並・中所遺跡	54	白山１遺跡
15	空港跡地遺跡	35	鶴尾神社４号墳	55	白山２遺跡
16	宮西一角遺跡	36	東中筋遺跡	56	白山３遺跡
17	多肥宮尻遺跡	37	天満・宮西遺跡	57	福万遺跡
18	日暮・松林遺跡	38	上西原遺跡	58	南天枝遺跡
19	多肥・松林遺跡	39	大池遺跡	59	十川東・平田遺跡
20	松林遺跡	40	木太・中村遺跡	60	西尾遺跡



第30図　川島本町遺跡・川島本町南遺跡周辺遺跡分布図

第Ⅲ章　川島本町遺跡の調査成果

第１節　概要

今回の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の溝跡を主に検出した。また、それと伴に集落跡の存在を示す柱穴・井戸跡を検出しており、調査地の東側に集落跡が展開する状況が推定できるようになった。古墳時代中期以降の様相は今回の調査から窺い知ることはできないが、17世紀前葉までに機能していたと考えられる条里方向の溝跡を検出しており、耕作地として土地利用されていたものと考えられる。

一方、黄褐色砂混じりシルト層中および上面からは、縄文時代後期の土器がまとまって出土した。また、風倒木痕と考えられる不定形な遺構の埋土中より、縄文土器と伴に多量のサヌカイト製の石器類が出土した。縄文時代後期の土器が包含層中より出土することは、県内では増加傾向にあるがその事例は少なく、これらの遺物は貴重な資料になる。

第２節　基本層序

当地は、今回の調査が行われる以前は、耕作地として利用されていた。この耕作土の下層にも旧耕作土層が確認される。この下層には黒褐色系～黄褐色系シルト層が堆積しており、検出された遺構はこの層を切り込んで形成されている。したがって、この層の上面が遺構検出面である。この遺構検出面の上には、部分的に砂層が薄く堆積している。したがって、この砂層が、遺構検出面を把握する際の指標となる。これらの遺構の基盤層となっている黒褐色系シルト層の下層では、砂粒を多く含んだ黄褐色系シルト層が、厚さ不均等に堆積する。縄文時代後期の土器はこの層よりまとまって出土している。さらにその下層は、調査区全体に砂層が厚く堆積しており、当地が旧河道上に位置していたことが想定される。また、縄文土器包含層中では、伏流水の跡を確認しており、旧河道の埋没後も水位が高かった状況が読み取れる。今回の調査では井戸かと考えられる土坑を検出していることからも、この状況を指示できる。

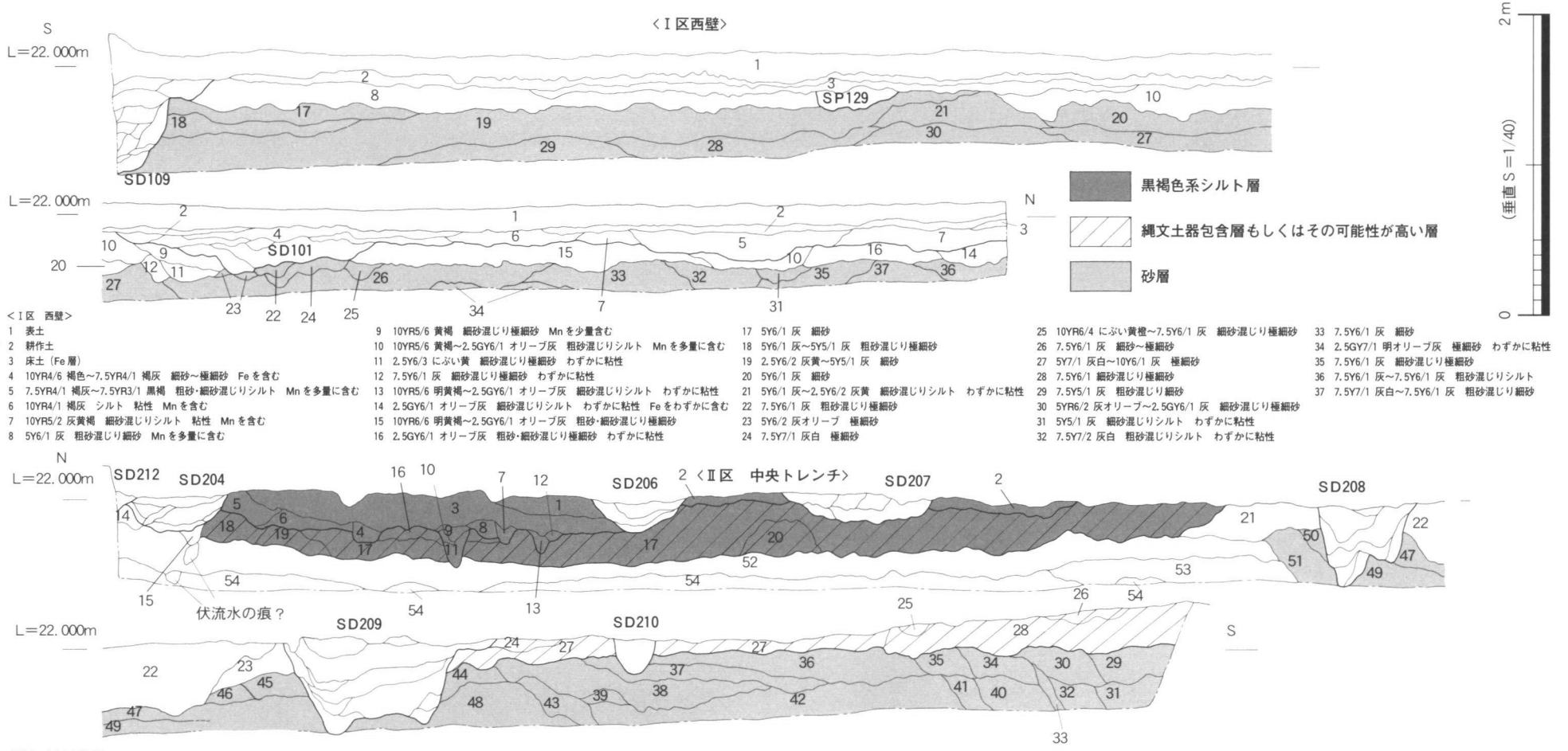
第３節　検出遺構・出土遺物

柱穴（第35・36図）

Ｉ区の北東部を中心に検出している（第58図参照）。黒褐色を呈する埋土と、灰白色を呈する埋土の２種類がある。出土遺物から、前者が弥生時代後期～古墳時代前期、後者が中世前半に所属する。いずれも現存深度が浅く、かなりの削平を受けているものと考えられる。

柱穴より出土した遺物のうち、５点を図示した(第36図)。１は磨消縄文土器で、縄文時代後期のものである。周辺より混入されたものとみてよいだろう。３は弥生土器広口壺の胴部。香東川下流域産（下川津Ｂ類）である。外面には、屈曲部より下半にわずかながら黒斑が認められる。断面に黒化層は認められない。５は弥生土器高杯脚部である。色調は香東川下流域産と同じである。断面には黒化層が認められる。７は土師器壺である。にぶい橙色を呈する。８は土師器椀。体部下半にはヨコナデが施されておらず、この部分が押し出し技法によって体部に成形されたものと考えられる。

上記出土遺物のうち、３・５は弥生時代後期中葉～後葉、7は古墳時代前期後葉(布留式中相～新



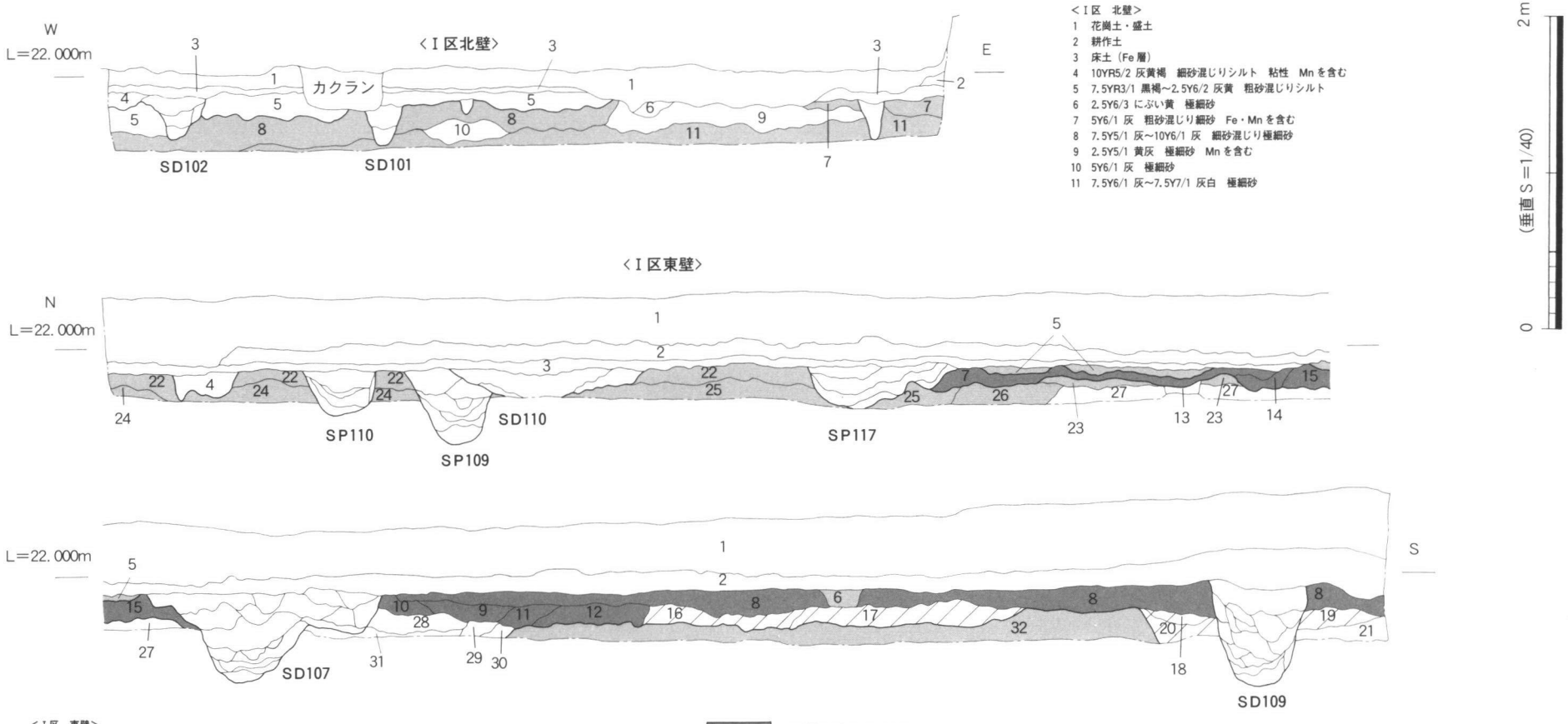
<Ⅰ区 西壁>

1 表土
2 耕作土
3 床土（Fe層）
4 10YR4/6 褐色～7.5YR4/1 褐灰 細砂～極細砂 Feを含む
5 7.5YR4/1 褐灰～7.5YR3/1 黒褐 粗砂・細砂混じりシルト Mnを多量に含む
6 10YR4/1 褐灰 シルト 粘性 Mnを含む
7 10YR5/2 灰黄褐 細砂混じりシルト 粘性 Mnを含む
8 5Y6/1 灰 粗砂混じり細砂 Mnを多量に含む
9 10YR5/6 黄褐 細砂混じり極細砂 Mnを少量含む
10 10YR5/6 黄褐～2.5GY6/1 オリーブ灰 粗砂混じりシルト Mnを多量に含む
11 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂混じり極細砂 わずかに粘性
12 7.5Y6/1 灰 細砂混じり極細砂 わずかに粘性
13 10YR5/6 明黄褐～2.5GY6/1 オリーブ灰 細砂混じりシルト わずかに粘性
14 2.5GY6/1 オリーブ灰 細砂混じりシルト わずかに粘性 Feをわずかに含む
15 10YR6/6 明黄褐～2.5GY6/1 オリーブ灰 粗砂・細砂混じり極細砂
16 2.5GY6/1 オリーブ灰 粗砂・細砂混じり極細砂 わずかに粘性
17 5Y6/1 灰 細砂
18 5Y6/1 灰～5Y5/1 灰 粗砂混じり極細砂
19 2.5Y6/2 灰黄～5Y5/1 灰 細砂
20 5Y6/1 灰 細砂
21 5Y6/1 灰～2.5Y6/2 灰黄 細砂混じりシルト わずかに粘性
22 7.5Y6/1 灰 粗砂混じり極細砂
23 5Y6/2 灰オリーブ 極細砂
24 7.5Y7/1 灰白 極細砂
25 10YR6/4 にぶい黄橙～7.5Y6/1 灰 細砂混じり極細砂
26 7.5Y6/1 灰 細砂～極細砂
27 5Y7/1 灰白～10Y6/1 灰 極細砂
28 7.5Y6/1 細砂混じり極細砂
29 7.5Y5/1 灰 粗砂混じり細砂
30 5YR6/2 灰オリーブ～2.5GY6/1 灰 細砂混じり極細砂
31 5Y5/1 灰 細砂混じりシルト わずかに粘性
32 7.5Y7/2 灰白 粗砂混じりシルト わずかに粘性
33 7.5Y6/1 灰 細砂
34 2.5GY7/1 明オリーブ灰 極細砂 わずかに粘性
35 7.5Y6/1 灰 細砂混じり極細砂
36 7.5Y6/1 灰～7.5Y6/1 灰 粗砂混じりシルト
37 7.5Y7/1 灰白～7.5Y6/1 灰 粗砂混じり細砂

<Ⅱ区 中央トレンチ>

1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
2 7.5YR4/4 褐 細砂混じりシルト
3 7.5YR3/1 黒褐 粗砂混じりシルト
4 7.5YR4/3 褐 粗砂混じりシルト わずかに粘性
5 7.5YR4/1 褐灰 粗砂混じりシルト
6 7.5YR4/1 褐灰～7.5YR4/2 灰褐 粗砂混じりシルト
7 7.5YR4/2 灰褐 粗砂～細砂混じりシルト
8 7.5YR4/2 灰褐 粗砂混じりシルト
9 7.5YR3/1 黒褐 粗砂混じりシルト 締まりやや悪い
10 7.5YR4/2 灰褐 細砂混じりシルト わずかに粘性
11 7.5YR4/2 灰褐～7.5YR4/1 褐灰 細砂混じりシルト
12 7.5YR4/3 褐 粗砂～細砂混じりシルト
13 7.5YR4/2 灰褐 粗砂～細砂混じりシルト わずかに粘性
14 2.5YR6/1 黄灰 粗砂～細砂混じり極細砂 わずかに粘性
15 5Y7/1 灰白 極細砂
16 7.5YR4/1 褐灰～7.5YR4/2 灰褐 粗砂混じりシルト
17 10YR4/3 褐 細砂混じりシルト わずかに粘性
18 2.5Y5/1 黄灰 粗砂混じり極細砂
19 2.5Y5/1 黄灰十7.5YR4/4 褐 粗砂混じり極細砂
20 2.5Y5/1 黄灰十7.5YR4/4 褐 粗砂混じり細砂
21 10YR5/3 にぶい黄褐色～7.5YR5/6 明赤褐 細砂混じりシルト
22 7.5YR5/6 明赤褐 粗砂混じり極細砂 わずかに粘性
23 5GY6/1 オリーブ灰 粗砂
24 2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じり細砂
25 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト
26 10YR5/1 褐灰 粗砂～細砂混じりシルト
27 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混じり細砂
28 10YR5/1 褐灰～7.5YR5/4 にぶい褐 粗砂混じりシルト
29 7.5YR5/6 明褐 粗砂～細砂混じり極細砂 わずかに粘性
30 7.5YR5/6 明褐～5Y5/1 灰 粗砂～細砂混じり極細砂
31 7.5YR5/6 明褐 細砂 わずかに粘性
32 2.5Y5/1 黄灰 細砂
33 2.5Y5/1 黄灰～7.5YR5/6 明褐 粗砂混じり細砂
34 5Y5/1 灰 粗砂混じり細砂
35 5Y5/1 灰～7.5YR5/6 明褐 粗砂混じり細砂
36 5Y6/1 灰 粗砂混じり細砂～極細砂
37 10YR5/2 灰黄褐 礫混じり粗砂～細砂
38 2.5Y5/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 わずかに粘性
39 2.5Y5/1 黄灰 極細砂
40 5Y5/1 灰 細砂混じり極細砂
41 5Y5/1 灰 粗砂混じり細砂
42 5Y5/1 灰 粗砂
43 5Y5/1 灰 粗砂混じり極細砂～シルト
44 5Y5/1 灰 粗砂混じり細砂
45 10Y5/1 灰 粗砂
46 10Y5/1 灰 粗砂混じり細砂
47 7.5YR5/6 明赤褐 細砂混じりシルト
48 5Y5/1 灰 粗砂
49 7.5YR6/8 橙 細砂混じりシルト
50 10YR5/3 にぶい黄褐～7.5YR5/6 明赤褐 細砂混じりシルト
51 10YR5/3 にぶい黄褐 粗砂混じりシルト
52 5YR6/1 灰～7.5YR6/6 橙 極細砂
53 7.5YR6/6 橙 極細砂 粘性
54 10YR6/1 灰 細砂混じり極細砂 わずかに粘性

第31図　Ⅰ区西壁・Ⅱ区中央トレンチ土層断面図

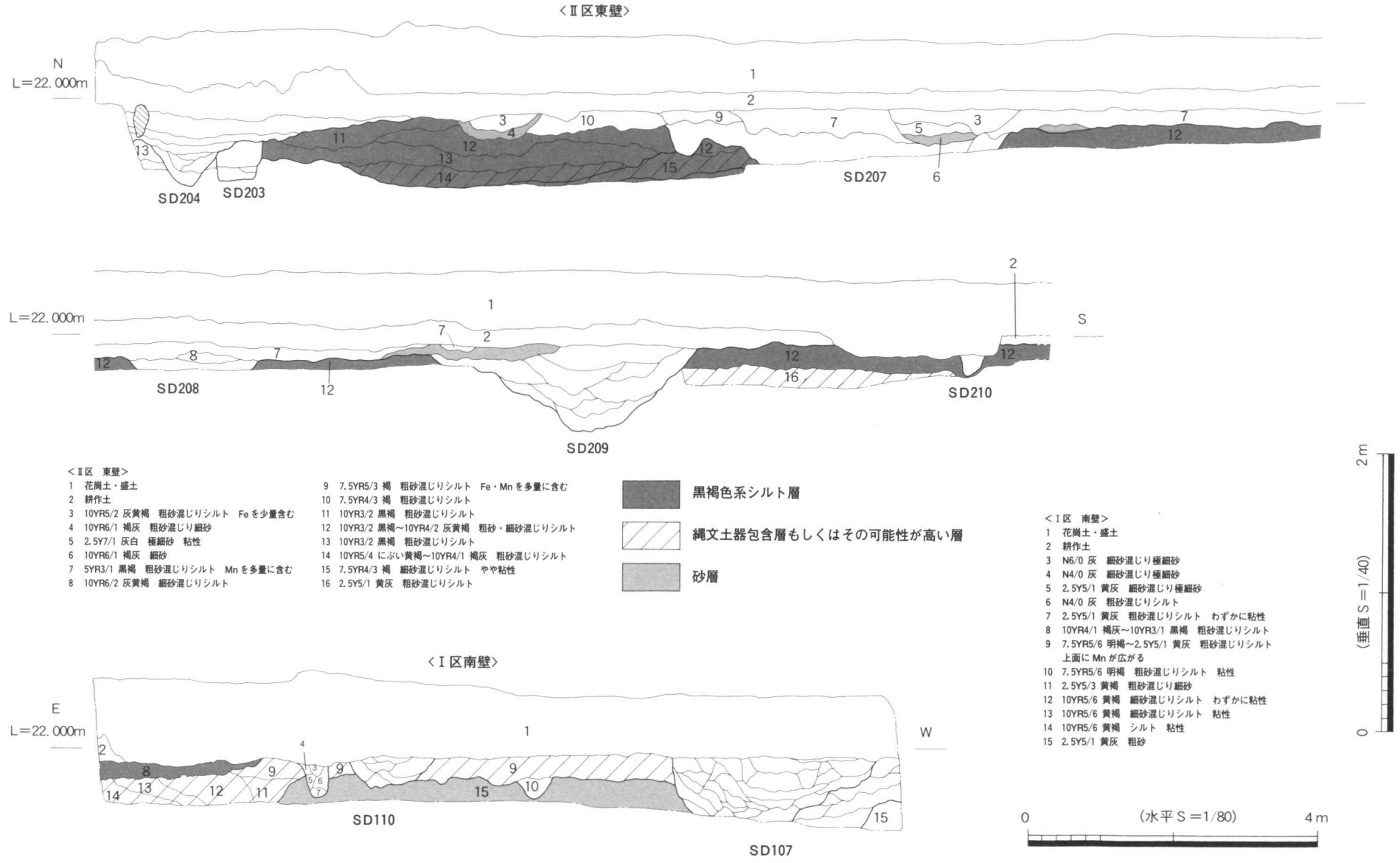


〈I区 北壁〉
1 花崗土・盛土
2 耕作土
3 床土（Fe層）
4 10YR5/2 灰黄褐 細砂混じりシルト 粘性 Mnを含む
5 7.5YR3/1 黒褐～2.5Y6/2 灰黄 粗砂混じりシルト
6 2.5Y6/3 にぶい黄 極細砂
7 5Y6/1 灰 粗砂混じり細砂 Fe・Mnを含む
8 7.5Y5/1 灰～10Y6/1 灰 細砂混じり極細砂
9 2.5Y5/1 黄灰 極細砂 Mnを含む
10 5Y6/1 灰 極細砂
11 7.5Y6/1 灰～7.5Y7/1 灰白 極細砂

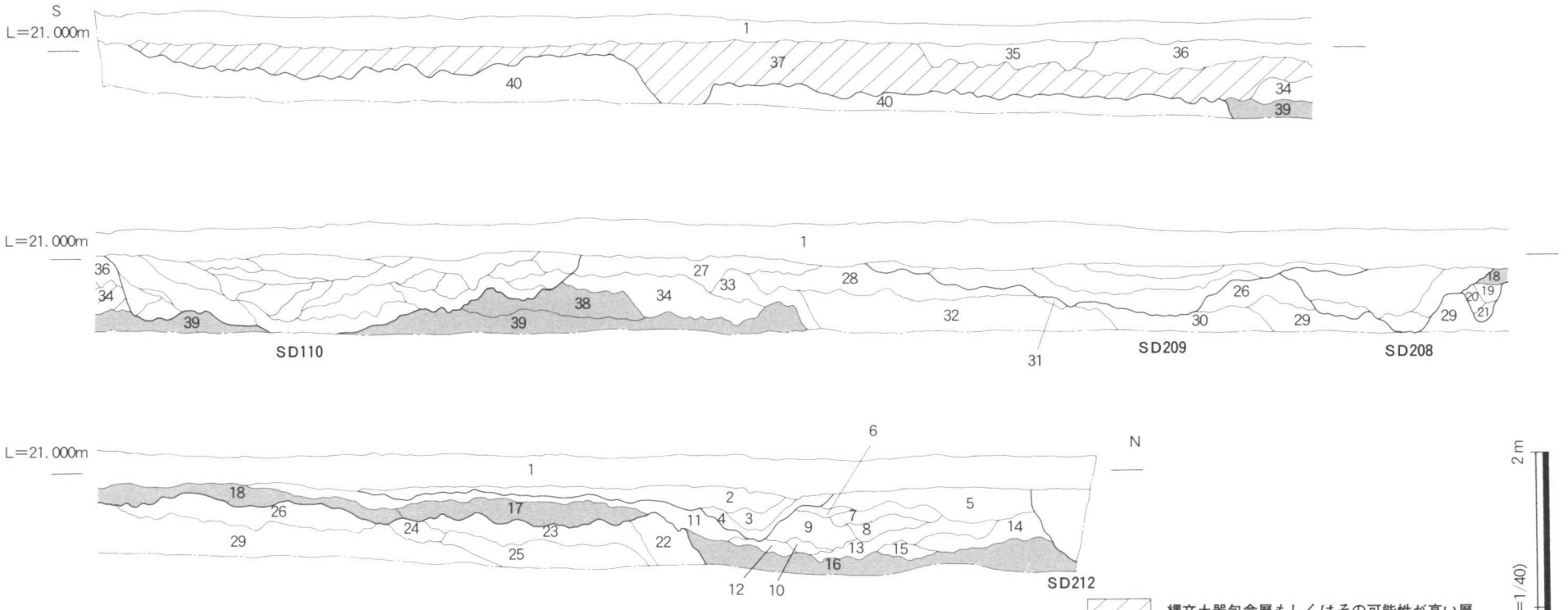
〈I区 東壁〉
1 花崗土・盛土
2 耕作土
3 床土（Fe層）
4 2.5Y7/1 灰白 極細砂 やや粘性 Fe・Mnを少量含む
5 2.5Y5/1 黄灰 細砂 Feを少量含む
6 5Y6/1 灰 粗砂混じり細砂 Feを少量含む
7 10YR3/1 黒褐～10YR4/1 褐灰 細砂混じりシルト わずかに粘性
8 10YR5/1 褐灰 粗砂混じりシルト Fe・Mnを少量含む
9 N5/0 灰 細砂混じりシルト 粘性
10 N5/0 灰 細砂混じりシルト わずかに粘性
11 N5/0 灰 粗砂混じりシルト わずかに粘性
12 10YR5/1 褐灰 粗砂混じり細砂 わずかに粘性
13 10YR4/1 褐灰 シルト
14 10YR4/1 褐灰 細砂混じりシルト 粘性
15 10YR4/1 褐灰 細砂混じり極細砂 わずかに粘性
16 2.5Y5/1 黄灰～10Y5/6 黄褐 粗砂混じりシルト
17 2.5Y5/1 黄灰 粗砂混じりシルト わずかに粘性
18 N5/0 灰～5Y6/1 灰 細砂混じりシルト
19 10YR5/1 褐灰 粗砂混じりシルト Fe・Mnを少量含む
20 10YR5/6 黄褐～N5/0 灰 粗砂混じりシルト 粘性
21 5Y6/1 灰 粗砂混じり細砂 Fe・Mnを含む
22 5Y6/1 灰 粗砂混じり細砂 Fe・Mnを含む
23 5Y5/1 灰 粗砂 粘性
24 5Y6/1 灰 粗砂混じり細砂 Mnを少量含む
25 5Y5/1 灰 粗砂混じり細砂 Mnを少量含む
26 10YR5/1 褐灰～7.5YR5/8 黄褐 粗砂混じりシルト 粘性
27 7.5YR5/6 明褐 細砂混じりシルト 粘性
28 7.5YR6/8 橙 細砂混じりシルト 粘性
29 5Y4/1 灰 粗砂 粘性
30 5Y5/1 灰 粗砂 粘性
31 7.5YR5/8 明褐 シルト 粘性
32 7.5Y5/1 灰 粗砂混じり細砂

黒褐色系シルト層
縄文土器包含層もしくはその可能性が高い層
砂層

第32図　I区北壁・I区東壁土層断面図

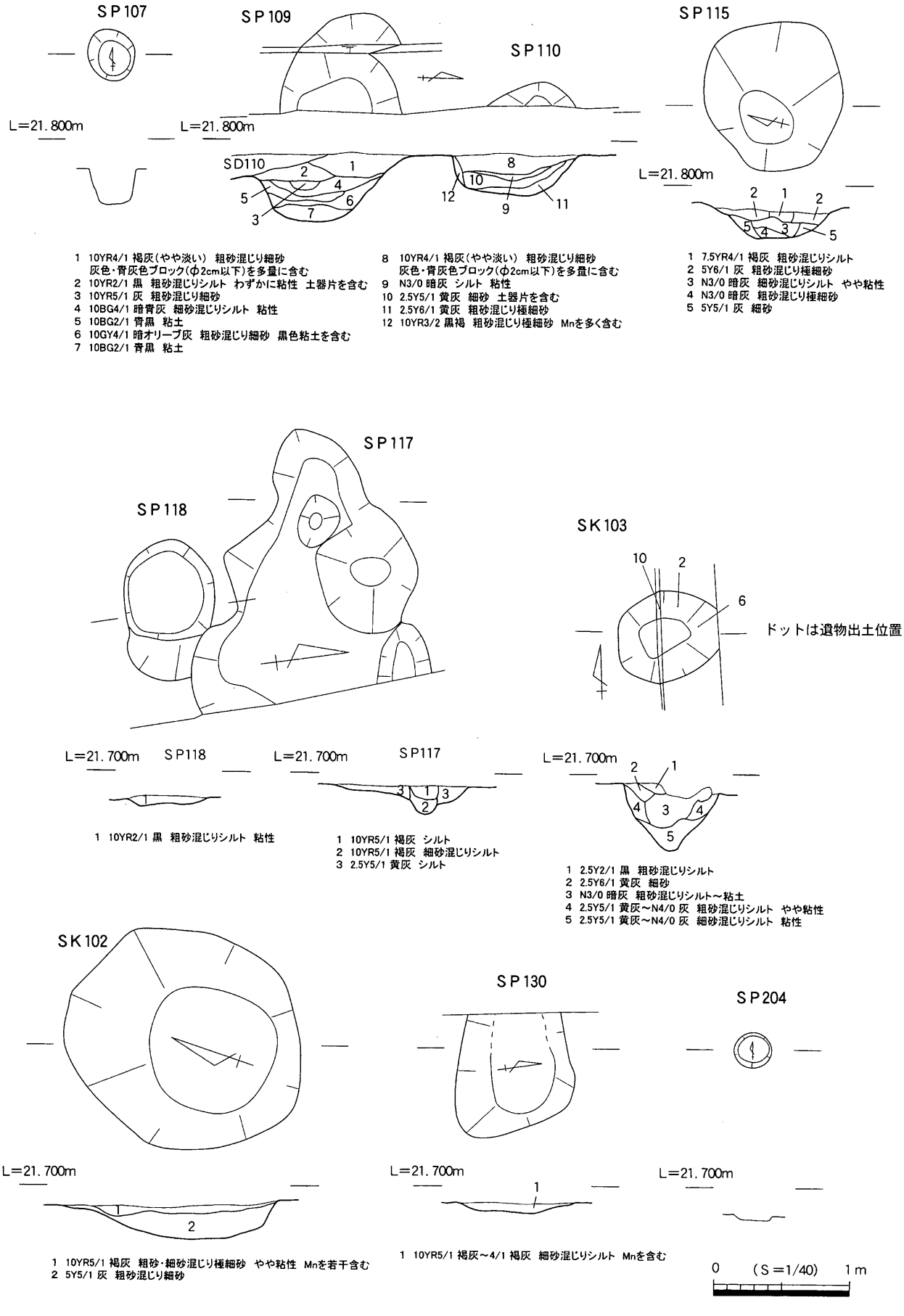


第33図　Ⅱ区東壁・Ⅰ区南壁土層断面図

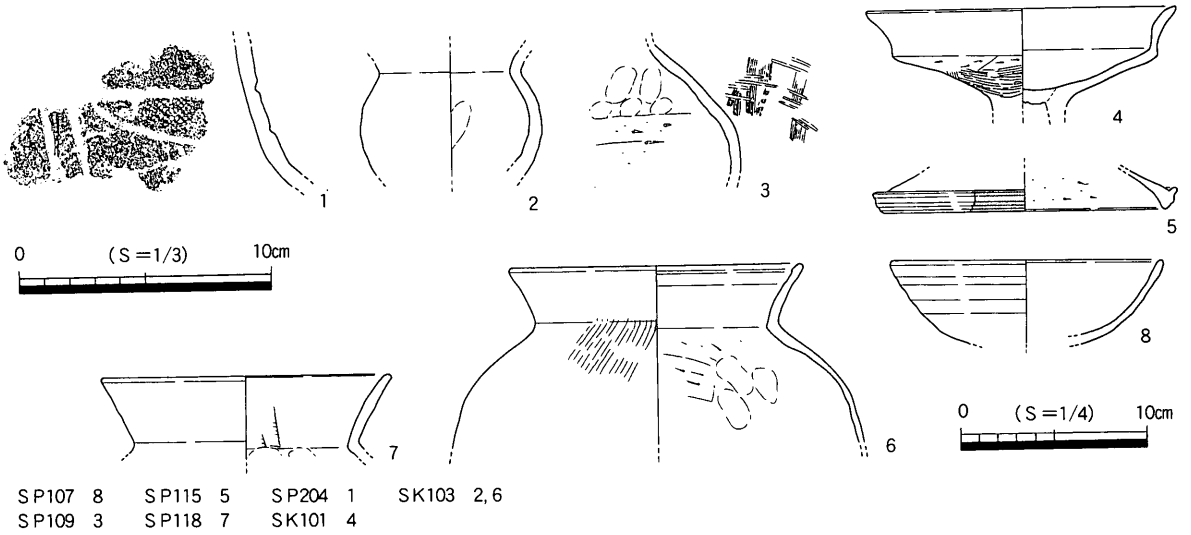


1 表土
2 10YR5/1 褐灰 細砂混じりシルト Fe・Mnが上面に薄く広がる
3 10YR4/1 褐灰～10YR3/1 黒褐 細砂
4 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト やや粘性
5 7.5YR4/3 褐 粗砂混じりシルト Feを多量に含む
6 2.5Y6/1 灰白 細砂～粗砂
7 5Y5/6 明赤褐 細砂混じりシルト Fe・Mnを多量に含む
8 5Y5/6 明赤褐 細砂混じりシルト Feを多量に含む
9 2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じり細砂 Mnが斑点状に薄く広がる
10 10Y6/1 灰 細砂
11 2.5Y6/1 黄灰～2.5Y7/1 灰白 粗砂混じり細砂～極細砂 Mnが斑点状に薄く広がる
12 5Y5/1 灰 粗砂混じり細砂～極細砂
13 10YR5/1 褐灰～2.5GY6/1 オリーブ灰 極細砂 Feを斑点状に多量に含む
14 2.5GY6/1 オリーブ灰～2.5GY7/1 明オリーブ灰 細砂混じり極細砂
15 N4/0 灰 粘土
16 7.5Y6/1 灰 粗砂混じり細砂
17 2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 Fe・Mnを少量含む
18 10YR5/1 褐灰 粗砂混じりシルト Mnを斑点状に多量に含む
19 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
20 2.5Y5/1 黄灰 粗砂混じり細砂
21 10YR5/1 褐灰 細砂混じりシルト
22 7.5YR4/4 褐 粗砂混じり極細砂 締まり良い
23 2.5Y6/1 黄灰 粗砂 Feを少量含む
24 10YR6/1 褐灰 極細砂
25 2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じり細砂
26 10YR5/6 黄褐 粗砂混じりシルト Mnを含む
27 7.5YR5/6 明褐 細砂混じりシルト
28 7.5YR5/6 明褐 シルト Mnを多量に含む
29 2.5Y6/1 黄灰 粗砂
30 2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じり細砂
31 10YR5/6 黄褐 細砂混じりシルト
32 10YR5/6 黄褐 細砂混じりシルト 粘性
33 5Y6/1 灰 粗砂混じり細砂 Mnを多量に含む
34 5Y6/1 灰 粗砂混じり細砂 Mnを含む
35 2.5Y6/1 黄灰 シルト Mnを多量に含む
36 10YR6/6 明黄褐 シルト～極細砂 Mnを多量に含む
37 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルト～極細砂 Mnを少量含む
38 5Y6/1 灰 粗砂混じり極細砂 Mnを少量含む
39 10YR5/1 褐灰 粗砂
40 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト～極細砂 粘性 Feが薄く広がる

第34図　Ⅱ区西壁土層断面図



第35図　柱穴・土坑平面図・断面図



第36図　柱穴・土坑出土遺物実測図

相)、８は12世紀中葉～13世紀初頭に消費された遺物と考えられる。

土坑（第35・36図）

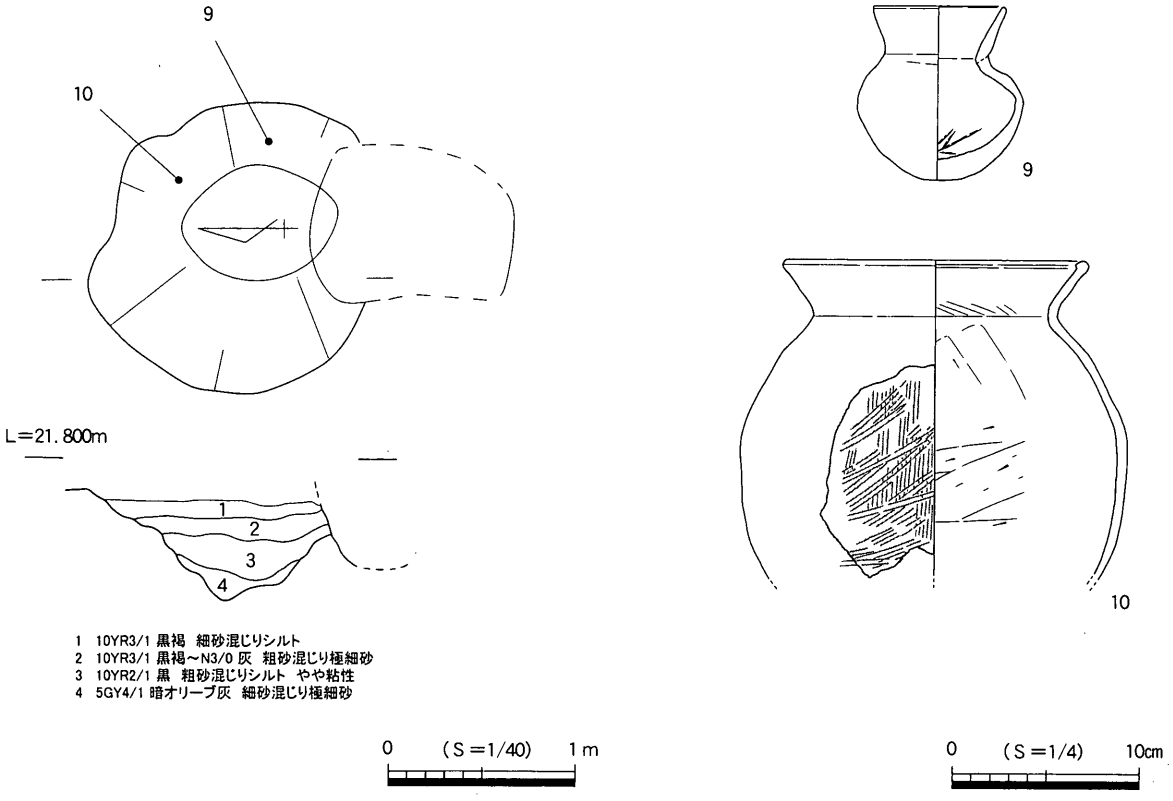
土坑としているが、平面形およびその規模・断面形および掘削深度や、残存率の高い遺物がまとまって出土するなど、後述するＳＥ101と共通する部分が多い。したがって、これら土坑も井戸跡である可能性が高いと考える。いずれも溝跡（ＳＤ102・105）が埋没した後に、それぞれの溝跡を切り込んで掘り込まれている。

Ⅱ区北側では、伏流水の痕跡を確認している（第31図参照)。この伏流水の標高は、検出された各土坑・井戸跡の掘削深度とほぼ同じか、やや上に位置しており、調査地近辺の地下水位の高さを示唆していると考えられる。これら土坑が井戸跡であることを想定できるならば、井戸跡の廃絶時には土器をまとめて投棄するという行為が通常化していた状況が読み取れる。

なお、各土坑の掘削時にも湧水が顕著であったため、土層断面図が不完全となってしまったことを断っておく。特に、ＳＫ102は、調査時にはＳＤ102であると認識したため、この土坑より出土した遺物がＳＤ102出土遺物と混入している可能性が高い。

出土遺物は、ＳＫ101より１点（４)、ＳＫ103より２点を図示した（２・６)。なお、ＳＫ103より出土した土師器甕の破片（10）は、ＳＥ101出土のものと接合したため、ＳＥ101にて報告している。４は香東川下流域産（下川津Ｂ類）の高杯である。摩滅が著しいが、内面には分割ヘラミガキが施されていたとみてよい。シャモットと思われる幅２～４㎜程度の褐色粒を多く含む。２は土師器小形丸底壺である。白色～にぶい橙色を呈する。６は土師器甕である。白色～淡い橙色を呈する。胴部の断面には薄い黒化層が認められる。10と同一個体の可能性を考慮すべきだが、口縁端部の形状や、口縁部の厚みおよび長さにおいてやや違和感を覚える。

上記出土遺物のうち、４は弥生時代後期中葉頃、２・６は古墳時代前期後葉（布留式中～新相）に消費された遺物である。ただし、４を出土したＳＫ101は、弥生時代後期後葉に埋没したと考えられるＳＤ102を切り込んでいる。よって、４は混入したものと考え、ＳＫ101の主たる存続時期を弥生時代終末期と仮定しておく。また、ＳＫ102より出土した可能性が高い遺物（第39図27～29、第40図30～35）は、弥生時代終末期のものであり、この頃に廃絶したものと考える。ＳＫ103は上記出土遺物にしたがって、古墳時代前期後葉に廃絶したものと考えられる。



第37図　ＳＥ101平面図・断面図及び出土遺物実測図

井戸跡（第37図）

井戸跡である可能性が高い遺構として、ＳＥ101を検出した。また、前述の通り、各土坑も井戸跡である可能性が高い。各土坑と同様、湧水が著しかったため、底付近の掘り方の形状は不確かなものである。

出土遺物は２点を図示した（９・10）。このうち、10はＳＫ103出土遺物と接合している。９は土師器小形丸底壺である。にぶい橙色を呈する。内外面ともに摩滅が著しい。10は土師器甕で、白色を呈する。口縁端部内側の肥厚は、ヘラ状工具を押し当てることで成形している。

上記出土遺物は、古墳時代前期後葉（布留式中～新相）に消費された遺物である。したがって、ＳＥ101は、この時期に廃絶したものと考えられる。

溝跡

ＳＤ101・102・104・106（第38～40図）

Ｉ区西側で検出された南北方向の溝跡群である。特筆すべきはＳＤ102で、他のものより現存深度が深く、かつ、断面形が箱形もしくは逆台形を呈する。ただし、このような状況は全検出部分の北半部においてであり、南半部は他の溝跡と近い状況を呈している。したがって、他の溝跡についても、調査区外の部分で上記のような断面形を呈している可能性がある。

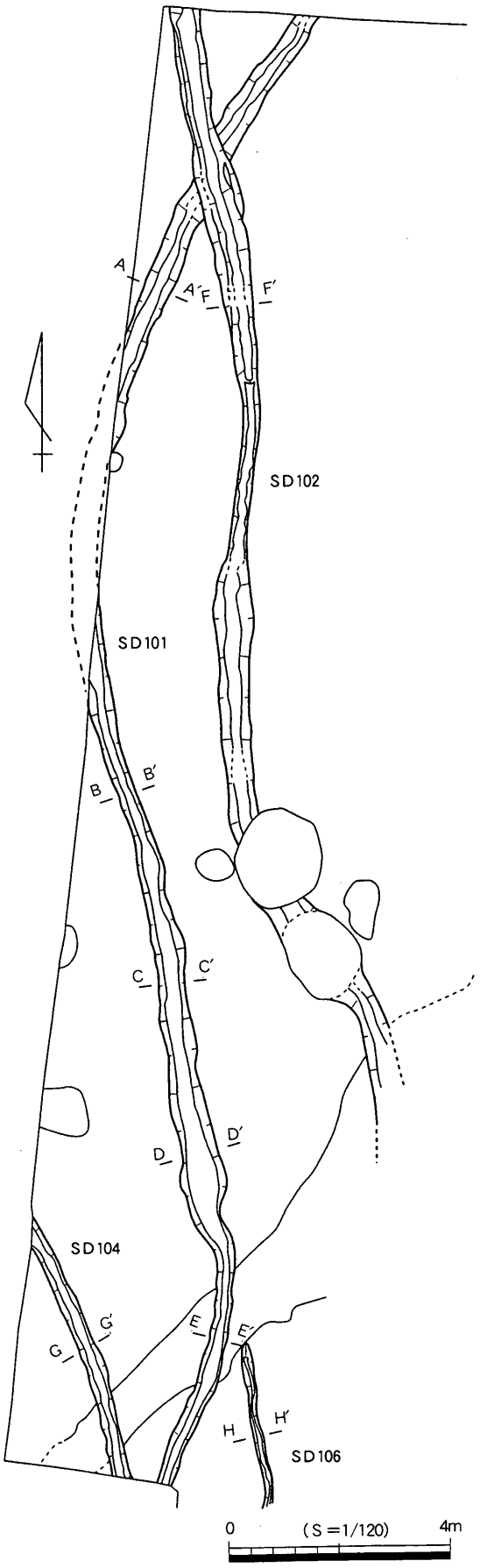
出土遺物は、ＳＤ101より２点、ＳＤ102より30点を図示した（第39・40図）。ただし、先述の通り、ＳＤ102出土遺物の中には、ＳＫ102出土のものが確実に混入している。このうち、残存率の高い高杯（27～29）は、ＳＫ102の位置にて、ＳＤ102の現存深度よりさらに深い位置よりまとまって出土している。つまり、ＳＫ102の底付近より出土したものであり、ＳＫ102出土遺物と断定できる。また、27～29に本来伴っていたと考えられる高杯脚部のうち31・32は、ＳＫ102およびその近辺で出土

していることから、SK102出土遺物である可能性が高い。一方、同じく残存率の高い小形鉢（37・38）は、SD101との交差地点のやや南側で出土しており、SK102出土遺物混入品と確実に区別されるものである。甕17～20も小形鉢37・38付近で出土していることから、同様のことが言えよう。

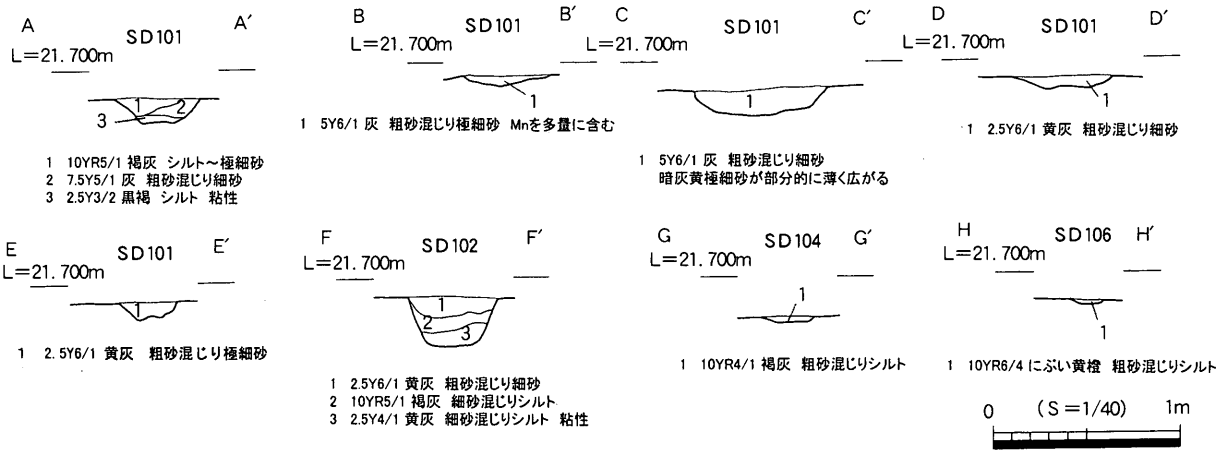
11は弥生土器壺の口頸部、13・14・16は底部および体部である。このうち、11は香東川下流域産（下川津Ｂ類）であり、16もその可能性がある。13・14は白色～淡い橙色を呈するものである。14の断面には薄い黒化層が認められる。17～21は弥生土器甕の口縁部および胴部、15・23・24は底部および胴部である。これらのうち、15、18～21は香東川下流域産であり、断面に黒化層は認められない。一方、17は白色～淡い橙色を呈するものであり、断面にはかなり薄い黒化層が認められる。26～29は弥生土器高杯の杯部、30～35は脚部である。いずれも香東川下流域産のものである。胎土中にはシャモットの可能性のある幅１～３㎜程度の褐色粒が散見される。12・22・25・37・38は弥生土器小形鉢である。ただし、22・25がやや小形の甕である可能性を否定するものではない。このうち、底部が突出しているもの（12・22・25）は淡い橙色を呈し、突出しないもの（37・38）はにぶい白色～橙色を呈する。黒化層は12・25・38に認められる。なお、37の外面に認められる黒班はかなり薄くなっており、消失しかかっている状況である。39は鉢である。内面はにぶい白色、外面は橙色を呈する。36は小形丸底壺である。にぶい白色～橙色を呈する。

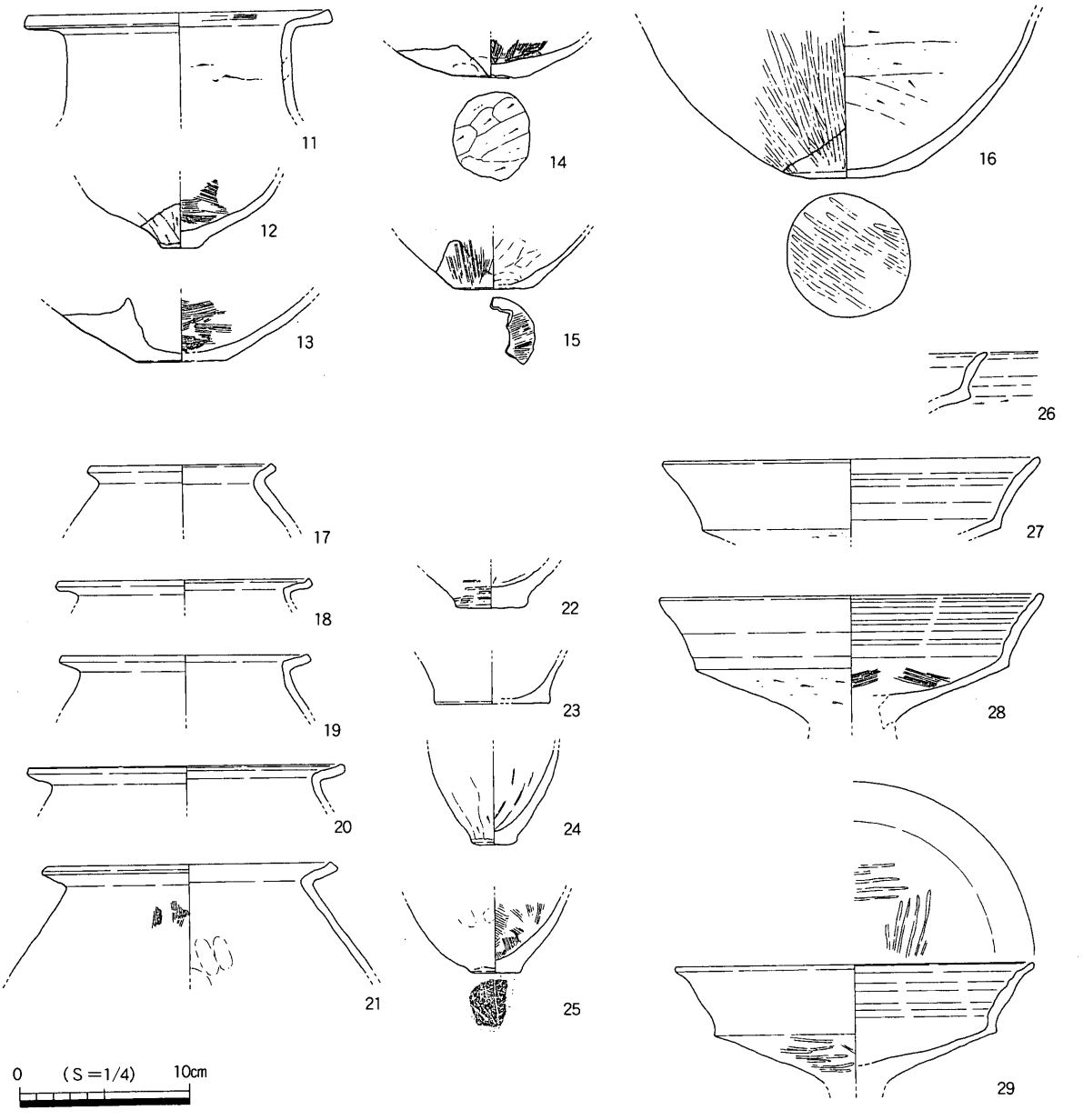
40はSD101出土、サヌカイト製の石鏃未製品である。素材の背面側には自然面を、腹面側にはポジティブな剥離面を多く残す。41はSD101出土、サヌカイト製の楔形石器である。下端部には複数の階段状剥離痕が認められ、正面と背面には剪断面が認められる。42はSD102出土、サヌカイト製の楔形石器の削片である。上・下両端部には複数の階段状剥離痕が認められる。

上記出土遺物のうち、SK102出土遺物とみられ

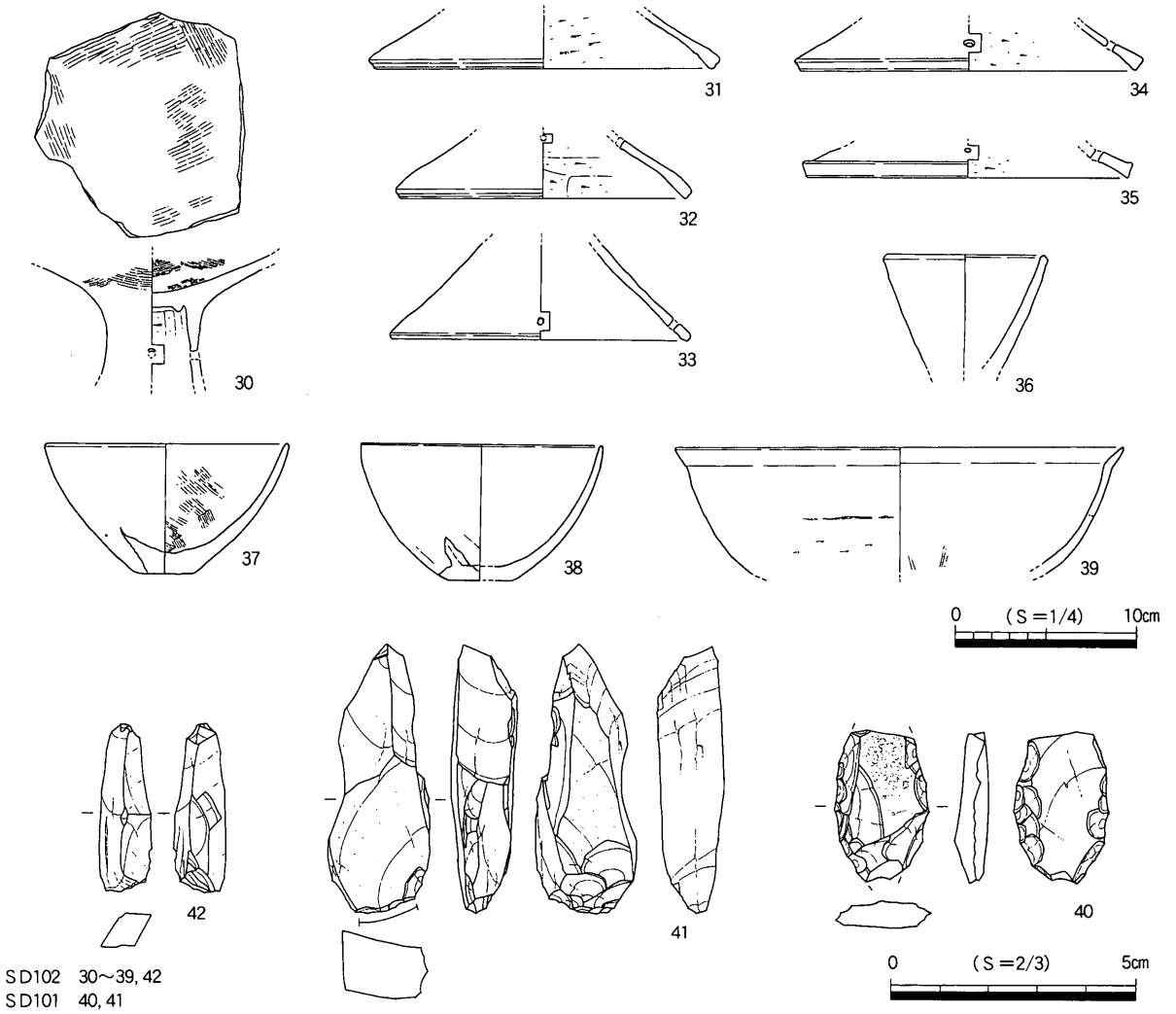


第38図　SD101・102・104・106平面図





第39図　SD101・102・104・106断面図及びSD102出土遺物実測図①



第40図　SD102出土遺物実測図②及びSD101出土石器実測図

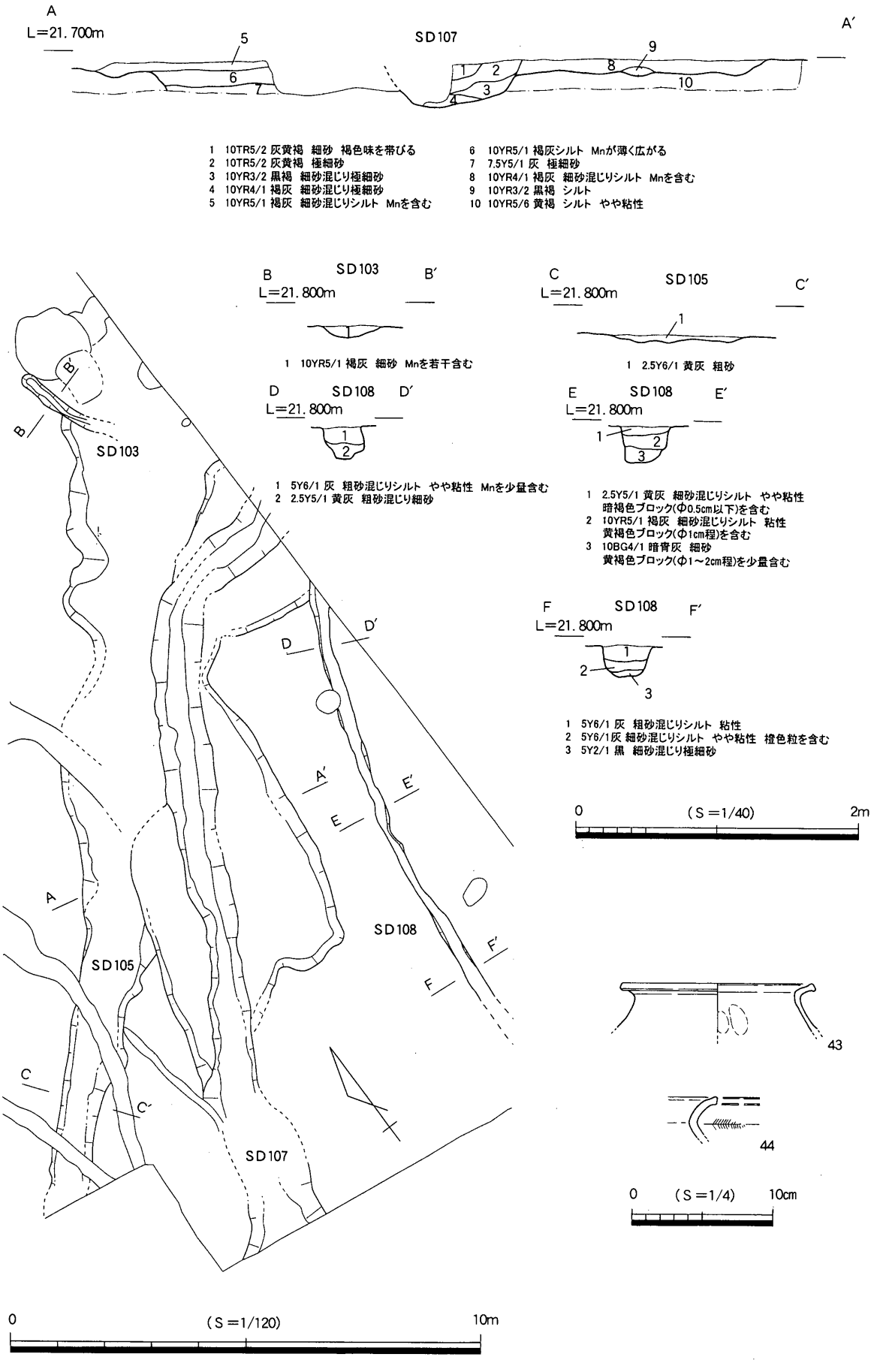
る27～29は弥生時代終末期、SD102より確実に出土している37・38は弥生時代後期後葉に消費された遺物であり、廃絶時期を示すものと考える。また、SD101はSD102に先行することから、弥生時代後期中葉頃に機能および廃絶したものと仮定しておく。

SD103・105・107・108（第41図）

Ⅰ区東南側で検出された溝跡群である。このうち、SD108は先述したSD102と同様、断面形が箱形もしくは逆台形を呈するものであり、部分的には土圧のためにオーバーハングしている箇所も見られる。遺物は出土しなかったが、SD102と近い時期に、SD102と同様の機能を有していたものと想定できる。なお、SD108はⅡ区で検出されたSD203に続いている可能性が高い。

SD105は切り合い関係から見て、Ⅰ区で検出された溝跡の中では最も古い時期に形成されたものと考えられる。その大部分はSD107に付随する浅い落ち込みと同化しており、土層上の区別もほとんどつかない。SD107はこの浅い落ち込みを切り込んで掘削されている。断面形は逆台形を呈するが、埋土・規模からみてSD102・108とは区別されるべきものと考える。また、この状況から、本来SD105のような断面形皿形の溝跡を掘りなおして、SD107が形成された可能性があげられる。

出土遺物はSD107およびSD107に付随する浅い落ち込みより、計２点を図示した。43は香東川下流域産の甕であり、浅い落ち込みより出土している。44はSD107より出土した弥生土器甕であり、白色～淡い橙色を呈する。



第41図　SD103・105・107・108平面図・断面図及びSD107出土遺物実測図

上記出土遺物はいずれも破片で、かつ、出土点数も少ないため、SD107の厳密な時期比定の根拠とするのはやや困難であると考える。周辺の状況からみて、弥生時代後期後葉～古墳時代前期の時間幅の中で、機能および廃絶したものと仮定しておく。また、SD105からは時期を示す遺物は出土していないが、切り合い関係を考慮して弥生時代後期中葉以前に機能していたものと推定する。SD108は、SD102と同様の機能が想定されることから、弥生時代後期後葉およびその前後に機能していたものと推定する。

SD201～203（第42図）

いずれも削平を受け、現存深度が浅く、遺物出土量も極わずかである。ただし、前述の通り、SD203はⅠ区で検出された断面形箱形を呈するSD108につながるものと想定される。

出土遺物は3点を図示した。45は縁帯文土器で、縄文時代後期中葉のものである。周辺では黄褐色シルト層（基盤層）上面および層中より縄文土器が多数出土しており、混入したものとみなせる。49は弥生土器甕の底部かと思われる。

52はSD203出土、サヌカイト製の凹基式の石鏃である。

SD203は上記の状況から、弥生時代後期後葉およびその前後の時期幅で位置づけておく。SD201・202は厳密な時期比定が困難であるが、周辺の状況から弥生時代後期頃に機能および廃絶したものと仮定しておく。

SD205～207（第42図）

SD205より枝分かれして、SD206・207が派生する。SD206とSD207には時期差が想定されるが、SD205の部分において層上の区別はできなかった。なお、これらの溝跡は縄文時代後期の土器がまとまって出土した落ち込みを切り込んで形成されている。

出土遺物は、計7点を図示している。このうち、46～48は縄文後期の土器で、46は縁帯文土器、47は磨消縄文土器、48は刻目突帯文土器である。50は弥生時代前期の甕。これらは上記の落ち込みに伴う土器が混入したものとみなせる。51は須恵器杯蓋。外面では、ニス状の降灰による暗灰色を呈する部分と、重ね焼きによって露胎した白灰色を呈する部分がまだらに認められる。

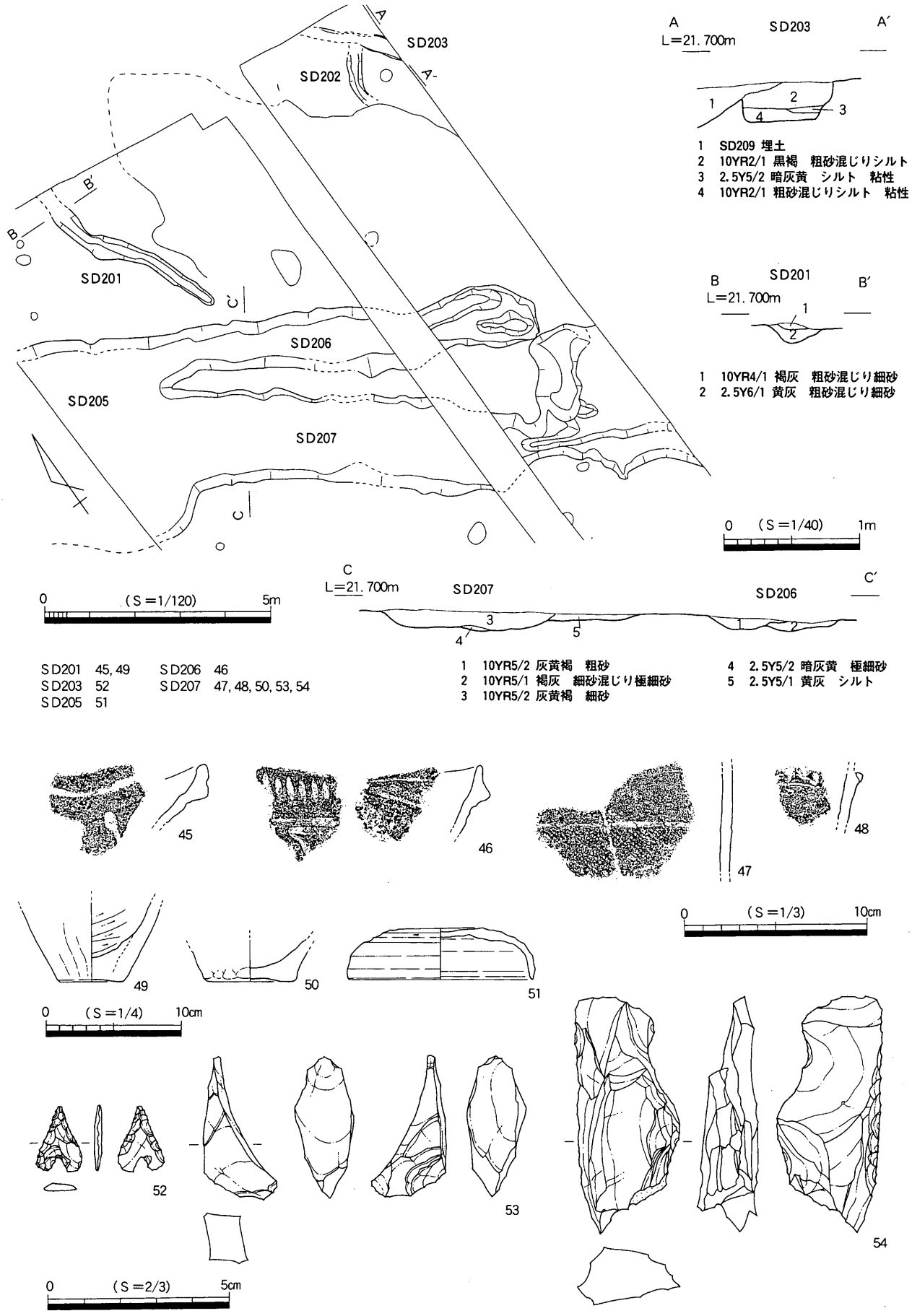
53はSD207出土、サヌカイト製の楔形石器の削片である。下端部には複数の階段状剥離痕が認められ、上端部からの加撃による剪断面が認められる。54はSD207出土、サヌカイト製の石核である。打面調整後不整形な横長状の剥片を剥離している。なお、側縁部には小刻みな直線状の調整が認められ、最終的には削器として転用したものと考えられる。

上記出土遺物のうち、51は6世紀末葉頃に消費された遺物である。しかし、同様の時期を示す資料が他にない。また、SD205～207とほぼ同じ方向で形成されているSD208～210においても、出土遺物が示す時期は弥生時代前期～中期である。したがって、51のみでSD205～207の時期を判定するには、なお問題が残ると考える。よって、これらの時期比定については今後の調査に委ねたい。

SD208～210（第43・44図）

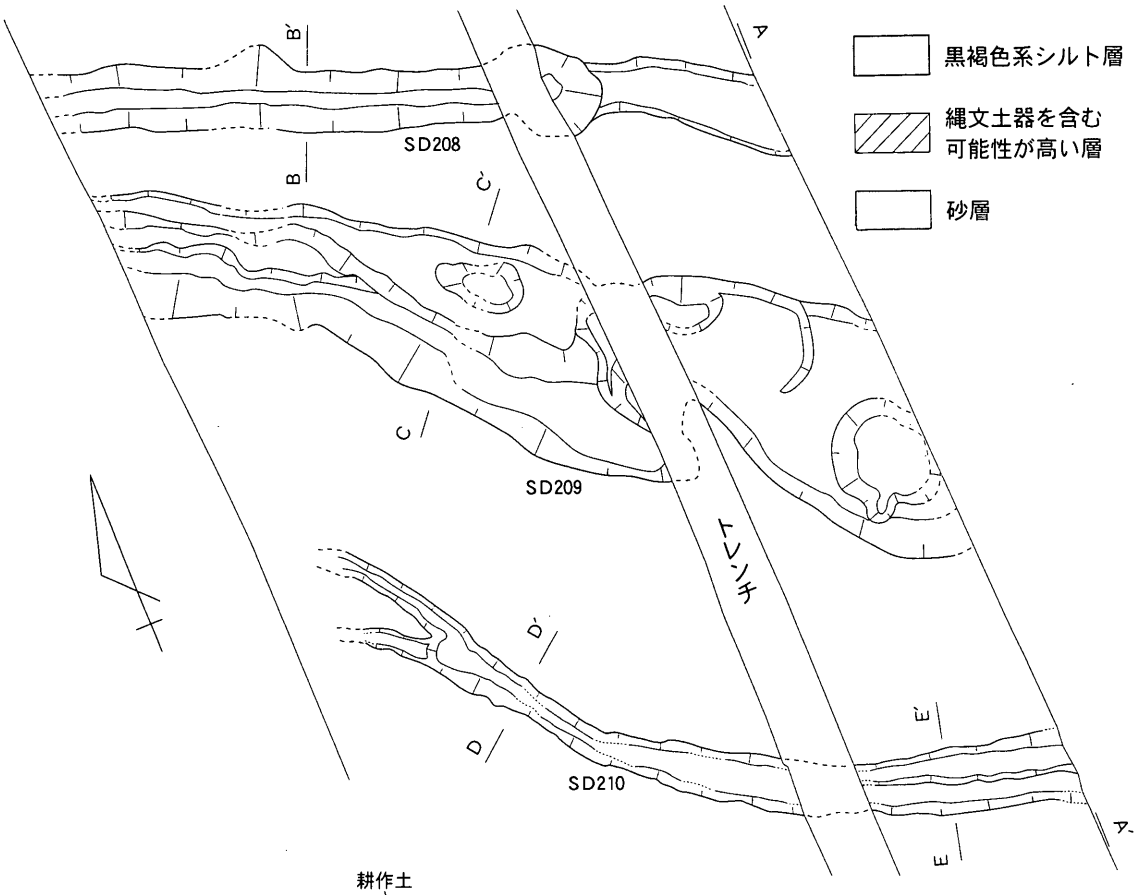
SD205～210とほぼ同じ方向に形成された溝跡群である。このうち、SD209はかなり凹凸が著しいが、これは湧水によるものだと考えられる。SD208でもその可能性を示唆する深い落ち込みが1箇所確認されている。SD210は西端で二股に分かれており、そこで極端に浅くなっている。

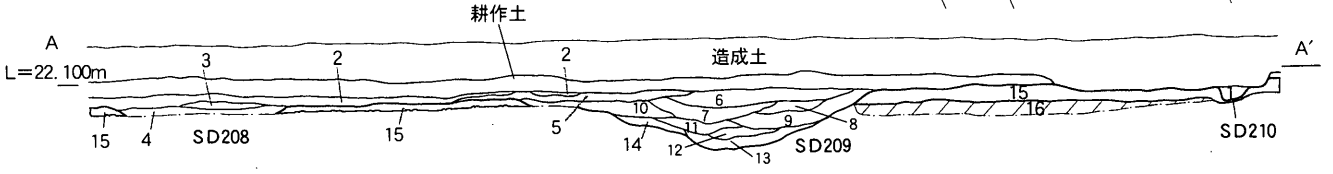
出土遺物は、9点を図示した。55～59は弥生土器甕の底部である。ただし、56は壺である可能性を否定しない。いずれも摩滅が著しいが、56については器表面の砂粒が沈んでいることから、ヘラ



SD201 45, 49　SD206 46
SD203 52　SD207 47, 48, 50, 53, 54
SD205 51

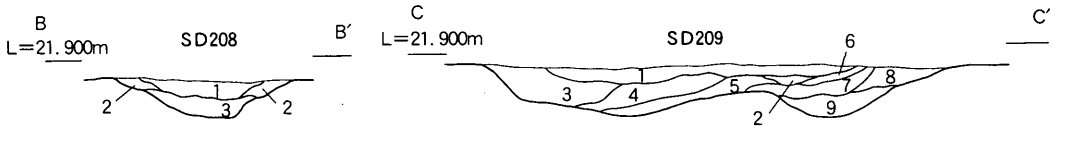
第42図　ＳＤ201～203・205～207平面図・断面図及び出土遺物実測図





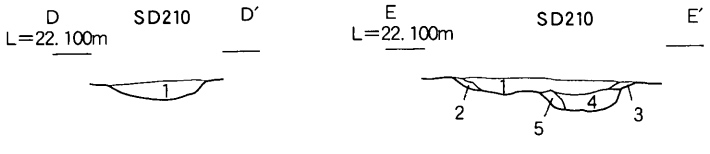
1 10YR4/1 褐灰 細砂混じりシルト
2 10YR4/2 灰黄褐 粗砂・細砂混じりシルト
3 10YR6/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
4 10YR4/1 褐灰 シルト
5 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～細砂 Mnを若干含む
6 2.5Y5/3 黄褐 粗砂混じり細砂 Mnを若干含む
7 7.5YR5/1 褐灰 粗砂混じりシルト やや粘性 茶褐色粒を多く含む
8 10YR5/1 褐灰 粗砂混じりシルト 茶褐色粒を多く含む
9 7.5YR4/1 褐灰 粗砂混じりシルト 締まりやや悪い
10 10YR5/1 褐灰 粗砂混じりシルト
11 N3/0 灰 粗砂混じりシルト 粘性
12 N3/0 灰 粗砂混じりシルト やや粘性
13 10YR3/1 黒褐 粘土
14 2.5Y4/1 黄灰 粗砂混じり細砂
15 10YR3/2 黒褐～10YR4/2 灰黄褐 粗砂・細砂混じりシルト
16 2.5Y5/1 黄灰 粗砂混じりシルト

0 (S=1/80) 5m



1 7.5YR3/2 黒褐 粗砂混じりシルト やや粘性
2 N5/0 灰 粗砂混じりシルト
3 N5/0 灰 細砂混じり極細砂 やや粘性

1 7.5YR4/2 灰褐 粗砂混じりシルト
2 2.5Y6/1 黄灰 細砂混じりシルト 灰褐色ブロック（φ2cm程度）を含む
3 10YR3/2 黒褐 粗砂混じりシルト やや粘性
4 3にほぼ同じ ただし、砂粒を多く含む
5 2.5Y6/1 黄灰 細砂混じり極細砂
6 10YR6/1 褐灰 シルト 粘性 褐色粒を含む
7 5Y6/1 灰 粗砂混じり細砂
8 5Y6/1 灰 細砂混じり極細砂
9 5Y5/1 灰 粗砂混じり細砂

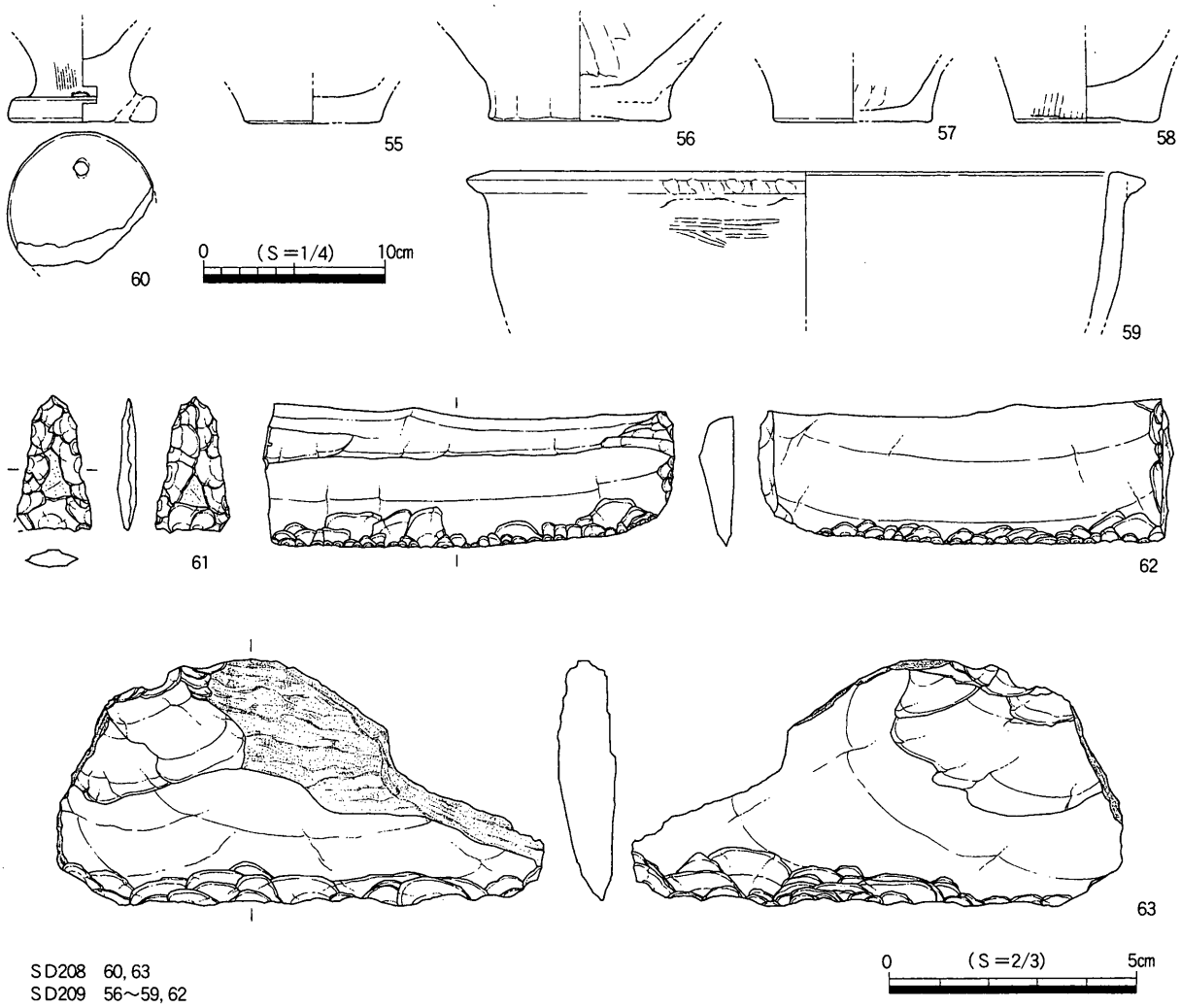


1 10YR5/1 褐灰 細砂混じりシルト

1 10YR3/1 黒褐 粗砂混じりシルト 茶褐色粒を含む
2 N4/0 灰 粗砂混じりシルト
3 N4/0 灰 細砂混じりシルト
4 10YR3/1 黒褐～2/1 黒 粗砂混じりシルト わずかに粘性
5 10YR2/1 黒 粗砂混じり極細砂

0 (S=1/40) 2m

第43図 SD208～210平面図・断面図



SD208 60, 63
SD209 56～59, 62
SD210 55, 61

第44図　SD208～210出土遺物実測図

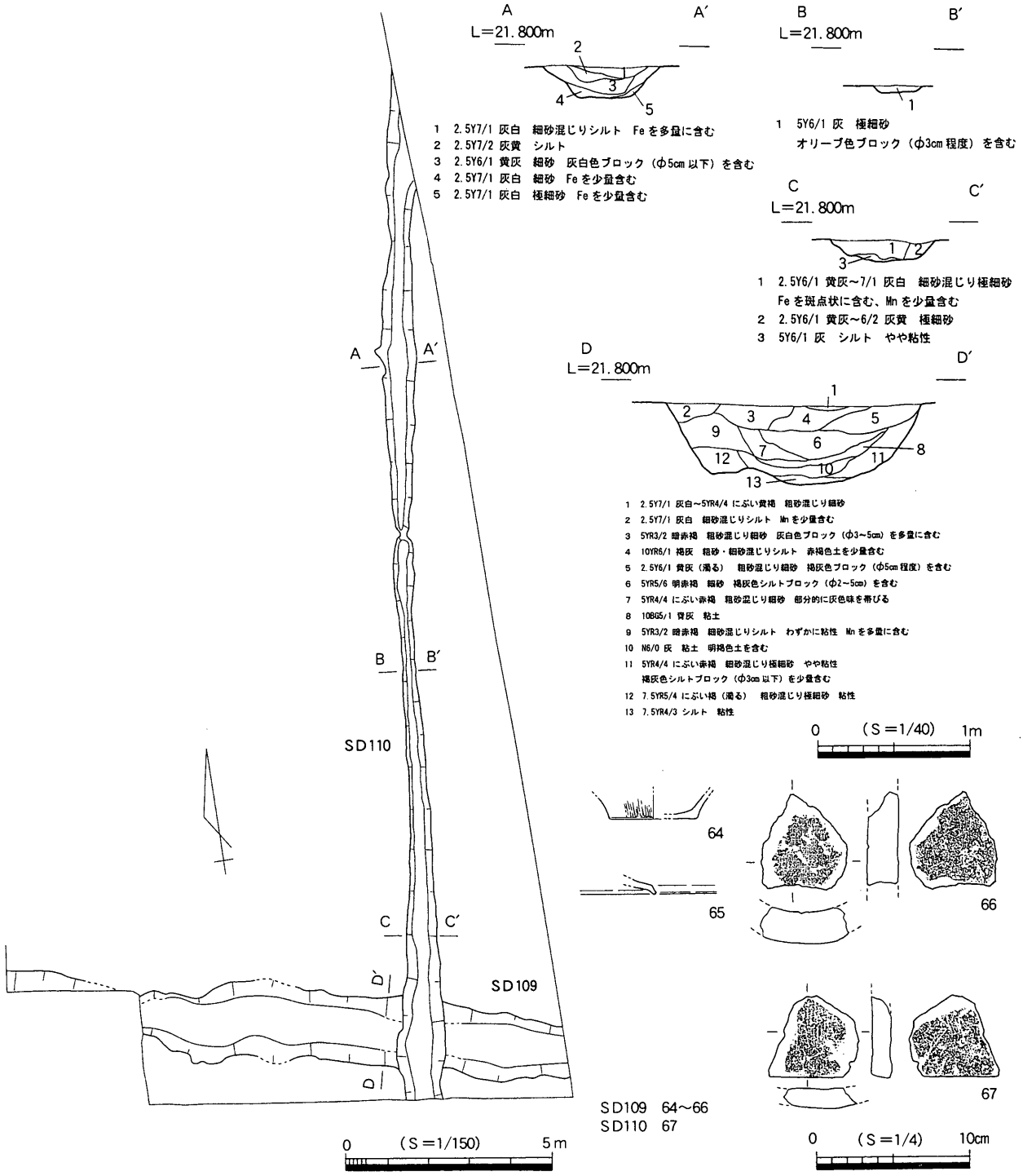
ミガキを施しているのは確実である。ただし、底部外面には施されていない。59は弥生土器甕もしくは鉢。口縁部端に貼り付けられた突帯の下側には、板状工具の先端が押圧されたような圧痕がある。おそらく、ヘラミガキの前に胴部外面に施されたタテハケの痕跡であろう。60は弥生土器甕もしくは鉢の底部かと思われる。底部は円盤状を呈し、穿孔しており、類例の少ない資料と考える。56同様、底部外面以外はヘラミガキを施しているものと考える。

61はSD210出土、サヌカイト製の平基式の石鏃である。62はSD209出土、サヌカイト製の削器である。横長状の剥片を素材に用い、刃部には表・裏両面より調整を施し、直線状で鋭いエッジを形成している。63はSD208出土、サヌカイト製の削器である。肉厚な横長状の剥片を素材に用い、刃部には表・裏両面より調整を施しているが比較的粗雑な階段状の剥離痕である。

上記出土遺物は、いずれも弥生時代前期～中期前葉の所産である。ただし、SD208～210の存続時期については、SD205～207同様、慎重に検討する必要があろう。

SD211（第58図）

調査時には明瞭に区別できなかったが、SX202を切り込んで形成されたものと考える。極めて浅く、遺物も出土しなかったため詳細は不明である。主軸はほぼ正方位となる。

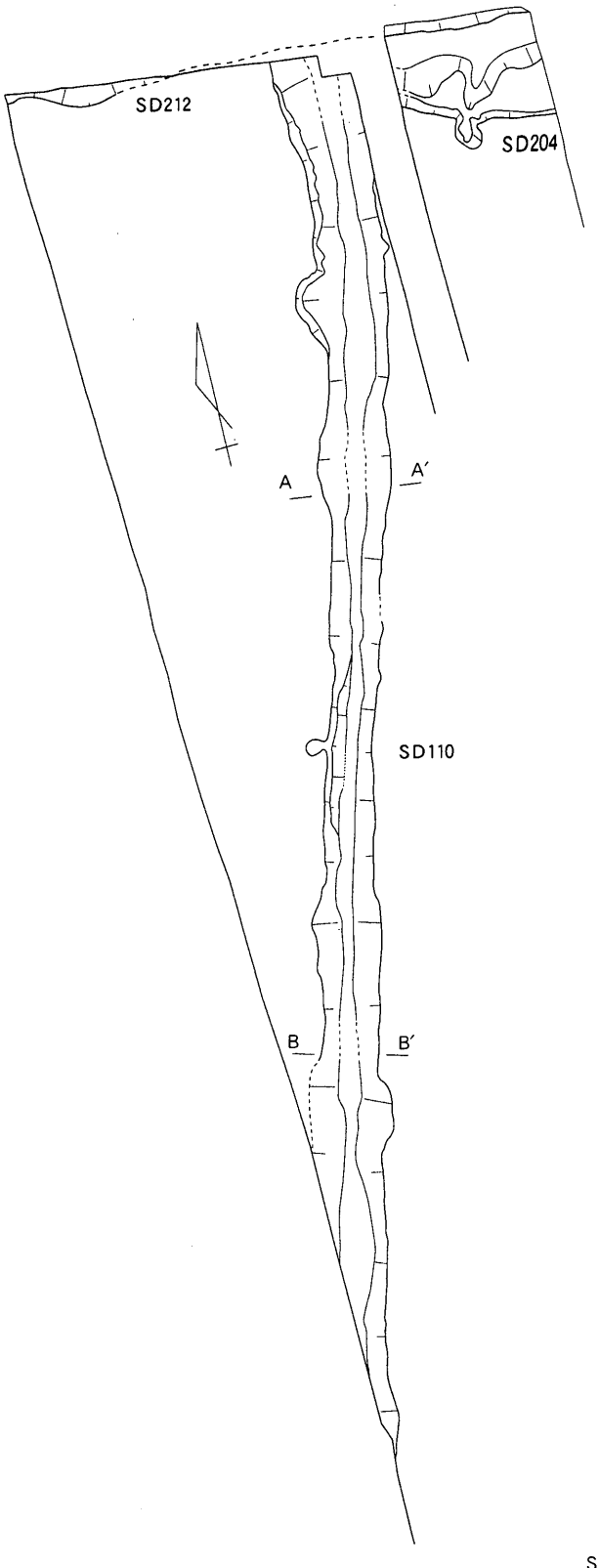


第45図　SD109・110平面図・断面図及び出土遺物実測図

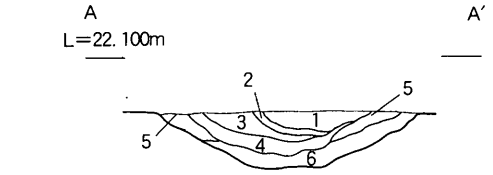
SD109・110・204・212（第45～47図）

いわゆる条里溝である。東西溝であるSD109・212は現存する条里型地割の坪界線に一致している。一方、南北溝であるSD110は、今回の調査地より1町南で現存する南北方向の地割に一致している。ただ、当遺跡周辺では条里型地割の縦軸の復原自体が容易ではないため、SD110が条里型地割に一致するかどうかは、慎重に検討していく必要がある。

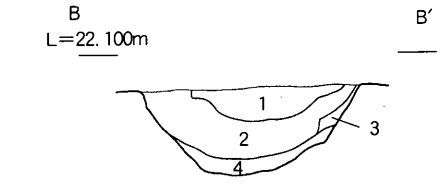
これらの先後関係については、SD109→SD110、SD204→SD212であることを切り合いから確



0 (S=1/150) 5m



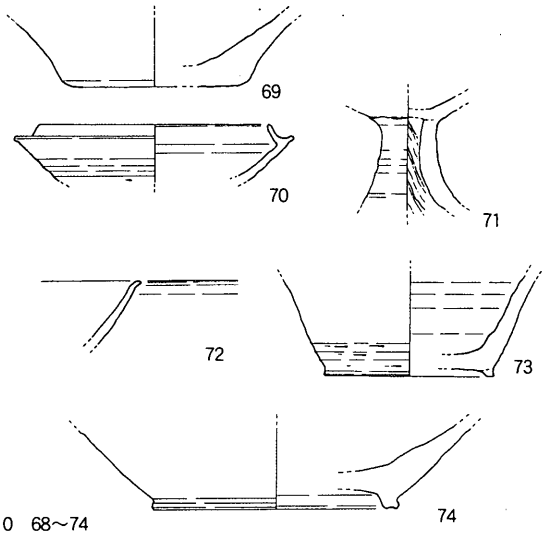
1 10YR7/1 灰白 細砂混じりシルト 橙色ブロック(φ3～4cm)を含む
2 2.5Y7/1 灰白 シルト
3 10YR6/2 灰黄褐 粗砂混じり細砂
4 10YR5/3 にぶい黄褐 粗砂混じり細砂 灰白色極細砂ブロック(φ3cm程)を含む
5 10YR7/1 灰白 細砂混じりシルト 橙色粒を少量含む
6 2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 わずかに粘性 橙色粒を含む



1 2.5Y8/1 灰白 砂混じりシルト 茶褐色ブロック(φ5cm程)を少量含む
2 10YR3/1 黒褐+2.5Y7/2 灰黄 細砂混じりシルトブロック
3 2.5Y6/1 黄灰 シルト
4 2.5Y5/1 黄灰粘土 Feを少量含む

0 (S=1/40) 1m

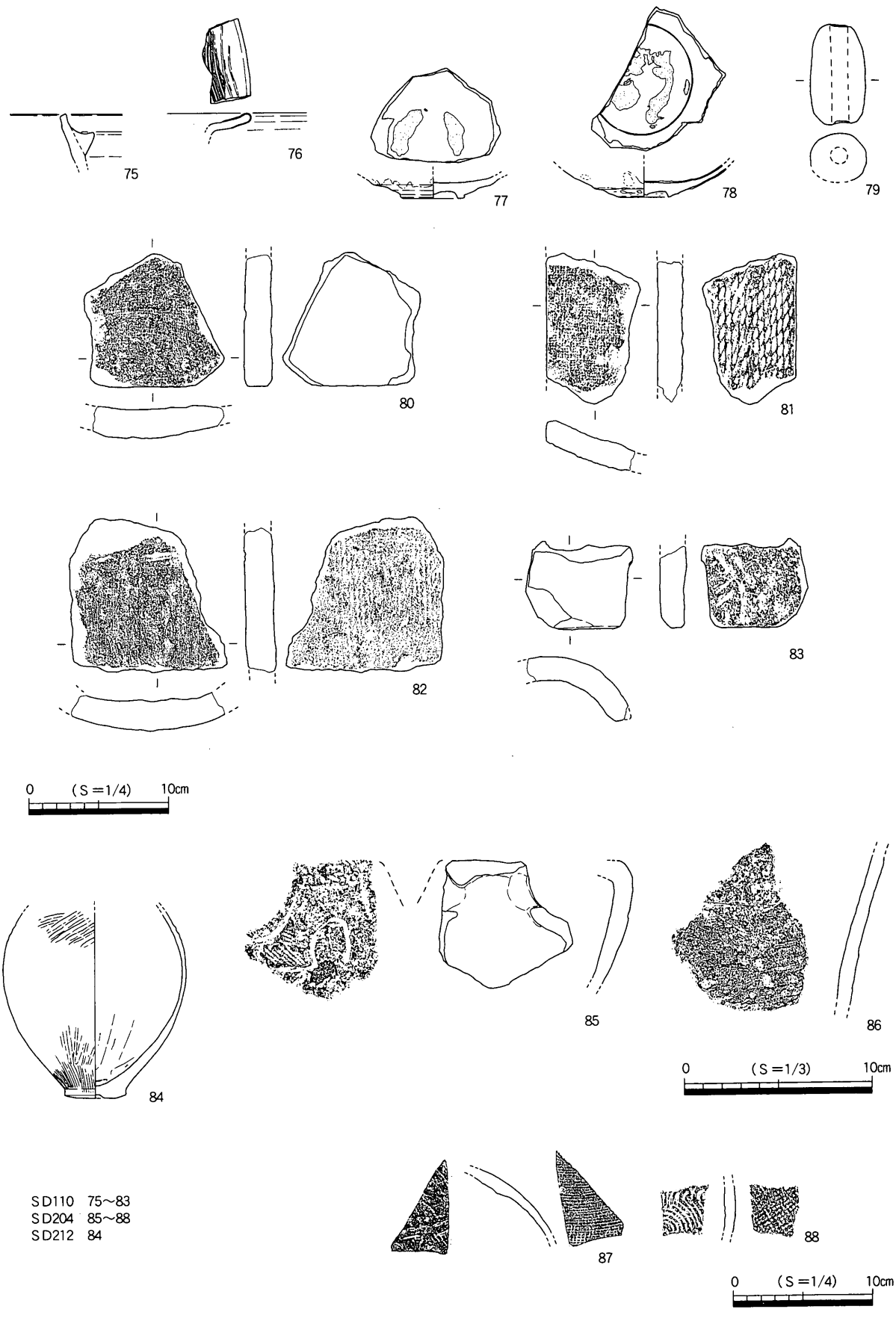
0 (S=1/3) 10cm



SD110 68～74

0 (S=1/4) 10cm

第46図 SD110・204・212平面図・断面図及び出土遺物実測図①



SD110 75～83
SD204 85～88
SD212 84

第47図　SD110・204・212出土遺物実測図②

認している。

出土遺物は、SD110出土のものを中心に21点を図示した。68・85・86は縄文時代後期の土器である。69は弥生土器壺の底部、64・84は弥生土器甕である。70は須恵器杯身、71は須恵器高杯。70が青灰色を呈する良好堅緻なものであるのに対して、71は灰白色を呈する焼成不良の軟質である。72は須恵器椀、73・74は須恵器壺の底部である。両者の断面には、赤みを帯びた胎土が、器表面側５㎜程度の厚さで、層状に認められる。87・88は須恵器甕。75は土師器足釜の鍔部。76～78は陶器であり、このうち、77・78は肥前系の皿である。79は土師質の管状土錘。66・67、80～82は平瓦片、83は丸瓦片である。

これらの出土遺物のうち、77・78は17世紀前葉頃に消費された遺物であり、SD110の埋没時期を示唆しているものと考えられる。また、SD109・110は、土層の観察より、最終的には意図的に埋められたことが確認できている。一方、掘削時期については、72～74が８世紀後半～９世紀頃に消費された遺物であり、可能性としてはこの時期に求められる。しかし、70・71などと同様、混入品である可能性も否定できない状況であり、なお慎重に検討しなければならない課題が多い。SD109・204・212についても、その存続時期を詳細に検討することは困難である。

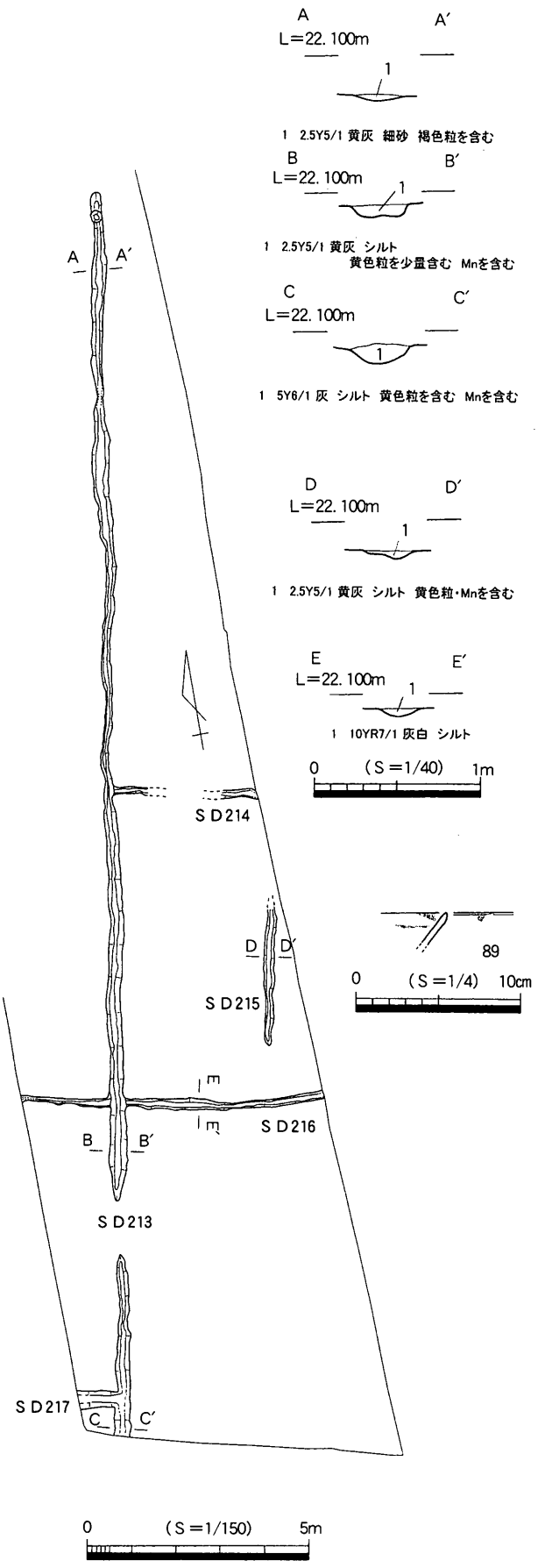
SD213～217（第48図）

前述の条里溝と同様、高松平野で通有の条里型地割とほぼ同じ主軸方位の溝跡群である。これらは現存深度が浅く、出土遺物もごく微量であるため、詳細は不明である。前述の条里溝との先後関係も明らかにできない。

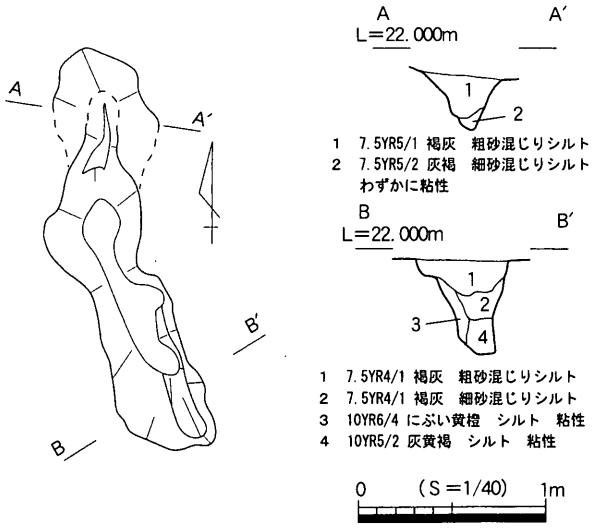
出土遺物は須恵器杯身の口縁部（89）を１点図示した。

性格不明遺構

不定形の土坑４基を性格不明遺構と位置づ



第48図　SD213～217平面図・断面図及びSD213出土遺物実測図

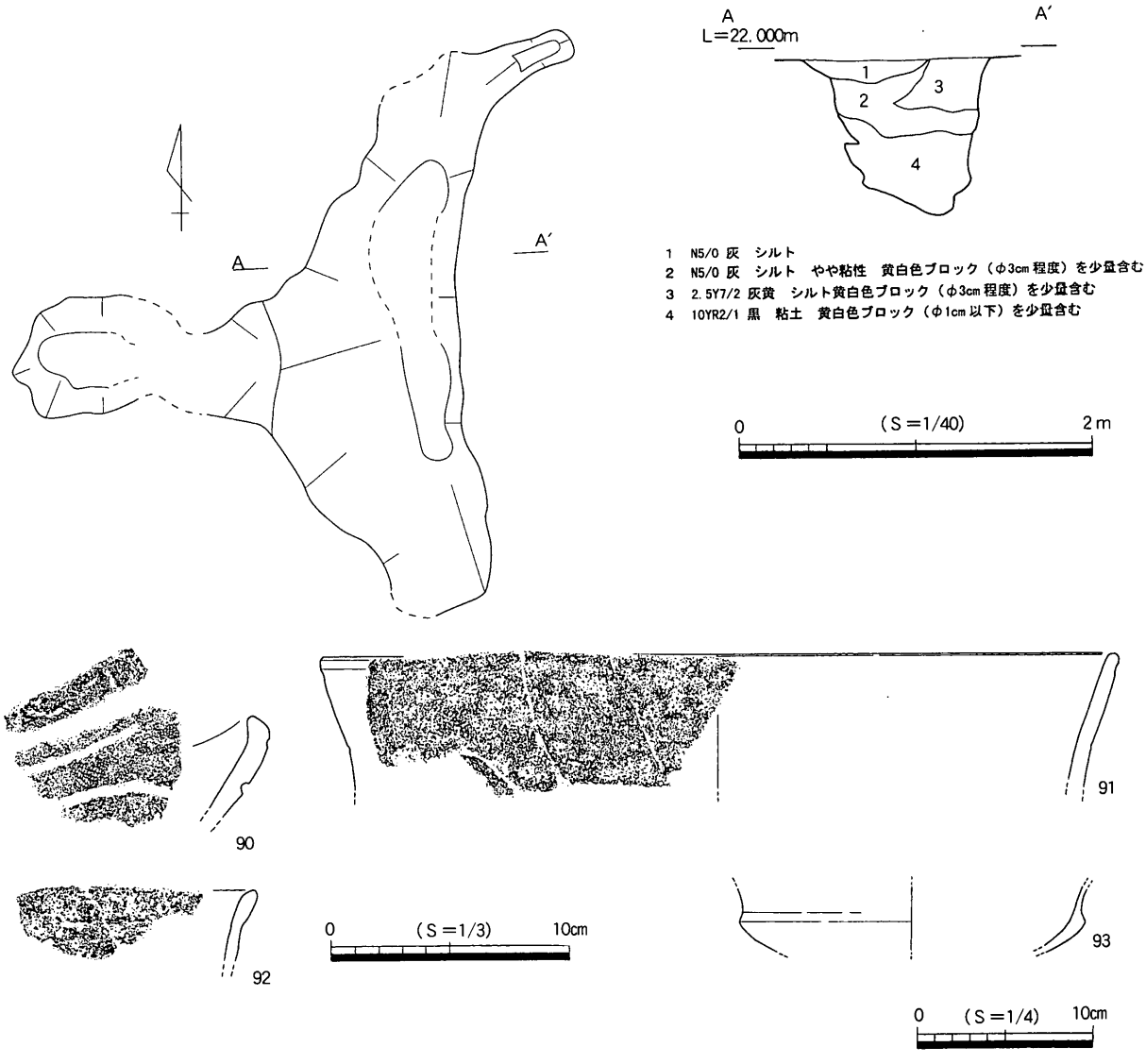


第49図　ＳＸ201平面図・断面図

けたが、その形状には人為的な意図が読み取れない。自然の営為によるもの、特に風倒木痕の可能性を想定している。これらのうち、ＳＸ202からは、縄文時代後期の土器ともに、多量の石器類が出土し、ＳＸ203からは、平縁無文深鉢が出土している（第57図）。したがって、これらは縄文時代後期頃に形成された風倒木痕であると位置づけておく。

SX202（第50～56図）

縄文時代後期の土器とともに、多量の石器が出土している。弥生時代後期前葉～中葉の高杯が１点出土しているが、これはＳＸ202を切り込んで形成されたＳＤ210に本来伴う遺物



第50図　ＳＸ202平面図・断面図及び出土遺物実測図

が、調査時に混入してしまったものと考えられる。ただし、縄文土器においても、90が磨消縄文土器であるのに対し、92の無文深鉢は、口縁部外面で段をなすことから、なつめの木式（津雲Ａ式併行期）のものであり、やはり、時期差を有する。

ＳＸ202出土石器類（第54～56図）

ＳＸ202の遺構検出時及びトレンチ掘削時に多数のサヌカイト製の剥片・砕片、器種不明石製品等が出土した。そのため剥片類が出土する１～３層までの上層部分に限り、土壌を水洗し可能な限り遺物を抽出することにした。その結果ＳＸ202からは、砕片・剥片が主であるが7,071点のサヌカイト製の石器類と器種不明石製品１点を抽出した。サヌカイト製石器類の詳細な内訳は第８表に示した。その内訳の中で約90％を占めているのが砕片・剥片類である。これらは石器製作時の石屑であり、石器製作後に不要な石屑をこの遺構に廃棄した可能性が高い。出土した剥片については、第51図に長・幅値と数量についてまとめた。なお、砕片と剥片の区分は1.0cmを基準とし、1.0cm以下を砕片、以上を剥片に分類した。剥片の傾向としては、長さでは1.0～2.0cm、幅では0.5～1.5cm位の剥片が最も多く、出土した石器類同様に小ぶりである。石器では石鏃と楔形石器に係わる資料が主体を占めている。これらの遺物は洗浄後に接合関係を検討した結果、楔形石器等の資料で数点の接合関係を掴む事ができた。そのため、比較的一括性の高い資料と考えられる。なお、素材となるサヌカイトには、著しく風化したサヌカイト（サヌカイトB）が５％程度含まれる。この違いはサヌカイトの原産地の相違を示すものと考えられる。

94～113は石鏃である。石鏃は24点出土し20点を図化した。出土した石鏃は比較的小型で、形態上では平基式のものが主であるが、細分すれば数種類に分けられる。また、24点の石鏃の中で11点は、先端部等を欠く欠損品である。なお、112・113は器面調整が粗い点より未製品の可能性がある。

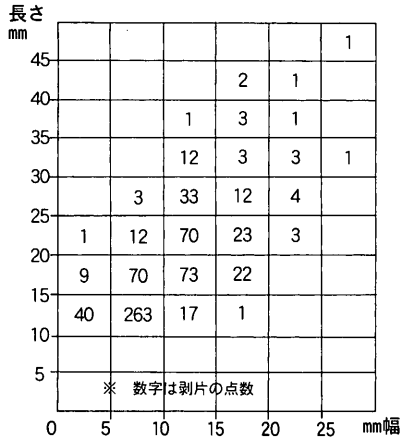
114は上半部を欠く打製石斧である。先端部には刻線状の使用痕、側縁部にはマメツ痕を残す。

115・116は剪断面が認められないため、楔形石器の素材に分類した。117～127は楔形石器である。楔形石器は合計13点出土し11点を図化した。形態的に

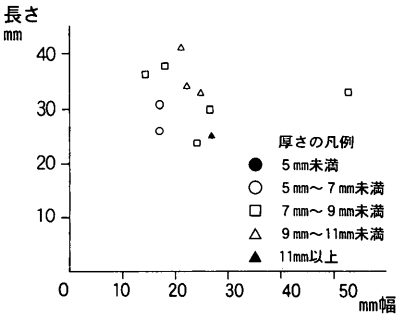
第８表　ＳＸ202出土サヌカイト製石器類組成表

器　種	サヌカイトＡ	サヌカイトＢ	備　考
打製石斧	1		欠損
石鏃	24	1	欠損11点
石鏃未製品		1	
楔形石器	13		接合資料あり
楔形石器の素材	2		
楔形石器の削片	17		接合資料あり
二次加工ある剥片	7		
剥片	631	53	
砕片	6,019	302	長・幅１cm以下
計	6,714	357	7,071

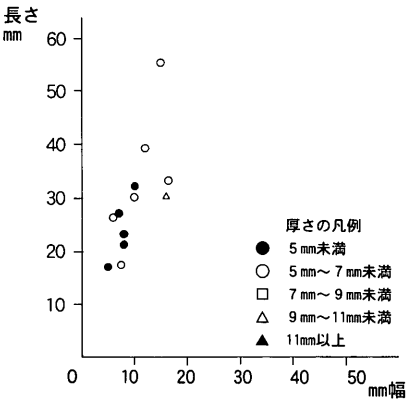
＊サヌカイトＢとは風化の著しいサヌカイトを指す



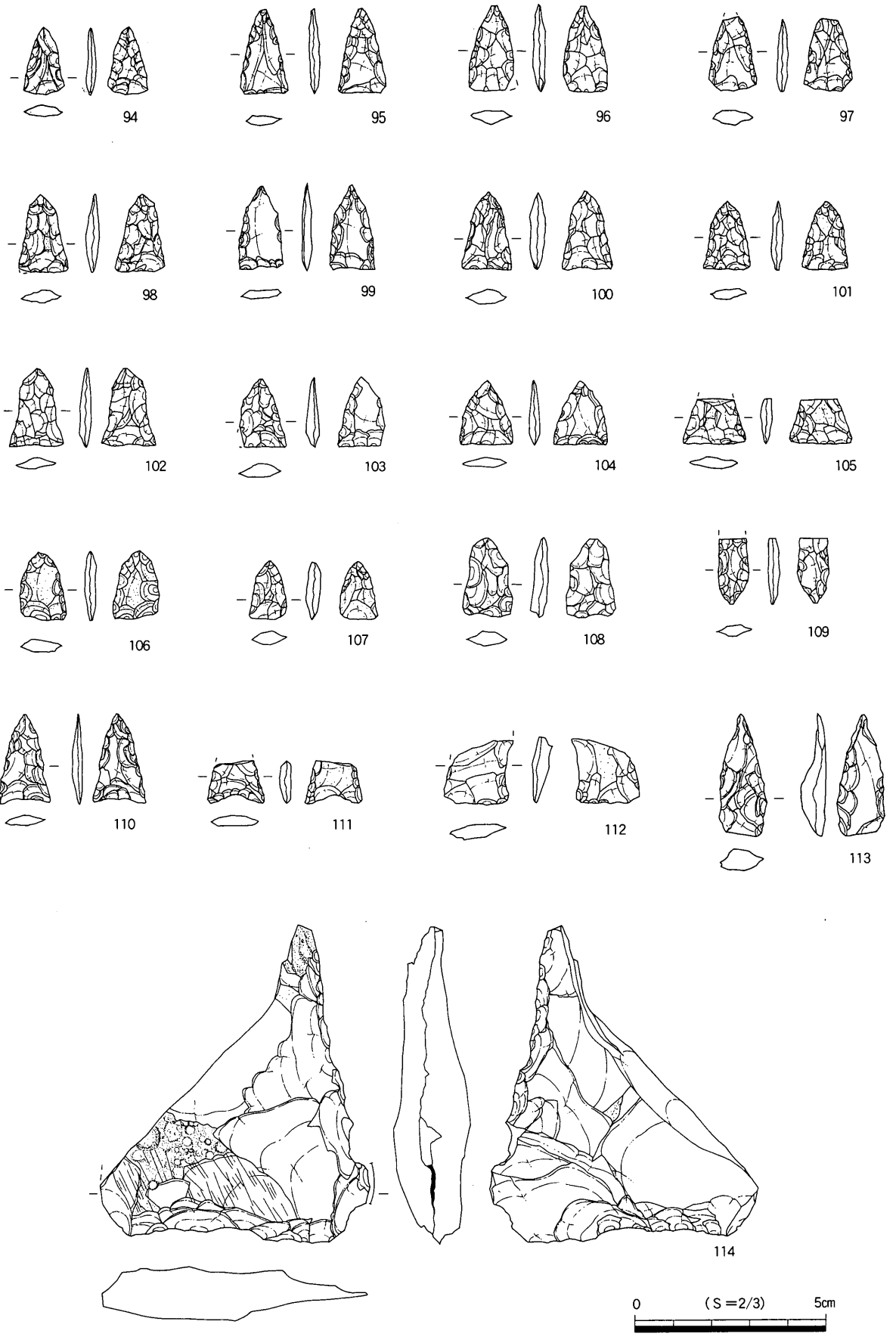
第51図　ＳＸ202出土剥片 長・幅比率



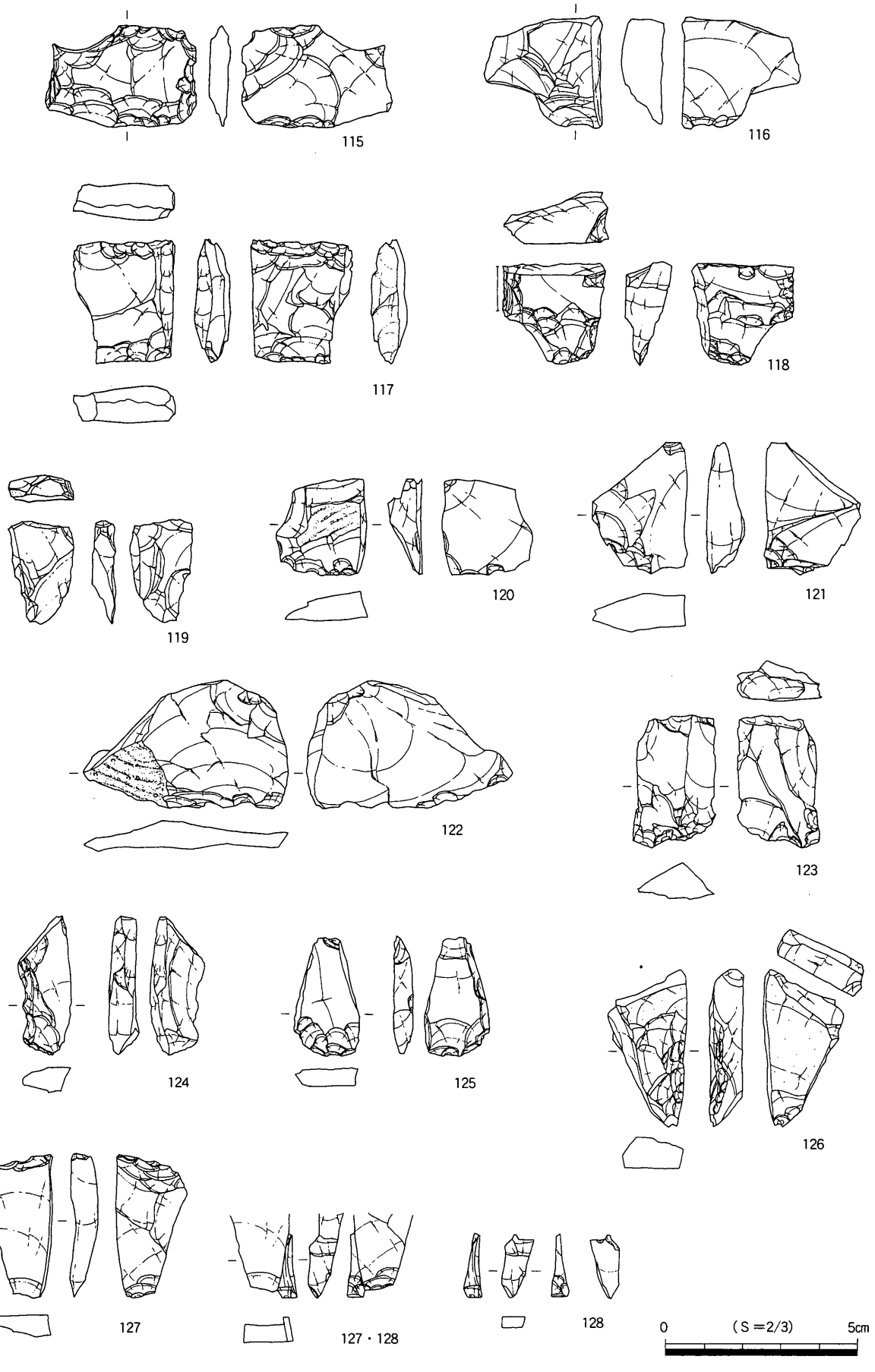
第52図　ＳＸ202出土楔形石器 長・幅比率



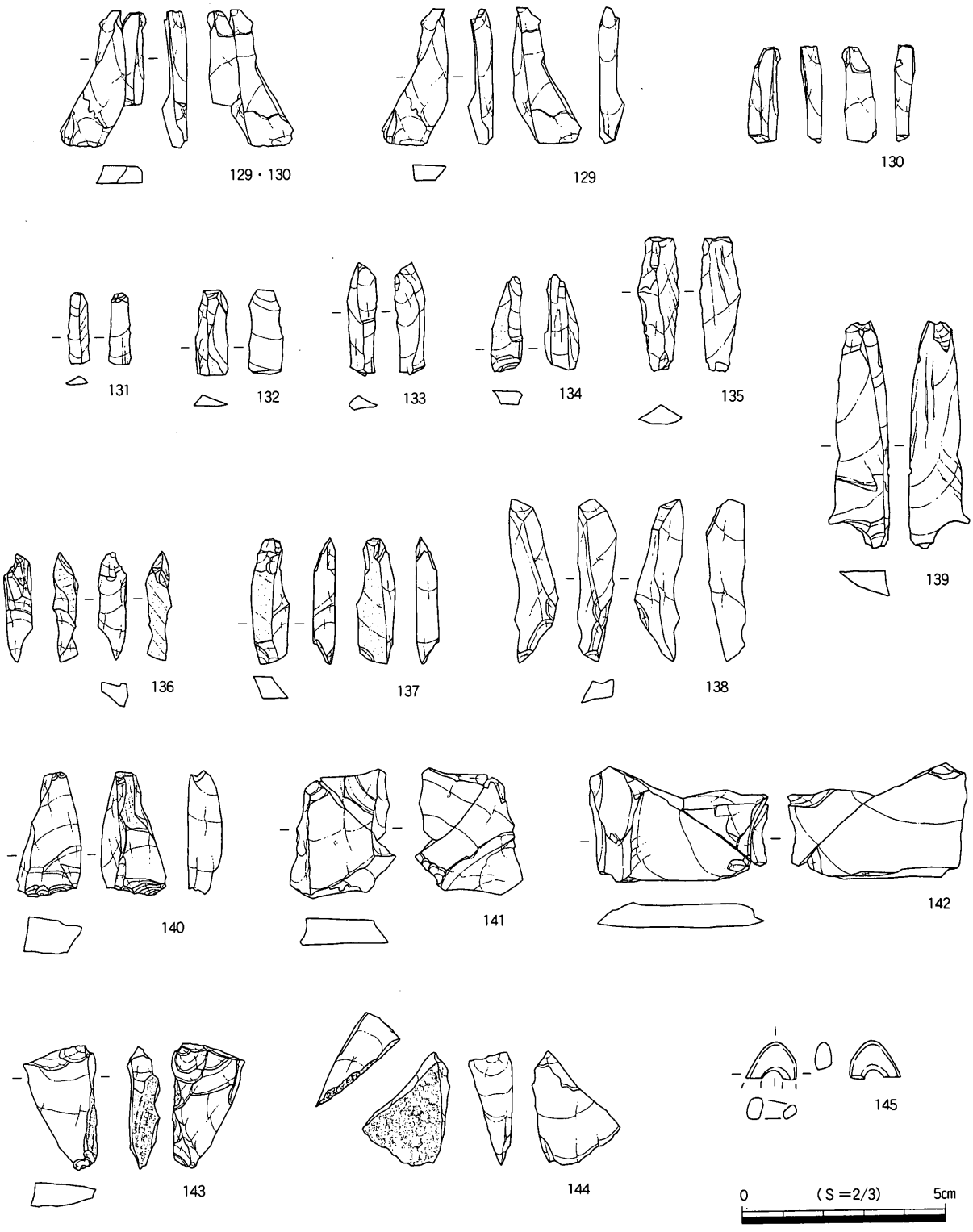
第53図　ＳＸ202出土楔形石器の削片 長・幅比率



第54図　ＳＸ202出土石器実測図①

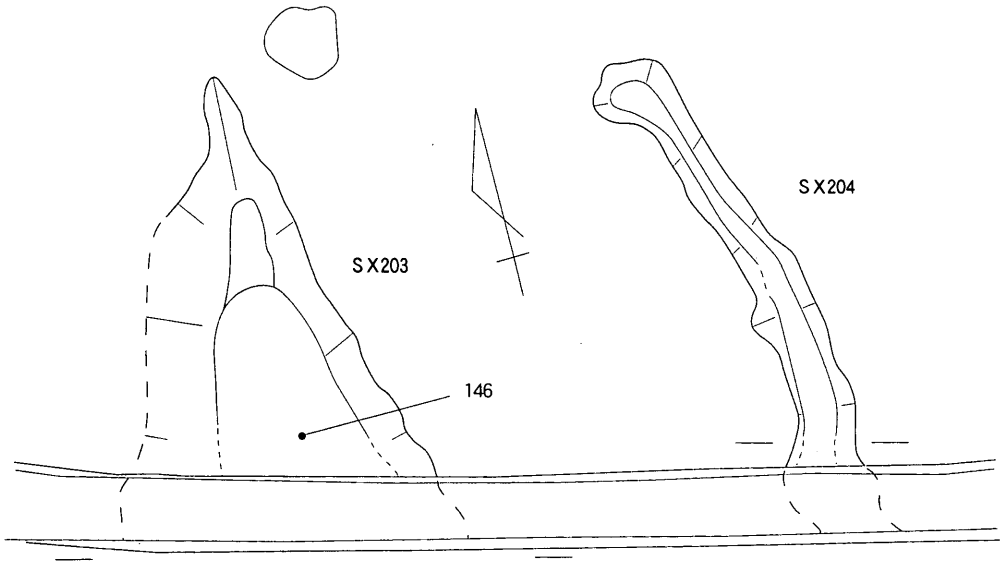


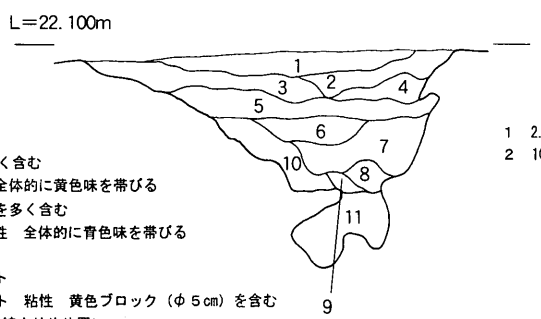
第55図　ＳＸ202出土石器実測図②



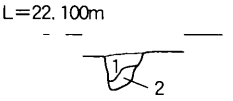
第56図　ＳＸ202出土石器実測図③

は小型のものが多く、長・幅3.0～2.5cm前後が主体を占める。117は上・下両端部に複数の階段状剥離痕が認められ、左・右両端部には上・下２方向からの剪断面が認められる。119～123・125は下端部に複数の階段状剥離痕が認められる楔形石器である。118・124は下端部と背縁部に複数の階段状剥離痕が認められる楔形石器である。126は剪断面が２つの短辺に認められる楔形石器である。127

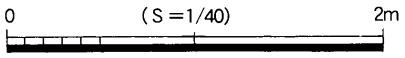


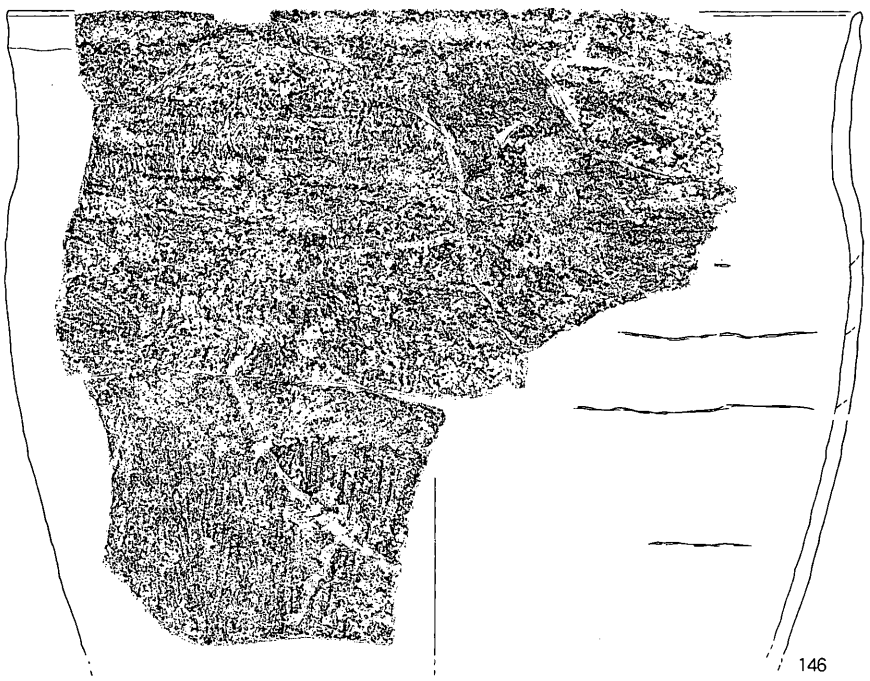


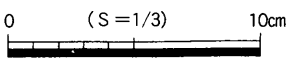
1 10YR6/1 褐灰 シルト Mnを多く含む
2 10YR6/1 褐灰 シルト 1より全体的に黄色味を帯びる
3 10YR6/1 褐灰 シルト 土器片を多く含む
4 10YR6/1 褐灰 シルト やや粘性 全体的に青色味を帯びる
5 N5/1 灰 シルト やや粘性
6 N5/1 灰～7.5YR3/2 黒褐 シルト
7 N5/1 灰～7.5YR3/2 黒褐 シルト 粘性 黄色ブロック（φ5cm）を含む
8 5PB4/1 暗青灰 シルト 粘性 締まりやや悪い
9 5PB4/1 暗青灰 粘土
10 N5/0 灰＋10YR6/6 明黄褐 シルト 粘性
（基盤層が崩落して形成された層）
11 N3/0 暗灰 粘土



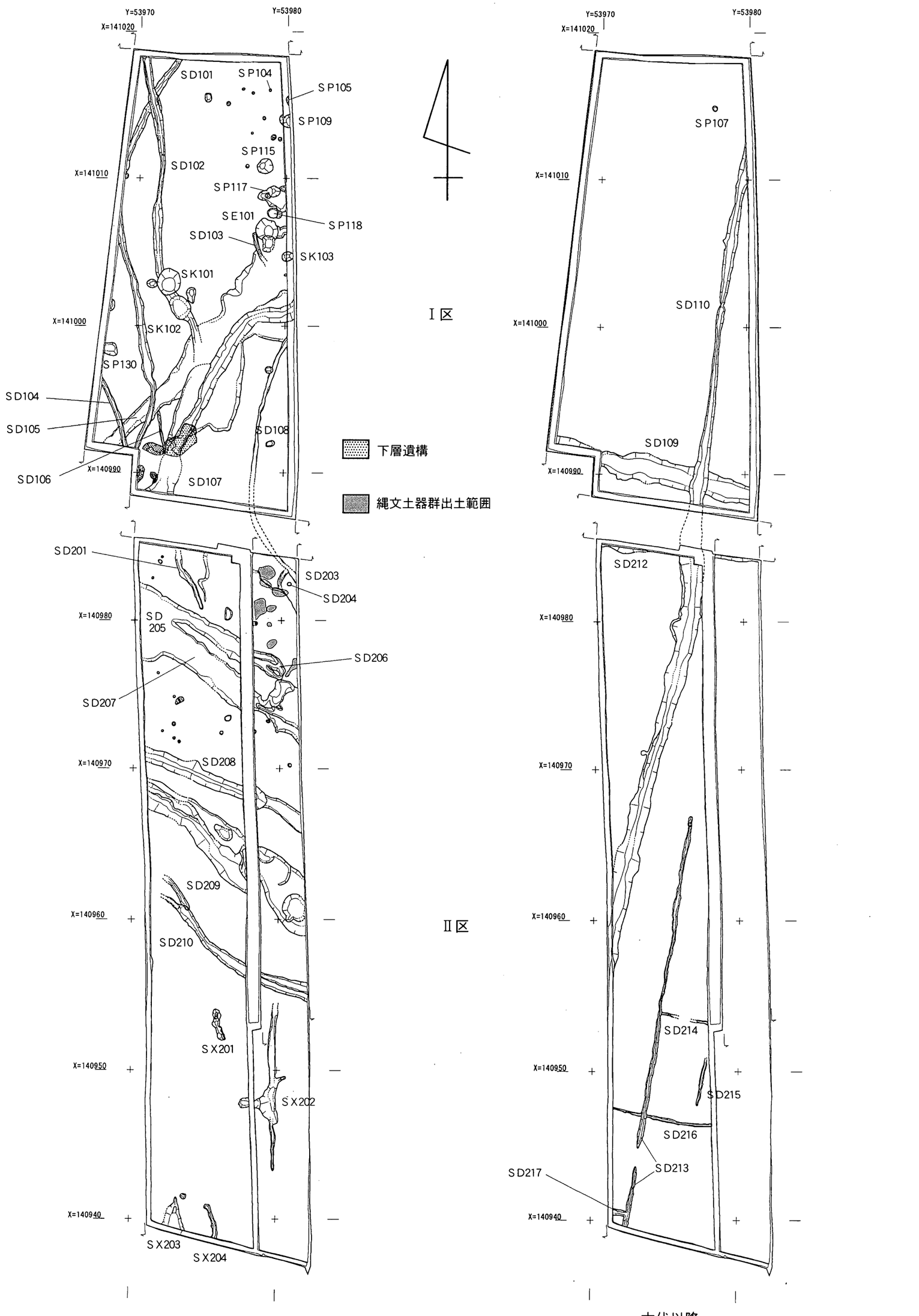
1 2.5Y6/1 黄灰 シルト 黄色ブロック（φ1cm以下）を若干含む
2 10YR3/1 黒褐 シルト 粘性







第57図　ＳＸ203・204平面図・断面図及びＳＸ203出土遺物実測図



第58図　川島本町遺跡遺構配置図

・128は楔形石器と楔形石器の削片の接合資料である。127は上・下両端部に複数の階段状剥離痕が認められる楔形石器である。128は上端部が欠損した楔形石器の削片である。両者を比較して剥離の順番を考えれば、127の上端からの加撃により128が剥離されるのであるが、その際に上・下２つに割れる。また127の側面部はその衝撃で、下端部からの加圧により剥離したようである。　129～140は楔形石器の削片である。楔形石器の削片は合計17点出土して12点図化した。長さは1.7～3.9cm、幅は0.5～1.65cmのバラツキが認められる。129・130は楔形石器の削片どうしの接合資料である。129の下半部は肥厚し、下端部は下方からの加圧による剥離痕が認められる。130は129より先行する加撃により剥離した削片である。下半部はその際の加撃により欠損している。この接合資料は上方からの連続する加撃により剥離した事を示す良資料である。

141～143は二次加工ある剥片である。144は剥片に分類したが、分割面を見る限り端部からの長軸線にそう剪断面状の剥離痕が認められる。そのため楔形石器として分類する考え方もある。

145は装身具の一種と考えられる器種不明の石製品片である。全長1.0cm前後の磨製の石製品で、穿孔を施している。穿孔部は約1/2を残し、径は0.5cmを測る。なお、穿孔は表・裏２方向から穿たれている。

包含層出土遺物

縄文土器群（第59～61図）

Ⅱ区の北東部では、浅く緩やかな落ち込みが認められ、この上面より縄文時代後期の土器がまとまって出土した（第60・61図）。このうち、155の文様構成は中津式に近いが、縄文部は反転している（福田ＫⅡ式）。153も、文様構成は中津式のものに近いが、沈線が交わらずに途切れて終わる部分が認められ、後出的な要素をもっている。このほか、161は福田ＫⅡ式のものであり、158も沈線の間隔が狭いことから、福田ＫⅡ式である可能性が高い。したがって、これらの土器群は、中津式を主体としながらも、福田ＫⅡ式のものまで含まれていると考えられる。

一方、施文の有無と器形の対応関係でみると、概ね、有文の場合は波状口縁を呈し、口縁部を肥厚させるものが多いのに対して、無文の場合は、平縁のものが多い。ただし、例外も確実に存在しており、156は無文でありながら波状口縁を呈し、157は有文でありながら平縁である。また、無文深鉢の口縁部は、有文のものと同様、口縁部を肥厚させるものが一定量確認される。

いずれも、破片であるため、文様構成は詳らかではないが、中津式あるいは福田ＫⅡ式の文様構成を大きく逸脱しないものと考える。ただし、166は縦長の波状文を呈しており、異質である。磨消縄文ではあるが、沈線がやや太いことも含めて、沈線文土器との関連を想定すべきかと考える。167も、文様構成は中津式の範疇で捉えられるが、沈線の太さから同様のことが言える。

なお、これらとともに出土した底部（175～180）は、本来、上記の深鉢に伴うものと考えられるが、周辺ではわずかながらに弥生時代前期の土器も確認されており、考慮しておく必要がある。

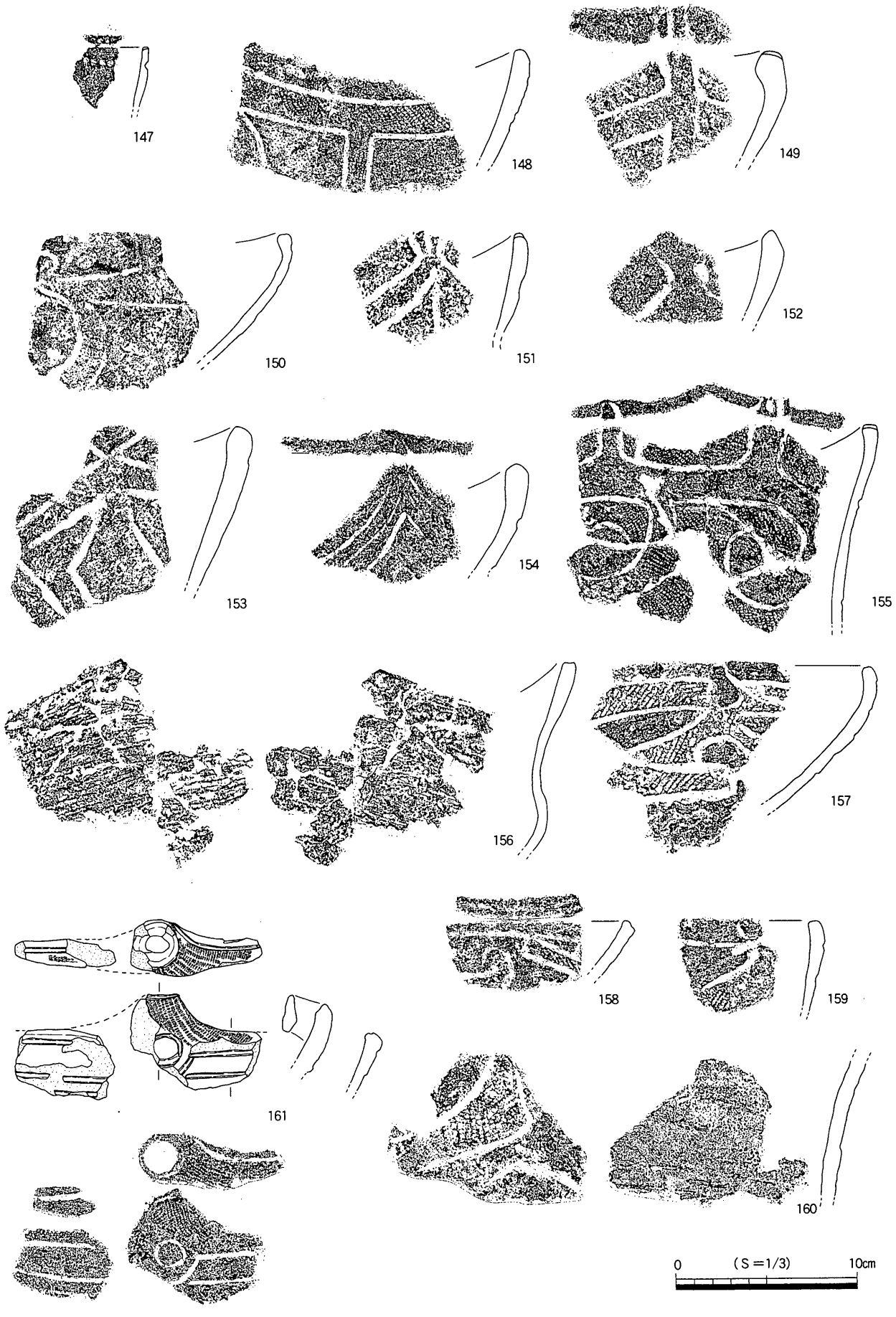
包含層より出土したその他の遺物（第62図）

前述の縄文土器群のほか、23点を図示した。いずれも、遺構より出土した遺物との大差はない。また、石器類のうち198～202は、前述の縄文土器群と同位置から出土しており、本来縄文土器群に伴うものであった可能性が高い。

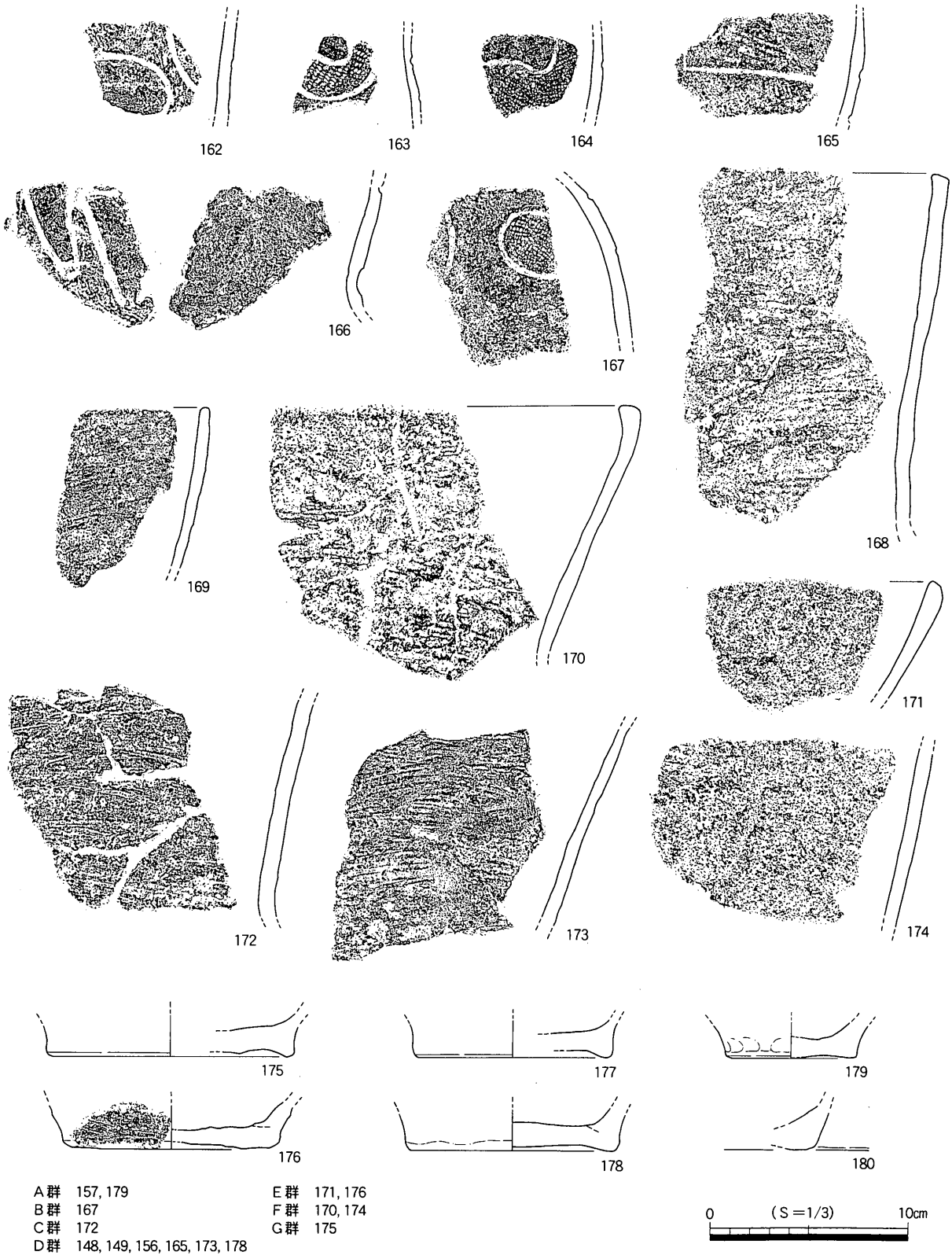
197～203はⅡ区の包含層から出土した石器類である。197はサヌカイト製の石鏃である。縄文時代の石鏃の形状を呈する。198はサヌカイト製の石鏃未製品である。表・裏面伴に素材面を残してはい

1　10YR5/2 灰黄褐　粗砂混じりシルト　Fe を少量含む
2　10YR6/1 褐灰　粗砂混じり細砂
3　5YR3/1 黒褐　粗砂混じりシルト　Mn を多量に含む
4　7.5YR5/3 褐　粗砂混じりシルト　Fe・Mn を多量に含む
5　7.5YR4/3 褐　粗砂混じりシルト
6　10YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト
7　10YR3/2 黒褐～10YR4/2 灰黄褐　粗砂・細砂混じりシルト
8　10YR3/2 黒褐　粗砂混じりシルト（6よりやや暗い）
9　10YR5/4 にぶい黄褐～10YR4/1 褐灰　粗砂混じりシルト
10　7.5YR4/3 褐　細砂混じりシルト　やや粘性

第59図　縄文土器群出土位置図

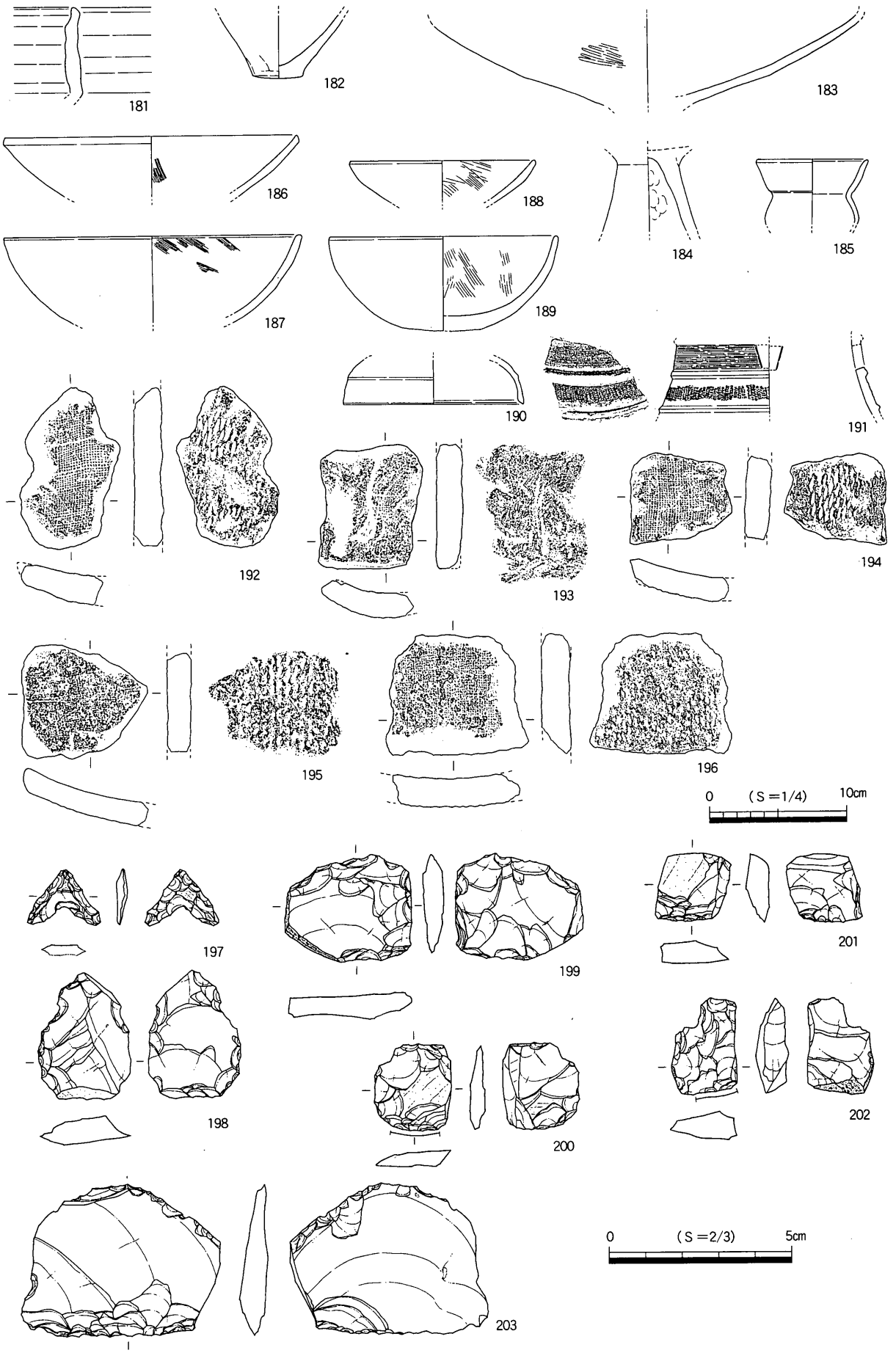


第60図　縄文土器群出土遺物実測図①



第61図　縄文土器群出土遺物実測図②

るが、両側縁部に調整を施している。199はサヌカイト製の楔形石器の素材である。側縁部３辺に階段状剥離痕が認められる。200～202はサヌカイト製の楔形石器である。側縁部に複数の階段状剥離痕、短辺に剪断面が認められる。203はサヌカイト製の削器である。上・下両側縁に調整を施し、刃部を形成している。



第62図　包含層出土遺物実測図

第Ⅳ章　川島本町南遺跡の調査成果

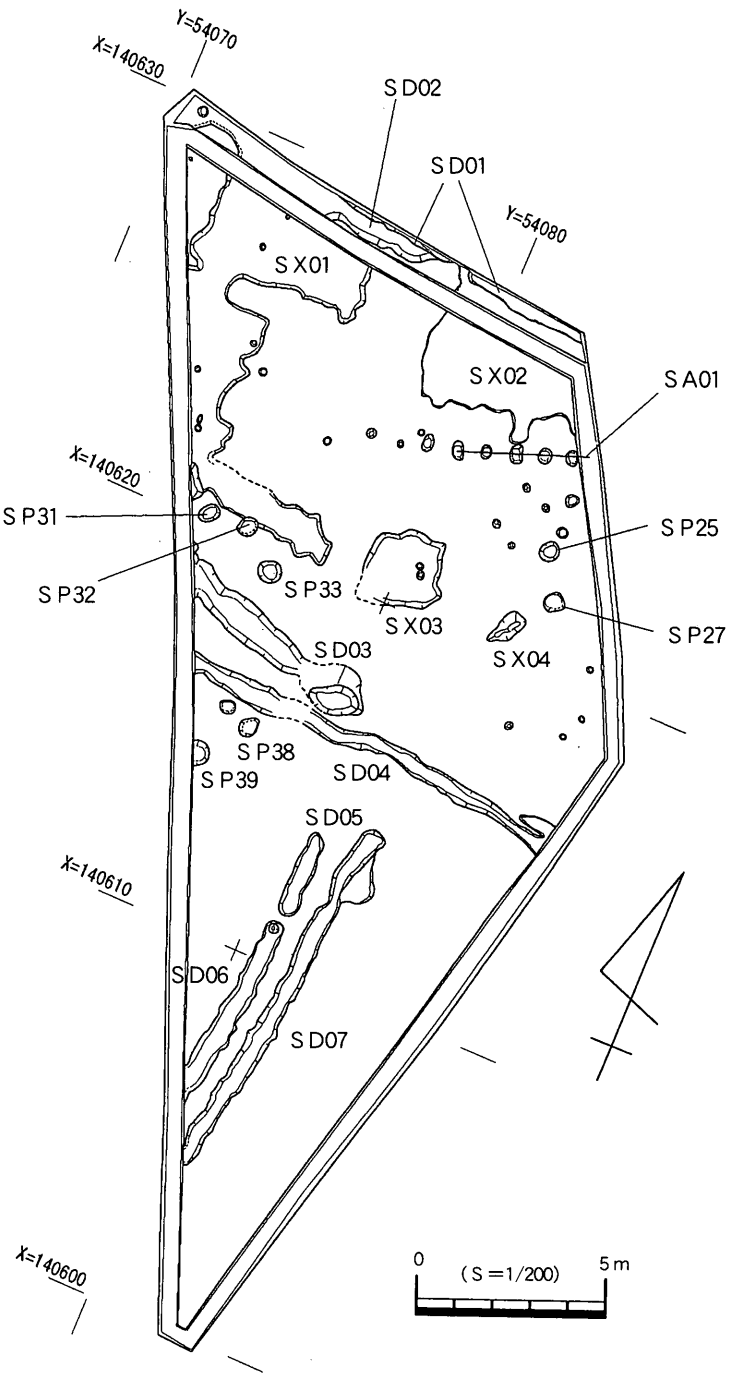
第１節　概要

耕作跡とそれに付随すると見られる溝跡を検出した。これらの時期を示す遺物は出土していないが、埋土の特徴からみて近世の所産と考えられる。ただし、これらには、高松平野の条里型地割に沿うものと、沿わないものの二者があり、時期差が存在することがうかがえる。また、黒褐色シルトを埋土とする柱穴を２基確認している。包含層中からは、弥生時代～古墳時代の遺物が出土しており、柱穴２基はこの時期の所産であると考えられる。また、メノウ製の勾玉が出土している。

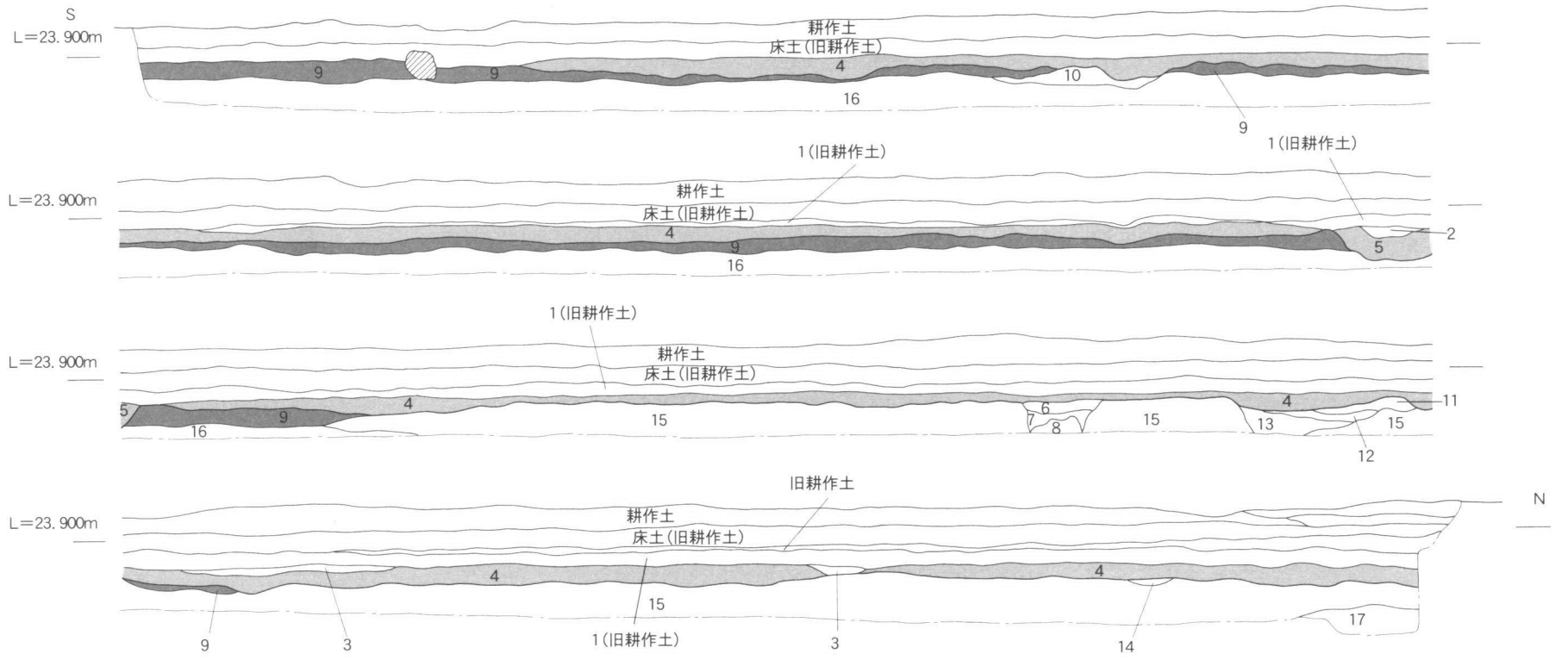
第２節　基本層序

調査前まで使用されていた耕作土および床土を除去すると、青灰～白灰色を呈する砂混じりシルト層が調査区のほぼ全体を覆って堆積する。この層も旧耕作土層であるが、今回検出したほとんどの遺構は、この層を埋土としている。ただし、遺構の埋土である場合、この層は厳密には２層に細分できる。すなわち、遺構の掘形を覆うように橙色を呈するシルトが薄く堆積し、その上層で青灰～白灰色を呈する砂層が堆積する。

この層の直下には黄褐色シルト層が堆積しており、基盤層となっている。ただこの層は決して厚くはなく、その直下には砂層が厚く広がっていることから、不安定な土地条件であろう。ただし、遺構の現存深度が極めて浅いことから、この基盤層はかなり削平を受けていることを考慮しなければならない。

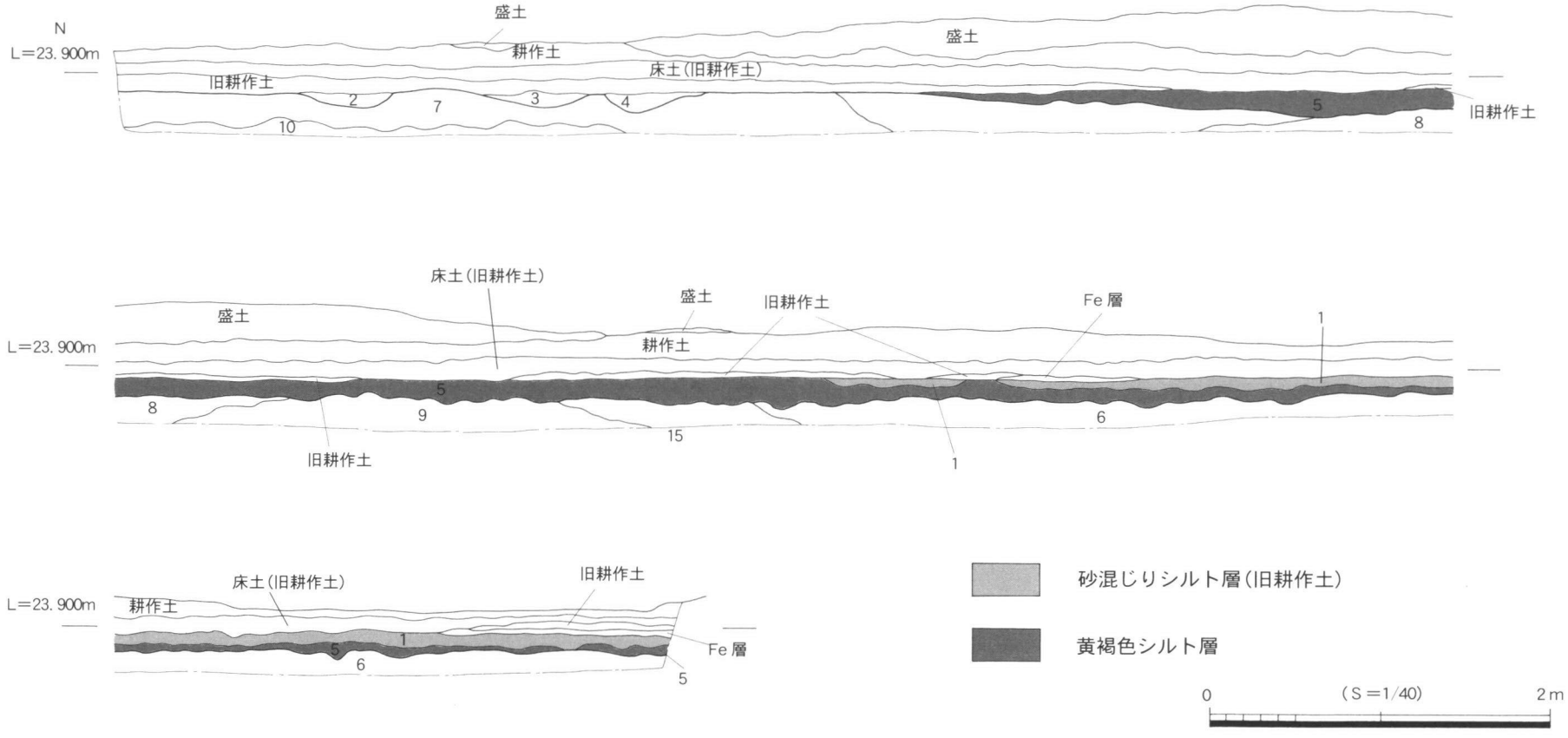


第63図　川島本町南遺跡遺構配置図



1　2.5Y6/4 にぶい黄　シルト、Mn を少量含む
2　10YR5/6 黄褐　細砂混じりシルト　粘性　青灰色土を含む
3　10YR5/6 黄褐　細砂混じりシルト
4　5BG5/1 青灰　粗砂・細砂混じりシルト　粘性（全体的にやや黄色味を帯びる）
5　10BG5/1 青灰　細砂混じり極細砂　粘性　黄褐色シルトを少量含む
6　10Y6/1 灰　細砂混じり極細砂　黄褐色シルトを少量含む
7　2.5GY6/1 灰　細砂
8　N3/0 暗灰　細砂混じりシルト　粘性
9　10YR5/8 黄褐　シルト　粘性　Mn 粒を含む
10　10YR5/8 黄褐　シルト　粘性　青灰色粘性シルトを含む
11　10YR3/1 黒褐　シルト　粘性
12　10YR5/6 黄褐　シルト　粘性
13　10G6/1 緑灰　細砂混じりシルト　粘性　Mn を少量含む
14　10YR5/8 黄褐　シルト　粘性
15　7.5YR3/2 黒褐＋2.5YR6/2 灰黄　シルト　粘性　Mn を多量に含む
16　7.5YR3/2 黒褐＋10BG5/1 青灰　シルト　粘性　Mn を多量に含む
17　7.5YR3/2 黒褐＋10BG5/1 青灰　細砂混じりシルト　粘性　Mn を多量に含む

第64図　西壁土層断面図



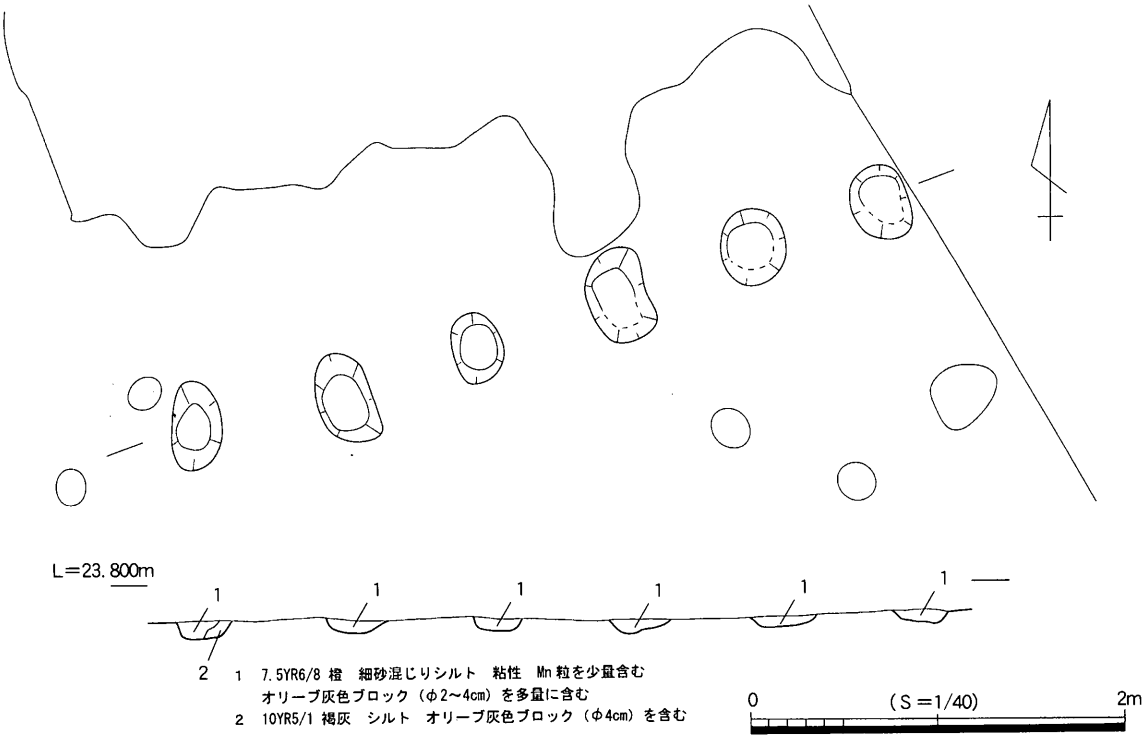
1　10BG5/1 青灰　粗砂混じりシルト　Fe・Mn を少量含む
2　10YR5/1 褐灰　細砂混じり極細砂　Mn 粒を多く含む
3　10YR5/1 褐灰　粗砂混じり極細砂　Mn 粒を少量含む
4　10YR5/1 褐灰　粗砂混じり極細砂
5　10YR5/6 黄褐　粗砂混じりシルト　粘性　Mn を少量含む
6　5B4/1 暗青灰　シルト　粘性　Mn を多量に含む
7　10YR2/2 黒褐　シルト　Mn を多量に含む
8　N5/0 灰 細砂混じりシルト　粘性
9　2.5Y6/1 黄灰　粗砂混じり細砂　Fe が雲流状に薄く広がる
10　10YR5/1 褐灰　粗砂混じり細砂

第65図　東南壁土層断面図

第３節　検出遺構・出土遺物

柵列跡（第66図）

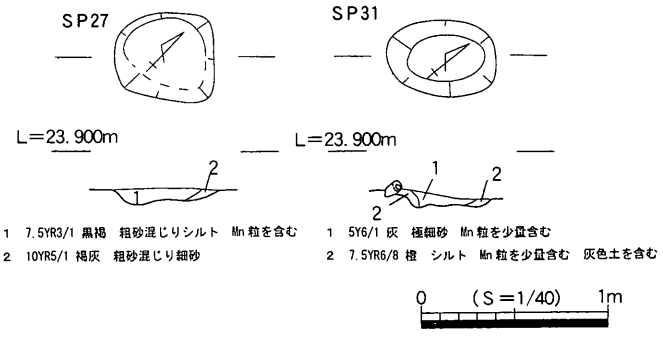
調査区の北東側で検出された。埋土は橙色シルトの上面に砂層が薄く堆積したものであり、今回検出された遺構の埋土としては通有のものである。この柵列跡は、耕作跡と考えられるＳＸ02・03と主軸をほぼ同じくしていることから、これらと併存して機能していたことが想定される。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から近世の所産であると仮定しておく。



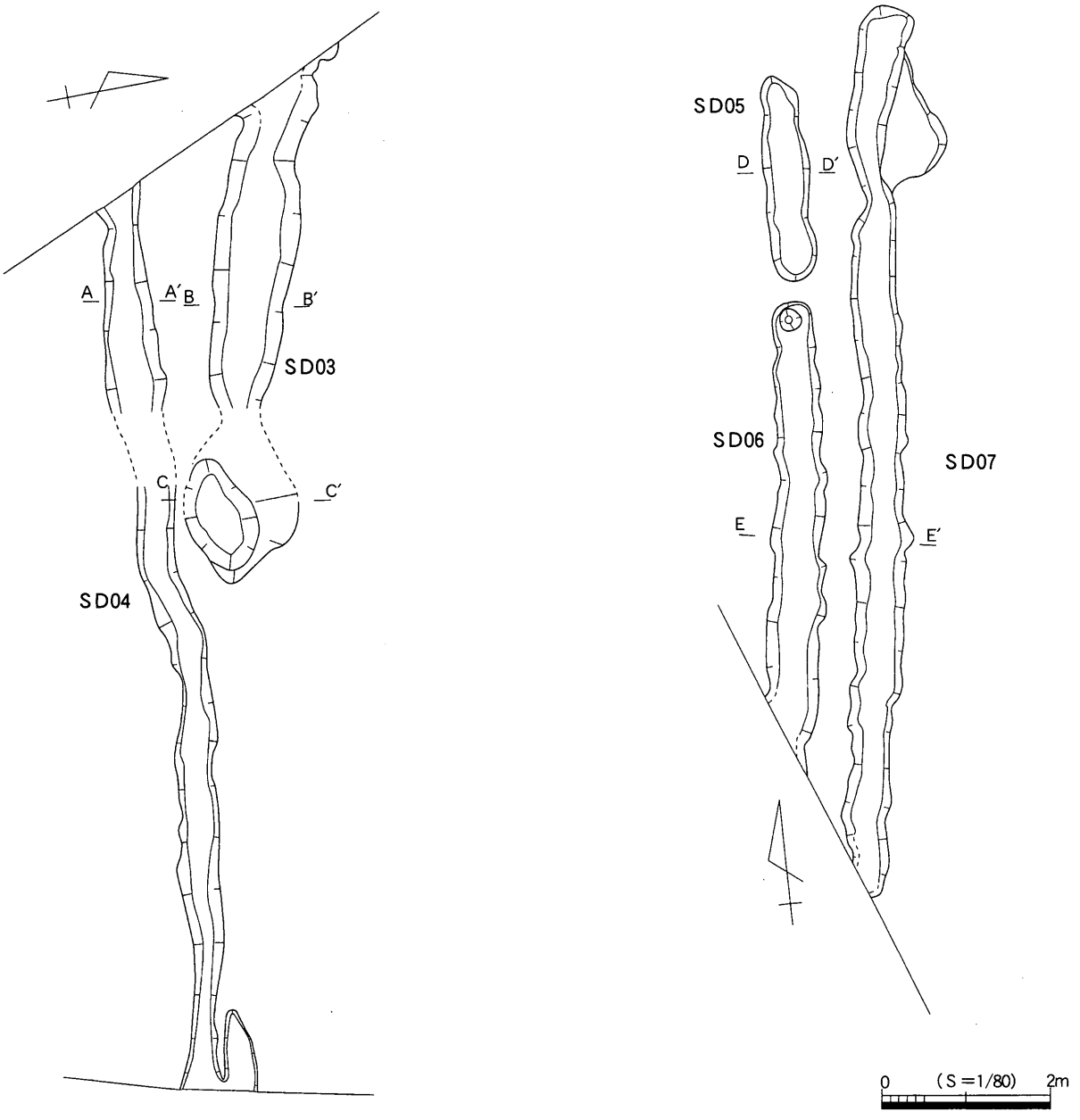
第66図　ＳＡ01平面図・断面図

柱穴（第67・69図）

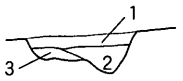
柱穴の多くは、ＳＡ01同様、橙色シルトと青灰～白灰色極細砂で構成される埋土を有しており、近世の所産であると想定できる。ＳＰ31からは、弥生土器高杯の脚部が出土しているが（第69図－５）、混入品とみるべきであろう。一方、黒褐色シルトを埋土とする柱穴も２基検出している（ＳＰ25・27)。これらは調査区東端に位置するため、これらに組み合う柱穴を調査区外に求めざるを得ない。しかし、その場合でも、掘立柱建物跡・柵列跡・竪穴住居跡等に復原することは困難である。土坑と位置づける余地もあるが、現存深度が極めて浅いことから、これらに組み合う柱穴の多くは、削平を受けて消失したものと捉えておきたい。この２基のうち、ＳＰ27からは弥生時代後期前葉の高杯が出土しており（第69図－４)、この柱穴の機能していた時期を示唆しているものと考えられる。



第67図　ＳＰ27・31平面図・断面図

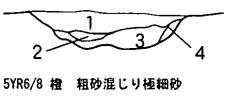


A
L=23.900m
A′



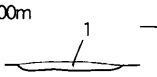
1 N5/0 灰+7.5YR6/8 橙 粗砂混じり細砂 Mn粒を少量含む
2 7.5YR6/1 灰 細砂混じりシルト やや粘性 Mn粒を少量含む
3 5Y6/2 灰オリーブ シルト やや粘性 Mn粒を多量に含む

B
L=23.900m
B′



1 5YR6/8 橙 粗砂混じり極細砂
2 7.5YR5/1 褐灰 シルト
3 10YR5/1 褐灰 シルト Mnを含む
4 2.5Y6/2 灰黄 シルト Mnを多量に含む

D
L=23.900m
D′



1 7.5YR6/8 橙 粗砂混じりシルト 灰色土を含む
Mn粒を少量含む

C
L=23.900m
C′

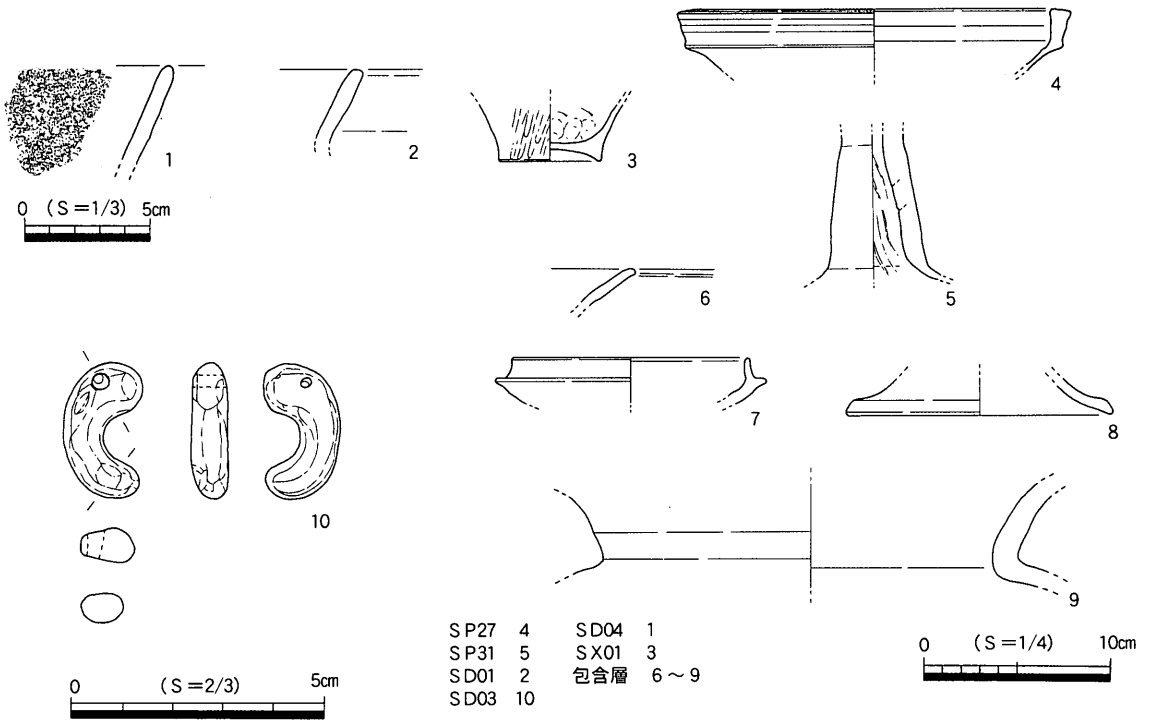
1 5YR6/8 橙 粗砂混じり極細砂
2 5YR4/4 にぶい赤褐 シルト Mn粒を少量含む
3 2.5Y5/1 灰 細砂混じりシルト 橙色粒を含む
4 2.5Y5/1 灰 シルト 粘性 橙色土を含む

E
L=23.900m
E′

1 7.5YR6/8 橙+5Y5/1 灰 細砂混じりシルト

0 (S=1/40) 2m

第68図　SD03～07平面図・断面図



第69図　川島本町南遺跡出土遺物実測図

溝跡（第68・69図）

調査地の各所で計７条を検出した。このうち、SD01・02は調査区北壁に沿って検出している（第63図参照）。調査区の北壁は、現存する条里型地割の坪界線に位置することから、これらは条里の坪界溝である。遺物はほとんど出土しておらず、時期比定が困難であるが、近世の所産であると考えられるSX01・02を切り込んで形成されていることから、近世以降に形成されたものと仮定しておく。

SD03～07も条里方向に沿う溝跡である。埋土は橙色シルトと青灰～白灰色極細砂で構成されており、今回の調査では通有のものである。耕作跡かと考えられるSX01とも軸を同じくしており、これらが同時併存していた可能性が想定される。存続時期を示す遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世の所産であると仮定しておく。

10は光沢のあるメノウ製の勾玉である。全長2.6cm、穿孔径は0.2～0.3cmを測り一方向から穿たれている。メノウ製勾玉は、古墳時代後期に盛行し、「コ」の字形を呈するのが特徴とされる（車崎2003・近藤1998）。今回出土した勾玉も、さほど角ばってはいないが「コ」の字形を呈し、包含層中より古墳時代後期の遺物が出土していることから、この時期の所産であると考えたい。

包含層出土遺物（第69図）

包含層出土遺物で図示できたのは４点である（第69図－６～９）。６は弥生土器甕もしくは壺の口縁部である。７は須恵器杯身。８は須恵器高杯の脚部と考えられるが、焼成不良で軟質のものである。９は須恵器甕の口縁部である。

上記のように、古墳時代後期の遺物が散見される。当期の遺構は今回検出されなかったが、既に削平を受けて消失したか、隣接地に所在することが想定できよう。

第Ⅴ章　調査成果の分析

（1）弥生時代後期～古墳時代前期の土器の色調・胎土について

川島本町遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の土器が、溝跡や土坑などに伴って出土している。これらの土器は色調・胎土などにおいて、ある程度の傾向が看取できる。また、そのことが、今回検出された土坑などの評価とも関わってくることが想定できた。したがって、これらの諸点について若干の検討を行いながら述べておく。

第９表　弥生時代後期～古墳時代前期における各器種と色調及び胎土

時期	器種	色調・胎土	該当遺物番号	特記事項
弥生時代後期～古墳時代前期初頭	壺	香東川下流域産	3・11・16	
		白～にぶい橙・砂粒多い	13・14	
	甕	香東川下流域産	18・19・20・21・43	
		にぶい白～橙	17・44・182	
	高杯杯部	香東川下流域産	4・5・26・27・28・29・30	シャモットを含むものが多い
		にぶい白～橙・砂粒多い	93	
	高杯脚部	香東川下流域産	31・32・33・34・35	シャモットを含むものが多い
		その他	184	
	小型鉢	ややにぶい白～淡橙	12・22・25・37・38	
	鉢	白～橙	39・186・187・188・189	
古墳時代前期後葉	小型丸底壺	にぶい白～橙・砂粒多い	2・9・36	器表面劣化・断面は橙色
	甕	白～淡橙・きめが細かい	6・10	布留式中～新相

第９表は、当該期における各器種と色調・胎土との対応を示したものである。資料数が少ないため、高杯以外の各器種は口縁部や底部などをそれぞれ１点として計上している。また、報告書不掲載資料を計上できなかったこともあるため、あくまでおおよその傾向を反映しているに過ぎない。ただし、時期の推定が可能な資料は概ね掲載しているので、不掲載資料を計上しても時期的推移に大きな変更はないものと考える。

さて、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の状況をみると、香東川下流域産（下川津Ｂ類）の土器と、にぶい白～橙色を呈する土器とに大別できる。これは空港跡地遺跡、林・坊城遺跡、多肥松林遺跡で既に確認されている状況（乗松2004）と同様のものといえる。空港跡地遺跡、林・坊城遺跡、多肥松林遺跡は、巨視的にはひとつの遺跡群（信里2003）におさまるものと考えられる。それに対して、当遺跡は三谷三郎池遺跡や池田合子神社などとともに、別個の遺跡群が想定できるものである。したがって、色調・胎土などに基づく大別は、空港跡地遺跡などで形成される遺跡群固有の事象ではないことが確認される。

また、各器種における香東川下流域産土器とにぶい白～橙色を呈する土器の割合は、資料数が少ないため正確さに欠けるが、少なくとも高杯における香東川下流域産土器の占める割合の高さは読み取れる。ただし、これらの高杯はＳＫ102もしくはＳＤ102出土のものがほとんどであり、後述するように、これらの廃絶に際して香東川下流域産の高杯を選択して投棄されていたことも想定できる。したがって、当遺跡にて香東川下流域産高杯の占める割合が高いことが、そのまま当地近辺に想定される集落の状況を反映しているものとはいえない。

次に古墳時代前期後葉の土器についてみてみると、この時期には香東川下流域産土器が生産されていないので、資料数が少ないとはいえ、白～橙色を呈する土器で基本的に構成されるとみることに問題はないだろう。ただし、今回出土した小形丸底壺と布留式甕は、色調・胎土において明らか

に区別されるものであり、白～橙色を呈する土器としてひと括りにしてしまうことには、大きな問題が残る。以下にその特徴を記しておく。

小形丸底壺：にぶい白色を基調とするが、それは器表面のみの特徴で、断面は全て橙色を呈する。また、劣化が著しく、器表面の剥離によって断面の橙色が露胎するものもある。１～３㎜幅の砂粒を多く含む。

布留式甕：乳白色を基本とする。淡い橙色を呈する部分もあるが、器表面のごく一部に認められるに過ぎない。残存状況は極めて良好で、劣化による器表面の剥離は全く認められない。１～３㎜幅の砂粒を含むが、小形丸底壺と比べれば目立たない。胎土自体、きめの細かい印象を受ける。

上記の諸特徴のうち、劣化状況に基づく差異については、出土に至るまでの土壌条件を考慮しなければならない。しかし、小形丸底壺２・９と、布留式甕６・10は同じ遺構（ＳＥ101・ＳＫ103）から出土しており、土壌条件に起因する可能性を捨象することができる。また、これらとは別の遺構（ＳＤ102）より出土した小形丸底壺36も、器表面の劣化が著しい。したがって、各遺構に起因する現象ではなく、今回出土の小形丸底壺に通有の現象とみるべきであろう。

このような器種で区別される色調・胎土の差異の原因として、まず考えられるのは製作地の違いである。今回出土の小形丸底壺と布留式甕とでは、小形丸底壺のほうが色調・胎土において、前段階（弥生時代後期～古墳時代前期初頭）で確認されるにぶい白～橙色を呈する土器群に近い。したがって、小形丸底壺を前段階から当地近辺で作られてきた土器群の延長上で捉え、布留式甕は他地域からの搬入品であると仮定することは可能である。ただし、他地域から搬入されたといっても、県外で製作されたとする根拠はない。まずは、高松平野内で模索するのが妥当かと考える。

一方、今回出土した布留式甕の胎土がきめ細かいという特徴から見れば、それが水簸によるものであり、そのために小形丸底壺との外見上の違いが生じたと見ることも可能である。また、胎土中の砂粒の多寡は、器種ごとで素地にまぜる砂粒の量を変えていることが想定できる。つまり、両者の違いは製作地の違いではなく、製作時の違いであると仮定することも可能なのである。

現時点では上記の２通りの見解が提示できるが、両者の是非を検証することは困難である。しかし、当地近辺を中心としたデータの蓄積がなされれば、どちらかを示唆する傾向が、おのずとみえてくるものと考える。いずれにせよ、結果として、器種と色調・胎土が対応するという状況が、古墳時代前期後葉において存在していることが、今回の調査から確認されるのである。

（２）今回検出した井戸跡および土坑について

前項で検討した小形丸底壺および布留式甕は、そのほとんどが井戸跡ＳＥ101・土坑ＳＫ103より出土している。ＳＫ103は土坑としているが、状況からみて井戸跡である可能性が高い（第Ⅲ章参照）。また、これらより出土した土器のうち、布留式甕は、残存状況が良好でありながら、煮沸具として使用された痕跡が認められない。すなわち、未使用の状態で投棄された可能性が考えられる。やや安直ではあるが、井戸跡の廃絶に際して意図的に投棄したことが想起されよう。共伴する小形丸底壺についても、同様のことが想起される。

上記の遺構のほか、弥生時代終末期の土坑ＳＫ101・102も井戸跡である可能性が高いことを第Ⅲ章で述べた。このうち、ＳＫ101の出土遺物はわずかであるが、ＳＫ102からは少なくとも香東川下流域産（下川津Ｂ類）の高杯が底付近よりまとまって出土している。この高杯も井戸廃絶に際して

意図的に投棄されたことを想定する余地があろう。

弥生時代後期～古墳時代前期の井戸廃絶に際する土器投棄について、県内ではまだ状況が把握できていない。参考までに、対岸の岡山県の状況をみてみると（中野1988）、弥生時代後期～古墳時代初頭において、井戸跡の底部より完形の土器が出土することが多い。これは、井戸放棄に際する意図的放置と位置づけられている。このような意図的放置は、弥生時代後期後半より急増し、少なくとも古墳時代初頭までは継続するようである。また、意図的に放置される土器の器種は、弥生時代後期においては多種多量であるのに対し、古墳時代初頭においては主に甕を用い、１～数個に限られるという。

地域が異なるうえに、対象としている時期が若干異なるため、安易な援用は避けるべきであるが、今回の調査事例と岡山県の事例とに共通する現象として、井戸廃絶時に投棄（放置）する土器の器種構成に時期的な推移があることが挙げられよう。当遺跡での時期的推移をまとめると、以下のようになる。

弥生時代終末期：井戸の廃絶に際して、少なくとも高杯をまとめて投棄する

古墳時代前期後葉：井戸の廃絶に際して、小形丸底壺と布留式甕をそれぞれ１～２個投棄する

一方、岡山県の事例と比較して決定的に異なるのは、井戸跡の底から完形で出土するとは限らないという出土状況である。ＳＫ102出土高杯は底から出土しているが、完形になるものはなかった。ＳＥ101出土の小形丸底壺９は完形であるが、布留式甕10は底部が出土していないうえに、破片の一部はＳＫ101より出土している。また、ＳＫ101から出土した土器２・６・10は、埋土の上位より出土している。このような現象を理解するためには、今なお事例の増加とその把握を経なければならない。

以上、川島本町遺跡においては弥生時代終末期～古墳時代前期の井戸跡がいくつかあり、廃絶時には意図的に土器を投棄した状況を想定した。本来ならば、発掘調査時において井戸跡であることを認定し、その上で出土状況を検討すべきであるが、調査時の認識が至らなかったため、出土状況などから井戸跡であろうという推定に至っている。このため、基礎資料としては多くの問題が残る事態を招いてしまった。反省すべき点であり、今後の調査の上での注意点としておきたい。

第Ⅵ章　まとめ

川島本町遺跡

川島本町遺跡では、縄文時代以前に形成されたと考えられる旧河道の埋没後に形成された溝跡群と、調査地の北東側を中心に、弥生時代後期～古墳時代前期の井戸跡・柱穴などの居住域を示唆する遺構が確認された。当地は地形の検討から見ても、旧河道の存在が想定できる。おそらく、居住域の中心地は当地より東側で、かつ、春日川に至るまでの間の微高地上に形成されていたものと推定できる。このように、集落跡の位置をある程度限定的に推定できるようになったのは、今回の調査成果としては大きい。

また、これらの遺構より出土した土器は、空港跡地遺跡、林・坊城遺跡、多肥松林遺跡の土器と同様、香東川下流域産（下川津Ｂ類）土器とにぶい白～橙色を呈する土器(「白色系」、乗松2004)とで基本的には構成されている。香東川下流域産土器が生産されなくなる古墳時代前期後葉においては、橙色を基調とし、砂粒を多く含んだ、劣化の著しい小形丸底壺と、白色を基調とし、胎土のきめが細かく、残存状況のよい布留式甕があり、器種と色調・胎土に対応関係が認められた。

両者の土器は、井戸廃絶に際して意図的に投棄されたものと考えられる。また、これらと同様の状況であることから、香東川下流域産の高杯がまとまって出土した土坑ＳＫ102も、井戸の可能性が高く、高杯は意図的に投棄されたものであると想定できる。

上記のような、色調・胎土の傾向や、井戸とみられる遺構での出土状況などは、周辺の調査事例の増加とともに、あらためて評価していく必要がある。

一方、黄褐色シルト層中および上面や、風倒木痕の埋土からは、縄文時代後期前葉～中葉の土器と、石器類がまとまって出土した。瀬戸内地方では、当該期の資料が包含層よりまとまって出土する事例が年々増加しており、これらの土器に対する詳細な検討がなされつつある（幸泉2001)。このような検討は、遺構出土の遺物に対する検討以上に、事例の多さによって裏づけされなければならない側面が強い。今回出土の縄文土器および石器類も、このような検討で明らかにされた事象を補強、あるいは再評価するものであり、遺構に伴わない遺物とはいえ貴重な資料である。

また、古代から近世の遺構として、条里方向に沿った溝跡が検出された。このうち、東西方向の溝ＳＤ109・212は、現存する条里の坪界線にほぼ一致している。一方、南北方向の溝ＳＤ110は当地の一町南で確認される地割の延長線上に位置すると考えられる。当地近辺では、条里型地割の横軸は良好に現存しているが、縦軸は不明瞭である。今回検出されたＳＤ110は当地近辺の条里型地割の縦軸の施行状況を明らかにするための基礎資料となる。

なお、ＳＤ110からは、その存続時期を示唆する遺物が少量ではあるが出土している。それに基づけば、17世紀前葉頃に埋没したものと考えられ、ＳＤ110と埋土が近似するＳＤ109も同じ頃に埋没したと考えられる。一方、掘削時期を示唆する遺物としては、８世紀後半～９世紀前半頃の須恵器が出土しているが、これに従えばかなりの長期間機能していたことになり、なお検討していく必要がある。

川島本町南遺跡

川島本町南遺跡では、埋土の特徴から近世の所産かと思われる溝跡と、耕作跡と考えられる浅い

落ち込みが主に検出された。このうち、東西方向の溝ＳＤ01・02は現存する条里型地割の坪界線上に位置するものであり、これに方位を同じくする他の溝跡や、耕作跡も近い時期に形成されたものと考えられる。一方、同じ埋土でありながら、主軸方位が異なる柵列ＳＡ01や耕作跡ＳＸ02も検出されている。これらの主軸方位は、調査区の西壁の方向と一致する。調査区の西壁は現在も使用されている水田の畦に沿うものであり、したがって、地図上には示されていないが、当遺跡においては、現存する条里型地割の方位とは異なる地割が存在していたことが伺える。

これらの遺構とは別に、黒褐色シルトの埋土を有する柱穴ＳＰ25・27が検出された。出土遺物から弥生時代後期のものと考えられる。これらは現存深度が極めて浅いことから、これらの他にも本来は存在し、それが削平を受けて消失してしまった状況が想定される。

また、溝ＳＤ03からは、メノウ製の勾玉が出土した。古墳時代後期のものと考えられ、包含層中より出土している同時期の遺物がこれを示唆している。今回、古墳時代後期の遺構は確認されなかったが、上述と同様、削平を受けて消失したか、隣接地に存在する可能性が考えられる。

引用・参考文献

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

金田章裕　1992「第２章　第１節　地理的環境」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会

高橋　学　1992「第４章　第１節　高松平野の環境復原」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会

大久保徹也・森格也　1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　上天神遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

川畑　聰　2001『太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊　凹原遺跡』高松市教育委員会

川畑　聰　2002『太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　天満・宮西遺跡　～集落・水田編～』高松市教育委員会

川畑聰・末光甲正編　2000『太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　上西原遺跡　附　汲仏遺跡』高松市教育委員会

蔵本晋司　1999「弥生時代終末期の讃岐地域の土器様相について　―下川津Ｂ類土器の動向を中心として―」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第32冊　中間西井坪遺跡Ⅱ』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

信里芳紀　2003「讃岐地域における弥生時代前期集落の様相」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会

信里芳紀・山元素子　2004『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第53冊　中森遺跡　林・坊城遺跡Ⅱ　東山崎・水田遺跡Ⅱ』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

乗松真也編　2004『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第８冊　空港跡地遺跡Ⅷ』香川県教育委員会ほか

乗松真也　2005「三谷三郎池遺跡出土の弥生時代資料」『調査研究報告』第１号　香川県歴史博物館

松本和彦　2000『都市計画道錦町国分寺綾南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　松並・中所遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

宮崎哲治　1993『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

森格也・古野徳久編　1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　前田東・中村遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

山下平重　1999『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　多肥松林遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

山元敏裕編　1994『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　浴・長池Ⅱ遺跡』高松市教育委員会ほか

渡部明夫編　1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第９冊　永井遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

第Ⅲ章　川島本町遺跡の調査結果

大橋康二　1993「唐津と伊万里」『考古学の世界　第５巻　九州・沖縄』ぎょうせい

幸泉満夫　2001「西日本縄文後期土器組成論―瀬戸内地方における沈線文系土器に関する研究―」『考古学研究』48－３　考古学研究会

佐賀県立九州陶磁文化館　1984『北海道から沖縄まで　国内出土の肥前陶磁』
佐藤良二編　1984『奈良県文化財調査報告第42集　二上山北麓石器製作遺跡の調査―清風荘第３地点遺跡・滝ヶ谷遺跡―』奈良県立橿原考古学研究所
矢野健一　1994「縄文後期のおける土器の器種組成の変化」『愛媛大学法文学部考古学研究報告第３冊　江口貝塚Ⅱ　―縄文後晩期編―』愛媛大学法文学部考古学研究室
渡部明夫　1980「讃岐国の須恵器生産について」『鏡山猛先生古稀記念　古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
渡部明夫　1994「観音寺市なつめの木貝塚出土の縄文時代後期土器（なつめの木式）について　～香川県における津雲Ａ式及び北白川上層式１期併行期の土器～」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅱ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

第Ⅳ章　川島本町南遺跡の調査結果

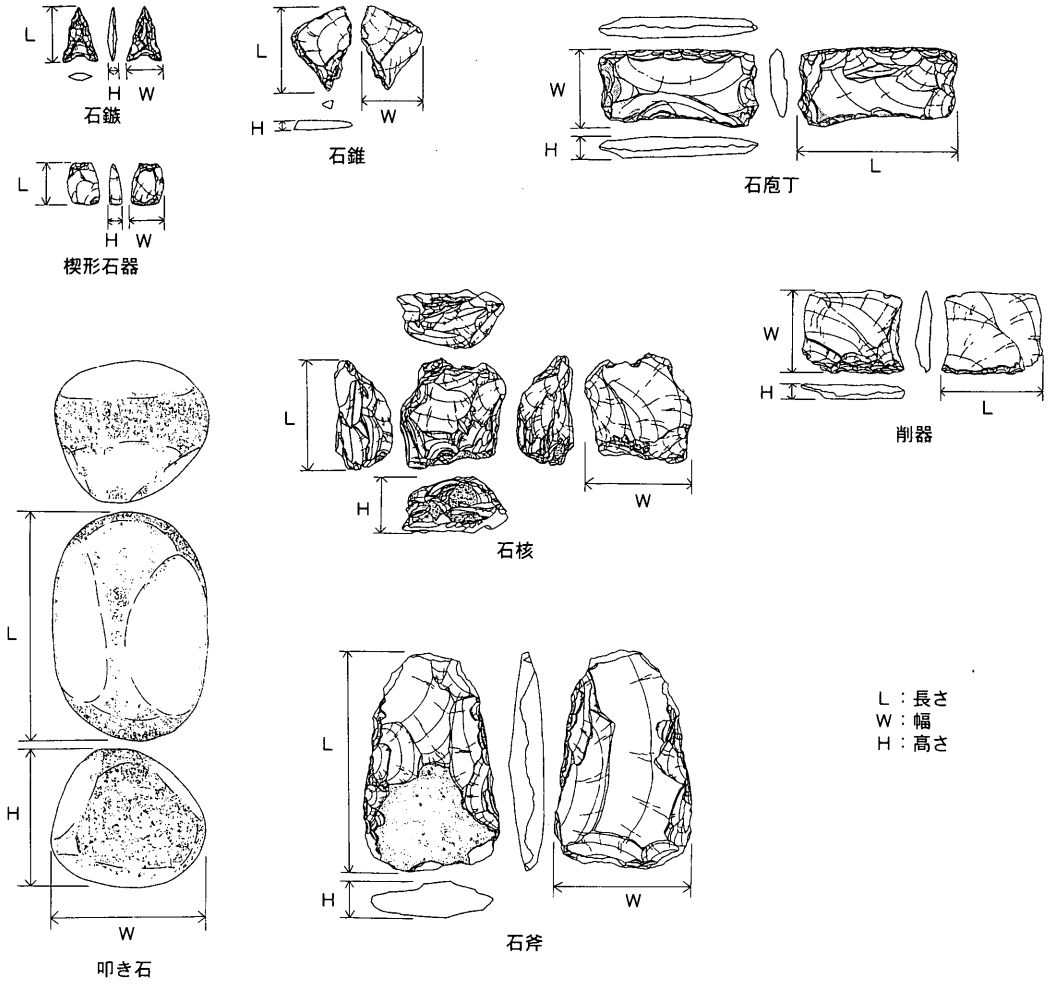
車崎正彦　2003「勾玉」『日本考古学事典』三省堂
近藤　広　1998「装身具」『滋賀県栗太郡栗東町　和田古墳群』栗東町教育委員会

第Ⅴ章　調査結果に関する所見

佐原　眞　1979「土器の用途と製作」『日本考古学を学ぶ（２）』有斐閣
中野雅美　1988「弥生・古墳時代初頭の井戸」『鎌木義昌先生古稀記念論集　考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会
信里芳紀　2003「讃岐地域における弥生時代前期集落の様相」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会
乗松真也　2004「第３章第１節　分析の目的と今後の課題」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第８冊　空港跡地遺跡Ⅷ』香川県教育委員会ほか

第Ⅵ章　まとめ

幸泉満夫　2001「西日本縄文後期土器組成論―瀬戸内地方における沈線文系土器に関する研究―」『考古学研究』48－３　考古学研究会
乗松真也　2004「第３章第１節　分析の目的と今後の課題」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第８冊　空港跡地遺跡Ⅷ』香川県教育委員会ほか



第70図　石器計測基準図

川島本町遺跡
川島本町南遺跡

遺物観察表

第10表　川島本町遺跡出土土器観察表

遺物番号	報告遺構名	調査区	器種	法量(cm)			残存率	胎土	色調		調整		備考
				口径	器高	底径			外面(釉)	内面(胎土)	外面	内面	
1	SP204	Ⅱ区	縄文土器　深鉢	−	−	−	体部破片	石英・長石(中)並	10YR8/ 灰白	10YR5/4 にぶい黄褐	縄文, 沈線	ﾏﾒﾂ	
2	SK103	Ⅰ区	土師器　小型丸底壺	−	−	−	頸部2/8	石英・長石(中)並, 赤色粒(細)少	2.5YR8/2 灰白	5YR6/6 橙	ﾅﾃﾞ, ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ	
3	SP109	Ⅰ区	弥生土器　壺	−	−	−	破片	石英・長石(中)並, 角閃石(細)少, 雲母(細)少	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	ﾊｹﾒ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	指ｵｻｴ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ	下川津Ｂ類
4	SK101	Ⅰ区	弥生土器　高杯	(16.4)	−	−	口縁部2/8	石英・長石(細)多, 赤色粒(細)少, 角閃石(細)少, 雲母(細)少	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	ﾖｺﾅﾃﾞ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ, ﾏﾒﾂ	
5	SP115	Ⅰ区	弥生土器　高杯	−	−	(15.2)	脚部1/8	石英・長石(中)少, 角閃石(細)並, 雲母(細)少	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/6 明褐	ﾖｺﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	下川津Ｂ類
6	SK103	Ⅰ区	土師器　甕	(15.4)	−	−	口縁部3/8	石英・長石(細)並, 赤色粒(細)少, 雲母(細)少	10YR8/1 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	ﾖｺﾅﾃﾞ, ﾊｹﾒ, ﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃﾞ, 指ｵｻｴ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
7	SP118	Ⅰ区	土師器　壺	(15.2)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(中)並	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	ﾖｺﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ後ﾖｺﾅﾃﾞ, 指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	
8	SP107	Ⅰ区	土師器　椀	(14.4)	−	−	口縁部2/8	石英・長石(中)並	2.5YR8/2 灰白	2.5YR8/2 灰白	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
9	SE101	Ⅰ区	土師器　小型丸底壺	(6.9)	9.0	2.0	底部8/8	石英・長石(中)多, 赤色粒(粗)少	10YR8/3 浅黄橙	5YR7/8 橙	ﾖｺﾅﾃﾞ, ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ, 板ﾅﾃﾞ	
10	SE101	Ⅰ区	土師器　甕	(15.8)	−	−	口縁部1/8	砂粒(中)少	10YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ, ﾊｹﾒ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ, ﾊｹﾒ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
11	SD102	Ⅰ区	弥生土器　壺	(17.4)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(細)少, 角閃石(細)並, 雲母(細)少	10YR5/4 にぶい黄褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	下川津Ｂ類, 内面に接合痕ｱﾘ
12	SD102	Ⅰ区	弥生土器　鉢	(60.0)	6.4	2.1	底部8/8	石英・長石(中)並	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ	
13	SD102	Ⅰ区	弥生土器　壺	−	−	(5.2)	底部2/8	石英・長石(中)並	10YR3/2 黒褐	10YR4/2 灰黄褐	ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ	
14	SD102	Ⅰ区	弥生土器　壺	−	−	4.5	底部8/8	石英・長石(中)並, 赤色粒(中)並	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/4 浅黄橙	板ﾅﾃﾞ後ｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ｹｽﾞﾘ	ﾏﾒﾂ, ﾊｹﾒが残る	
15	SD102	Ⅰ区	弥生土器　甕	−	−	(4.8)	底部2/8	石英・長石(細)少, 角閃石(細)並, 雲母(細)多	5Y3/1 オリーブ黒	5Y3/1 オリーブ黒	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ, 指ｵｻｴ	下川津Ｂ類, 底部にﾍﾗﾐｶﾞｷ
16	SD102	Ⅰ区	弥生土器　壺	−	−	7.2	底部8/8	石英・長石(中)並, 赤色粒(中)少, 角閃石(中)少, 雲母(細)少	10YR5/8 黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	底部に黒斑ｱﾘ
17	SD102	Ⅰ区	弥生土器　甕	(10.5)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(中)少	10YR8/3 浅黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
18	SD102	Ⅰ区	弥生土器　甕	(14.6)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(中)少, 赤色粒(中)少, 角閃石(細)少, 雲母(細)少	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	下川津Ｂ類
19	SD102	Ⅰ区	弥生土器　甕	(14.2)	−	−	口縁部2/8	石英・長石(細)少, 赤色粒(細)少, 雲母(細)少	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	下川津Ｂ類
20	SD102	Ⅰ区	弥生土器　甕	(18.4)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(細)並, 赤色粒(細)少, 角閃石(細)並, 雲母(細)少	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	下川津Ｂ類
21	SD102	Ⅰ区	弥生土器　甕	(16.6)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(細)少, 雲母(細)少	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ﾅﾃﾞ, ﾊｹﾒ, ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ, ｵｻｴ	下川津Ｂ類
22	SD102	Ⅰ区	弥生土器　甕	−	−	4.3	底部8/8	石英・長石(中)少, 赤色粒(細)少	7.5YR8/6 浅黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	ﾀﾀｷ, 板ﾅﾃﾞ後ﾀﾀｷ	板ﾅﾃﾞ	
23	SD102	Ⅰ区	弥生土器　甕	−	−	(6.6)	底部2/8	石英・長石(中)並, 雲母(細)少	10YR3/1 黒褐	10YR4/1 褐灰	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
24	SD102	Ⅰ区	弥生土器　小型甕	−	−	(2.6)	底部3/8	石英・長石(中)少, 雲母(細)並	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	ﾅﾃﾞ, ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ	
25	SD102	Ⅰ区	弥生土器　鉢	−	−	2.9	底部8/8	石英・長石(細)並, 赤色粒(細)少	7.5YR7/6 橙	10YR8/3 浅黄橙	ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ	底部に木葉圧痕
26	SD102	Ⅰ区	弥生土器　高杯	−	−		口縁部破片	石英・長石(中)少, 雲母(中)少	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	ｹｽﾞﾘ, ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
27	SD102	Ⅰ区	弥生土器　高杯	(21.8)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(中)少, 赤色粒(中)少, 角閃石(細)少, 雲母(細)少	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ﾍﾗｹｽﾞﾘ, ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	下川津Ｂ類

遺物番号	報告遺構名	調査区	器種	法量(cm)			残存率	胎土	色調		調整		備考
				口径	器高	底径			外面(釉)	内面(胎土)	外面	内面	
28	SD102	Ⅰ区	弥生土器 高杯	(22.2)	−	−	口縁部2/8	石英・長石(中)少, 赤色粒(中)少, 角閃石(細)少, 雲母(細)並	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい褐	ヨコナデ, マメツケズリ, マメツ	ヨコナデ, ヘラミガキ, マメツ	下川津B類
29	SD102	Ⅰ区	弥生土器 高杯	(20.8)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(細)並, 赤色粒(細)少, 角閃石(細)少, 雲母(細)並	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	ヘラミガキ, マメツ	ヨコナデ, ヘラミガキ, マメツ	下川津B類
30	SD102	Ⅰ区	弥生土器 高杯	−	−	−	接合部3/8	石英・長石(中)並, 赤色粒(中)少, 角閃石(細)少, 雲母(細)少	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ナデ, ヘラミガキ	ヘラケズリ	穿孔アリ, 下川津B類
31	SD102	Ⅰ区	弥生土器 高杯		−	(18.4)	脚部破片	石英・長石(細)並, 雲母(細)少	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/6 明褐	ヨコナデ, マメツ	ケズリ	
32	SD102	Ⅰ区	弥生土器 高杯	−	−	(15.6)	脚部2/8	石英・長石(中)並, 赤色粒(中)少, 雲母(細)少	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	ナデ	ヘラケズリ	穿孔アリ
33	SD102	Ⅰ区	弥生土器 高杯	−	−	(16.0)	脚部1/8	石英・長石(中)少, 赤色粒(中)少	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/8 明褐	マメツ, 一部板ナデアリ	ナデ	穿孔アリ
34	SD102	Ⅰ区	弥生土器 高杯	−	−	(18.4)	脚部1/8	石英・長石(細)少, 赤色粒(中)少, 雲母(細)並	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ナデ	ケズリ	穿孔アリ
35	SD102	Ⅰ区	弥生土器 高杯	−	−	(17.4)	脚部1/8	石英・長石(中)並, 赤色粒(粗)少, 雲母(中)少	7.5YR5/8 明褐	7.5YR5/8 明褐	ヨコナデ	ヘラケズリ	穿孔アリ
36	SD102	Ⅰ区	弥生土器 小型丸底壺	(8.6)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(中)少	2.5Y6/3 にぶい黄	7.5YR5/4 にぶい褐	ナデ, ヨコナデ	ナデ, ヨコナデ	
37	SD102	Ⅰ区	弥生土器 鉢	(13.2)	6.9	3.2	底部8/8	石英・長石(中)少	2.5Y8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	マメツ	ハケメ, マメツ	
38	SD102	Ⅰ区	弥生土器 鉢	(13.2)	7.3	(3.4)	口縁部1/8	石英・長石(細)少	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y8/2 灰白	マメツ	マメツ	
39	SD102	Ⅰ区	弥生土器 鉢	(24.6)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(中)並	5YR6/6 橙	10YR8/3 浅黄橙	マメツ	マメツ	接合痕アリ
43	包含層	Ⅰ区	弥生土器 甕	(13.6)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(中)並, 角閃石(細)少, 雲母(細)並	7.5YR6/6 橙	7.5YR5/6 明褐	ヨコナデ	ヨコナデ, 指オサエ	下川津B類
44	SD107	Ⅰ区	弥生土器 甕	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(細)並, 雲母(細)少	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	ハケメ, マメツ	マメツ	
45	SD201	Ⅱ区	縄文土器 鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(粗)多, 雲母(中)少	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR2/3 黒褐	マメツ, 沈線	マメツ	
46	SD206	Ⅱ区	縄文土器 鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)多	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5Y6/3 にぶい黄	条痕文	条痕文, 沈線	縁帯文土器
47	SD207	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	体部破片	石英・長石(中)並, 雲母(中)少	2.5Y3/1 黒褐	2.5Y7/2 灰黄	縄文, 沈線, マメツ	マメツ	
48	SD207	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	破片	石英・長石(中)少, 雲母(細)少	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	突帯, 刻み	マメツ	刻目突帯文土器
49	SD201	Ⅱ区	弥生土器 甕	−	−	(4.5)	底部3/8	石英・長石(細)少	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/3 浅黄	ナデ, 板ナデ, マメツ	ヘラケズリ	
50	SD207	Ⅱ区	弥生土器 甕	−	−	(6.2)	底部7/8	石英・長石(中)多, 雲母(細)少	2.5Y8/1 灰白	10YR8/2 灰白	指オサエ, マメツ	マメツ	
51	SD205	Ⅱ区	須恵器 杯蓋	(13.5)	(3.7)	−	口縁部4/8	砂粒(中)少	N7/ 灰白	N7/ 灰白	回転ナデ, 回転ヘラケズリ	回転ナデ, ナデ	
55	SD211	Ⅱ区	弥生土器 甕	−	−	(7.6)	底部1/8	石英・長石(中)並	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	マメツ	マメツ	
56	SD209	Ⅱ区	弥生土器 甕	−	−	(10.0)	底部2/8	石英・長石(中)並, 雲母(細)少	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	ナデ, 板ナデ後ナデ, ヘラケズリ	ナデ, 板ナデ	
57	SD209	Ⅱ区	弥生土器 甕	−	−	(8.6)	底部1/8	石英・長石(中)並	7.5YR7/6 橙	2.5Y8/2 灰白	マメツ	指オサエ, マメツ	
58	SD209	Ⅱ区	弥生土器 甕	−	−	(8.0)	底部6/8	石英・長石(中)並, 赤色粒(中)少, 雲母(細)少	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y8/2 灰白	ハケメ, マメツ	マメツ	
59	SD209	Ⅱ区	弥生土器 甕	(34.4)	−	−	口縁部破片	石英・長石(粗)並	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/2 灰黄	ナデ, ヘラミガキ, 指オサエ後ヨコナデ	ナデ	
60	SD212	Ⅱ区	弥生土器 不明	−	−	(7.7)	底部4/8	石英・長石(粗)少	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y8/2 灰白	ナデ, ハケ後ナデ	ナデ	穿孔アリ
64	SD109	Ⅰ区	弥生土器 甕	−	−	(5.6)	底部1/8	石英・長石(中)少	2.5Y4/1 黄灰	10YR4/3 にぶい黄褐	ヘラミガキ, マメツ	マメツ	
65	SD109	Ⅰ区	須恵器 杯蓋	−	−	−	破片	砂粒(細)少	N5/ 灰	N5/ 灰	回転ナデ	回転ナデ	

遺物番号	報告遺構名	調査区	器種	法量(cm)			残存率	胎土	色調		調整		備考
				口径	器高	底径			外面(釉)	内面(胎土)	外面	内面	
68	SD110	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR6/2 にぶい灰黄褐	口縁部キザミ目, 刺突文	ﾏﾒﾂ	
69	SD110	Ⅱ区	弥生土器 壺	−	−	(8.8)	底部2/8	石英・長石(中)並	10YR5/4 にぶい黄褐	2.5YR5/3 黄褐	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
70	SD110	Ⅱ区	須恵器 杯身	(12.0)	−	−	口縁部1/8	砂粒(細)少	N6/ 灰	N6/ 灰	回転ﾅﾃﾞ, 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	焼成良好, 堅緻
71	SD110	Ⅱ区	須恵器 高杯	−	−	−	接合部破片	砂粒(中)少	N8/ 灰白	N8/ 灰白	回転ﾅﾃﾞ	ｼﾎﾞﾘ目, ﾅﾃﾞ	焼成不良
72	SD110	Ⅱ区	須恵器 椀	−	−	−	口縁部破片	砂粒(細)多	N5/ 灰	N7/ 灰	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	
73	SD110	Ⅱ区	須恵器 壺	−	−	(9.0)	底部1/8	砂粒(細)少	N4/ 灰	N7/ 灰白	ﾅﾃﾞ, 回転ﾅﾃﾞ, 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	
74	SD110	Ⅱ区	須恵器 壺	−	−	(14.8)	底部1/8	砂粒(細)多	N5/ 灰	N6/ 灰	ﾅﾃﾞ, ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
75	SD110	Ⅱ区	土師器 足釜	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並	10YR6/6 明黄褐	7.5YR6/6 橙	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
76	SD110	Ⅱ区	陶器 鉢？	−	−	−	口縁部破片	砂粒(細)少	5YR6/6 橙, 5YR5/3 にぶい赤褐 (釉) 5G5/1 緑灰	(釉) 灰白2.5Y8/1			
77	SD110	Ⅱ区	肥前系陶器 皿	−	−	(4.5)	底部5/8	砂粒(細)少	7.5YR5/3 にぶい褐 (釉) 2.5Y8/2 灰白	5Y6/1 灰	回転ﾅﾃﾞ, 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	
78	SD110	Ⅱ区	肥前系陶器 皿	−	−	(3.4)	底部6/8		10YR7/3 にぶい黄橙	N8/ 灰白	回転ﾅﾃﾞ, 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ, 施釉	施釉	ｹｽﾞﾘ出し高台
79	SD110	Ⅱ区	土師質 管状土錘	6.8	4.0	3.3	全体7/8	石英・長石(中)並	10YR6/6 明黄褐		ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ	
84	SD212	Ⅱ区	弥生土器 甕	−	−	4.4	底部8/8	石英・長石(細)多, 赤色粒(細)少	7.5YR5/6 明褐	10YR5/4 にぶい黄褐	ﾀﾀｷ, ﾍﾗﾐｶﾞｷ, ﾊｹﾒ, ﾏﾒﾂ	ｹｽﾞﾘ, ﾏﾒﾂ	
85	SD204	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並, 雲母(細)少	10YR8/2 灰白	10YR6/3 にぶい黄橙	縄文, 沈線	ﾏﾒﾂ	
86	SD204	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	胴部破片	石英・長石(細)多, 角閃石(細)少, 雲母(細)少	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	条痕文(ﾖｺ)	ﾅﾃﾞ	
87	SD204	Ⅱ区	須恵器 甕	−	−	−	胴部破片	砂粒(細)少	5Y8/ 灰白	5Y7/ 灰白	ﾀﾀｷ, ﾀﾀｷ後櫛描	青梅波文, ﾀﾀｷあて具痕	
88	SD204	Ⅱ区	須恵器 甕	−	−	−	破片	砂粒(中)少	N5/ 灰	N6/ 灰	格子ﾀﾀｷ	当て具痕	
89	SD213	Ⅱ区	須恵器 杯身	−	−	−	口縁部破片	砂粒(細)少	N7/ 灰白	N7/ 灰白	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	灰ﾀﾞｽｷ痕ｱﾘ
90	SX202	Ⅱ区	縄文土器 鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)多	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/1 灰白	縄文, 沈線	ﾏﾒﾂ	
91	SX202	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	(28.4)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(中)多	10YR5/1 褐灰	10Y7/1 褐灰	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
92	SX202	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並	10YR5/1 褐灰	2.5Y7/1 灰白	縄文, ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
93	SX202	Ⅱ区	弥生土器 高杯	−	−	−	杯部破片	石英・長石(中)並, 雲母(細)少	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
146	SX203	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	(33.8)	−	−	口縁部2/8	石英・長石(小～大)多	7.5Y5/2 灰褐	N3/ 暗灰	条痕文(ﾀﾃ), 条痕文(ﾖｺ)	ﾅﾃﾞ, ﾏﾒﾂ	
147	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並	10YR6.2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	ﾅﾃﾞ, 刺突文	ﾏﾒﾂ	
148	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)多, 雲母(中)少	2.5Y6/1 黄灰	5Y8/1 灰白	縄文, 沈線	ﾏﾒﾂ	D群
149	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(細)少, 赤色粒(細)少	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	縄文, 沈線, ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	D群
150	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並, 雲母(細)少	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y3/1 黒褐	縄文, 沈線	ﾐｶﾞｷ	
151	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並, 雲母(細)少	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y5/1 黄灰	縄文, 沈線	ﾏﾒﾂ	
152	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)多, 赤色粒(中)少	7.5YR7/2 明褐灰	10YR8/1 灰白	縄文, 沈線, ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
153	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並, 赤色粒(中)少	7.5YR8/2 浅黄橙	10YR8/2 灰白	沈線, ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	

遺物番号	報告遺構名	調査区	器種	法量(cm)			残存率	胎土	色調		調整		備考
				口径	器高	底径			外面(釉)	内面(胎土)	外面	内面	
154	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(細)並, 雲母(細)少	2.5Y7/2 灰黄	10YR5/4 にぶい黄褐	縄文, 沈線, ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
155	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(細)多, 雲母(細)少	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	縄文, 沈線	ﾏﾒﾂ	
156	包含層	Ⅱ区	縄文土器 浅鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y6/2 灰黄	条痕文	条痕文	D群
157	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)多, 雲母(中)少	2.5Y4/3 オリーブ褐	2.5Y6/2 灰黄	縄文, 沈線	ﾏﾒﾂ	A群
158	包含層	Ⅱ区	縄文土器 鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並, 雲母(細)少	5YR5/6 明赤褐	10YR6/1 褐灰	縄文, 沈線, ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
159	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	破片	石英・長石(中)少, 赤色粒(中)少	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	縄文, 沈線	ﾏﾒﾂ	
160	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	破片	石英・長石(中)並, 赤色粒(中)少	2.5Y7/3 浅黄	10YR7/6 明黄褐	縄文, ﾅﾃﾞ, 沈線	条痕文	
161	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	破片	石英・長石(中)多	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	縄文, 沈線	ﾅﾃﾞ	
162	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	破片	石英・長石(中)並	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	縄文, 沈線	ﾅﾃﾞ	
163	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	破片	石英・長石(中)少	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄	縄文, 沈線	ﾏﾒﾂ	
164	包含層	Ⅱ区	縄文土器 浅鉢	−	−	−	破片	石英・長石(中)多, 雲母(細)少	10YR5/2 灰黄褐	10YR3/2 黒褐	縄文, 沈線	ﾏﾒﾂ	
165	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)多, 雲母(細)少	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y6/1 黄灰	条痕文, 沈線, ﾏﾒﾂ	条痕文	D群
166	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	破片	石英・長石(細)並, 雲母(細)少	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	縄文, ﾅﾃﾞ, 沈線	ﾅﾃﾞ	
167	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	破片	石英・長石(中)並, 雲母(細)少	7.5YR5/4 にぶい褐	2.5Y6/2 灰黄	縄文, ﾅﾃﾞ, 沈線	ﾅﾃﾞ	B群
168	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並, 雲母(中)少	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y7/2 灰黄	条痕文, ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	
169	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(細)多, 赤色粒(細)少	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	条痕文	ﾏﾒﾂ	
170	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並, 赤色粒(細)少	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5Y7/3 浅黄	条痕文, ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
171	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)多, 雲母(細)少	2.5Y6/1 黄灰	10YR7/2 にぶい黄橙	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	E群
172	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	破片	石英・長石(粗)並	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	条痕文	ﾅﾃﾞ	C群
173	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	破片	石英・長石(中)多, 雲母(中)少	10YR3/2 黒褐	10YR6/4 にぶい黄橙	条痕文, ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	D群
174	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	破片	石英・長石(中)多	10YR6/1 褐灰	2.5Y7/2 灰黄	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	F群
175	包含層	Ⅱ区	縄文土器 浅鉢？	−	−	(12.4)	底部1/8	石英・長石(中)並, 雲母(中)少	2.5Y8/3 淡黄	10YR5/8 黄褐	ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	G群
176	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	(11.0)	底部2/8	石英・長石(中)多	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y7/3 浅黄	条痕文, ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	E群
177	包含層	Ⅰ区	縄文土器 深鉢	−	−	(9.6)	底部1/8	石英・長石(中)多	10YR8/1 灰白	10YR7/4 にぶい黄橙	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
178	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	(10.2)	底部3/8	石英・長石(中)多	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白	ｵｻｴ, ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	D群
179	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	(6.6)	底部3/8	石英・長石(細)並, 赤色粒(細)少, 雲母(細)少	7.5YR6/6 橙	7.5YR5/6 明褐	ｵｻｴ, ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	A群
180	包含層	Ⅱ区	縄文土器 深鉢	−	−	−	底部破片	石英・長石(細)並, 赤色粒(細)少	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
181	包含層	Ⅱ区	弥生土器 二重口縁壺	−	−	−	口縁部破片	石英・長石(中)並, 赤色粒(中)少, 角閃石(細)並, 雲母(細)並	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
182	包含層	Ⅱ区	弥生土器 甕	−	−	3.7	底部8/8	石英・長石(中)並	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	ﾅﾃﾞ, 板ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ, ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ	
183	包含層	Ⅱ区	弥生土器 高杯	−	−	−	杯部破片	石英・長石(中)並, 角閃石(細)少	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR5/4 にぶい黄褐	ﾍﾗﾐｶﾞｷ, ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	下川津B類
184	包含層	Ⅱ区	弥生土器 高杯	−	−	−	接合部3/8	石英・長石(中)少	2.5Y7/3 浅黄	7.5YR5/4 にぶい褐	板ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	
185	包含層	Ⅰ区	土師器 小型丸底壺	(8.0)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(細)少	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ﾖｺﾅﾃﾞ, ﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
186	包含層	Ⅱ区	弥生土器 鉢	(21.2)	−	−	口縁部4/8	石英・長石(中)並, 赤色粒(中)少	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ, ﾊｹﾒが少し残る	

遺物番号	報告遺構名	調査区	器種	法量(cm)			残存率	胎土	色調		調整		備考
				口径	器高	底径			外面(釉)	内面(胎土)	外面	内面	
187	包含層	Ⅰ区	弥生土器 鉢	(21.4)	−	−	口縁部1/8	石英・長石(中)並, 赤色粒(細)少	10YR4/1 褐灰	10YR7/6 明黄褐	ﾏﾒﾂ	ﾊｹﾒ, ﾏﾒﾂ	
188	包含層	Ⅱ区	弥生土器 鉢	−	−	−	口縁部1/8	石英・長石(中)少, 赤色粒(細)少	10YR8/2 灰白	2.5YR8/3 淡黄	ﾏﾒﾂ	ﾊｹﾒ	
189	包含層	Ⅱ区	弥生土器 鉢	(16.2)	−	−	口縁部2/8	石英・長石(細)少, 赤色粒(細)少	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄褐	ﾏﾒﾂ	ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	
190	包含層	Ⅰ区	須恵器 杯蓋	(13.2)	−	−	口縁部1/8	砂粒(中)少	2.5YR8/2 灰白	2.5YR7/2 灰黄	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	
191	包含層	Ⅰ区	須恵器 不明	−	−	−	脚部破片	石英・長石(中)並	5YR5/3 にぶい赤褐	7.5YR4/1 褐灰	櫛描文, 連続刺突文	回転ﾅﾃﾞ	透かしｱﾘ

第11表 川島本町遺跡出土瓦観察表

遺物番号	報告遺構名	調査区	器種	法量(cm)			胎土	色調		調整		備考
				現存長	最大幅	最大厚		凹面	凸面	凹面	凸面	
66	SD109	Ⅰ区	平瓦	(6.4)	(5.6)	2.1	白色砂粒(中)少	N4/ 灰	N4/ 灰	布目圧痕	板ﾅﾃﾞ	
67	SD110	Ⅰ区	平瓦	(5.2)	(5.3)	1.3	白色砂粒(中)少	N2/ 黒	N3/ 暗灰	布目圧痕	板ﾅﾃﾞ	
80	SD110	Ⅱ区	平瓦	(9.3)	(9.3)	2.0	白色砂粒(中)少, 灰色砂粒(細)少	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白	布目圧痕	ﾏﾒﾂ	
81	SD110	Ⅱ区	平瓦	(9.1)	(5.8)	1.9	白色砂粒(中)少	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	布目圧痕	縄目ﾀﾀｷ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
82	SD110	Ⅱ区	平瓦	(9.2)	(9.4)	2.1	白色砂粒(中)少	7.5Y8/1 灰白	N8/ 灰白	布目圧痕	縄目ﾀﾀｷ	
83	SD110	Ⅱ区	丸瓦	(6.2)	(7.6)	1.9	白色砂粒(中)少	N4/ 灰	5Y5/1 灰	ﾏﾒﾂ	ﾍﾗｷﾘ, ﾏﾒﾂ	
192	包含層	Ⅰ区	平瓦	(11.6)	(7.3)	2.0	白色砂粒(中)少, 灰色砂粒(中)少	N5/ 灰	N5/ 灰	布目圧痕	縄目ﾀﾀｷ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
193	包含層	Ⅱ区	平瓦	(8.9)	(7.7)	1.9	白色砂粒(中)少	N3/ 暗灰	N3/ 暗灰	布目圧痕	縄目ﾀﾀｷ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
194	包含層	Ⅱ区	平瓦	(6.6)	(7.4)	1.8	白色砂粒(中)少	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	布目圧痕	縄目ﾀﾀｷ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
195	包含層	Ⅰ区	平瓦	(8.0)	(9.2)	1.8	白色砂粒(中)多	N4/ 灰	5Y4/1 灰	布目圧痕	縄目ﾀﾀｷ, ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
196	包含層	Ⅱ区	平瓦	(8.7)	(10.4)	2.0	白色砂粒(細)少, 黒色砂粒(細)少, 灰色砂粒(細)少	N3/ 暗灰	5Y5/1 灰	布目圧痕	縄目ﾀﾀｷ	

第12表　川島本町遺跡出土石器観察表

遺物番号	報告遺構名	調査区	層位	器種	材質	法量(cm)			重量(g)	備考
						現存長	最大幅	最大厚		
40	SD101	Ⅰ区		石鏃未製品	サヌカイト	3.00	1.90	0.70	4.23	
41	SD101	Ⅰ区		楔形石器	サヌカイト	5.40	2.10	1.30	16.66	
42	SD102	Ⅰ区	下層	楔形石器の削片	サヌカイト	3.40	1.10	0.70	2.87	
52	SD203	Ⅱ区		石鏃	サヌカイト	1.80	1.30	0.20	0.29	
53	SD207	Ⅱ区		楔形石器の削片	サヌカイト	3.90	2.10	1.60	6.84	
54	SD207	Ⅱ区		石核	サヌカイト	6.50	2.80	1.70	22.00	
61	SD210	Ⅱ区		石鏃	サヌカイト	2.70	1.50	0.40	1.32	
62	SD209	Ⅱ区	上層	削器	サヌカイト	8.50	2.90	0.70	26.04	
63	SD208	Ⅱ区		削器	サヌカイト	10.00	4.90	1.20	63.48	
94	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	1.70	1.10	0.25	0.36	
95	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	2.20	1.20	0.30	0.56	
96	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	2.20	1.20	0.30	0.84	
97	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	1.90	1.30	0.30	0.67	
98	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	2.00	1.30	0.30	0.76	
99	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	2.20	1.20	0.30	0.55	
100	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	2.00	1.30	0.40	0.84	
101	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	1.70	1.30	0.30	0.51	
102	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	2.00	1.40	0.30	0.58	
103	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	1.80	1.20	0.35	0.67	
104	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	1.60	1.40	0.30	0.55	
105	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	1.20	1.70	0.30	0.55	
106	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	1.80	1.30	0.30	0.62	
107	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	1.50	1.00	0.40	0.46	
108	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	2.00	1.35	0.40	1.12	
109	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	1.70	0.80	0.30	0.38	
110	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	2.40	1.40	0.30	0.70	
111	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	1.10	1.50	0.30	0.46	
112	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	1.70	1.90	0.50	0.95	
113	SX202	Ⅱ区	上層	石鏃	サヌカイト	3.20	1.30	0.60	1.85	
114	SX202	Ⅱ区	上層	打製石斧	サヌカイト	8.30	7.10	2.00	72.49	
115	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の素材	サヌカイト	2.60	4.00	0.50	5.80	
116	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の素材	サヌカイト	2.90	3.10	1.10	9.06	
117	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.00	2.65	0.85	9.56	

遺物番号	報告遺構名	調査区	層位	器種	材質	法量(cm)			重量(g)	備考
						現存長	最大幅	最大厚		
118	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器	サヌカイト	2.60	2.70	1.30	7.48	
119	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器	サヌカイト	2.60	1.70	0.60	2.97	
120	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器	サヌカイト	2.40	2.40	0.70	4.42	
121	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.30	2.50	1.00	8.61	
122	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.30	5.30	0.80	14.68	
123	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.40	2.20	0.90	7.15	
124	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.60	1.40	0.70	4.16	
125	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.10	1.70	0.50	3.44	
126	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器	サヌカイト	4.10	2.10	0.90	8.05	
127	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.80	1.80	0.70	4.63	128と接合
128	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	1.70	0.70	0.60	0.48	127と接合
129	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	3.30	1.65	0.55	2.04	130と接合
130	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	2.30	0.80	0.50	1.00	129と接合
131	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	1.70	0.50	0.20	0.18	
132	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	2.10	0.80	0.30	0.53	
133	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	2.70	0.70	0.30	0.60	
134	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	2.30	0.80	0.30	0.64	
135	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	3.20	1.00	0.45	1.12	
136	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	2.60	0.60	0.60	0.86	
137	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	3.00	1.00	0.50	1.64	
138	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	3.90	1.20	0.50	2.27	
139	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	5.50	1.50	0.65	4.69	
140	SX202	Ⅱ区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	3.00	1.60	1.00	5.00	
141	SX202	Ⅱ区	上層	二次加工ある剥片	サヌカイト	3.15	2.60	0.65	6.50	
142	SX202	Ⅱ区	上層	二次加工ある剥片	サヌカイト	2.80	4.40	0.80	10.57	
143	SX202	Ⅱ区	上層	二次加工ある剥片	サヌカイト	3.10	1.80	0.70	3.26	
144	SX202	Ⅱ区	上層	剥片	サヌカイト	2.80	2.15	1.10	4.00	
145	SX202	Ⅱ区	上層	装身具		0.90以上	1.20以上	0.50以上	0.58	
197	包含層	Ⅱ区		石鏃	サヌカイト	1.50	2.00	0.30	0.54	
198	包含層	Ⅱ区		石鏃未製品	サヌカイト	3.40	2.50	0.70	5.79	
199	包含層	Ⅱ区		楔形石器の素材	サヌカイト	2.90	3.50	0.70	7.99	
200	包含層	Ⅱ区		楔形石器	サヌカイト	2.30	2.10	0.45	2.61	
201	包含層	Ⅱ区		楔形石器	サヌカイト	1.90	2.10	6.50	3.22	
202	包含層	Ⅱ区		楔形石器	サヌカイト	2.50	1.80	0.75	3.77	
203	包含層	Ⅱ区		削器	サヌカイト	5.40	4.10	0.70	17.32	

第13表　川島本町南遺跡出土土器観察表

遺物番号	報告遺構名	調査区	器種	法量(cm)			残存率	胎土	色調		調整		備考
				口径	器高	底径			外面(釉)	内面(胎土)	外面	内面	
1			縄文土器　深鉢				口縁部破片	石英・長石(中)多, 雲母(中)少	10YR5/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
2			弥生土器　甕				口縁部破片	石英・長石(中)多	2.5YR5/6 明赤褐	10YR6/4 にぶい黄橙	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	
3			弥生土器　甕			(5.2)	底部6/8	石英・長石(細)並	10YR4/2 褐灰	10YR4/2 褐灰	ﾅﾃﾞ, ﾍﾗﾐｶﾞｷ, ﾏﾒﾂ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	
4			弥生土器　高杯	(20.8)			杯部1/8	石英・長石(細)並, 赤色粒(中)少	7.5YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	ﾏﾒﾂ, 退化した凹線	ﾏﾒﾂ	口縁上に凹線2条ｱﾘ
5			弥生土器　高杯				接合部7/8	石英・長石(細)並, 赤色粒(中)少	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	ﾏﾒﾂ	ｼﾎﾞﾘ目	
6	包含層		弥生土器　甕				脚部破片	石英・長石(中)少	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	
7	包含層		須恵器　杯身	(12.4)			口縁部1/8	砂粒(細)少	N7/ 灰白	N7/ 灰白	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	
8	包含層		須恵器　高杯			(14.0)	底部1/8	砂粒(中)少	5Y8/1 灰白	2.5YR7/3 浅黄	ﾏﾒﾂ		焼成不良
9	包含層		須恵器　甕	頸径(22.0)			頸部1/8	砂粒(中)少	N7/ 灰白	N7/ 灰白	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ, ﾏﾒﾂ	

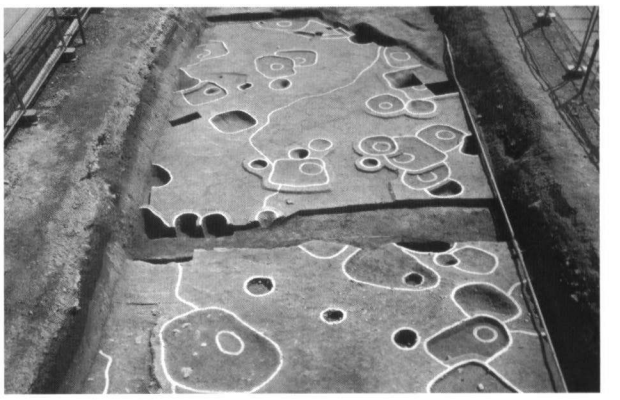
第14表　川島本町南遺跡出土石器観察表

遺物番号	報告遺構名	調査区	層位	器種	材質	法量(cm)			重量(g)	備考
						現存長	最大幅	最大厚		
10	SD03		上層	勾玉	メノウ	2.60	0.70	0.70	3.51	

田村遺跡 II
川島本町遺跡
川島本町南遺跡

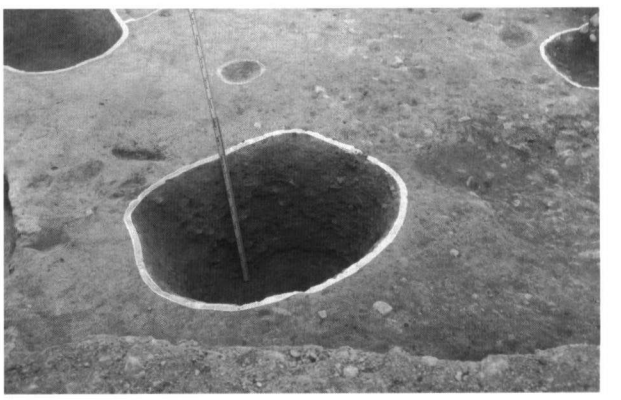
写真図版

(1)　Ⅰ-2区全景(北から)



(2)　Ⅱ-1区全景(北から)

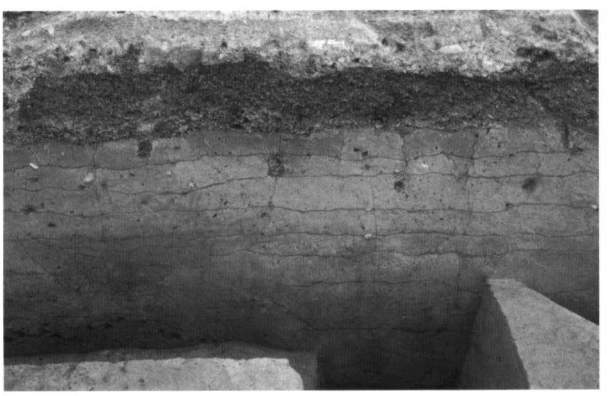
(3)　Ⅱ-2区全景(南から)



(4)　SP106完掘(西から)

(5)　SB002-SP133土層断面(北から)

(6)　SB009-SP250土層断面(東から)

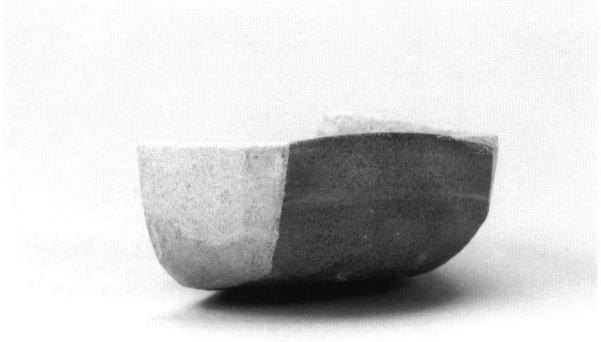


(7)　Ⅱ-1区東壁土層断面(西から)

(8)　SB003-SP138　12

図版２

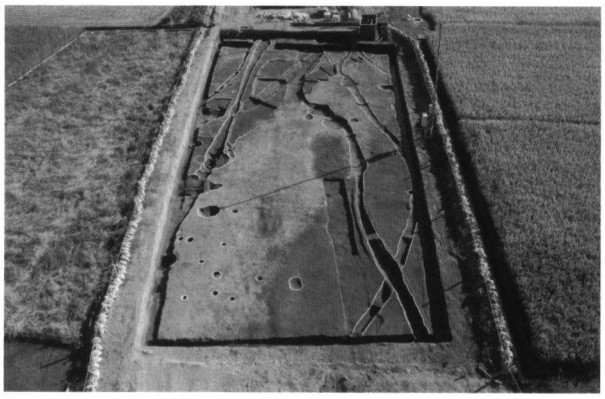
田村遺跡



(9)　包含層出土土器　33

(10)　ＳＫ303出土土器　40

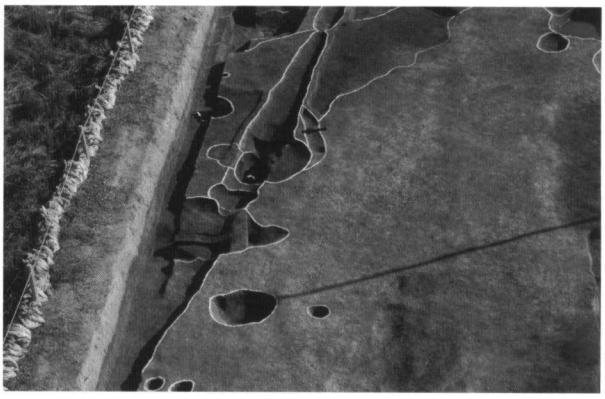
川島本町遺跡



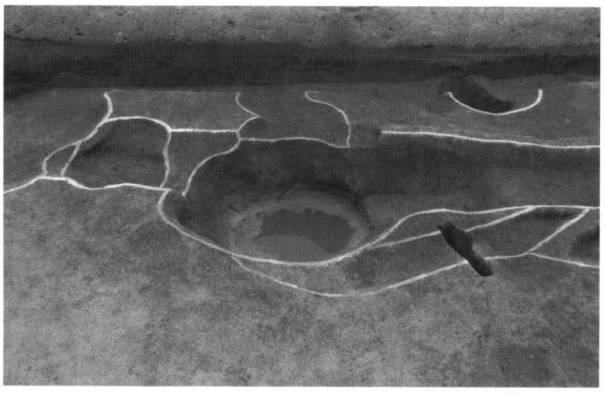
(11)　Ⅰ区全景(北から)

(12)　Ⅱ区下層遺構面全景(北から)

(13)　Ⅱ区上層遺構面全景(北から)

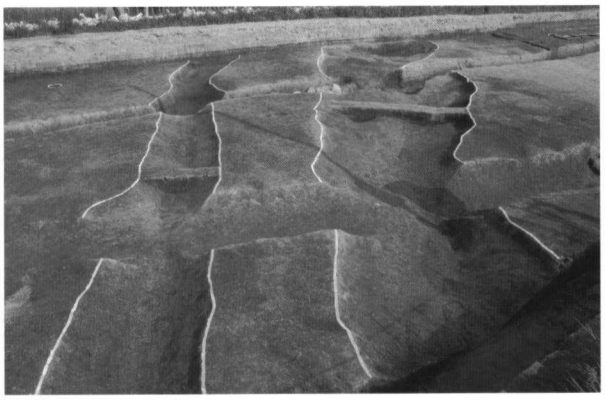


(14)　ＳＥ101周辺(北から)

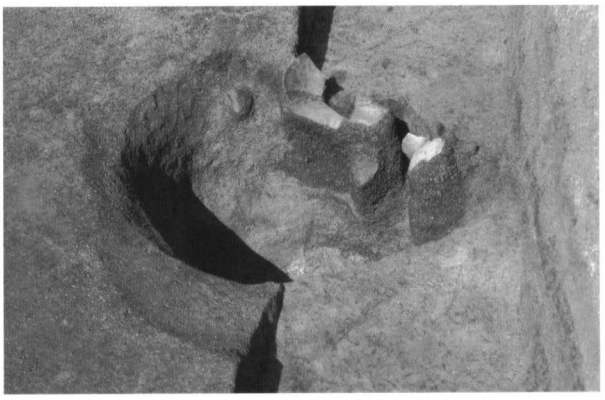


(15)　ＳＥ101全景(西から)

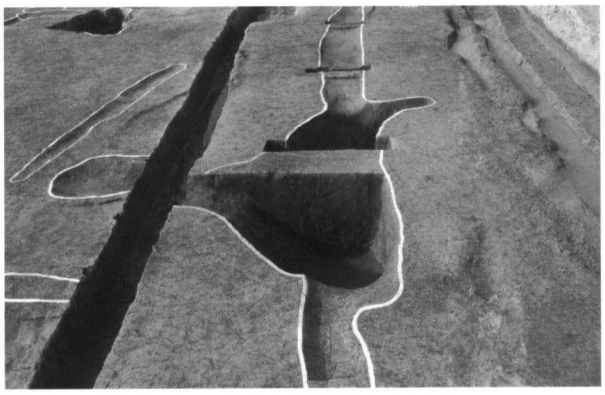
(16)　ＳＤ102遺物出土状況(北から)



⑰　ＳＤ208・209全景（南西から）

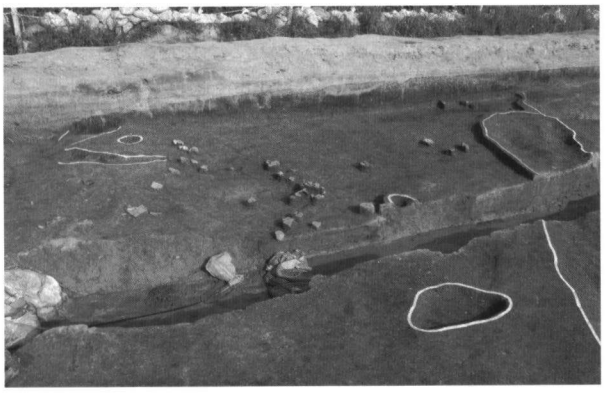


⑱　ＳＫ103遺物出土状況（南から）



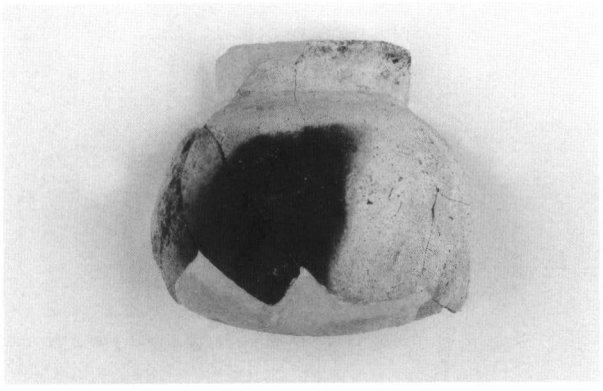
⑲　ＳＸ202検出状況（南から）

⑳　ＳＸ202サヌカイト砕片・剥片類出土状況（南から）

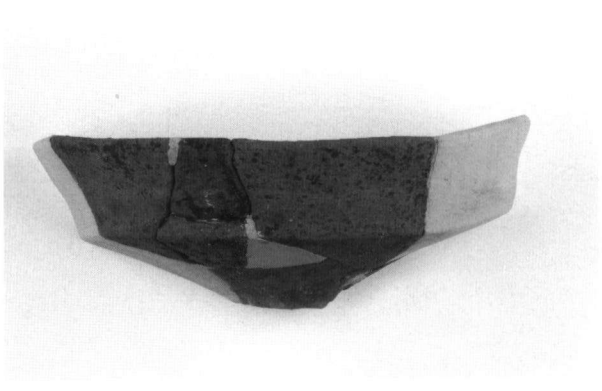


㉑　Ⅱ区包含層出土縄文土器群（西から）

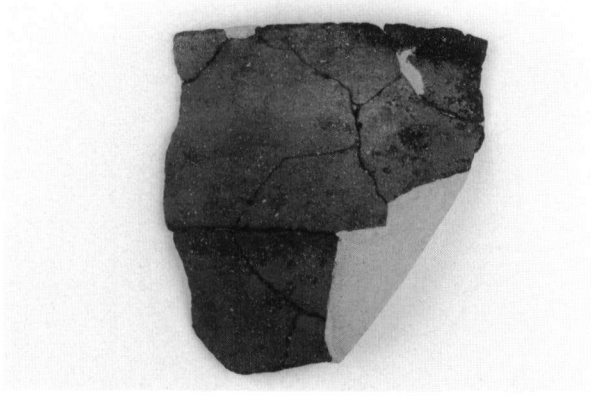
㉒　ＳＥ101出土土器　9



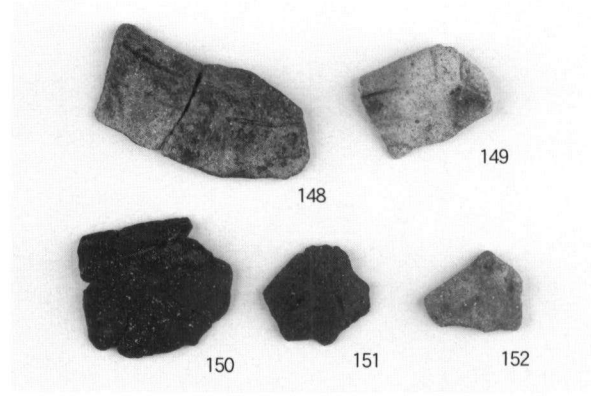
㉓　ＳＥ101出土土器　10



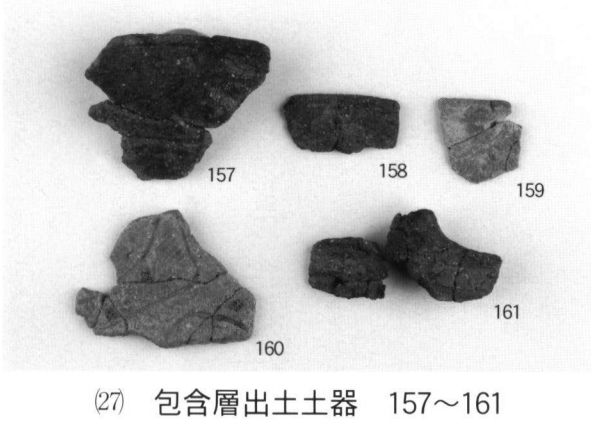
㉔　ＳＤ102出土土器　28



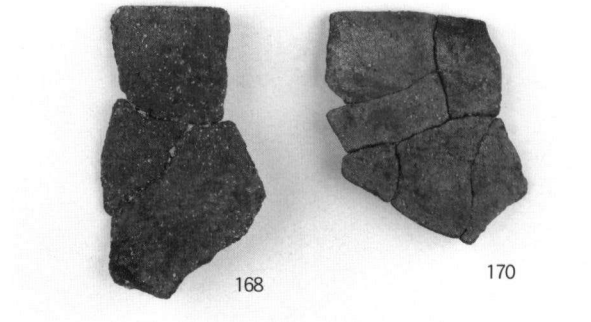
(25)　ＳＸ203出土土器　146



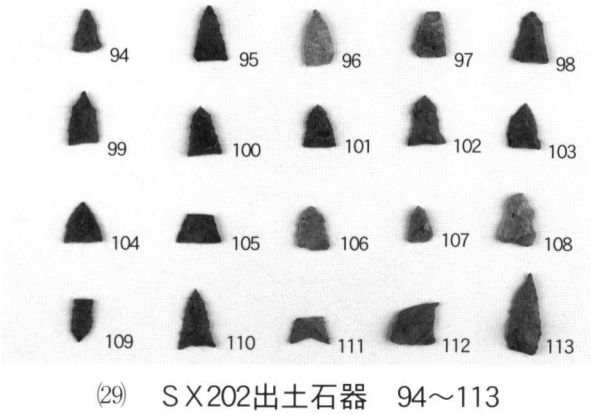
(26)　包含層出土土器　148～152



(27)　包含層出土土器　157～161



(28)　包含層出土土器　168･170



(29)　ＳＸ202出土石器　94～113

(30)　ＳＸ202出土石器　114～118

川島本町南遺跡

(31)　全景(北から)

(32)　ＳＤ03出土勾玉　10

報 告 書 抄 録

ふりがな	たむらいせきに　　かわしまほんまちいせき　　かわしまほんまちみなみいせき
書名	田村遺跡Ⅱ　川島本町遺跡　川島本町南遺跡
副書名	県道高松善通寺線道路改修事業及び県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
編著者名	西村尋文，中里伸明
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒762-0024　香川県坂出市府中町字南谷5001-4　TEL　0877-48-2191 FAX　0877-48-3249
発行機関名	香川県教育委員会
発行年月日	2007年１月31日

総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数	付図枚数
134	27	92	11頁	4頁，CD１枚	70枚	33	０枚

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たむらいせき 田村遺跡Ⅱ	かがわけんまるがめし 香川県丸亀市 たむらちょう 田村町	37202	34° 16′ 10″	133° 47′ 50″	2005．4．1 ～2005．6．30	790㎡	県道高松善通寺線道路改修
かわしまほんまちいせき 川島本町遺跡	かがわけんたかまつし 香川県高松市 かわしまほんまち 川島本町	37201	34° 11′ 09″	134° 5′ 11″	2005．7．1 ～2005．9．30	1,275㎡	県道西植田高松線道路改良
かわしまほんまちみなみいせき 川島本町南遺跡	かがわけんたかまつし 香川県高松市 いけだちょう 池田町	37201	34° 11′ 00″	134° 5′ 16″	2005．10．1 ～2005．11．30	448㎡	県道西植田高松線道路改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たむらいせき 田村遺跡Ⅱ	集落	飛鳥時代 ～白鳳時代	掘立柱建物跡・ 柵列跡	土師器・須恵器	
かわしまほんまちいせき 川島本町遺跡	集落	縄文時代後期	遺物包含層	縄文土器・石器	
		弥生時代後期 ～古墳時代前期	溝跡・井戸跡・ 土坑・柱穴	弥生土器・土師器	
		古代～近世	溝跡・柱穴	土師器・須恵器・陶器	
かわしまほんまちみなみいせき 川島本町南遺跡	集落	弥生時代後期	柱穴	弥生土器・土師器	
		古墳時代後期	遺物包含層	須恵器・瑪瑙製勾玉	
		近世？	溝跡		

県道高松善通寺線道路改修事業 及び
県道西植田高松線道路改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

田村遺跡 II
川島本町遺跡
川島本町南遺跡

2007年1月31日

編集 香川県埋蔵文化財センター

〒762 - 0024 香川県坂出市府中町字南谷5001番地の4
電話 (0877) 48 - 2191

発行 香川県教育委員会

印刷 平和写真印刷株式会社